

JR筑肥線複線化地内遺跡 埋蔵文化財調査報告書

—周船寺遺跡第10次・飯氏遺跡第9次・蓮町遺跡第2次・
今宿遺跡第5次・生ノ松原遺跡第1次の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集



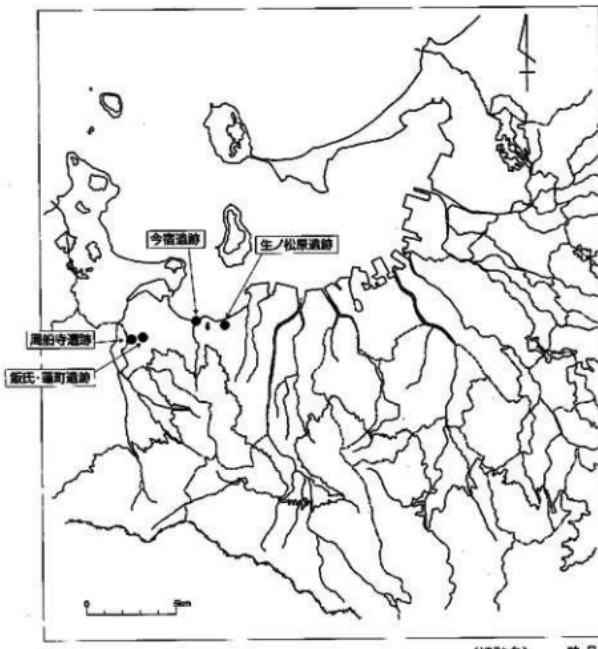
2000

福岡市教育委員会

JR筑肥線複線化地内遺跡 埋蔵文化財調査報告書

—周船寺遺跡第10次・飯氏遺跡第9次・蓮町遺跡第2次・
今宿遺跡第5次・生ノ松原遺跡第1次の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集



（遺跡名）	路号
周船寺遺跡	SSJ-10
飯氏遺跡	IJ-9
蓮町遺跡	HMC-2
今宿遺跡	IMJ-5
生ノ松原遺跡	IKM-1

2000

福岡市教育委員会



(1) 今宿遺跡5次 製塙土器出土状況



(1) 飯塙遺跡9次 SD04

序

福岡市西区は、地下鉄、JR筑肥線の接続、西九州自動車道の開通等の交通基盤の整備とともに住宅等の開発が急速に進み、人口は増加の一途をたどっています。そのため、この地域での埋蔵文化財の調査も年々増加しております。今回報告します周船寺遺跡、姫氏遺跡、蓮町遺跡、今宿遺跡、生の松原遺跡は、JR筑肥線の複線化に伴って調査を行ったものです。

各遺跡では主に弥生時代、古墳時代、古代の遺構と遺物が出土し、その中には対外交渉でもたらされた遺物や、製塩の跡、大規模な集落の一端など重要な遺構や遺物があり、多大な成果を上げることができました。

今回の調査にあたりましては九州旅客鉄道株式会社および地元の方々に深いご理解とご協力を頂きました。関係者の皆様には厚くお礼申しあげます。

本書が市民の皆様の埋蔵文化財保護への理解と地域の歴史を知る上で一助となり、また研究資料として活用頂ければ幸いです。

平成12年1月31日

福岡市教育委員会
教育長 西 憲一郎

例　　言

1. 本書はJR九州筑肥線複線化事業に伴い1997年、98年度に発掘調査を実施した周船寺10次、飯氏9次、蓮町2次、今宿5次、生ノ松原1次調査の報告書である。
2. 本書に使用した遺構の実測は調査担当者の他、調査補助員、作業員が行い、写真撮影は池田、久住が行った。
3. 本書に使用した遺物の実測は池田、久住、背波正人、田上勇一郎、本田浩二郎、藏富上寛、平川敬治、井上加代子、西山めぐみ、坂元雄紀、西堂将夫、篠原律子、山根ひろみ、坂本真一、坂田邦彦、能登原孝道が行った。
製図は山崎龍雄、久住、田上、星野恵美、藏富士、上角智希、井上、西山、西堂、平井裕子、坂田、坂本、成清直子、蜂須賀博子、山口朱美、金子朋子、石井淳子が行った。
写真撮影は久住、平川が行った。
4. 本書に使用した座標は国土地標第II座標系である。方位は磁北で、座標北から $6^{\circ}21'W$ 偏する。
5. 本書の執筆はII-3、III-3、V-3の自然科学分析をパリノサーヴェイ株式会社が行った他はI、III、IV、V-1、2-1)、2)、3)を池田が、II、V-2-4)、VIを久住が行い、II-1の「周辺の調査」の中の「周船寺7次の概要」は山崎龍雄が行った。自然科学分析については報告に基づき担当者が一部編集した所がある。図集は池田、久住が行った。
6. 本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。
7. 表紙の写真は、左上が周船寺10次の弥生前期壺、右上が今宿5次の弥生前期の供献小壺、左下が飯氏9次の弥生中期丹塗壺、右下が生ノ松原1次の古墳中期の韓式系軌道壺である。裏表紙は飯氏9次の全景である。

目 次

I.	はじめに.....	1
1.	調査に至る経緯.....	1
2.	調査の組織.....	1
II.	周船寺遺跡10次調査.....	3
1.	はじめに.....	3
2.	調査の記録.....	9
3.	周船寺遺跡10次調査の自然科学分析（付・生の松原遺跡）.....	33
III.	飯氏遺跡9次調査.....	45
1.	はじめに.....	45
2.	調査の記録.....	46
3.	飯氏遺跡9次調査の自然科学分析.....	79
IV.	連町遺跡2次調査.....	91
V.	今宿遺跡5次調査.....	93
1.	はじめに.....	93
2.	調査の記録.....	95
1)	調査の概要.....	95
2)	層序.....	95
3)	弥生時代以前の遺構と遺物.....	97
4)	古墳時代以降の遺構と遺物.....	131
3.	今宿遺跡5次調査の自然科学分析.....	160
VI.	生の松原遺跡1次調査.....	165
1.	はじめに.....	165
2.	調査の記録.....	176

- 小森宿跡
吉田宿跡
平岡宿跡
今宿跡
周船寺遺跡
新氏遺跡
喜町遺跡
今山遺跡
今宿遺跡
生の松原遺跡
蛭遺跡
宮の山遺跡
野乃遺跡
吉武遺跡



I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成8年9月、九州旅客鉄道株式会社からJR筑肥線複線化事業についての事前審査願いが提出された。計画は、下山門駅から筑前前原駅までの11.1kmの間で路線を拡幅するもので、福岡市域では周知の埋蔵文化財包蔵地を數カ所横切っていた。事業は長年の計画の中で進められ、公共性も高く遺跡が確認された場合も計画変更は困難と考えられ、本調査を前提とした協議が申請者と福岡市教育委員会との間でもたれた。

申請地は、延長は長いものの拡幅幅が狭く、実質的に調査が不可能な箇所が多い。また、明らかに遺跡の範囲外と判断される部分もあった。その結果、調査可能な下山門、生の松原、今宿、飯氏、周船寺の5地点において試掘または立会調査を行い、遺跡が存在した場合はそのまま本調査を行う事とした。調査は用地買収等の条件が整った地点から行い、平成9年4月の今宿遺跡から平成10年8月の飯氏・蓮町遺跡の調査まで断続的に4地点5遺跡について本調査を行った。各調査地点の実施内容は別表の通りである。

調査は頻繁に通過する列車のすぐ脇で様々な規制の元に行われたが、心配された事故もなく、また狭い調査範囲ながら予想を超える成果をあげて終了することができた。調査にあたっては九州旅客鉄道株式会社をはじめ地元各位の多大なご理解とご協力をいただき、感謝の意を表す。

2. 調査の組織

調査委託：九州旅客鉄道株式会社

調査主体：福岡市教育委員会

調査總括：埋蔵文化財課長 荒巻輝勝 柳田純孝（前任）山崎純男

第1係長 二宮忠司（前任） 山口謙治

調査担当：荒牧宏行 池田祐司 久住猛雄

調査補助：名取さつき 大塚拓史、小沢佳憲 井村公洋 平美典 原田智也 端野晋平

日林強（九州大学）、古閑真理子 新郷英弘 黒木政行（西南学院大学）、

山根ひろみ（福岡大学）、青木美香 八尋恵美 大野玄晋 荒木慶（別府大学）

調査協力：柴田シズノ 德重コマキ 德重忠子 那賀久子 西田マキエ 森友ナカ 石田照江

木戸和子 真鍋キミエ 末松美佐子 小金丸ミネ子 木藤猛美 木藤幸三郎 熊谷ノ

犬童陽子 近藤ノリ子 深見佳子 堀田昭 友池富美志 木戸アサノ 中村シゲ子

柴田種美 山崎シズエ 三苦ヨシ子 倉光政彦 水井大志 柴藤裕志 池健助

甲斐正耕 金子由利子 川口シゲノ 清原ユリ子 坂本ハツ子 指山歌子 指山浩子

佐藤テル子 柴田常人 西畠盛行 堀川ヒロ子 松井フユ子 水野山美子 門司弘子

吉川順助 千野義光 坂本隆二 杉村文子 伊藤美智子 井上ヒデ子 井上トミコ

清末シズエ 西島マツコ 西島ムラコ 西島洋子 平田千鶴子 結城千代子

脇坂ミサヲ 橋良平 脇坂レイコ 青木秀雄 栗木和子 鬼塚友子 平野義雄

平野ミサオ 三谷朗子 辻節子 宮原邦江 有吉貞江 黒修一

整理協力：成清直子 甲斐田嘉子 平井裕子 富田輝子 宮坂環 森部順子 上田保子

前田みゆき 中原尚美

周船寺遺跡10次

調査番号	9765	事前審査番号	8-1-614	遺跡略号	S SJ-10
調査地地籍	西区飯氏、千里			分布地図番号	132千里
開発面積				調査面積	290m ²
調査期間	1997.12.22~1998.2.27			担当者	久住猛雄

飯氏遺跡9次

調査番号	9825	事前審査番号	8-1-614	遺跡略号	I I J-7
調査地地籍	西区飯氏356-1他			分布地図番号	120周船寺
開発面積				調査面積	412m ²
調査期間	1998.7.15~8.22		担当者	荒牧宏行 池田祐司 久住猛雄	

蓮町遺跡2次

調査番号	8925	事前審査番号	8-1-614	遺跡略号	HMC-2
調査地地籍	西区大字周船寺316-2他			分布地図番号	120周船寺
開発面積				調査面積	108m ²
調査期間	1998.8.19~8.25		担当者	池田祐司	久住猛雄

今宿遺跡5次

調査番号	9708	事前審査番号	8-1-614	遺跡略号	I MJ-5
調査地地籍	西区今宿東3丁目			分布地図番号	112今宿
開発面積				調査面積	397m ²
調査期間	1997.4.14~6.9		担当者	池田祐司	久住猛雄

生の松原遺跡1次

調査番号	9734	事前審査番号	8-1-614	遺跡略号	I KM-1
調査地地籍	西区生ノ松原1丁目32.33他			分布地図番号	103長垂
開発面積				調査面積	1100m ²
調査期間	1997.7.24~11.5		担当者	久住猛雄	

II. 周船寺遺跡10次調査

1. はじめに

1) 調査の経緯

本調査地点は、西区飯氏・千里地内にあり、JR筑肥線周船寺駅の西400mの平田第2踏切から、750mの前原市境までの間の筑肥線(拡幅前)沿線北側にあたる。1997年12月初めには調査に入る予定であったが、条件整備等で若干遅れ、12月22日より調査を開始。同日に機材搬入を行い、調査区東側のA区から重機による試掘を開始した。途中、年末年始の中断期間があったが、翌1998年1月7日より作業を再開した。1月9日よりB区の試掘を開始した。1月13日には八区の試掘を終了。1月16日よりB区の遺構確認、本調査を開始する。1月26日に、C区の試掘を開始する。1月後半の時点では、雨天が多く、排水作業に手間取り、工程が遅れ気味であったので、1月30日にJR側と工程の調整を行った。

2月いっぱいを使って、B区の遺構の掘削・精査とC区のトレーナーの精査を行った。B区は遺構や遺物包含層がやや多く検出され、その精査に時間がかかり、現場作業が終了したのは2月27日であった。同日に機材を撤収し、調査は終了した。なお今回の調査では、対象地全てについてまず重機で1m幅の試掘を行い、遺構や遺物包含層が認められた部分を左右に拡張して調査するという方法を取っている。そのため、A区では遺構が認められなかったため、実質的に試掘調査に近く、C区の大半も同様である。なお調査時に未買収で、未調査となったB区の西側隣接地については、1998年9月8日に坦蔵文化財課事前審査係が試掘を行ったが、遺構は検出できなかった。

調査時には、西接する前原市側でもJR筑肥線拡幅を原因とする調査を行っており(高田遺跡)、担当者の瓜生秀文氏(前原市)には様々な御教示を頂いた。ま



Fig. 1 周船寺遺跡調査地点図(数字は調査次数) S=10,000

た調査事務所の水については、市立周船寺小学校の便宜を頂き、水道を使わせて頂いた。さらに、調査中および整理報告の過程において、主に縄文時代後・晩期から弥生時代の遺構・遺物について、藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館）、中園聰（九州大学）、山崎龍雄・米倉秀紀・吉留秀敏・菅波正人・大塚紀宜・田上勇一郎・井上麻子・本田浩二郎（文化財部職員）各氏からの様々な御教示と御協力があった。記して感謝の意を表したい。

2) 周辺の調査と遺跡の地理的歴史的環境 (Fig.1)

周船寺遺跡群は、糸島平野の東端、周船寺川によって形成された沖積微高地に立地する。今回（第10次）の調査地点は、遺跡群中央部にあたり、標高10~11mを測る。現在周開は耕作地と住宅地で削平が進み、平坦な感があるが、本来は起伏のある地形であったようである。遺構検出面は、耕作土（表土）を10~50cm程度除去して現れる灰色ないし黄灰色シルト土の面であり、弥生時代以降の遺構は暗褐色ないし黒褐色（黒灰色）の覆土を呈する。遺構面の灰色シルト自体も、やや褐色気味の部分が縄文時代の遺構や遺物包含層となることが多いが、地山のシルトとは曖昧な差であることが多く、検出が難しい場合が多い。縄文時代の埋甕の掘方なども不明瞭な場合が少なくない。

これまで周船寺遺跡では、13回の調査が行われている。未報告のものもあり、ここで各調査で簡単に触れておく。第1次は「千里シビナ」遺跡として報告。第60、88集。縄文時代後・晩期から弥生時代前期の遺構・遺物を検出。弥生前期の竪穴住居、縄文後・晩期の溝がある。第2・3次は「飯氏ゾウサ」遺跡として調査。未報告で詳細不明である。第4次は「千里シビナ」2次として調査。削平が著しく遺構は少ない。未報告。第5次は4次の南に位置し、「千里シビナ」3次。縄文後・晩期、弥生前・中期の遺構・遺物を検出。弥生中期が多く、甕棺墓地と祭祀土坑も存在。未報告。4・5次は『年報』Vol.3（1988年度）に概要の紹介。第6次は、弥生中期の遺構・遺物を多く検出し、縄文晚期の遺物も出土。第429集。縄文後期の埋甕、弥生前期の甕棺・中期の祭祀土坑がある。第7次は縄文晩期から弥生前・中期、一部古墳時代の遺構・遺物を検出。弥生前期後半の集落は、直線的な柵列に掘立柱建物が伴い、規格性の強い集落であり、重要な発見である。弥生前末の甕棺墓地も存在。未報告であるが、重要性を考慮して、今回その概要を担当者に紹介して頂いた。第8次は、弥生前期後半から中期の遺構・遺物を主に検出。磨製石剣も出土。弥生前期の甕棺墓地あり。報告は第493集。第9次は時期不明の柱穴列2列を平行して検出した。縄文晩期から弥生中期の遺物を出土という。『年報』Vol.12（1997年度）に報告。7次の弥生前期後半の二重柵列に類似し、弥生時代か。ただし建物は削平のためか検出されていない。第10次は本報告。第11次は、弥生中期の遺構・遺物を密に検出した。甕棺墓、祭祀土坑、溝がある。縄文後・晩期の包含層からはかなり多くの遺物が出土した。2000年度報告書刊行。第13次は本報告書作成現在調査中だが、4次の東、1次の北西、10次B C区間の南50mに位置し、縄文晩期から弥生前期の遺構・遺物を多く検出している。縄文後・晩期の埋甕を出土。第12次は試掘で弥生前期の甕棺を検出したのみ。9次の東、10次調査区東端の北100m。遺跡群南側の6、8、11次では弥生中期の集落と墓地が密に分布し、弥生前期の遺構は1、5、8、13次の遺跡群中央南にある程度のまとまりがあり、10次で溝が検出されるが、中心地区は遺跡群北側の7次付近であろう。縄文後・晩期の遺構・遺物は遺跡群の中央から南側にかけて散漫に分布する状況であり、北側にも若干の分布がある。なお、弥生後期以降は遺構・遺物が極端に少なく、集落が廃絶した感がある。遺跡群北部の調査が少ないのでまだ断定はできないが、周船寺の集落を営んだ人々は、おそらく、東1kmの飯氏遺跡群か、西1.5kmの志登遺跡群、あるいは弥生中期後半から巨大化する南2.5kmの三雲遺跡群といった各拠点集落へ移転したのではないかと考える。

3) 周船寺遺跡群第7次調査の概要

(1) 調査に至る経過

周船寺遺跡群は福岡市の内部、前原市との境に所在する遺跡である。特に第7次調査地点はこの周船寺遺跡群の北西側に位置し、西隣は前原市との市境となる。地番は西区周船寺1丁目531-1である。この地点に共同住宅建設の事前審査願いが埋蔵文化財課に提出された為、事前調査を行った所、遺構が確認された。その後、その取り扱いについて協議を行い、原因者負担で発掘調査を実施する事となつた。調査は平成2年1月16日から3月22日まで実施した。申請面積は1,472.42m²で、そのうち750m²について調査を実施した。調査組織は以下のとおりである。

調査組織

調査委託 昭和上地建物株式会社

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

埋蔵文化財課長 柳出 純孝（現文化財部長）

第1係長 飛高 憲雄

調査担当 山崎 龍雄

(2) 調査概要

調査地点の立地 周船寺遺跡群は高祖山から張り出した丘陵部と瑞梅寺川に挟まれた扇状地上に立地し、調査地点はその北西側に位置し、現標高は7~8mを測る。西に隣接する前原市では高田遺跡群となる。遺跡群は過去11次に亘る調査が行われているが、いずれもJR筑肥線以南で当地点周辺は、まだ他に調査が行われていない。ただ過去の調査の成果から周船寺遺跡群が縄文時代晩期から古墳時代にかけての集落・墳墓遺跡であることが分かりつつある。

調査区の土層 基本的な層序は上から第1層、客土（厚さ30~70cm）、第2層、暗灰色砂質土（水田耕作土、厚さ10~20cm）、第3層、暗灰褐色砂泥じり粘土（水田床土、厚さ5~10cm）、第4層、暗灰褐色粘土（鉄分を多く含む、厚さ3cm前後）、第5層、暗褐色砂泥じり粘土（鉄分を多く含む、

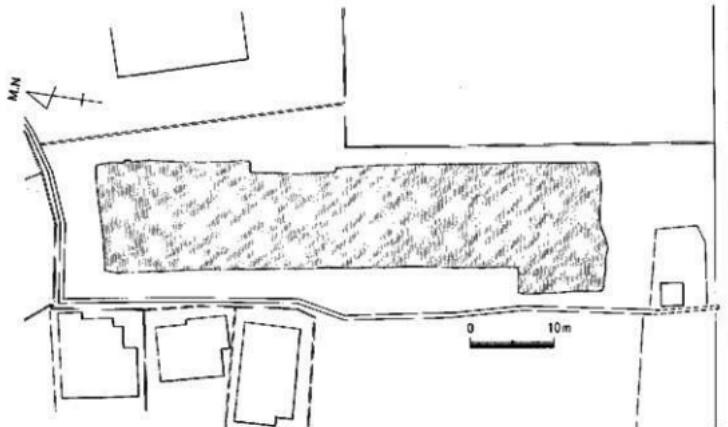


Fig.2 調査区配図図(1/600)



Ph.1 調査区全景(南から)



Ph.2 調査区北側



Ph.3 調査区南側

包含層10~15cm)で、第6層は淡灰褐色粘質シルト又は灰褐色砂砾である。北側では第5層の下に绳文時代の遺物を含む薄い遺物包含層がある。遺構は第6層上面で検出した。遺構面迄の深さは南東側が高く、北西側に向かって深くなる。深さは南東側で1m、北西側で1.3m程度である。

遺構の概要 (Fig. 2 ~ 4, Ph. 1 ~ 3) 遺構の分布密度は高く、また調査区全向に検出された。検出された主な遺構は甕棺墓6基、貯蔵穴8基、土坑36基、溝3条、竪穴住居跡1棟などである。ビット及び柱穴は多数あり、柱穴の中には柱根が残っていたものもあり、岡上復元案として建物5棟、構2条を現在考えている。遺構の時期は現在遺物の発現が途中で断定出来ないが、調査中の所見などから弥生前期から中期頃を中心と考える。

甕棺墓 (Ph. 4) は調査区北側の一部に集中して検出されたが、前期末から中期初めの金海式甕棺で、包含層を切り込んでいた。6基の内訳は成人棺の单棺4基、小兒棺1基、不明1基である。残りは悪かったが、人骨が残っていたものもあった。貯蔵穴 (Ph. 5) はいずれも直径1m前後で、プランは円形の袋状を呈する。北側で7基検出したが、甕棺墓の下から確認したものもある。内部には木の実が多く量に蓄えられていた。板付II式の土器が出土し、前期後半のものである。

土坑は長方形、円形の他、様々な形態があり、規模もまちまちである。調査区中央から南側に分布し、焼土ブロックや炭化物を多く含むものもあった。溝はいずれも浅く規模は小さいが、磁北方向に延びるものもあり、何らかの区画溝であろう。掘立柱建物群は主軸を磁北からやや東に振った方向を取り、横列 (Ph. 6)と同じ方向を取りその配置に企画性がある。竪穴住居 (Ph. 7) は2×4mと小型で、焼土や主柱穴は確認出来なかったが、床面には縫の痕跡があった。また鍬の歯が1点出土している。時期は不明だが前期のものであろう。

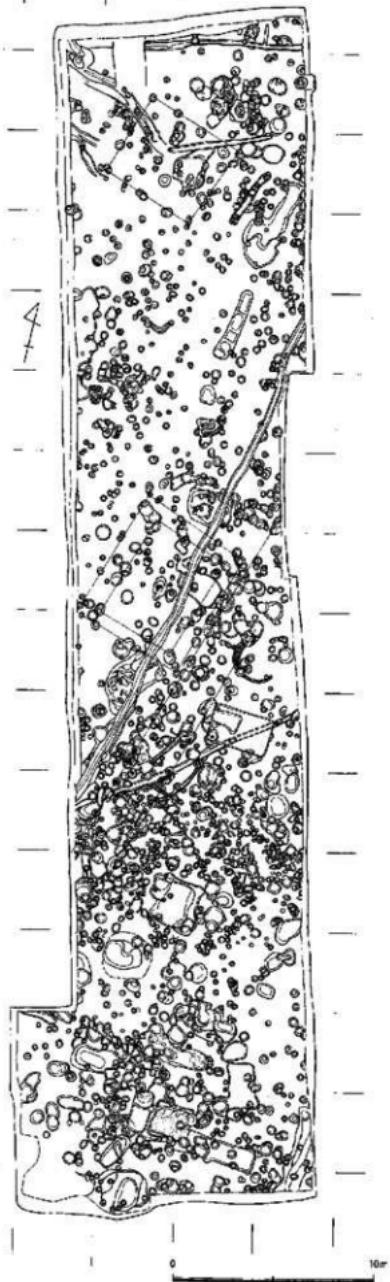
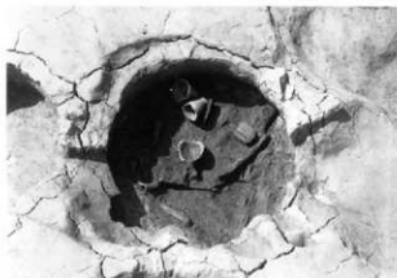


Fig.3 遺構全体図(1/250)



Ph.4 要格墓検出状況



Ph.5 貯藏穴検出状況



Ph.6 長方形の竪穴住居(南から)



Ph.7 南北方向に並列する構

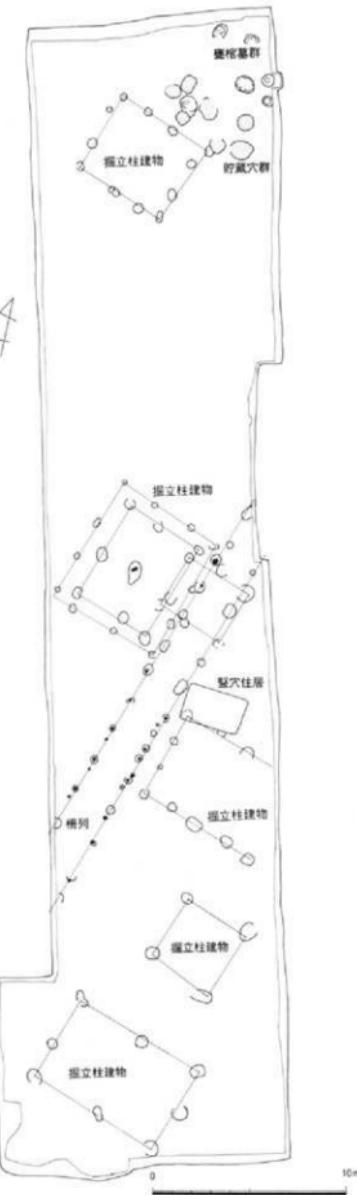


Fig.4 主要造構配置図 (1/250)

2. 調査の記録

1) 調査の概要

調査区は、延長約400mにおよぶが、東からA・B・Cの三区に分けて調査した（付図参照）。遺構検出面は表土直下10~40cmの灰色粘質シルト層だが、一部砂礫層が露出する。検出面とした灰色粘質シルト層は一部縄文時代の包含層となっている。調査はまず、1m幅分の試掘を行い、遺構・遺物を検出した部分を拡張した。A区は、顯著な遺構・遺物を検出できず、トレンチ調査のみで土層図の作成に努めた。B区は調査区東半で縄文時代後・晩期から一部弥生時代の包含層を検出した。包含層としたもののうち浅い掘り込み状のものは竪穴住居址になる可能性があるB区西半では弥生前期の溝1条と時期不明のピットなどの遺構を検出した。B区は縄文後・晩期、弥生前期の遺物を出土、C区は、その東半分の旧地形は低く、近年の客土がなされている。C区中央の5トレンチでは弥生前期の包含層を検出した。またC区東端の1トレンチでは近世以降の旧河川を検出しているが、他には遺構・遺物の検出はない。出土遺物は、縄文後・晩期、弥生前期の土器・石器を中心コンテナ7箱分の遺物が出土している。以下、A・B・Cの各区で検出された遺構の説明を行い、また遺物に関する報告は後でまとめて記述することにする。なお、縄文時代包含層や弥生前期の溝の土壤について、花粉分析などの自然科学分析をパリノサーウェイ株式会社に委託しており、その分析結果を最後に付してあるので参考にされたい。

2) A区の調査 (Fig. 5)

A区は調査区起点の平田第2踏切から約100m西の道路までであるが、重機の出し入れの都合上、延長84mしか掘っていない。調査時現況は畠地であった。全体を重機で耕作土（表土）およびその下の床土まで除去して、部分的にいくつかだめ押しで深くトレンチを入れている。床土は、地山の灰色シルトに鉄分等が沈殿した黄灰褐色土の場合の他に、若干の穢まじりの客土と考えられる灰褐色シルト土の場合がある。地山の灰色シルトは下部では地下水の影響で青灰色粘質化している (Fig. 7)。Fig. 5には、最終的に掘り下げた面での調査区各部における土質を記した（多くは地山）。砂礫層の部分がいくつもあり、古い河川の痕跡があるらしい。また調査区東端は、耕作土を除去した下部は黒褐色砂質土+レキであったが、この堆積は時期が不明で、近世以降と思われる素焼きの焼物（今回図示していない）の破片が出土し、混入でないとすれば、比較的新しい時期の河道などの落ち込みを埋めたものであろうか。この点A区端から道路を渡って20m東には溜池があり、近年の修築以前の落ち込みがあった可能性がある。その他時期



Ph.8 A区調査状況(東から)



Ph.9 A区調査状況(西から)

Fig. 5 A区全体図 ($S=1/200$)

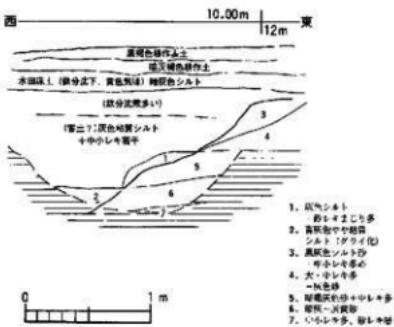
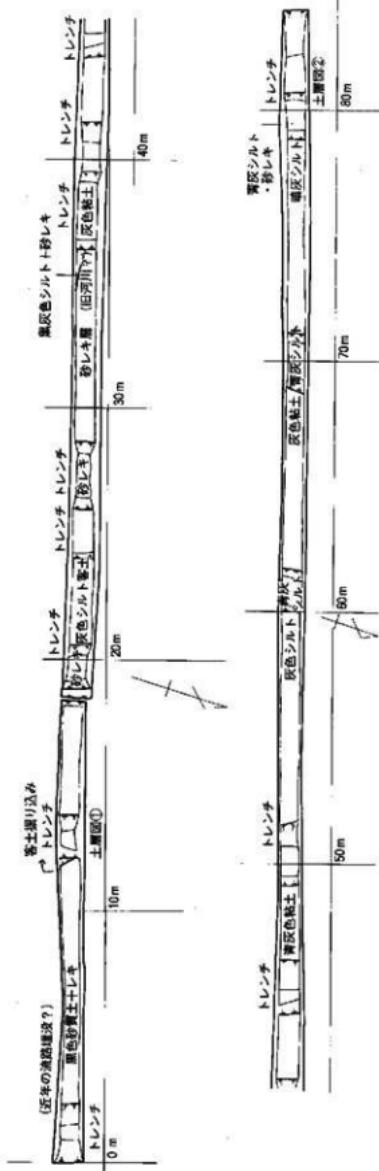


Fig. 6 A区調査区土層図① ($S=1/40$)

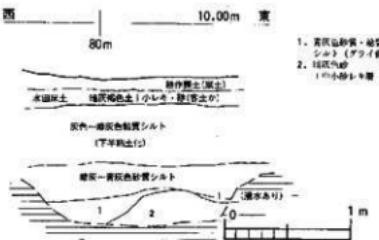


Fig. 7 A区調査区土層図② ($S=1/40$)

不明 (客土の床土に連続するので新しいもの) の客土の掘方がみられる (Fig. 6)。灰色シルト面では遺構は検出できず、重機での掘削も慎重に進めたが、灰色シルト土中に包含層や遺構は検出できなかった。わずかに、表上途中からの近代以降の浅い掘り込み (ゴミ穴等) が認められたに過ぎない。しかし、A区端50m北で弥生前期の壺棺が検出されたり、A区南50mの2・3次調査でも縄文後・晩明～弥生前期の遺構・遺物が削平を受けつつも若干は検出されているようであるから、今回調査のA区は本来遺構が存在してもよい地点であり、おそらく農地の開墾などのために削平されてしまったと考えたい。A区は、トレンチの平面図と部分的に10ヶ所程度十層断面図を記録して、調査を終了した。

3) B区の調査 (Fig. 8)

A区の西側には南北に農道が走り、これの西側に沿って農業用水路が走っている。この水路の端から西、次の高田第一踏切の手前までをB区としている(付図参照)。なお高田第一踏切から東へ20m間は、調査当時未買収で一段高くなってしまっており、遺構の遺存が期待されたが、その後の試掘では、地表下1.7mの盛土がなされていることが分かり、これから述べるB区の他の部分と同様に、削平が進んでいることが分かっている。さて、B区の調査では調査区東西にあわせて任意に座標を設定し、以下の各遺構の記述では、調査区東側の基点(0, 0)から西へ「○○m」(東の場合は「-○○m」と)といった形で説明する(なおA区の任意座標も方角はB区と同じで、ただし基点はA区東側に設定)。B区は、調査区西端から順に、重機による表土はぎと遺構確認を行っていった。表土直下で灰色シルト、ないし灰色砂質土、一部は砂礫層があらわれ、主に黒灰褐色の覆土の遺構をいくつか確認した。またはっきりしない土色(灰褐色)の覆土の縄文後・晩期の包含層をいくつか検出した。主要な遺構については後述するが、調査区の西端付近の70~75m地点では、柱穴や土坑などの遺構が重なって検出された(S X09)。いずれも深さが10cm前後以下しか残らず、遺物もほとんど出土していないので時期不詳だが、弥生前~中期の土器の細片を含むので、後述のS D01と同時期の遺構が含まれる可能性がある。ただし、近世の染付片を含むので、新しい遺構も存在し、さらに上部の耕作土の影響が少くないようである。また、調査区東端(-4mより東)はシルト層と砂礫・砂層が交互に堆積しており、東側の水路以前の複数の旧河道の堆積とみられる。さらに調査区中央38~65mでは、おそらく灰色シルト層の下部の砂礫層が露出しており、削平のためか遺構は検出されなかった。主な検出遺構



Ph.10 B区調査区全景(西から)



Ph.11 B区中央SX02~05(東から)

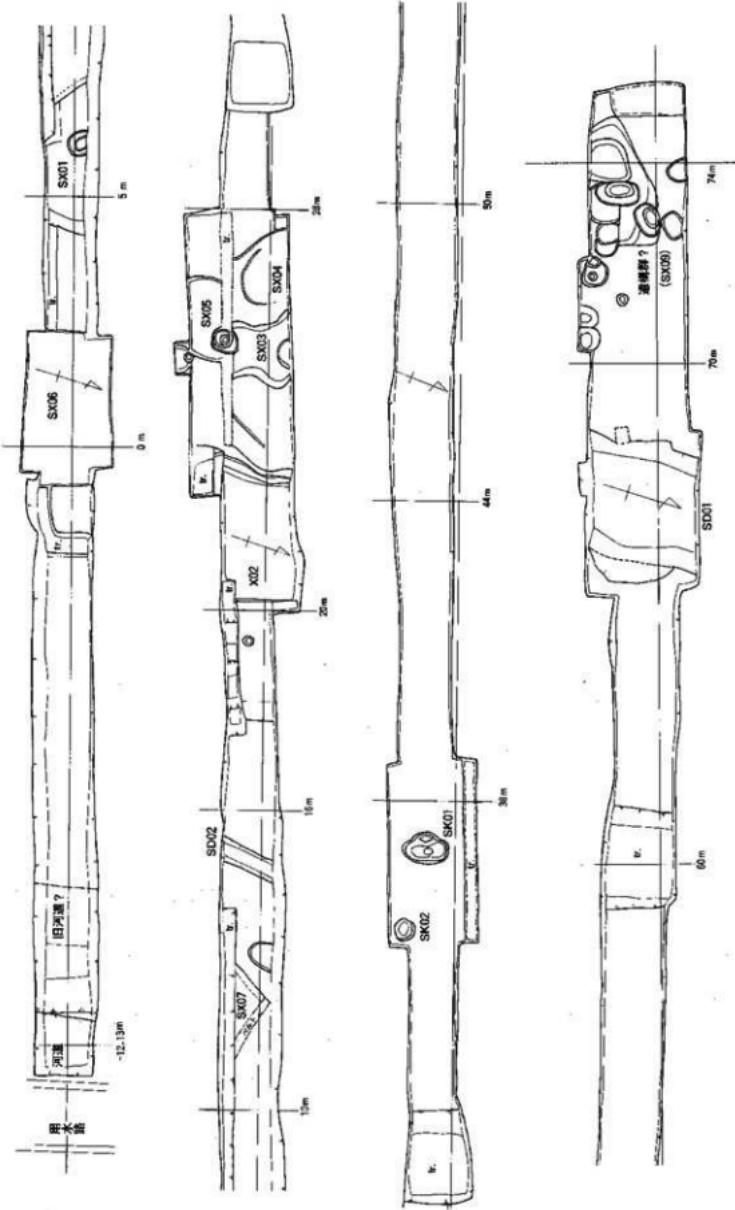


Fig.8 B区全休图 ($S=1/100$)

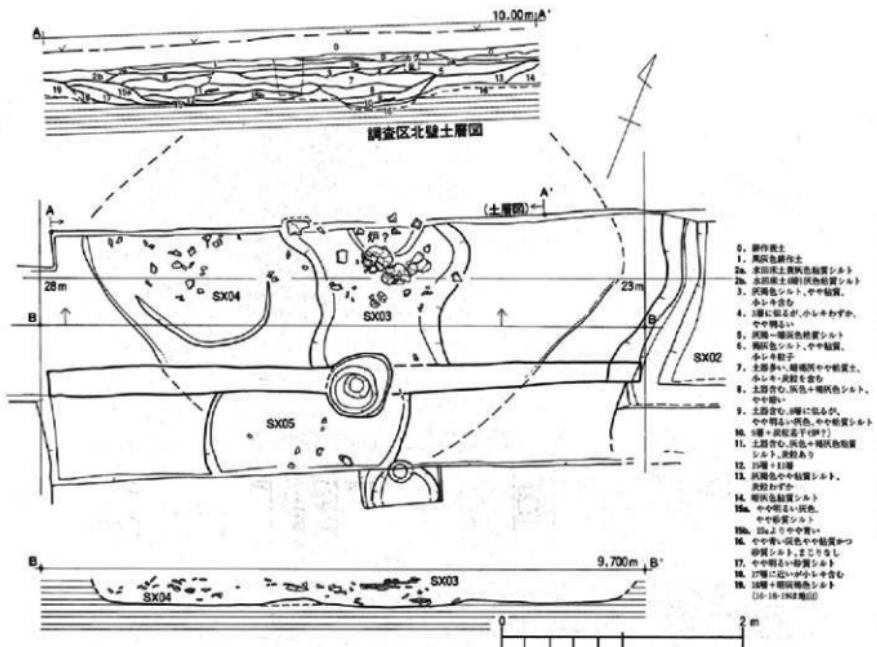


Fig. 9 SX03-04(住居址 ? SC03) 平面図・断面図 (S=1/40)

には、まず - 3 m 付近から 28 m 前後にかけて縄文後・晩期を主体とする包含層があり、一部は竪穴住居の可能性がある。次に 35-38 m に推定弥生時代の柱穴が、65-69 m に弥生前期の溝 S D01 がある。以下各遺構について説明する。

・ SX03, 04(竪穴住居 ? SC03) (Fig. 9, Ph. 12-15)
23-28 m で検出した縄文後期の遺物包含層であるが、調査中および整理過程での検討の結果、同時期の竪穴住居ではなかったかと考える (SC03 とする)。当初、土器窯 SX03, SX04 として分けて考えたが、調査区北壁土層 A-A' の検討と平面的な精査により、一辺 3.5 m 前後の正方形に近い (隅円方形か) の竪穴住居ではないかと考えるに至った。SX03 の下部には、微妙な深い土坑状の落ち込みがあり、炭粒を含み、炉址の可能性がある。



Ph. 12 SX03-04 全景 (西から)



Ph.13 SX03遺物出土状況(南から)



Ph.14 SX04遺物出土状況(北から)



Ph.15 SX03-04全景(北から)



Ph.16 SX02遺物出土状況(東から)



Ph.17 SX02出土状況近景(東から)



Ph.18 SX02東西土層(西半、北から)

S X03とS X04の土器の出土状況は、ほぼ同一平面上で出土するレベルがあり、床面からやや浮いているが、住居址廃絶時に近い時期の一括廃棄であろう。S X04、S X03とともに、若干下層のレベルでの遺物の出土もみられる。なお土層を検討すると(Fig. 9のA-A'), 13, 15, 17層は掘り方内とすれば貼床の可能性もある。遺物は、縄文時代後期前半?の土器と、黒曜石製の石鎌・スクレイパー・剝片、安山岩製のスクレイパー、玄武岩製の打製石斧などがある。

• S X02 (Fig.10, 11, Ph.16~19)

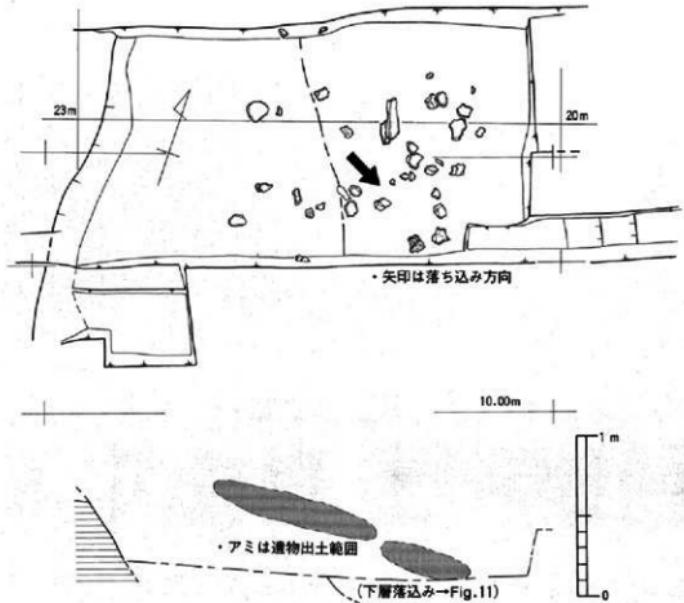


Fig.10 SX02平面図・断面図 ($S=1/30$)



Ph.19 SX02下層遺物出土状況(北から)

S X03の東側に接し、17.5m付近から23m付近にかけて検出された灰褐色～青灰色シルトないし粘土シルト、一部灰色砂の落ち込みである(土層はFig.16)。自然の河道ないし谷、あるいは沼状のよどみとみられる。落ち込みの最下部は確認していない。西半の上層から中層にかけて、西側ないし北西側(Fig.10の矢印)から捨てられたような状態、もしくは流れたような状況で、遺物が散漫に出土している(Ph.16, 17)。この出土状況については、平面図まで書いたところで翌日激しい雨が降り、遺物を残していた土柱がほとんど崩れてしまったので、正確な遺物の出土レベル

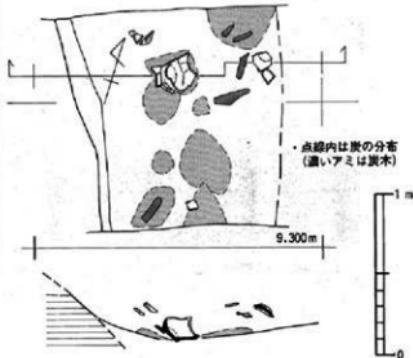


Fig.11 SX02下層出土状況図 ($S=1/30$)

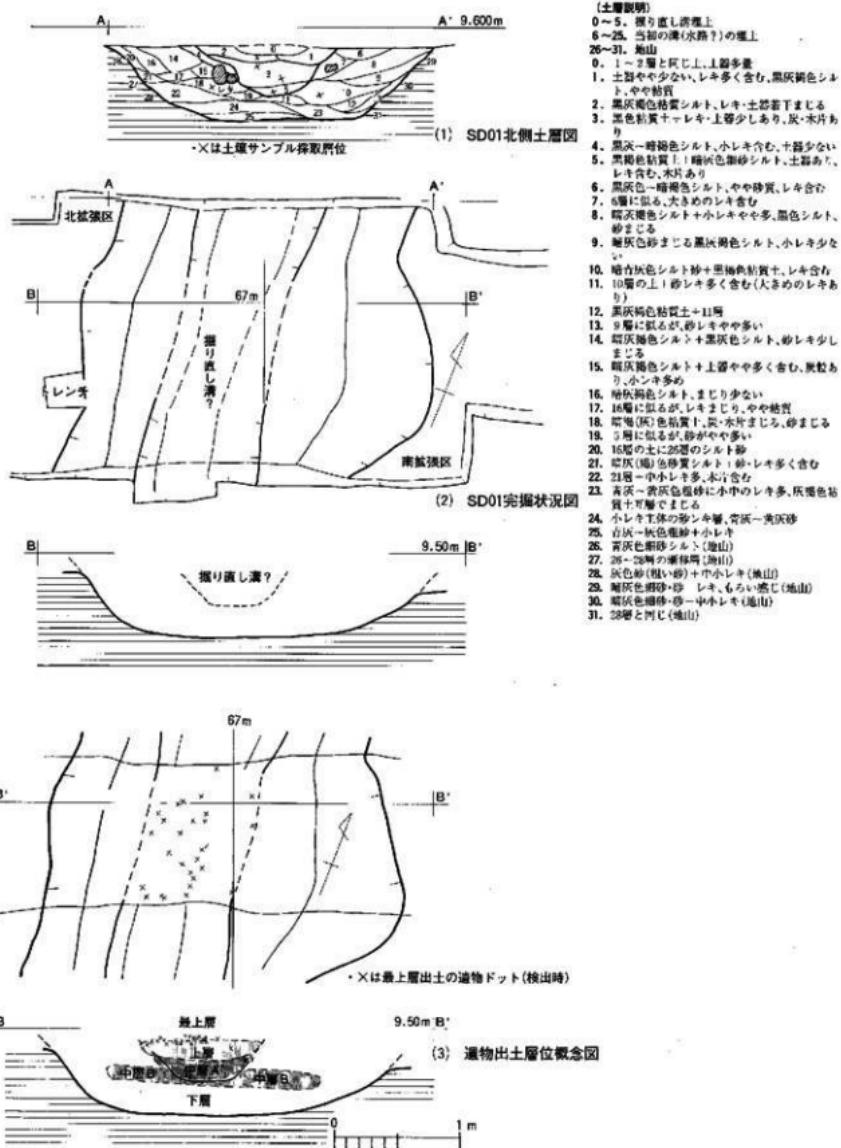


Fig.12 B区SD01平面図・断面図 (S=1/40)



Fig.13 SD01上層遺物出土状況図 (S=1/40)



Fig.14 SD01中層A・B遺物出土状況図 (S=1/40)



Ph.20 SD01検出状況 (拡張前、南から)



Ph.21 SD01中層遺物出土状況 (北から)



Ph.22 SD01掘り直し溝掘削状況 (南から)

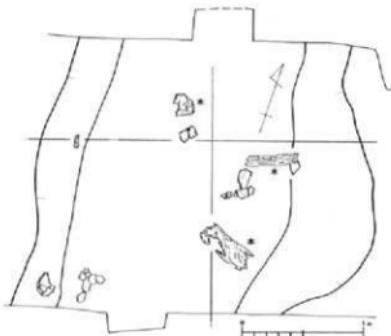
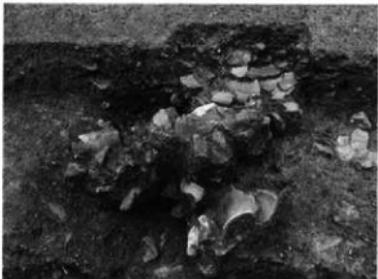
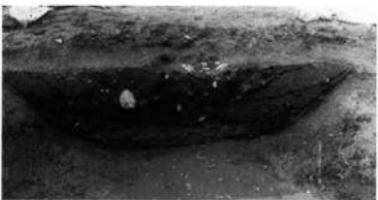


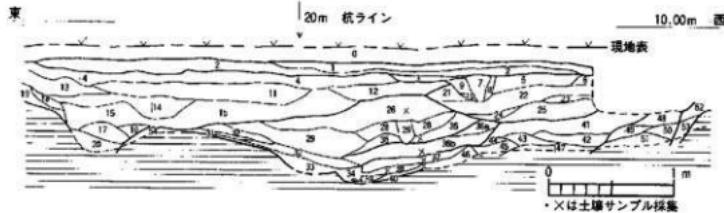
Fig.15 SD01下層遺物出土状況図 (S=1/40)



Ph.23 SD01上層南塗渠区出土状況 (北から)



Ph.24 SD01北側東西土層 (南から)



0. 黒い土上
1. 黒い土(木炭質土)
2. 黒い土(木炭質土)
3. (青)灰青色粘土(腐泥性土)
4. 黑色粘土(木炭質土)
5. 黑色粘土(木炭質土)
6. 黑色粘土(木炭質土)
7. 黑色粘土(木炭質土)
8. 黑色粘土(木炭質土)
9. 黑色粘土(木炭質土)
10. 黑色粘土(木炭質土)
11. 黑色粘土(木炭質土)
12. 灰褐色土
13. 灰褐色土(褐色シルト)
14. 黑色土(褐色シルト)
15. 黑色粘土(褐色シルト)
16. 黑色粘土(褐色シルト)
17. 黑色粘土(褐色シルト)
18. 黑色粘土(褐色シルト)
19. 黑色粘土(褐色シルト)
20. 黑色粘土(褐色シルト)
21. 黑色粘土(褐色シルト)
22. 黑色粘土(褐色シルト)
23. 黑色粘土(褐色シルト)
24. 黑色粘土(褐色シルト)
25. 黑色粘土(褐色シルト)
26. 黑色粘土(褐色シルト)
27. 黑色粘土(褐色シルト)
28. 黑色粘土(褐色シルト)
29. 黑色粘土(褐色シルト)
30. 黑色粘土(褐色シルト)
31. 黑色粘土(褐色シルト)
32. 黑色粘土(褐色シルト)
33. 黑色粘土(褐色シルト)
34. 黑色粘土(褐色シルト)
35. 黑色粘土(褐色シルト)
36. 黑色粘土(褐色シルト)
37. 黑色粘土(褐色シルト)
38. 黑色粘土(褐色シルト)
39. 黑色粘土(褐色シルト)
40. 黑色粘土(褐色シルト)
41. 黑色粘土(褐色シルト)
42. 黑色粘土(褐色シルト)

43. 黑色粘土(褐色シルト)
44. 黑色粘土(褐色シルト)
45. 黑色粘土(褐色シルト)
46. 黑色粘土(褐色シルト)
47. 黑色粘土(褐色シルト)
48. 黑色粘土(褐色シルト)
49. 黑色粘土(褐色シルト)
50. 黑色粘土(褐色シルト)
51. 黑色粘土(褐色シルト)
52. 黑色粘土(褐色シルト)
53. 黑色粘土(褐色シルト)
54. 黑色粘土(褐色シルト)
55. 黑色粘土(褐色シルト)
56. 黑色粘土(褐色シルト)
57. 黑色粘土(褐色シルト)
58. 黑色粘土(褐色シルト)
59. 黑色粘土(褐色シルト)
60. 黑色粘土(褐色シルト)
61. 黑色粘土(褐色シルト)
62. 黑色粘土(褐色シルト)

Fig. 16 SX02東西土層断面図 (S=1/40)

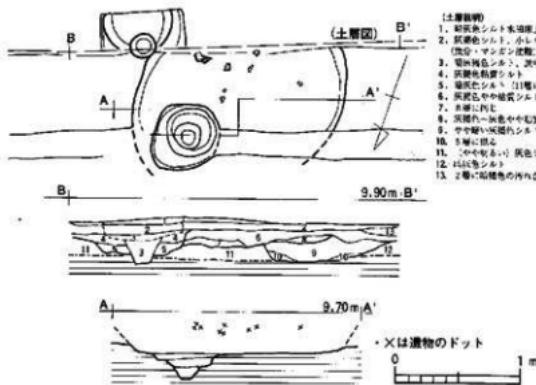


Fig. 17 SX05平面図・断面図 (S=1/40)

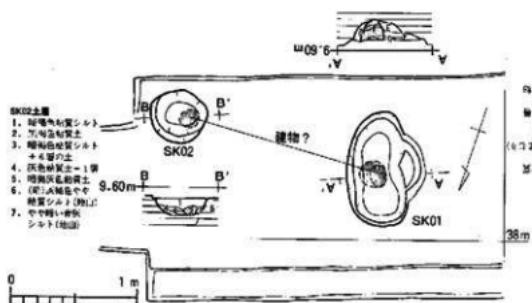


Fig. 18 SK01・02平面図・断面図 (S=1/40)

はとらえていないものが多いが、概略の出土状況はFig.10の断面図のような状況である。これら上層から中層の一層の下に炭化物を多く含む青灰色～灰褐色シルトの落ち込みがあり、ここから縄文時代後期初頭ないし前半の粗製の深鉢形土器の底部の大きな破片などがまとまって出土した(Fig.11、Ph.19)。層位的に上・中層の土器より古く、型式学的な検討が期待される資料である。この落ち込みが埋まる過程でまだ開いている時期は、SC03の時期を包含しているとみられ、調査中もそうであったが、地下水位の関係で湧水がみられ、

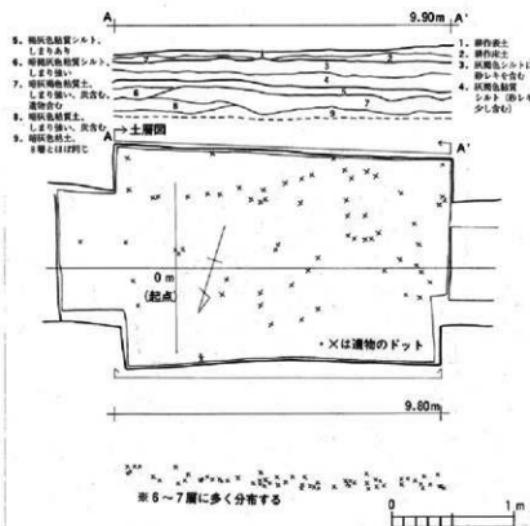
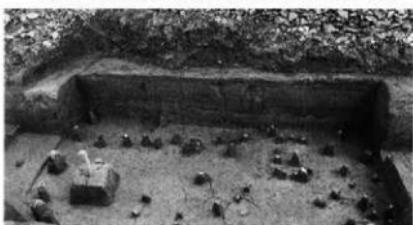


Fig. 19 B区SX06(2トレ)遺物出土状況図・断面図(S=1/40)



Ph. 25 B区SX06出土状況(北から)



Ph. 28 C区1トレンチ河道検出状況(北から)

おそらく集落内の水場として利用されたのではないかと思われる。SX 02については、下層出土の炭について炭素14年代分析と、土壤サンプルの花粉分を依頼している。C 14年代は、3680 B P、4000 B Pを示し、縄文後期初頭の推定年代に近い値となっている。一方、花粉分析につい



Ph. 26 C区調査区全景(西端から)



Ph. 27 C区6・7トレ全景(東から、後方は前原市調査)

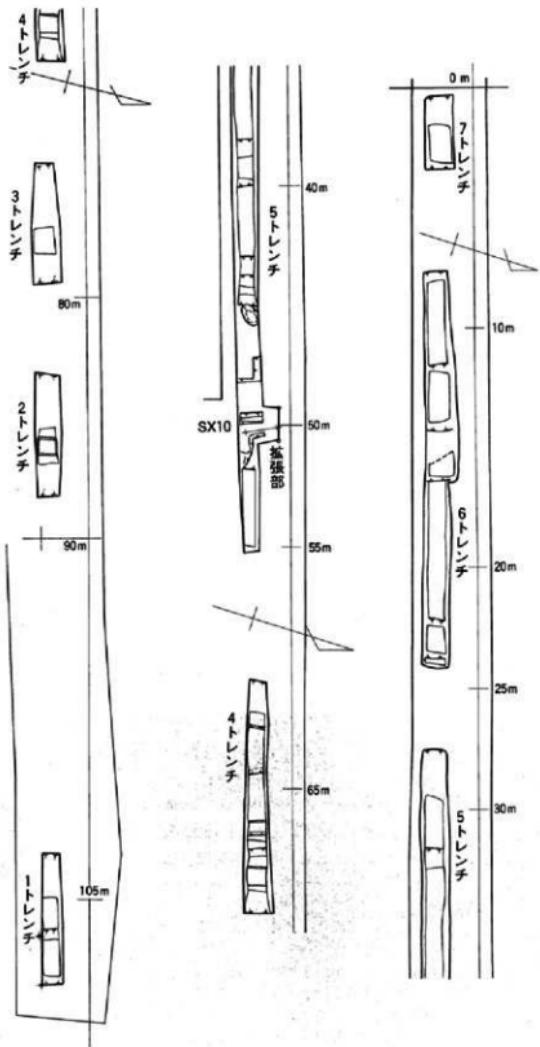


Fig. 20 C区全体図 (S=1/200)

ては、埋土環境のためか良好な花粉化石を検出できず、当時の環境の復元にはいたっていない（3.周船寺遺跡10次調査の自然科学分



Ph. 29 5トレンチ調査状況(東から)



Ph. 30 5トレ SX10土器出土状況(東から)



Ph. 31 5トレ SX10基強部土器出土状況(南から)

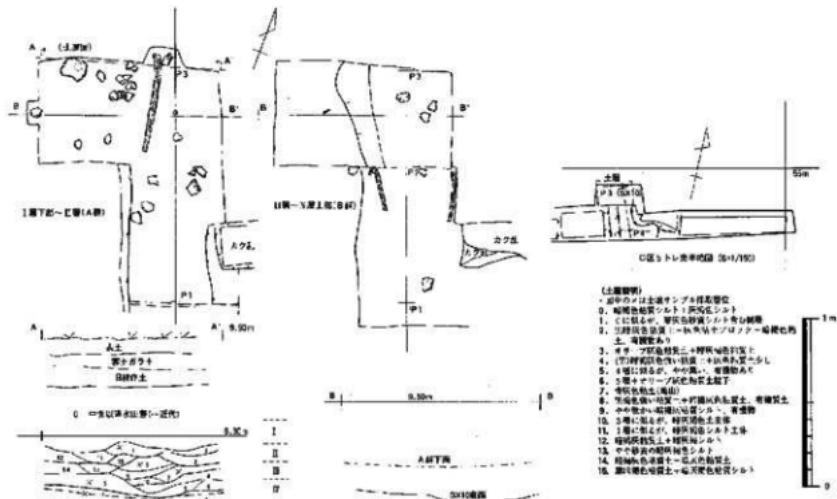


Fig.21 C区5トレSX10出土状況図・断面図 (S=1/30)

析)。

• SC01 (Fig.12~15, Ph.20~24)

65~69m地点で検出した弥生時代前期の溝状造構。幅2.5m前後、深さ60cmの逆台形の溝であり、底面が広い。調査区に直交し、確認された延長は2.5mのみで続きは不明である。土層の検討によると (Fig.12上)、溝中央部に掘り直しの痕跡があり、これは遺物の出土状況からも推測できる (Fig.13, Ph.22)。掘り直しとみられる部分は、黒褐色土を主体とし、以下の置上と異なっている。溝の下層は、砂礫・砂層があり、水が流れたことを示す。溝の東側の上端が大きく広がっているのは、溝が曲がるというより、流水によるえぐれの痕とみられ、この溝の本来の性格は自然流路であった可能性が高い。おそらく、流路が埋まる過程で、排水や集落内の区画などの目的のために人為的に掘り直されたものであろう。なお、この溝の検出面は、通常の造構検出面である灰色シルト層の最下部か、その下の砂礫混じりシルト層であり、同時期の造構が存在したとしても、削平されている可能性が高い。

S D01からは、多くの弥生前期上器が出土し、石器も伴い、一部自然木片や木の実も出土している。破片であるが、鉄器も1点出土している。遺物の出土状況であるが、ほとんどの遺物について、出土位置を記録し、上層も考慮してそれを検討した結果、4つの群にまとまっていることが判明した (Fig.12下、Fig.13~15)。なお、調査はまず1m強の幅で検出・掘削を始めたため、南北の拡張部分は出土状況が別の原因であり、今回の挿図は合成図であることをことわっておく。

遺物の4つの群とは以下の通りである。まず造構を検出した状況で (Ph.20)、溝中央部にすでに遺物が多数検出された「最上層」の一群と (Fig.12下の×)、「掘り直し」部分の「上層」の一群 (Fig.13) は一連のものである。これを1群とする。次に「掘り直し」の下半の「中層A」があり、これを2群とする。次は、最初の溝 (流路) の埋没過程の中層である「中層B」があり、これを3群とする。「中層A」と「中層B」は、層位学上異なる段階だが、平面的には同じレベルで検出している (Ph.21)。

なお、1・2群出土の土器の中には、3群と接合するものがあり、これは本来埋没していた3群の遺物を再掘削によってまきあげてしまい、再びそれが埋没したと考えられるので、そうした遺物は本

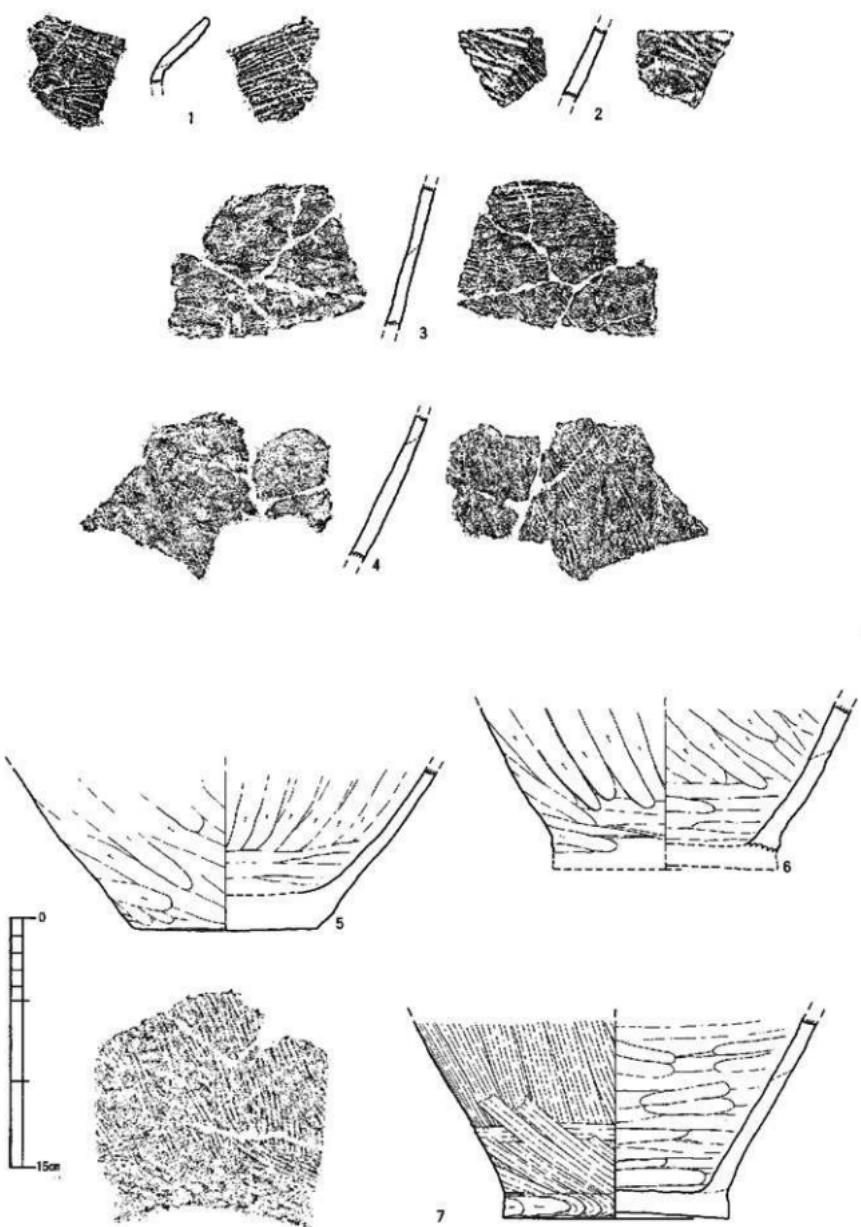


Fig. 22 B区SX02出土土器($S=1/3$)

来は3群に帰属すると考える。ただし、後述するように、1・2群と3群以下は型式学的に大差はないようである。最後に、溝の下層、3群以下を4群とする。溝の時期は、流路が機能していた時期の上層は不明だが、4群の遺物も板付IIa式が含まれ、流路としての下限がそこに認められる。3群と1・2群も同じ板付IIa式の範疇であり、流路の埋没は一つの時間的小様式内の比較的短期間である。「掘り直し」溝により多くの遺物を含むので、その掘削時期と集落の展開の二期は無関係ではないであろう。今後、環濠集落になる可能性を含め、この溝の延長の確認が期待される。

• SX05 (Fig.17)

26m付近の南側拡張区で検出。SX03-04と重複関係にあり、おそらくこちらが新しい。南側にピットがあるが、これとの関係は不明でこれはむしろSC03の柱穴かもしれない。南側調査区壁ではピットに切られる。こちらのピットは土色から弥生時代か。SX05は平面的には一つの土坑状に掘ってい

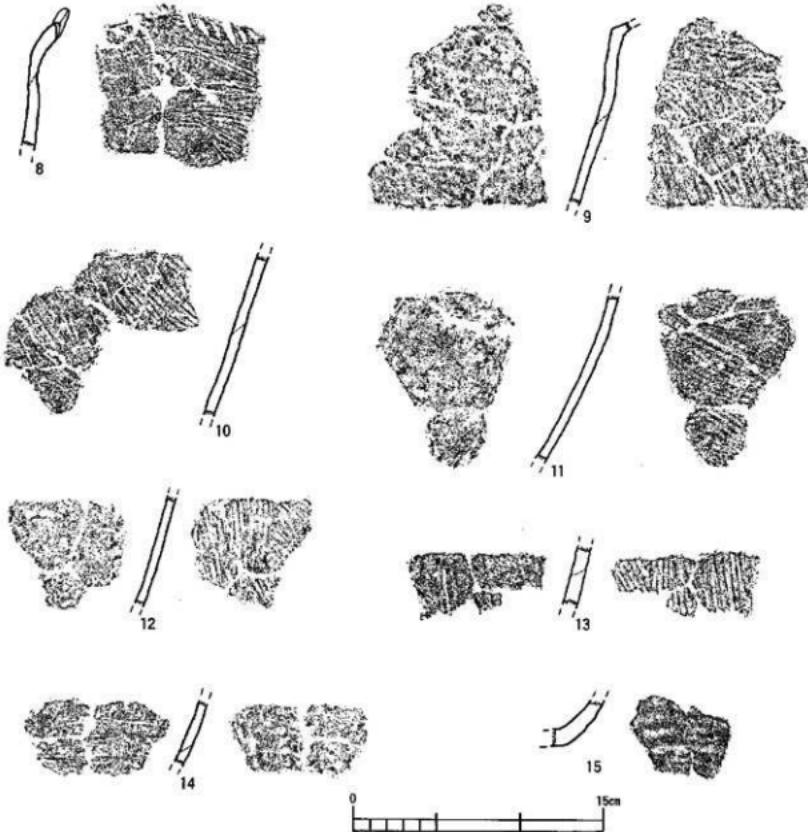
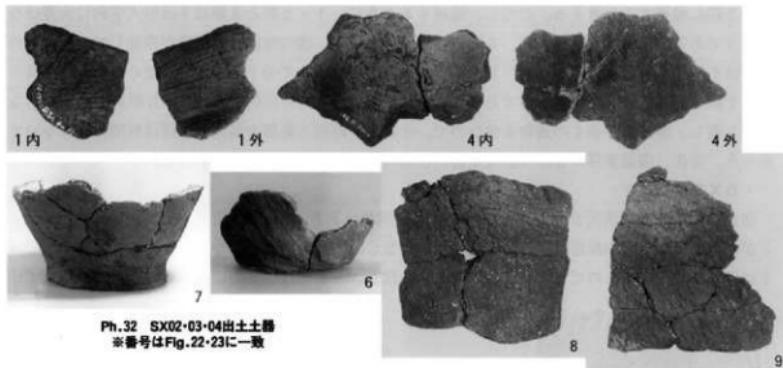


Fig.23 B区SC03(SX03-04)出土土器 (S=1/3)



Ph.32 SX02-03-04出土器
※番号はFig.22-23に一致

るが、土層の検討では複数の遺構の重複である可能性がある。床面より浮いて縄文土器（後期か）の細片が出土している。固化にたえるものはない。

・ S D02 (Fig. 8 参照)

25m付近で検出の溝。略南北に走行し、幅40cm、深さは土層では30cm。暗灰褐色粘質シルトの覆土で小レキを少し含む。遺物は無く、時期不明。土質はむしろ床土に類似し、新しい時期か。

・ S X01、S X07 (Fig. 8 参照)

S X01は4-6mで検出の暗褐灰色の浅い落ち込み。幅2m前後、深さ10cm程度。縄文土器の細片をわずかに出土。S X07は9-12m付近検出の範囲不明の落ち込み。深さは10cm程度で皿状。土色、土質はS X01と同じ。縄文・弥生土器の細片をわずかに出土。いずれも性格不明の遺構（包含層）。

・ S X06 (Fig.19, Ph.25)

- 1mから2.5m付近で土器の細片が多く出土し、この部分を拡張して（2トレンチ）遺物の出土状況を確認した。範囲不明の落ち込みで（S X06）、6, 7, 8層にかけて土器細片と炭粒が分布する。土器はいずれも細片で、縄文晩期も含むが、板付I式土器を出土（Fig.25右）。性格不明の遺構である。

・ S P01、S P02(Fig.18)

35-37mで検出した柱穴。いずれも暗褐色の覆土を主体とし、検出時および土層断面で黒褐灰色土の柱痕を確認。土色・質がS D01上層覆土に類似し、弥生時代の遺構であろう。建物を構成する可能性があるが、調査区が狭いため全貌は全く不明である。

4) C区の調査 (Fig.20, Ph.26:29)

C区の調査は、その東半分は地表下1m前後の客土がなされ、旧地形が低く、全てを地山面間で掘削すると土量が多くなり、廃土の置き場がなくなってしまうので、調査区をいくつかのトレンチに分けて試掘を行った。1~4トレンチおよび5トレンチ東端までは、真砂土やローム土による客土が大きく、0.5~1m前後下で厚さ15~25cm前後の旧表土（耕作土）が現れ、その下に暗灰色ないし青灰色のシルトまたは粘質土の地山が現れたが、この面での遺構・遺物の検出はなかった（なお、今回は紙数の都合上、C区の土層図の提示は省略している）。ただし1トレンチ東端最下部で、近世末期（近代初期か）の染付碗と、木製の下駄數点を検出しており、近世頃の河道とみられる。すぐ西の踏切脇に現在の水路があるので、それ以前のものか。

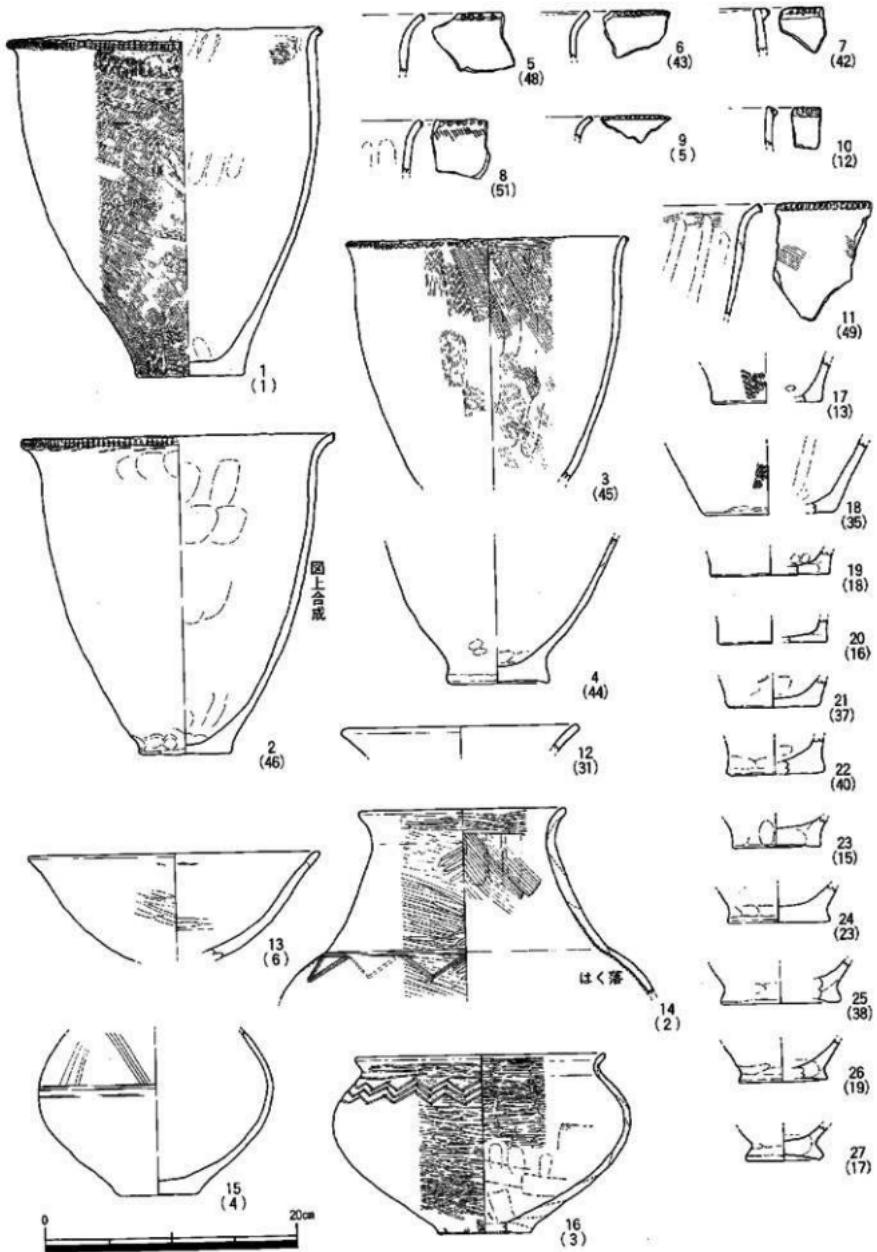
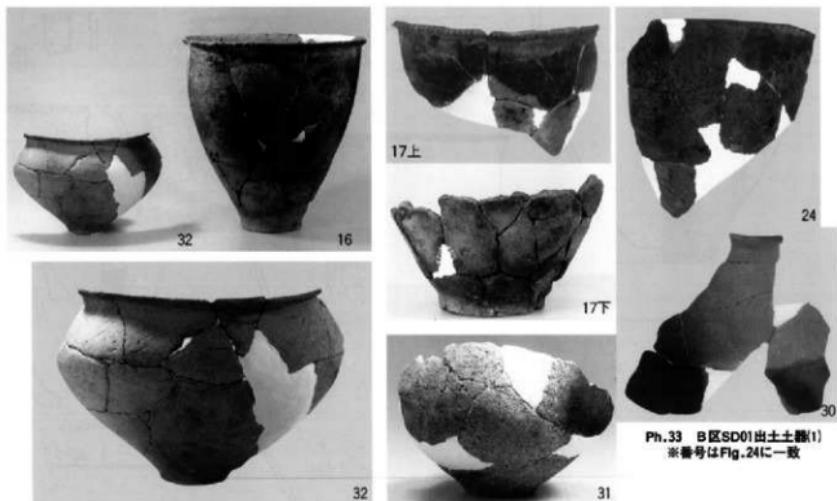


Fig. 24 B区SD01出土土器(1)(S=1/4)



5トレンチでは、東端を除いて地表下50~60cm前後で暗灰褐色粘質土が検出された。なおこの上の（旧耕作土の下）灰褐色シルト層は、土層の観察によると畦畔らしき部分があり、中世前期の陶磁器の細片を出土し、その頃の水田層の可能性がある。暗灰褐色粘質土面では後述のS X10を除き遺構は検出されていない。部分的にだめ押しで下部の青灰色粘土層まで下げているが、何もなかった。なお西の前原市側の調査での類似の土層で弥生前期の水田面が検出されているので、この土層もその可能性を考えたが、畦畔や足跡が不明で疑問がある。しかし、後述のS X10の土壤の分析では若干のイネの植物珪酸体が検出されており（自然科学分析の項参照）、可能性も残る。S X10はトレンチ東側で検出した弥生前期の土器窓である（Fig.21、Ph.30、31）。性格不明ながら、径1mの範囲で板付IからIIa式の土器片がややまとまって出土した。この部分は調査区を北に若干拡張した。

6トレンチでは中央から西側にかけて砂（粗砂含む）・砂質シルトの落ち込みがあり、7トレンチでは砂層とそれを切り込む砂疊層が検出された。いずれも河川跡とみられるが、時期は不明である。

5) 出土遺物

(1) 繩文土器

・B区S X02出土土器 (Fig.22、Ph.32)

S X02からはパンケース2箱程度出土しているが、細片が多く、埋土環境のためか脆い状態のものが多い（バイナダー処理を必要とするもの多し）、接合が進まず、器面も荒れて調整不明なものが多く、団化は一部にとどめた。1~4は上中層出土。1は波状口縁の破片で、内外とも横位から斜位のやや粗い条痕。口縁は如意状に外へ屈曲する。器壁は6~7mm。口縁と胴部の境は条痕原体の端があたり凹線状となる。胎土は粗く、1~4mmの石英・花崗岩を多く含み、雲母をわずかに含む。この胎土は他の縄文土器も同じものがほとんど。暗褐色から暗灰褐色。2は胴部片で、内外かなり粗い条痕。内面灰褐色、外面黒褐色。胎土は粗く、1~3mmの長石と花崗岩・閃綠岩？、粗い雲母を含む。3、4は同一個体の上下で器壁7~9mm。灰白色から灰褐色。断面の芯が黒い焼成。胎土は1に近いが、長石・

雲母がやや多い。3は外面横位の条痕の後、上半横の、下半は縦位のヘラミガキ。4は斜位または縦の条痕の後、縦のヘラミガキ。3、4ともに内面ケズリ後ヘラミガキ。1～4は粗製の深鉢か。5は中層と下層で接合。厚い底部で2cm強の器壁。胴部は7-8mm。底部内面は脆く、剝離・破損が多い。内面ナデないしミガキ。外面はナデ後ミガキか。平滑な器面。底部の縁は丸みがあるタイプで、6、

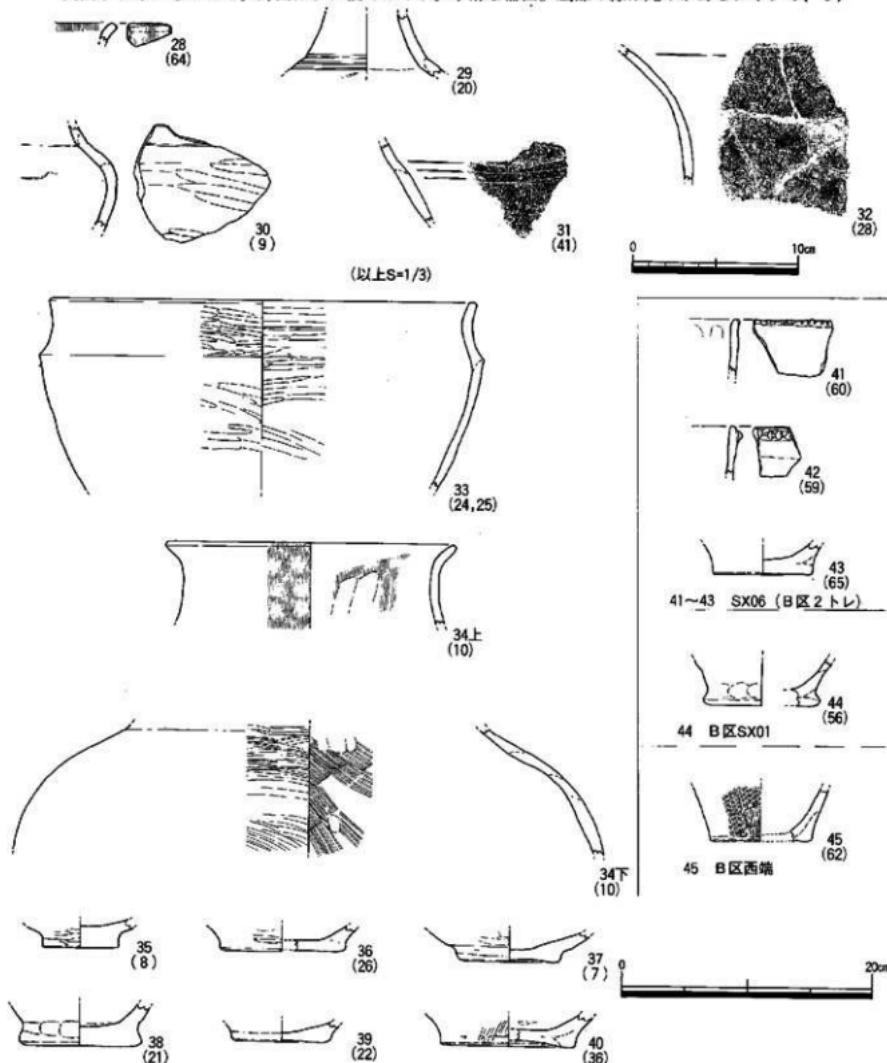
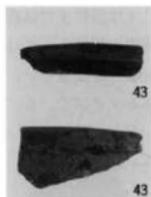


Fig.25 B区SD01出土土器(2)、B区SX06他出土土器(上段 S=1/3、他は S=1/4)



Ph.34 B区SD01出土土器(2)



*番号はFig.25に一致



48

7と異なる。浅鉢か。外面は灰褐色から暗橙色、内面は黒褐色。胎土は1-3mmの長石、石英、閃綠岩?、片岩?を含み、雲母をわずかと、角閃石を少し含む。「柏田遺跡」の底部B型か(福岡県教育委員会1977、山陽新幹線関係第4集)。6は中層出土。底

部円板が欠損した底部付近から胴部下半の破片。内外ナデ調整。底部の縁はやや凹むように外面横位のナデ。ナデは凹凸あるもの。底部の形態は7と同様か。器壁は10mm前後。橙色から淡褐色。胎土はやや細かく、1-2mmの砂粒を含む。石英・長石・花崗岩の細粒と、雲母をやや多く含む。7は下層出土。底部から胴部下方で遺存率が高い。底部の厚みは13mm程度。他の器壁は9mm前後。内面横位のナデ、外面は粗いハケメに似た条痕。縦位の後、横位・斜位。さらに底部の縁を横に強くユビナデ。底部はやや上げ底風で、前掲のA型か。やや白っぽい灰褐色。断面の芯が黒っぽい焼成。胎土は粗く、1-5mmの砂粒を多く含む。岩石・鉱物の構成は6と同じで粒がやや大きい。6・7は深鉢か。なお、5・7で煤の付着残る。以上の土器群は、粗製土器のみで位置付け困難だが、縄文後期前半の北久根山式前後に位置付けられる。上中層と下層は、この資料では明確に型式的な差を見い出すことは難しい。

・B区S X03, 04 (SX03) 出土土器 (Fig.23, Ph.32)

パンケース1箱強出土している。8は波状口縁の頂部の破片。外面は横位ないし斜位の条痕で、破片のため不明だが紋様的に施している可能性あり。内面磨滅し不明。暗灰黄褐色(内面黒灰色)。胎土は、SX02-1に類似するが、雲母がやや目立ち、片岩を含む。9は口縁部への屈曲部を含む破片。

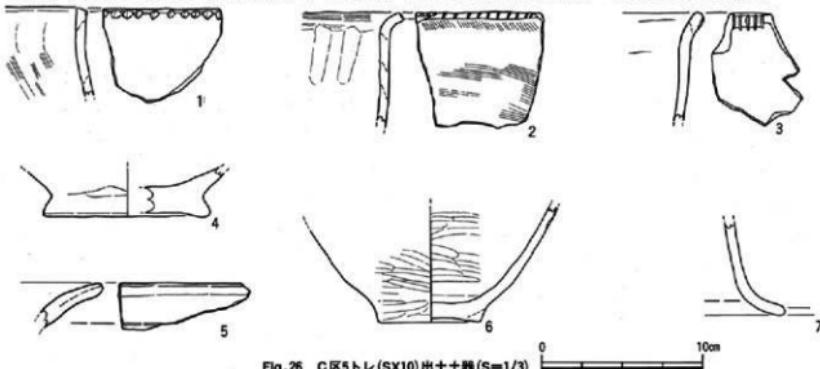


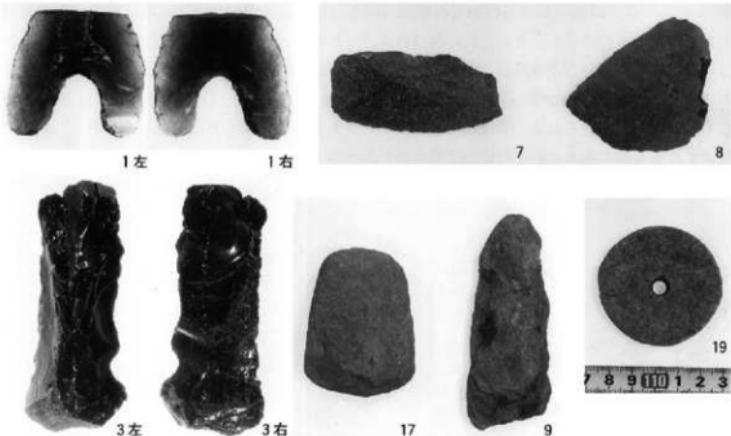
Fig.26 C区5トレ(SX10)出土土器(S=1/3)

外面は斜位から縦位の粗い条痕、屈曲部下は横位の条痕。内面磨滅不明。胎土はS X02-1と同じで、角閃石をごくわずか含む。灰褐色。10はミスで押図が天地逆になっている（左の拓本は外面）。斜位の条痕（内面磨滅不明）。胎土・色調は9に同じ。11も10と同様の調整・胎土。暗灰褐色。12は縦位・斜位の条痕（内面不明）。白っぽいにぶい黄橙色。胎土は通有のもの。13は外面は継ぎの条痕。内面は不明瞭だが条痕か。灰褐色で、胎土は通有。14は外面は継ぎの条痕で、にぶい黄橙色。内面は煤が付着し、横位の条痕、暗灰褐色。胎土は通有。15は底部附近で、外面ナデないしミガキで平滑、内面ナデ。にぶい黄橙色ないし淡灰褐色。胎土はやや密で、長石・石英の細粒と雲母を多く含む。底部の形状は、S X02-5に類似。以上の土器群は、ほとんど粗製の深鉢だが、S X02の特に上中層のものと同じ様相で、同様の型式が考えられよう。

(2) 弥生土器

・B区 S D01出土土器 (Fig. 24, 25, Ph. 33, 34)

弥生前期の土器がパンケース5箱程度出土。以下、紙面の都合で一つ一つの土器について詳述できないが、全体的な傾向といいくつかの土器について述べる。なお土器の器面は磨滅気味のものが多く、実測図で調整がない部分は必ずしも「ナデ」の部分を示すとは限らない。層位上の1~4群との対応関係は、1群がFig. 24-1~3, 5~7, 9~12, 14~19, 21, 22, 24~27, Fig. 25-29, 31, 32, 36~40、2群がFig. 24-8, 20, 23, Fig. 25-30、3群がFig. 24-4, Fig. 25-35, 38、4群がFig. 24-13, Fig. 25-28, 33, 34である。層位間で接合するものはより下層を優先した。下層の3・4群にはやや古相のFig. 24-4の底部やFig. 25-4の夜白系浅鉢もあるが、Fig. 24-13の丸みを持つ鉢状の坏部の高壺やFig. 25-34の壺の形状は特に古いということではなく、壺も口縁部全面刻みにならない（上端にからむ）タイプで、板付IIa式の範疇であろう（ただしその古相）。上層の1・2群もほぼ同じ段階である。ただし、1・2群土器を含めて、口縁部の如意形の屈曲の甘い「板付粗型壺」系で占められる本資料をどう位置付けるかはやや問題がある。前述のように刻みのあり方は新相のものが多いので（Fig. 24-1, 2, 3, 5, 6, 8、同9, 11は板付I的）、板付IIa式における糸島の地域色であると予想したい。板付I式としては、夜白系の土器群が少なく、夜白系の壺のFig. 24-7, 10も突堤が口縁部上端であり、新相である。同16のような山形紋の無頸壺（あるいは鉢か）は珍しいが、今後この地域で発見されるかもしれない。



Ph.36 出土石器写真(1) ※番号はFig.27・28に一致

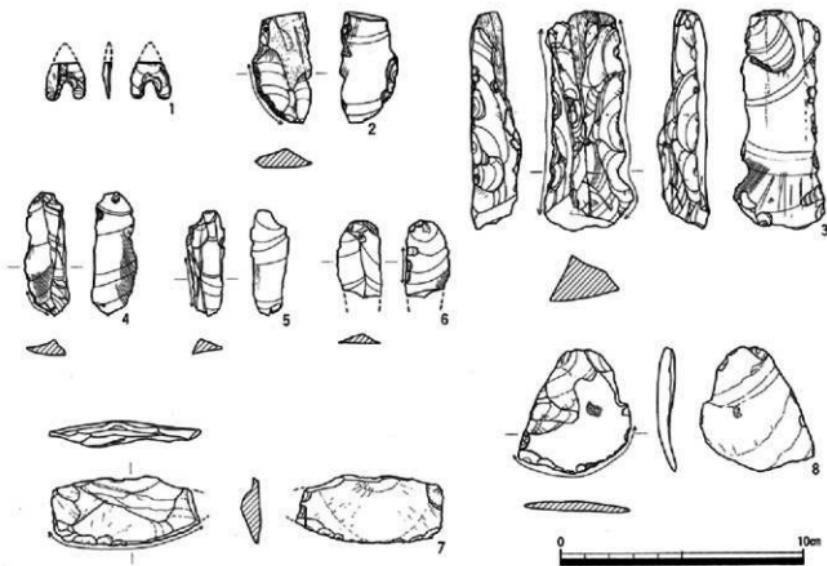


Fig. 27 出土石器(1)(S=1/2)

なお壺は貼付口縁の板付系が含まれないことが興味深い。Fig. 24-14は2条の、Fig. 25-30は1条の沈線を胴部から頸部の明確な屈曲部に施す。Fig. 25-29の沈線は3条だが、深く鋭い感がある。紋様はヘラ描き沈線の山形紋(2-3条)が多い(Fig. 24-14~16, Fig. 25-32, ただし32は重張紋か)。Fig. 25-31は3条の平行沈線の下に、矢印状の紋様(1条沈線)。壺の底部は円整貼付のものからやや上底気味のものまである。なおFig. 25-28は赤彩研磨され、彩紋土器の可能性が高い。同34も上半は赤彩である。壺の底部は、夜臼系の形態を残すものと(Fig. 24-3, 24-27)、新相の(あるいは地域?)薄い平底(同17~21)、この時期の板付系の通有の底部(同1, 2, 22~24)がある。壺は内面に縦のユビナデの痕跡を残すものが多い。また、Fig. 24-1のような外面ヨコハケ(ナナメハケ)の顕著な壺は、原体は違うが条痕の使い方の系譜か。土器の色調は、壺が暗褐色からぶい黄橙色、壺はぶい黄褐色から浅黄色を呈するものが多い。胎土の砂粒構成はほとんど同様で、1-3mmの長石ないし花崗岩がやや多く、次に石英が含まれる。雲母はごくわずかに含むものと、ふつうに含むものがある。角閃石が少量含まれるものもある。いずれにしても在地の胎土もある。いずれにしてもバリエーションにおさまるもののが大半である。以上の土器群は、壺が「板付相型壺」的な系譜の多く残る板付IIa式の



Ph. 37 出土石器写真(2) *番号はFig. 28に一致

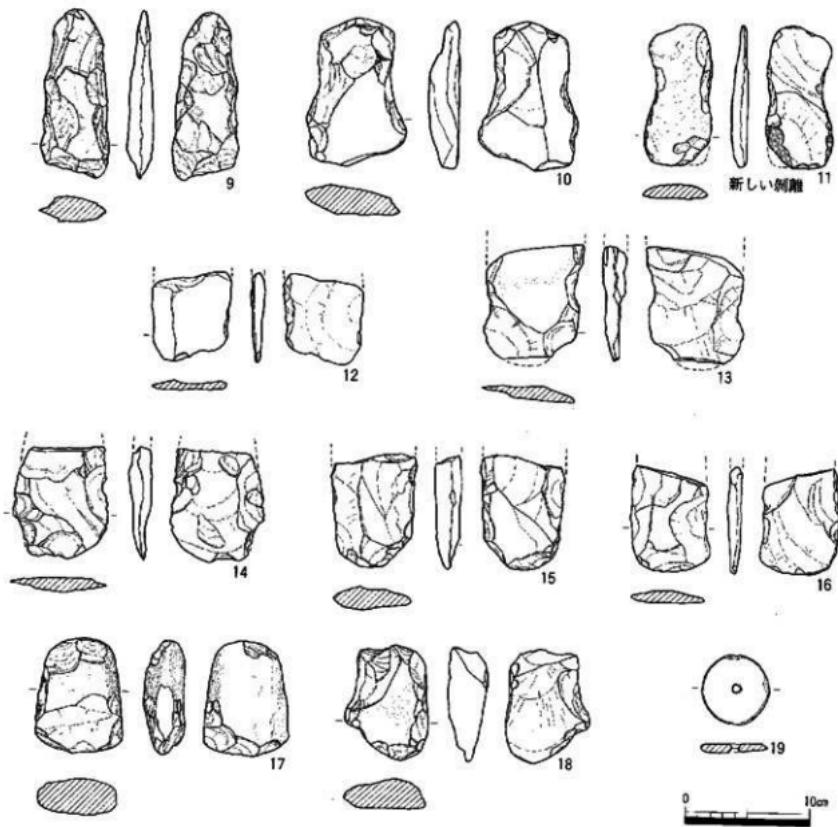


Fig. 28 出土石器(2)(S = 1/4)

表1. 石器・石製品一覧表

序号	出土遺構	石材	長さ	幅	厚さ	武合度	備考
1 石鏃	B区・SX01	黒曜石	(1.6)	1.5	0.3	左端形欠損	
2 スクレーパー	B区・SX04	黒曜石	4.6	2.4	0.9		
3 スクレーパー	B区・SD01	黒曜石	9.0	3.7	2.0		石核利用
4 脱帽剥離ある剥片	B区・SX03	黒曜石	5.1	1.8	0.7		
5 放射剥離ある剥片	B区・SX04	黒曜石	4.3	1.6	0.8		
6 放射剥離ある剥片	B区・SX04	黒曜石	(3.2)	(1.8)	(0.6)	欠損	
7 スクレーパー	B区・2トレ	古利輝石安山岩	2.5	(6.2)	1.1	欠損	
8 スクレーパー	B区・SX03	古利輝石安山岩	5.1	4.7	0.8		
9 打製石斧	C区・5トレ延張工所	安山岩	15.4	5.4	2.0		
10 打製石斧	B区・SD01	安山岩	11.8	8.0	2.6		
11 打製石斧	C区・5トレ延張工所	頁岩	11.3	5.4	1.4	万頭欠損	
12 打製石斧	B区・SX03	安山岩→玄武岩	(7.2)	(6.3)	(1.2)	素面欠損	
13 打製石斧	B区・SX03	安山岩→玄武岩	(9.2)	(8.0)	(2.0)	基部欠損	
14 打製石斧	B区・SX02	安山岩→玄武岩	(9.0)	(7.5)	(2.0)	基部欠損	
15 打製石斧	B区・SX02下層	安山岩→玄武岩	(9.1)	(6.8)	(2.1)	基部欠損	
16 打製石斧	B区・SX03	安山岩→玄武岩	(8.5)	(6.4)	(1.1)	基部欠損	
17 鋸石	B区・SD01	砂岩	9.1	6.8	3.4		
18 鋸石	B区・SD01	安山岩→玄武岩	9.0	6.7	3.2		
19 破壊車	B区・SD01	片岩(滑石?)	5.5	5.4	0.8		磨製石斧軸用

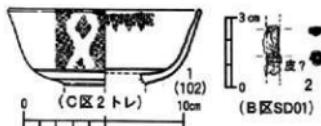


Fig. 29 その他の遺物(染付模 S=1/3、鉄器 S=1/2)



Ph.39 B区SD01出土鐵器
(図と表裏逆)

糸島の地域色と考えられる。今回、各土器について詳述できなかったが、今後問題となる資料と思われる所以、資料をぜひ実見され様々な検討がされることを願う。

・ その他の遺構の弥生土器

Fig. 25-41~43はB区S X06出土。41は板付I式の口縁部が外へ屈曲擴張する前の壺か。細かな刻みを施す。42は夜白系の壺。口縁上端から少し下がって突帯がある。同43はB区S X01出土。夜白II式か。同45はB区西端遺構群の出土。薄い平底の壺。板付II式の範疇か。Fig. 26はC区S X10出土。1は口縁が如意形にならない狭義の板付壺型壺。刻みは外側に片寄る。2も板付壺型壺で、甘い如意形。壺部や全面に細かな刻み。Fig. 24-9と同様。外面タテハケ後ヨコハケ。3は口縁部外方下端気味に縱長の刻み。甘い如意形。4は夜白系の壺の底部。ただし、B区S D01も同様だが、周船寺遺跡ではこの形態の底部にも板付壺型壺の口縁部が組み合わさる可能性が高い。5は貼付口縁の板付I式的な壺。6はやや上げ底気味の壺。夜白系か。

7は高環の脚部とみられ、作りは壺の口縁部をさかさまにした感じ。以上のC区S X10の土器群は、B区S D01と同時期か、わずかに古く板付I式新相になる可能性もある資料である。資料が乏しいが、B区S X06→B区S D01→C区S X10という土器群の変遷となろうか。

(3) その他の遺物

石器はFig. 27, 28に掲げ (Ph. 36, 37も参照)、詳述する余裕がないのでその観察を表1に記す (田上勇一郎作成)。Fig. 29-1はC区1トレンチ河道出土。肥前系の近世末~近代初めの染付端反碗。コバルトブルーの型紙文様。Fig. 29-2はB区S D01出土の鉄器。細い棒状で、幅5mm、現存長2.0cm。鉄錆の基か。一部に有機物を巻いた痕跡? メタル質残る。なお出土は確実。Ph. 40は近世末期の木製下駄である。C区1トレンチ河道出土。



Ph.38 C区1トレンチ出土染付碗



1表 1裏



2表 2裏



Ph.40
C区1トレンチ出土木製下駄 3

3. 周船寺遺跡10次調査の自然分析(付・生の松原遺跡)

はじめに

今回の自然科学分析は、JR筑肥線埋蔵文化財発掘調査で調査が行われた瓦船寺遺跡と生ノ松原遺跡の2遺跡について実施する。主な調査内容は、造構の年代観に関する検討、当時の古環境復元である。以下に遺跡別に調査成果について報告する。

I. 周船寺遺跡10次

周船寺遺跡は、福岡市西部、瑞梅寺川などの河川活動によって形成された糸島平野東端に位置し、縄文時代後期以降の性格不明の造構、弥生時代前期の溝ないし流路などが検出されている。

今回の調査では、造構の年代観に関する情報を得ることを目的に放射性炭素年代測定、造構の埋積過程を検討する目的で珪藻分析、また周辺の古植生復元を目的として花粉分析・植物珪酸体分析をそれぞれ実施する。

1) 試料

試料は、B区の縄文時代後期以降の性格不明な造構(SX02)から6点、同じくB区の弥生時代前期の溝ないし流路(SD01)埋積物から4点、C区5トレ拡張部の基本土層から4点採取された。これらの試料から、放射性炭素年代測定・珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を実施する試料を選択した(表1)。

表1 分析試料の一覧

地 点	試料名	状 態	分析項目			
			珪藻	花粉	植物	14C
B区SX02東半	11層	オリーブ灰色シルト		○		
	16層	オリーブ黒色砂混じりシルト		○		
	26層	灰オリーブ色砂混じりシルト		○		
	29層	暗オリーブ灰色砂混じりシルト		○		
	最下層	炭化材(No.10)				○
	最下層	炭化材(No.11)				○
B区SD01	2層	オリーブ黒色シルト質砂	○			
	5層	黒褐色シルト質砂	○	○		
	10層	黒褐色シルト混じり砂	○			
	18層	黒褐色シルト質砂	○	○		
C区5トレ拡張部	No.4	黒褐色砂混じり粘土質シルト			○	
	No.5	オリーブ黒色粘土質シルト		○	○	
	No.6	黒褐色砂混じりシルト			○	
	No.7	オリーブ黒色シルト質粘土			○	

2) 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

放射性炭素年代測定は、学習院大学年代測定室に依頼して測定して頂いた。

(2) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、K.Krammer (1992)、K.Krammer & Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, 1991b)などを用いる。

同定結果は、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水牛種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度(pH)・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.5%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出する化石が現地性か異地性か判断する目安として完形殻の出現率を求め考察の際に考慮する。堆積環境の解析にあたっては、淡水生種については安藤(1990)、陸牛珪藻については伊藤・堀内(1991)、汚濁耐性についてはK.Asai & T.Watanabe (1995)の環境指標種を参考とする。

(3) 花粉分析

試料を湿重で約10~20g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別(250μm)、重液分離(臭化亜鉛、比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理(無水酢酸:濃硫酸=9:1)の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の各種類の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子が総数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基準とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフン(ー)で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

(4) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250kHz, 1分割)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度で希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入しプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由來した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表に示す。

3) 結果

(1) 放射性炭素年代測定結果

放射性炭素年代測定結果を表2に示す。

年代値の算出には14Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しており、1950年より年数と

なっている。誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ に基づいて算出した年数で、標準偏差に相当する年代である。また、本測定値は同位体効果の補正をした値である。

表2 放射性炭素年代測定結果

試料名	試料の状態	年代値	Code.No.
B区SX02最下層No.10	炭化材	4000±60 $\delta^{13}\text{C} = -27.6$	Gak-20080
		2050 B.C.	
B区SX02最下層No.11	炭化材	3680±60 $\delta^{13}\text{C} = -29.8$	Gak-20081
		1730 B.C.	

(2) 珪藻分析

結果を表3・図1に示す。珪藻化石は、5層を除いて無化石～数十個体と少ない。化石の保存状態は全般的に悪く、化石が流出した5層の完形殻の出現率も15%と低い。産出分類群数は、17属27種類である。

5層は、貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真+好アルカリ性種（アルカリ性水域に生育する種）、流水不定性種（流水にも止水にも生育する種）が優占することを特徴とする。産出種の特徴は、流水不定性の*Cymbella aspera*、*Fragilaria ultua*が約20%と優占し、同じ生態の*Amphora affinis*、好止水性の*Sellaphora americana*、陸上のコケや土壤表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に生育する陸生珪藻の*Hantzschia amphioxys*、そして、海～汽水生で海藻などに付着生育する*Cocconeis scutellum*などを伴う。このうち優占種の*Cymbella aspera*は、沼澤湿地付着種群（安藤、1990）の一種でもある。

なお、18層は、珪藻化石が少ないが5層と近似する種類が検出されている。

(3) 花粉分析

結果を表4・図2に示す。B区SX02東半では、保存状態の悪いシダ類胞子が検出される程度であり、花粉化石が全く検出されない。これに対して、B区SD01とC区5トレ拡張部では、花粉化石が検出されるが、両遺構で主要木本花粉の出現傾向が異なる。

B区SD01では、コナラ属アカガシ亞属とニレ属一ケヤキ属が多産し、この他にマキ属、マツ属、シイノキ属などを伴う。ただし、総花粉・胞子の中で木本花粉の占める割合は低率である。草本花粉ではイネ科が多産し、この他にクワ科、ギシギシ科などが比較的多く検出され、ガマ属、ミズアオイ属、サナエタデ節一ウナギツカミ節、オオバコ属、キュウリ属、ヨモギ属などを伴う。

C区5トレ拡張部No.5では、ニレ属一ケヤキ属がもっとも高率に出現し、マキ属、マツ属、アカガシ亞属、シイノキ属などを伴う。草本花粉では、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが検出されるが、全体的に出現率が低率である。

表3 硅藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	B区SDOI			
	塩分	pH	流水		2層	5層	10層	18層
Cocconeis scutellum Ehrenberg	Ogh-Meh	ind	ind	C1	-	3	-	-
Nitzschia coconeiformis Grunow	Meh			E1	-	1	-	-
Nitzschia granulata Grunow	Meh			E1	-	1	-	-
Pseudopodosira kosugi Tanimura et Sato	Meh			E2	-	-	-	1
Nitzschia palea (Kuetz.) W. Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	-	1	-	-
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-ind	al-bi	l-ph	T	-	1	-	-
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	11	-	-
Aulacoseira italica (Ehr.) Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	2
Cocconeis placatula (Fhr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	-	-	1
Craticula cuspitata (Kuetz.) D. G. Mann	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	1	-	-
Cymbella aspera (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	O, T	-	21	-	14
Cymbella stiesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	1	-	-
Cymbella tumida (Brb. ex Kuetz.) V. Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	2	-	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	1	6
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1	-	-
Fragilaria ulna (Nitzsch.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	23	-	7
Fragilaria spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	1	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	1	-	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	-	1	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA, U	-	9	-	-
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA, S	-	2	1	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-
Neidium spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	1	-	-
Pinnularia brevistostata Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind		-	4	-	-
Pinnularia mesolepta (Ehr.) W. Smith	Ogh-ind	ind	ind	S	-	2	-	-
Pinnularia rupestris Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind		-	1	-	-
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	1	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	10	-	5
Sellaphora americana (Ehr.) Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	4	-	-
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	T	-	2	-	-
Stauroneis phoenicenteron var. hattori Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	-	1	-	-
Stauroneis phoenicenteron var. signata Meister	Ogh-ind	ind	ind		-	2	-	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	5	-	-
海水生種合計					0	0	0	0
海水-汽水生種合計					0	3	0	0
汽水生種合計					0	2	0	1
淡水-汽水生種合計					0	1	0	0
淡水生種合計					0	110	3	35
珪藻化石總數					0	116	3	36

凡例

IIR : 塩分濃度に対する適応性
 Euh-Meh : 海水生種-汽水生種
 Meh : 汽水生種
 Ogh-Meh : 淡水生種-汽水生種
 Ogh-ind : 淡水不適応種
 Ogh-hob : 黄泥縫隙生物種
 Ogh-unk : 黄泥不明種

pH : 水素イオン濃度に対する適応性
 al-bi : 高アルカリ性種
 al-il : 好アルカリ性種
 ind : pH不定性種
 ac-il : 好酸性種
 unk : pH不明種

C.R. : 流水に対する適応性
 l-ph : 好止水性種
 ind : 流水不定性種
 unk : 流水不明種

環境指標種

C1 : 海水高場指標種 E1 : 海水泥質干潟指標種 E2 : 汽水泥質干潟指標種 (以上は小杉, 1988)
 O : 沼沢湿地付着生種 (以上は安藤, 1990)
 S : 好汚泥性種 U : 適応性未種 T : 好洁水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T. 1995)
 R : 陸生硅藻 (RA : 芦原, 伊藤・輪内, 1991)

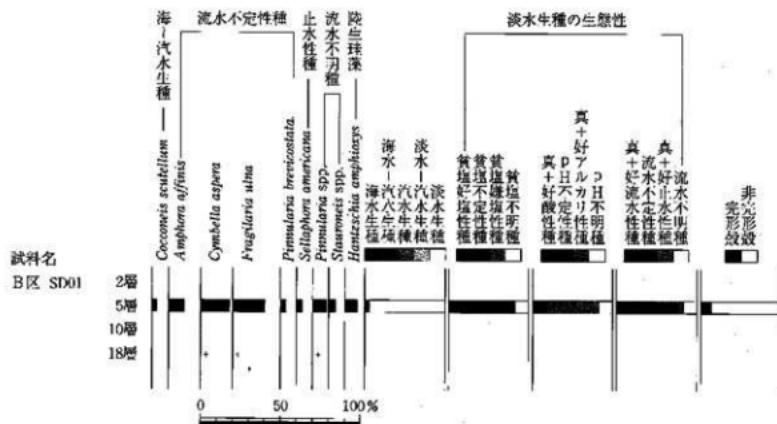


図1 主要珪藻化石群集の層位分布

海水-淡水 生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

(4) 植物珪酸体分析

結果を表4に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、概して検出個数が少なく、保存状態も悪い。No. 7では、イチゴツナギ亞科などがわずかに認められるに過ぎない。No. 6・5では、栽培植物のイネ属、タケ亜科がわずかに認められる。No. 4では、イネ属、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ属（ススキ属を含む）、イチゴツナギ亞科が認められるが、検出個数は少ない。

なお、No. 4・5では、イネ科起源の他に樹木起源珪酸体の第IVグループ（近藤・ビアソン、1981）が検出される。第IVグループは不規則な紡錘形を呈するもので、シノキ科、ツツジ科、モクレン科などの葉部に形成される。

4) 考察

(1) S X02の年代観

S X02最下層から出土した炭化材の放射性炭素年代測定値は、約3680年前、約4000年前を示した。これらの年代値が示す時代観は縄文時代後期であり、本遺構の時代観が縄文時代後期と考えられることと調和的なる結果といえる。

(2) S D01の堆積環境

S D01堆積物では、全般的に珪藻化石の産出個体数が少なかった。これは、堆積後の経年変化の過程で分解消失した可能性が考えられる。また分析層順が砂分が多く含む堆積物からなることから、堆積速度が早く取り込まれる珪藻が少なかった可能性も考えられる。

このような産状ではあったが、5層では比較的多くの珪藻化石が検出された。5層の珪藻化石群集は、流水性種が全く検出されず、沼よりも浅く水深が1m前後で、一面に水生植物が繁茂するような沼沢やさらに水深の浅い湿地に生育する沼沢湿地付着生種群（安藤、1990）を含む流水不定性種が多産

表4 花粉分析結果

種類	試料名	B区SX02 東半			B区SD01 北張部 No.5			
		11層	16層	26層	29層	5層	18層	
木本花粉		-	-	-	-	31	5	29
マキ属		-	-	-	-	1	-	7
モミ属		-	-	-	-	1	1	3
ツガ属		-	-	-	-	2	8	10
マツ属裸被管束亞属		-	-	-	-	11	8	54
マツ属(不明)		-	-	-	-	-	-	1
コウヤマキ属		-	-	-	-	1	-	7
スギ属		-	-	-	-	3	1	7
イナイ科イヌガヤ科ヒノキ科		-	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属		-	-	-	-	3	2	-
サリグルミ属		-	-	-	-	-	-	1
クルミ属		-	-	-	-	1	1	1
クマシダ属アサガホ属		-	-	-	-	7	7	2
ブナ属		-	-	-	-	-	1	-
コナラ属コナラ亜属		-	-	-	-	6	9	6
コナラ属アカガシ亜属		-	-	-	-	65	105	20
クリ属		-	-	-	-	1	5	1
シイノキ属		-	-	-	-	16	32	5
ニレ属ニレヤキ属		-	-	-	-	71	148	333
ニノキ属ムクノキ属		-	-	-	-	2	12	1
カラスザンショウ属		-	-	-	-	-	1	-
コクサギ属		-	-	-	-	-	-	1
センダン属		-	-	-	-	1	-	-
アカメガシワ属		-	-	-	-	-	1	-
ブドウ属		-	-	-	-	1	1	-
ノブドウ属		-	-	-	-	1	1	-
ウコギ科		-	-	-	-	1	2	4
アメキ属		-	-	-	-	1	-	-
カキ属		-	-	-	-	-	-	1
イボタノキ属		-	-	-	-	1	-	-
草本花粉		-	-	-	-	-	-	-
ガマ属		-	-	-	-	1	1	-
イネ科		-	-	-	-	510	351	143
カヤツリグサ科		-	-	-	-	3	8	31
ミズアオイ属		-	-	-	-	1	-	-
ユリ科		-	-	-	-	1	-	-
クリ科		-	-	-	-	44	85	-
ギシギシ属		-	-	-	-	151	144	4
サンエイタケ属クナギツカミ節		-	-	-	-	24	14	3
アカザ科ヒユ科		-	-	-	-	14	13	7
ナデシコ科		-	-	-	-	3	8	1
キンポウゲ科		-	-	-	-	3	4	1
アブラナ科		-	-	-	-	5	2	1
バラ科		-	-	-	-	2	2	2
マメ科		-	-	-	-	3	5	1
セリ科		-	-	-	-	3	6	1
オオバコ属		-	-	-	-	1	2	-
オミナエシ属		-	-	-	-	-	-	-
キュウリ属		-	-	-	-	4	2	-
ヨモギ属		-	-	-	-	13	28	31
オナモミ属		-	-	-	-	2	1	1
キク科		-	-	-	-	2	4	6
タンポポ科		-	-	-	-	-	-	4
不明花粉		-	-	-	-	7	15	9
シダ類胞子		-	-	-	-	-	-	-
ミズワラビ属		-	-	-	-	1	-	1
他のシダ類胞子		15	2	19	61	13	9	67
合計		0	0	0	0	227	351	487
木本花粉		0	0	0	0	787	676	237
草本花粉		0	0	0	0	7	15	9
不明花粉		15	2	19	61	14	9	68

する特徴を示した。また、下部の18層も珪藻化石の検出個体数が少なかったが、

5層と同様な種類が検出された。これらの特徴から、18層および5層は沼沢～湿地のような湿潤な状態で堆積したことが推定される。

したがって、遺構内には水が存在したと考えられ、一時的には流れを伴ったり流んだりする沼沢地のような状態であったと推定される。

(3) 遺跡周辺の古植物

S X02の埋積物中ではシダ類胞子が検出されるが、花粉化石が検出されなかつた。これは、検出されるシダ類胞子の保存状態が悪いこと、さらに花粉化石よりもシダ類胞子の方が痕跡に対する抵抗性が強いとされていることから、堆積後に風化作用の影響を受け分解・消失したものと考えられる。

弥生時代前期のSD01埋積物からはアカガシ亜属が多産し、マキ属、シイノキ属などを伴っていた。これらの種類は、暖温帯常緑広葉樹林を構成する要素であることから、弥生時代前期の頃、本地域にはアカガシ亜属を中心とする暖温帶性の広葉樹からなる植生が存在したことが推定される。なお、アカガシ亜属を上回る出現率を示したニレ属

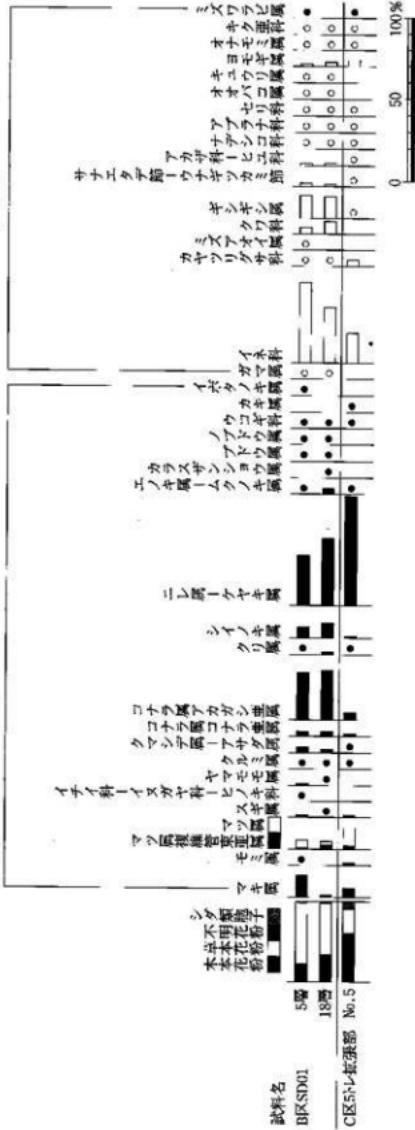


図2 花粉化石群集の層位分布
出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。なお、○●は1%未満の試料について検出した種類を示す。

ケヤキ属は、河道沿いに生育する種類を含むことや、本種類の花粉生産量などを考慮すると、遺跡近辺に局所的な植生を反映している可能性が高い。

このように遺跡周辺には暖温帯林が存在したとみられるが、総花粉・胞子に対する木本花粉の占める割合が低半であったことから、遺跡近辺は森林に覆われることのない開けた場所であったと推定される。すなわち、イネ科、クワ科、ギシギシ属、アカザ科—ヒユ科、オオバコ属、ヨモギ属などの草本類が繁茂する草地のような開けた場所であったとみられる。また、栽培種を含むキュウリ属が検出されたことから、集水域内部の微高地などでは畑作が行われていた可能性がある。

一方、C区5トレ拡張部で検出された植物珪酸体や花粉化石は、試料採取看護堆積期に集水域内部で生育していた母植物に由来するとみられる。花粉化石でみると、No. 5ではニレ属—ケヤキ属が優占した。これは上記したように局所的な植生を反映しているとみられ、調査地点付近にはニレ属—ケヤキ属が生育していた可能性がある。また、No. 6～4では栽培植物のイネ属に由来する植物珪酸体が

検出された。植物珪酸体の保存状況が悪かったため、本遺跡の近傍で稲作が行われていたか判断できないが、この時期に栽培種のイネが存在したことは間違いない。

ところで、北九州地方の植生史研究では、今回推定された照葉樹林が約8,000年前頃に成立していたことが推定されている（例えば、黒田・畠中、1979； Hatanaka, 1985など）。照葉樹林を構成する要素の種実には、可食植物の種類が多く、当時の人にとて重要な食料資源であったと考えられる。

II. 生ノ松原遺跡

生ノ松原遺跡は、西を長垂丘陵、東を十郎川に囲まれた部分の海岸線の内側に形成された砂丘上に位置している。発掘調査では弥生時代終末～古墳時代中期、古墳時代後期、奈良時代～平安時代初頭の遺物や遺構が検出されている。今回の調査では、古墳時代中期の住居内に構築されていた右囲いの遺構（SC03）の年代観に関する情報を得ることを目的に放射性炭素年代測定を実施する。

1) 試料

試料は、SC03より出土した炭化材1点である。

2) 分析方法

放射性炭素年代測定は、学習院大学年代測定室に依頼して測定して頂いた。

3) 結果

(1) 放射性炭素年代測定結果

放射性炭素年代測定結果を表6に示す。年代値の算出には ^{14}C の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しており、1950年より年数となっている。誤差は β 線の計数値の標準偏差に基づいて算出した年数で、標準偏差に相当する年代である。また、本測定値は同位体効果の補正をした値である。

4) 考察

年代測定を行った遺構は、古墳時代中期の住居内に構築されていた遺構である。この遺構内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定値は約2000年前を示した。この年代値は考古学的に推定されてい

表5 植物珪酸体分析結果

種類	C区5トレ紗張部			
	試料番号	No.4	No.5	No.6
イネ科葉部短細胞珪酸体				
イネ族イネ属	1	-	1	-
タケモ科	1	-	2	-
ヨシ属	1	1	-	-
ウシクサ族ススキ属	3	-	-	-
イチゴツナギモ科	4	2	-	1
不明キビ型	7	-	-	-
不明ヒゲシバ型	6	-	1	2
不明グンチク型	10	-	-	1
イネ科葉部機動細胞珪酸体				
イネ族イネ属	5	1	2	-
タケモ科	3	-	-	-
ヨシ属	1	1	-	-
ウシクサ族	9	-	2	-
不明	6	2	1	-
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	33	3	4	4
イネ科葉部機動細胞珪酸体	24	4	5	0
總計	57	7	9	4
樹木起源珪酸体				
第Ⅱグループ	2	1	-	-

表6 放射性炭素年代測定結果

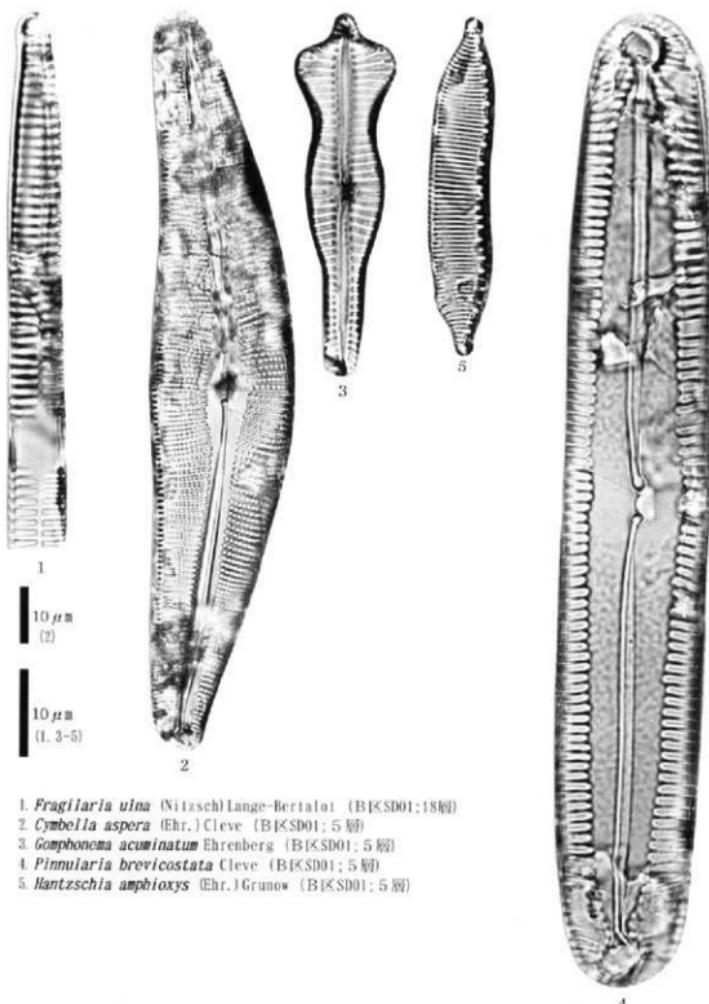
試料名	試料の状態	年代値	Code. No.
E-区SC03 No.35	炭化材	2070±60	Gak-20079
		$\delta^{13}\text{C} = -28$	
		120 B.C.	

る曆年代と比較すると、古墳時代より、むしろ弥生時代に近い値となっている。ただし、古材の再利用なども充分考えられることから、発掘調査時の所見と併せて年代値の評価が必要である。また、同時期の同様な条件の放射性炭素年代測定値を蓄積していくことで、地域的傾向の中での評価も必要と考える。

引用文献

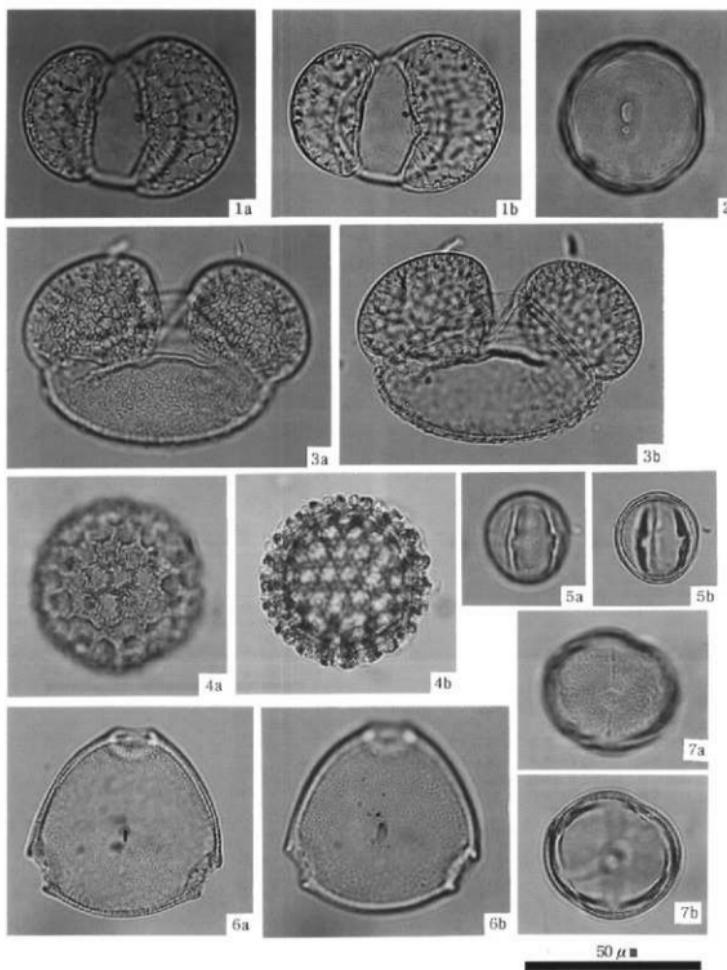
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p.73-88.
- K. Asai & T. Watanabe (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- K. Hatanaka (1985) PALEONTOLOGICAL STUDIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION SINCE THE WÜRM GLACIAL AGE IN KYUSHU AND ADJACENT AREAS. Journal of the Faculty of Literature, Kitakyushu University(Series B), 18, p.29-71.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 硅藻学会誌, 6, p.23-45.
- 近藤錦三・ピアスン友子 (1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究(第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について. 帯広畜産大学研究報告, 12, p.217-229.
- 近藤錦三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- K. Krammer (1992) PINNULARIA, eine Monographic der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. p.1-353., BERLIN · STUTTGART.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae, Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Suriellaceae, Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae, Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- K. Krammer & H. Lange-Bertalot (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achmanthaceae, Kritsche Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema, Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- 黒田登美雄・畠中健一 (1979) 花粉分析よりみた北九州の過去2万年間の植生変遷. 花粉, 13, p.3-8.

図版 1 硅藻化石



1. *Fragilaria ulna* (Nitzsch) Lange-Bertalot (B[KSD01; 18刷])
2. *Cymbella aspera* (Ehr.) Cleve (B[KSD01; 5刷])
3. *Gomphonema acuminatum* Ehrenberg (B[KSD01; 5刷])
4. *Pinnularia brevicostata* Cleve (B[KSD01; 5刷])
5. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow (B[KSD01; 5刷])

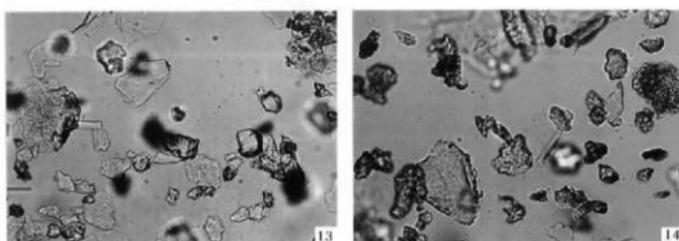
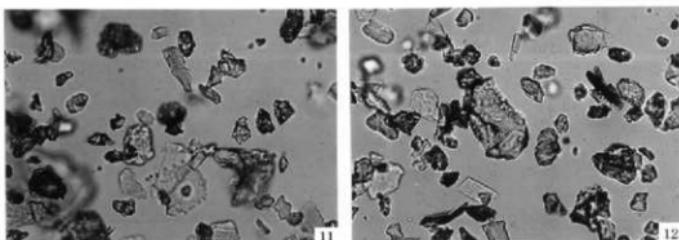
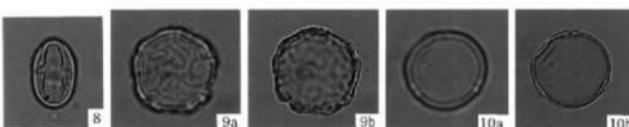
図版2 花粉化石(1)



1. マキ属 (B1₁SD01; 5層)
3. マツ属 (B1₁SD01; 5層)
5. コナラ属アカガシ亜属 (B1₁SD01; 5層)
7. ギシギシ属 (B1₁SD01; 5層)

2. イチ科 (B1₁SD01; 5層)
4. サナエタデ属—ウナギツカミ属 (B1₁SD01; 5層)
6. キュウリ属 (B1₁SD01; 5層)

図版3 花粉化石(2)・植物珪酸体分析プレパラート内の状況



8. シノノキ属 (B区SB01; 5層)

9. ニレ属-ケヤキ属 (B区SB01; 5層)

10. クワ科 (B区SB01; 5層)

11. 状況写真: 硫物粒子が散在 (C区5トレ拭張部; No. 4)

12. 状況写真: 硫物粒子が散在 (C区5トレ拭張部; No. 5)

13. 状況写真: 硫物粒子が散在 (C区5トレ拭張部; No. 6)

14. 状況写真: 硫物粒子が散在 (C区5トレ拭張部; No. 7)

50 μm
(11-14)

50 μm
(8-10)

III. 飯氏遺跡 9 次調查

1. はじめに

1) 調査の経緯

本地点は条件整備等の関係で調査着手がおくれ、調査が可能となったのは7月も後半になった時期で調査期限も8月半ばまでと迫っていた。このため急遽他現場の作業を中断して7月15日より調査を着手し、途中で担当者の入れ替わりが生じた。調査範囲は路線に沿った幅約3mで、東側から掘削を開始した。今回は、排土をダンプにより場外搬出を行ったため一度に全体を調査することができた。試掘調査ではピット等の遺構が確認されていたが、遺物を大量に含む溝等、弥生時代を中心とした遺構が予想以上に出土した。このため協議を行い調査期間を1週間延長し、8月22日調査を終了した。

2) 遺跡の立地と環境

飯氏遺跡は、高祖山から南に広がる丘陵地および、本調査地点がある扇状地上に位置する。これま



Fig. 1 調査地点と周辺の遺跡(1/3000)

での調査には鉄道の南約150mに平行して走る道路建設に伴うものや丘陵掘削によるものがある。1次から3次と6次のバイバス道路建設に伴う調査では、丘陵上で壺棺墓が出土し、刻目突帯文期、前期末から後期の壺棺墓が出土している。そのなかでⅡ区の後期の壺棺からは内行人花文鏡が出土した。さらに700mほど南の丘陵上にある5次調査地点では13基の中期の壺棺が出土している。弥生時代については墓地遺構のみの調査だが、試掘調査（4次調査）では、今回の調査地点の南西、周船寺駅の南側の冲積地で弥生時代の遺構が確認されている。また、飯氏遺跡の南に隣接する千里中原遺跡では、崖崩れの際にV字溝の断面が確認され、弥生中期の遺物が採集されている。今回の9次調査は遺跡の南端で古墳時代の遺構を検出した8次調査に続くものであるが、調査次数の整理の結果、7次調査が欠番となつた。

2. 調査の記録

1) 調査の概要

飯氏踏切から谷響川までの鉄道沿い南側、幅3m長さ130mについて調査を行った。調査区は北側の丘陵から張り出す扇状地を横断する。説明の便宜上、10mごとに東から西に1区から11区と呼称する。限られた範囲ながら、弥生時代の大規模な集落を想定できる遺構を確認することができた。検出した遺構は弥生時代中期の土器が多く出土する溝2条と中世の溝、土壙と多数のピットである。弥生時代の溝SD04は断面V字形を、SD08はU字形を呈す。ピットには建物を構成する方形の大規模のものがあり弥生土器が出土している。また縄文時代ではつまみ型石器が出土している。

現地は調査前、東側の1区から4区までは畑地で、それより西は駐車場で1.2mほどの盛り土がされていた。耕作土、床土直下の黄褐色土上面が遺構面で、東端で標高9.9m、西端で10.1mを測る。1区から5区では遺構面上に遺物包含層である暗茶褐色土が5~10cmの厚さで堆積している。遺構検出にあたっては包含層と床上の鉄分が沈着している層を除去した。遺構番号は溝、土壙等の大型の遺構を01から、ピットを101からの番号を付けた。

調査中は川村博司(前原市教育委員会)、溝口孝司(九州大学)の各氏、本市文化財部の諸氏の来訪を受け様々なご教示を得た。また、飯氏町内会長谷長祐氏をはじめとする地元の方々、旧地権者の方々には様々なご協力を得た。記して感謝いたします。

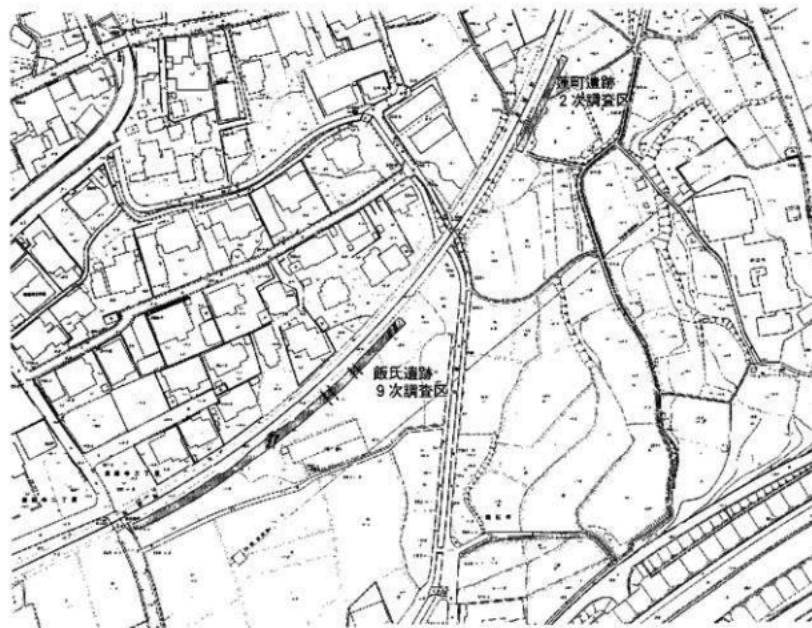


Fig.2 調査区位置図(1/1000)

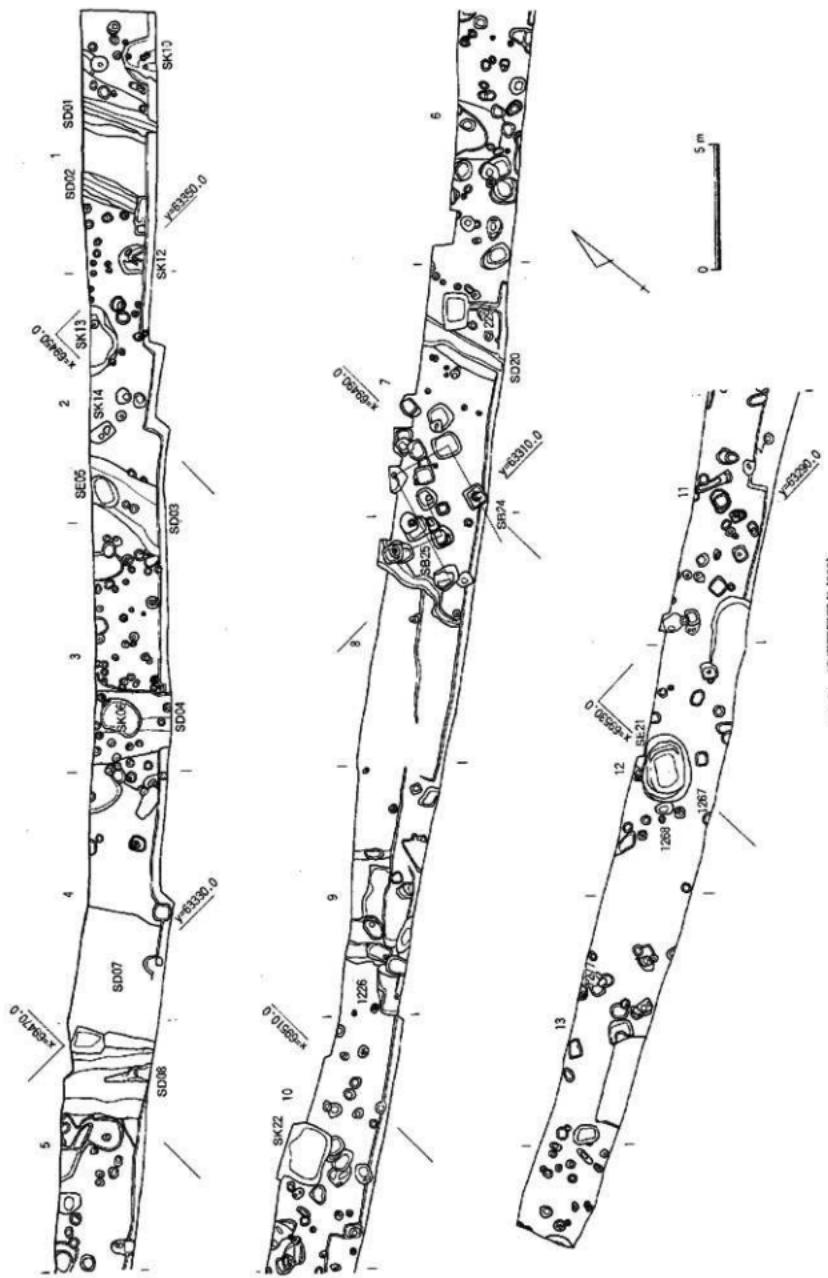


Fig.3. 地质剖面图(1/200)

2) 遺構と遺物

(1) 溝

調査区にはほぼ直行して横断する溝を5条検出した。いずれも長さ3mを確認したのみで延長は不明だが、調査区内においては地形の傾斜に沿って掘削されている。5条の内訳は弥生時代のもの2条、中世のもの3条でこの順序で述べていく。

S D04(Fig. 4)

調査区東側の3区で調査区と直交する溝を幅260cm、深さ90cmを測る。断面形は底に幅30~40cmの平坦な床があるがV字形と呼んで差し支えないと考える。溝の覆土は茶褐色系の暗い色調の粘質土でコンテナにして36箱の土器を中心とした遺物が出土した。

溝は黄褐色土の遺構面で検出した。溝の周辺は遺物包含層である暗褐色土(7層)が厚いところで20cm近く堆積する。この層は北壁の層間隙からS D04が削平を受けた後に堆積し、S D04部分は遺構埋土の影響で沈んでいる。溝はさらに上からの掘り込みであると考えられるがその規模は不明である。溝の埋土の堆積はほぼレンズ状を成し、堆積が一方に片寄ることもない。埋土は最上下層をのぞいて粘質が強い。

最上層の8層は茶褐色土で砂質が強く遺物は少ない。遺物は9層との境付近から多く出土する。9層は粘質が強い暗褐色土層で大量の土器が完形に近い状態で廃棄されている。10層は北壁の10層に見られるように西側から黄褐色粘土層が流れ込み9層と11層を分ける。遺物は上下の層と比べると少ない。11層は暗褐色粘土で粘質が強く土器の大型片を含んでいる。その下の12層は、粘質が強い暗褐色土が堅くしまり11層とは不連続で、11層から上の遺物の堆積は12、13層が溝の側面および床である段階に廃棄されたと考えられる。その段階で溝をさらえた可能性も想定されるが今回は不明であった。13、14層は粘質が強くなるものの砂粒、小礫を多く含み、遺物も13層にわずかに入る程度で大量に出土する11層から上とは状況を異なる。最下層の15層は黄褐色砂質土で粘性が弱く砂粒を多く含むが、特に水が流れたような痕跡はない。以上から、溝の埋没までの過程を推定すると、掘削後12層まで埋まり、11層から9層がたまる段階に土器が大量廃棄される。その後、8層がたまる段階には周辺の遺物は入るもの前の段階の様な廃棄は成されていない。

調査は土層を意識しながら掘り下げたが、遺物の取り上げについては各層位ごとに用いるのは困難で、主に出土状況のまとまりから上、中、下、最下層の4層に分けて取り上げた。上層は8層に、中層はもっとも遺物が多く8層の下部から9、10層に、下層は10層下部から11層上部、最下層は11層にはほぼ対応するが、任意な部分が多く明確なものではない。以下、取り上げる層ごとに遺物を図示する。S D04で出土した遺物は口縁部、底部片等固化できるものはほぼ掲載した。また上下の層で接合したものについては基本的に下の層にしたが明確に分けられない。

上層(Fig. 5) 遺物の量は少なく、いずれも小片で器皿が粗ているものが多い。廃棄したというより埋土に混じり込んだ状況である。1から9は壺で鋤形もしくは逆し字形の口縁部を呈し、外面に刷毛目を施すものが多い。9には赤色顔料の痕跡が残る。器面調整は粗れのため不明である。10は高杯で内面に赤色顔料を施し、外向は粗れており不明だが何様であろう。11、12は支脚で指頭痕が残り、13は器台で刷毛目調整が見られる。14、15は壺の蓋である。16から19は壺の底部、20から22は壺の底部で20、21外面上に赤色顔料を塗る。

中層(Fig. 6~9) 遺物がもっとも多く、完形に復元できるものが多い。23から32は壺でほぼ完形に復元できた。23は北側で東西方向に横倒し、下半は下層で取り上げている。1/3は隣接して北を向く。24は北よりに23と25の間に口縁部を南側に向けて横倒しにつぶれる。25は北側の東岸により逆

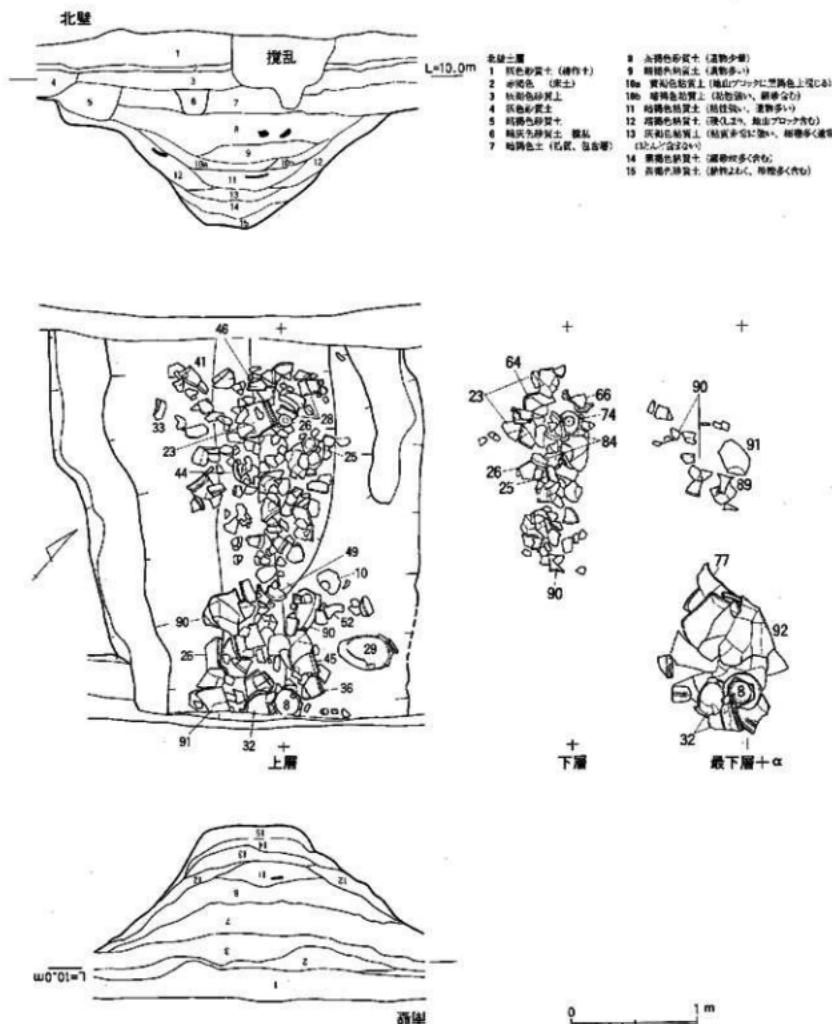


Fig.4 SD04実測図 (1/40)

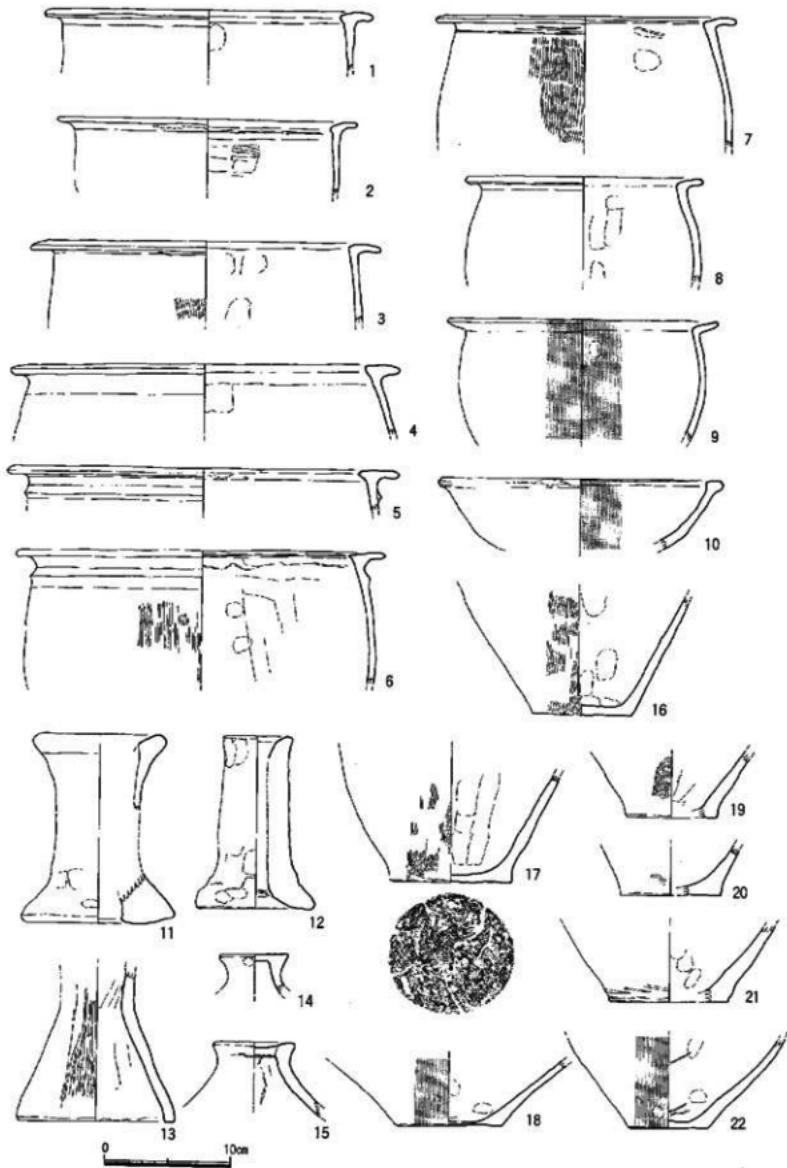


Fig.5 SD04出土遺物実測図1(1/4)

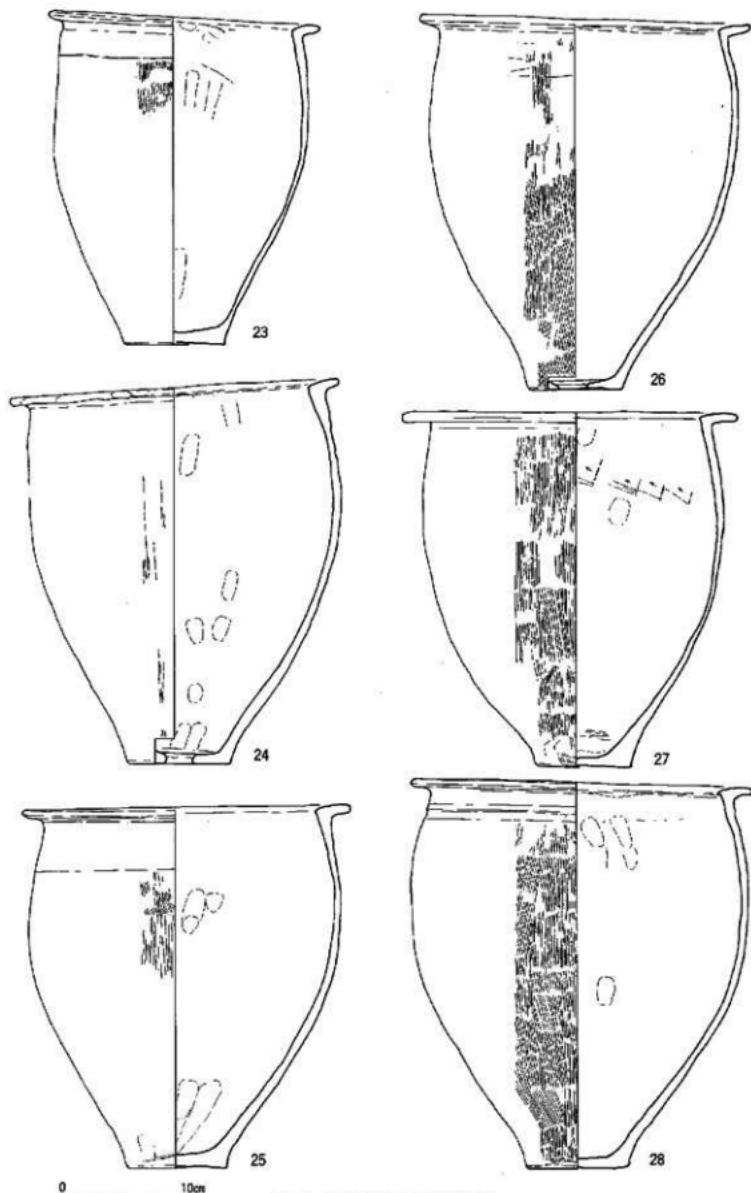
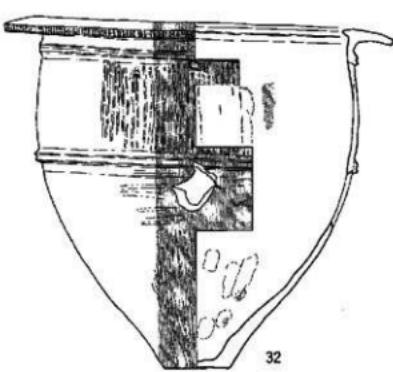
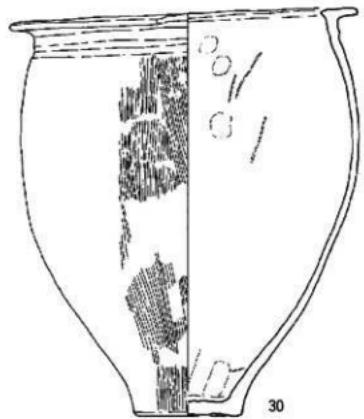
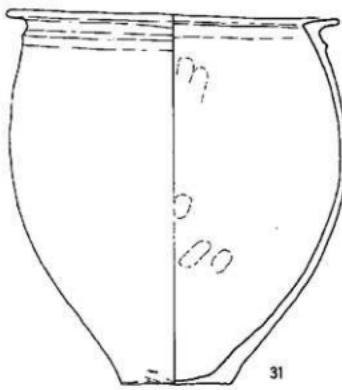
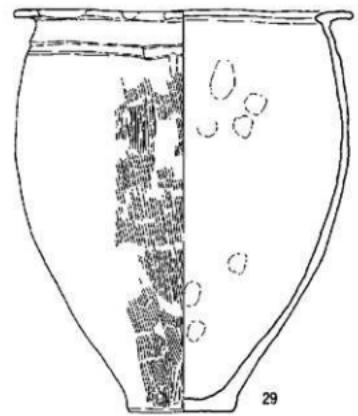


Fig. 6 SD04出土遺物実測図2(1/4)



0 10cm

Fig.7 SD04出土遺物測量図3(1/4)

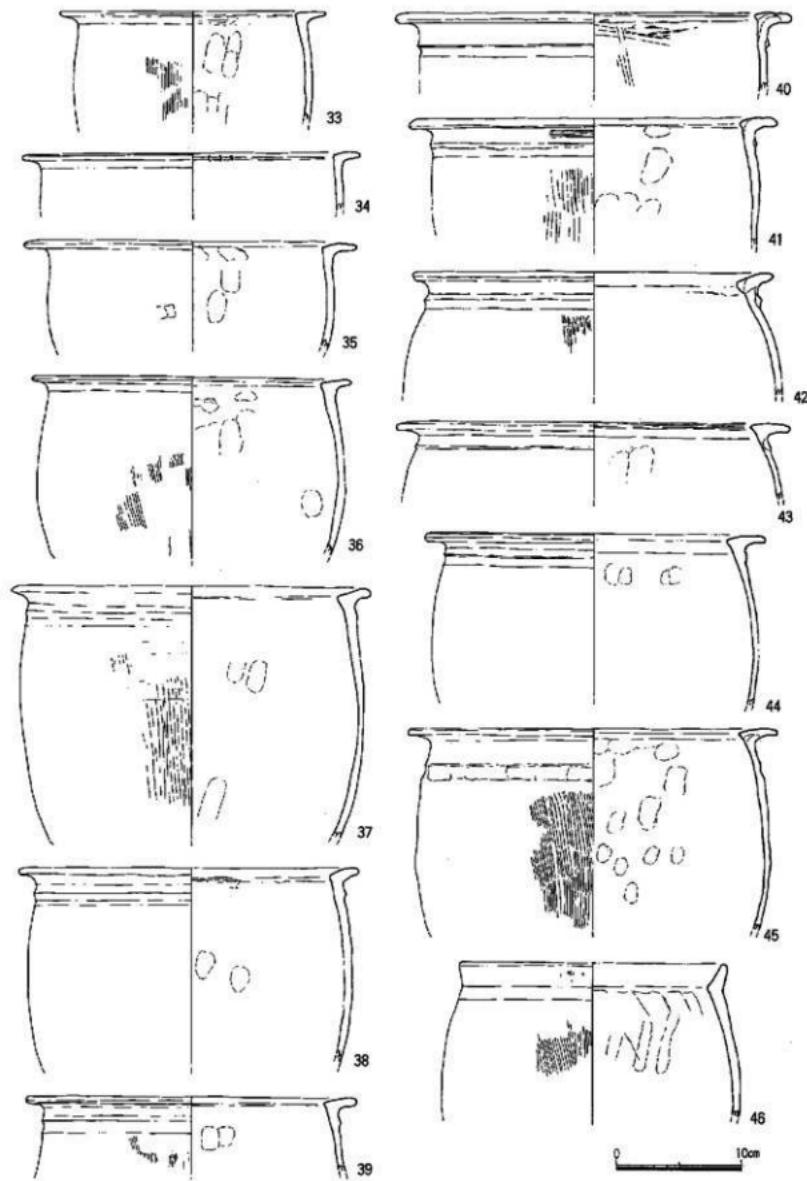


Fig. 8 SD04出土遺物實測圖4 (1/4)

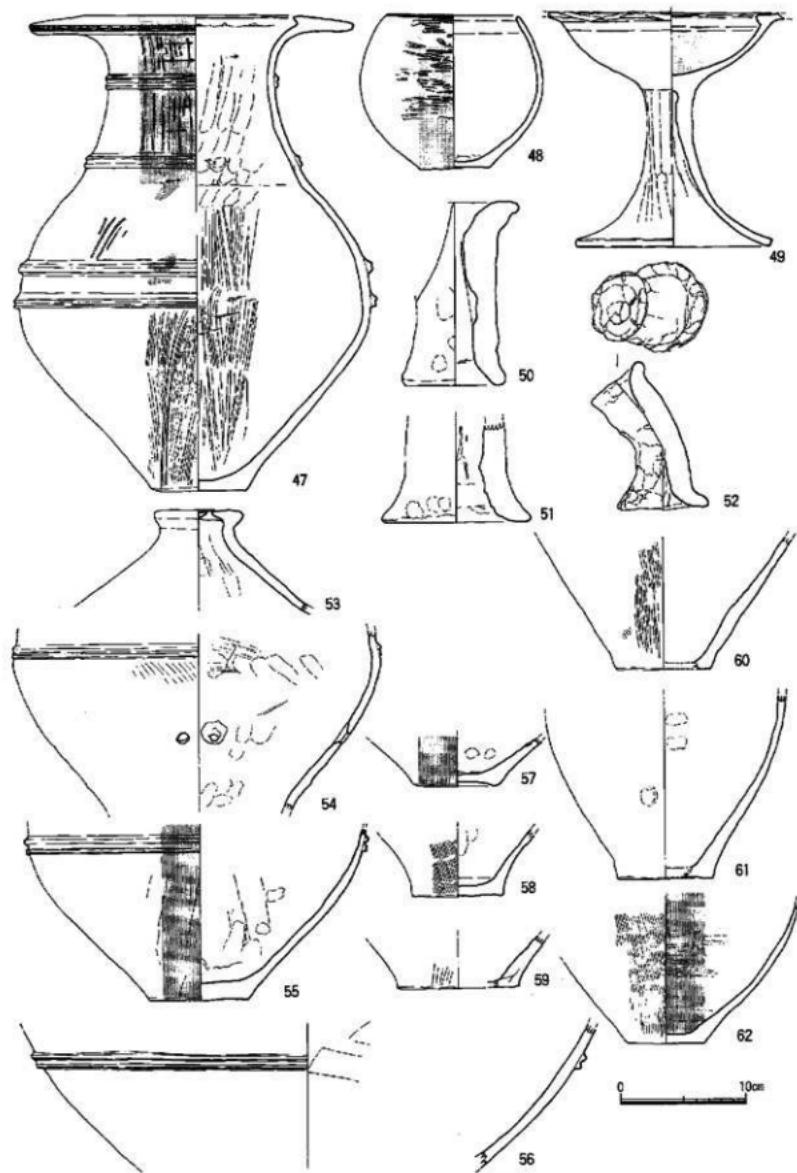


Fig.5 SD04出土遺物實測圖5(1/4)

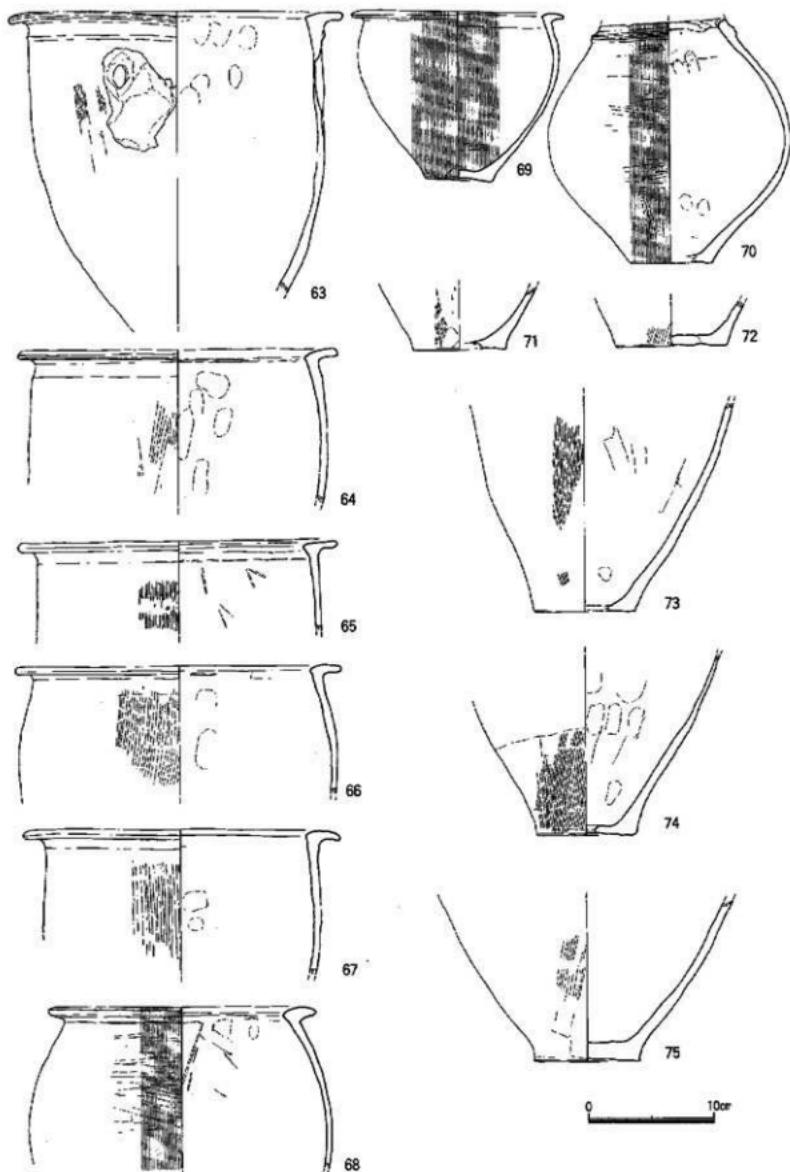


Fig.10 SD04出土遺物実測図6 (1/4)

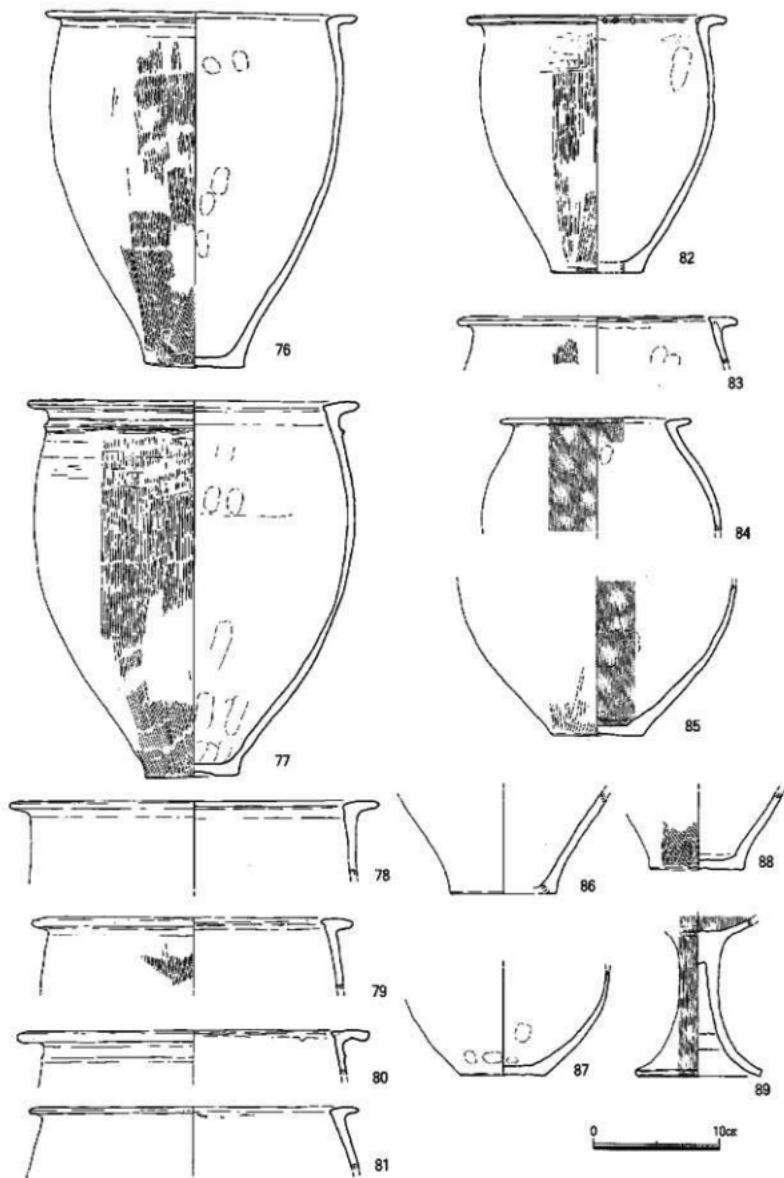


Fig.11 SD04出土遺物実測図7(1/4).

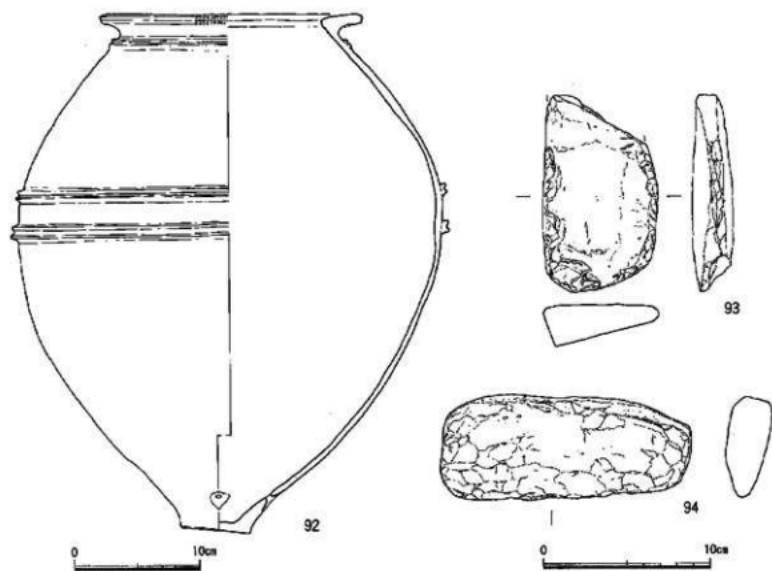
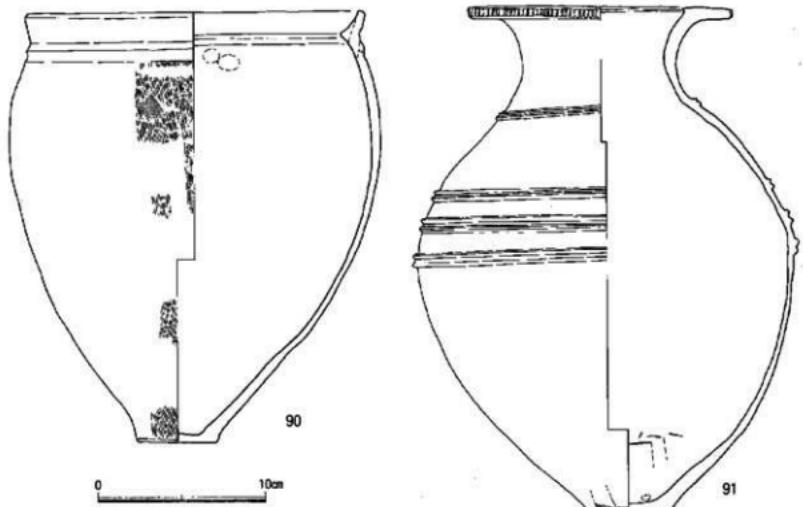


Fig.12 SD04出土遺物実測図(1/6,1/8,1/3)

さにつぶれ、中央付近の破片、下層も接合する。26は23の東を中心に散乱し、南端の離れた破片も接合する。28は北端よりの23の東側に大きめの破片が散乱する。29は1/4を欠くが他は割れずに南東側の上部に単独で横たわる。31は大きめの破片が溝全体に分布する。32は調査区南端に北向きに横たわり1/4片が割れて東に向く。完形になるものについて出土状況をみたが23、25、29、32のように完形で廃棄した状態が残っているものと、破片が散るものがある。26は一部器面がはげる。32は外面に赤色顔料を塗り、研磨調整と暗文を施す。胴部中位に焼成後の穿孔を施す。33から46も壺で44から46は口縁部が一周し、他の破片も3/5から1/4ほどの大型の破片が多い。L字もしくは鉛形口縁で口縁下に三角突帯を持つものや、強いなでにより突帯状に見えるものがある。46は口縁部内面が内湾するくの字形のタイプで棱がはっきりせず丸みを持ち器壁が厚い。47は壺で口縁部から頸部が一部欠けるが他は割れずに横たわった状態で出土した。外面頸部より上に赤色顔料を施す。肩部に櫛描き状の刻線がある。外面上半はなで、下半は刷毛目を施す。48は無頸壺である。研磨調整で赤色顔料を施す。49は高杯で口縁部端を打ち欠く。内面に赤色顔料がみられ、外面にも塗っていたと考えられる。南半で散乱して出土した。50から52は支脚、53は壺蓋である。54から57、62は壺の底部と底部付近で54には穿孔があり、55はこぼれた赤色顔料が付着する。57は外面、62には内面に赤色顔料がみられ、62の外面は刷毛目調整で顔料は塗らない。58から61は壺で61は二次焼成で赤変する。90は一部の破片が最下層北半に出土するが大部分は中層南半に東向きに横たわった状態で出土した。内湾するくの字口縁下に三角突帯がめぐる。ほぼ完形に復元できた。91は壺で南端の最下層の壺棺上に口縁部から頸部が逆さになり、周辺と最下層北半の底部が接合しほぼ完形に復元できた。

下層(Fig.10) 北半の一群で中層の土器と接合するものが多い。63から68は壺である。63は二次焼成を受けて器面が剥げ、胴部上部に穿孔が見られる。68は厚手の口縁部で外面に赤色顔料を塗り横方向の研磨を施す。69、70、84は壺で69は二次焼成で器面が粗れており不明だが、70、84は赤色顔料を塗る。71から75は壺の底部で75は器面が剥落する。

最下層(Fig.11) 76から83は壺である。76、77、82は完形に近い。77は壺棺の下からの出土で、最も下部の遺物である。82は口縁部内面端に3つだけだが刻み目を施す。81、83は胎土が良く器面は赤みがかる。85、87は壺で85の外面は赤色顔料を塗る。89は高杯で内外面に赤色顔料を塗る。92は壺棺で南端でつぶれた状態で出土した。上半が急に内径する丸みを持った壺棺で口縁下、胴部にM字突帯がめぐる。口縁部外縁には浅い刻み目を施し底部近くには穿孔がある。

石器(Fig.12) 93、94はいずれも玄武岩製で長辺の片側が平坦で他方は薄く細かな剥離がみられる。93は長さ117mm、幅50mm、厚さ25mm～10mm、重量279gを測る。94は長さ150mm、幅63mm、厚さ30mm～8mm、重量279gを測る。石鎚等の未製品と考えられる。中層からの出土である。

以上のようにSD04からは多くの上器が出土した。狭い範囲の調査で周辺を含めるとさらに完形に復元できるものがあろう。90、91にみられるように中層以下の土器は多数の接合関係があり、層的な差はなく、ほとんど同時に廃棄されたものと考えられる。完形品をそのままの状態で出土するものとやや離れて接合するものがあり、それが廃棄の行為の仕方に関係があるのかはここだけでは推定しかねる。特に祭祀的な上器が多いわけでもない。また、溝の使用のされ方、周囲の環境を知る目的で8層上部、9層、11層下部、14層の土壤について花粉分析、珪藻分析、8層上部以外について植物珪酸体分析を行った。詳細な結果については後に掲載している。結果は化石の残りが悪く環境復元には至らないが、溝が常に漏水する様な状況ではなかったものと考えたい。

SD08 (Fig.13)

調査区と直交する溝でSD04の西11mに位置する。幅260cm、深さ90cmを測り、断面形は浅いU字

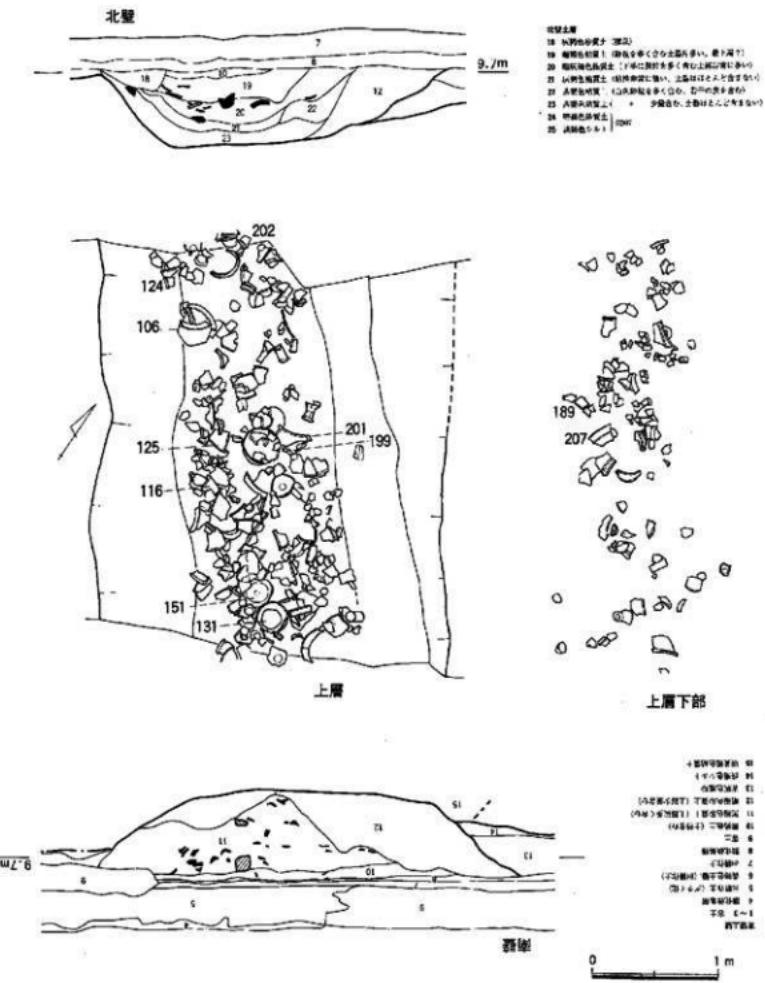


Fig.13 SD08実測図(1/40)

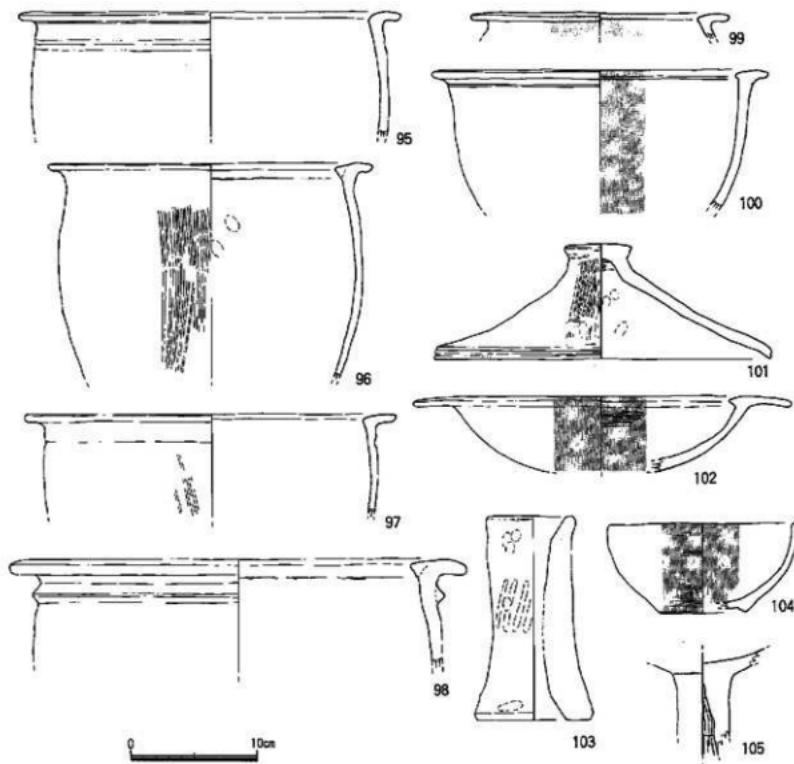


Fig. 14 SD08出土遺物実測図1(1/4)

型で底の幅約120cmを測る。溝の長さ約3mの延長の調査でコンテナにして65箱の上器を中心とした遺物が出土した。

溝は西側を黄褐色土、東側は旧河川と考えられる粗砂層を遺構面として検出した。覆土の直上が旧耕作上でかなりの削平を受けていると考えられる。溝の埋土は暗褐色土および茶色が強い褐色土の2層に分けられ、上層の暗褐色土からは大量の遺物が出土したが、下層からはわずかである。理土は上下層とも粘質が強く砂を多く含む。土層同士で11層と12層の境は起伏が大きいが掘り返し等は考え

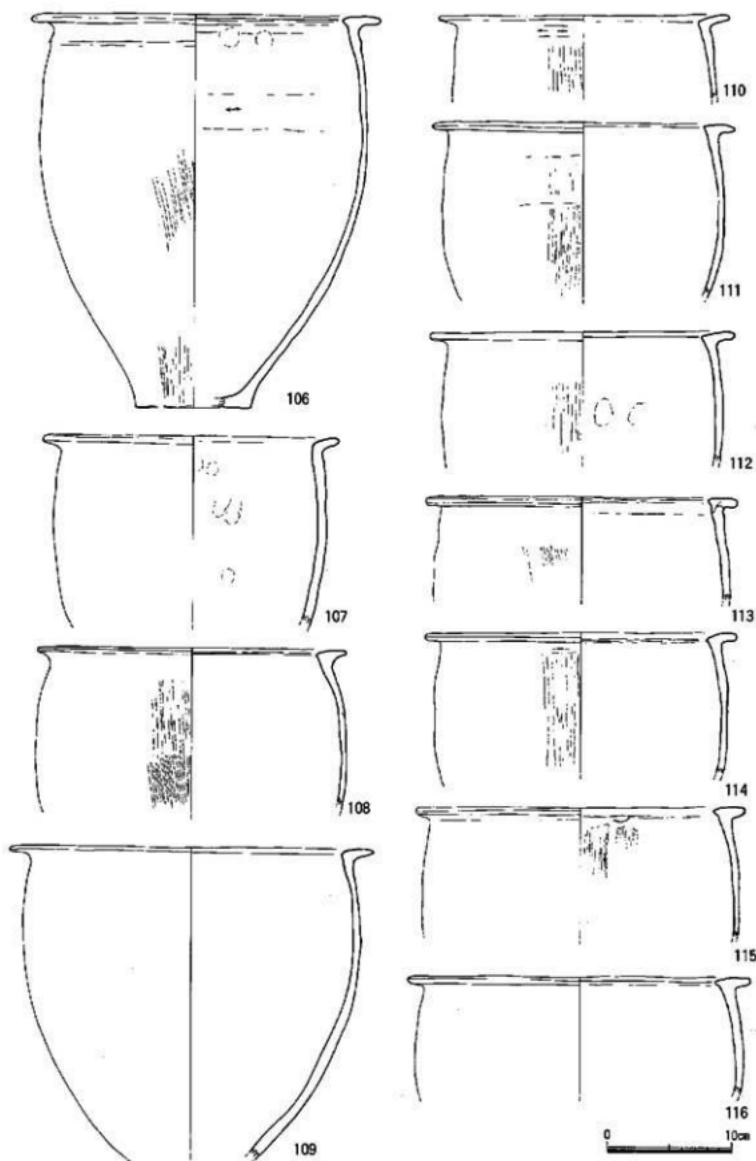


Fig.15 SD08出土遗物实测图2(1/4)

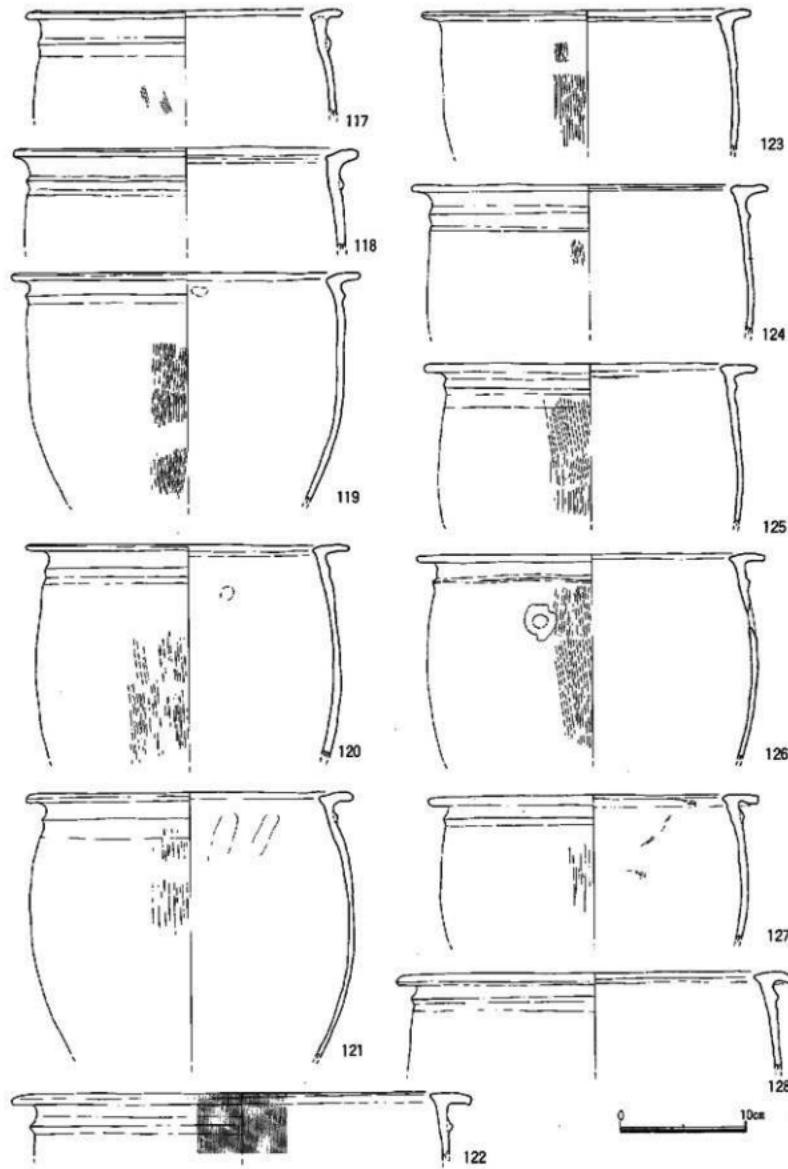


Fig.16 SD08出土遺物実測図3(1/4)

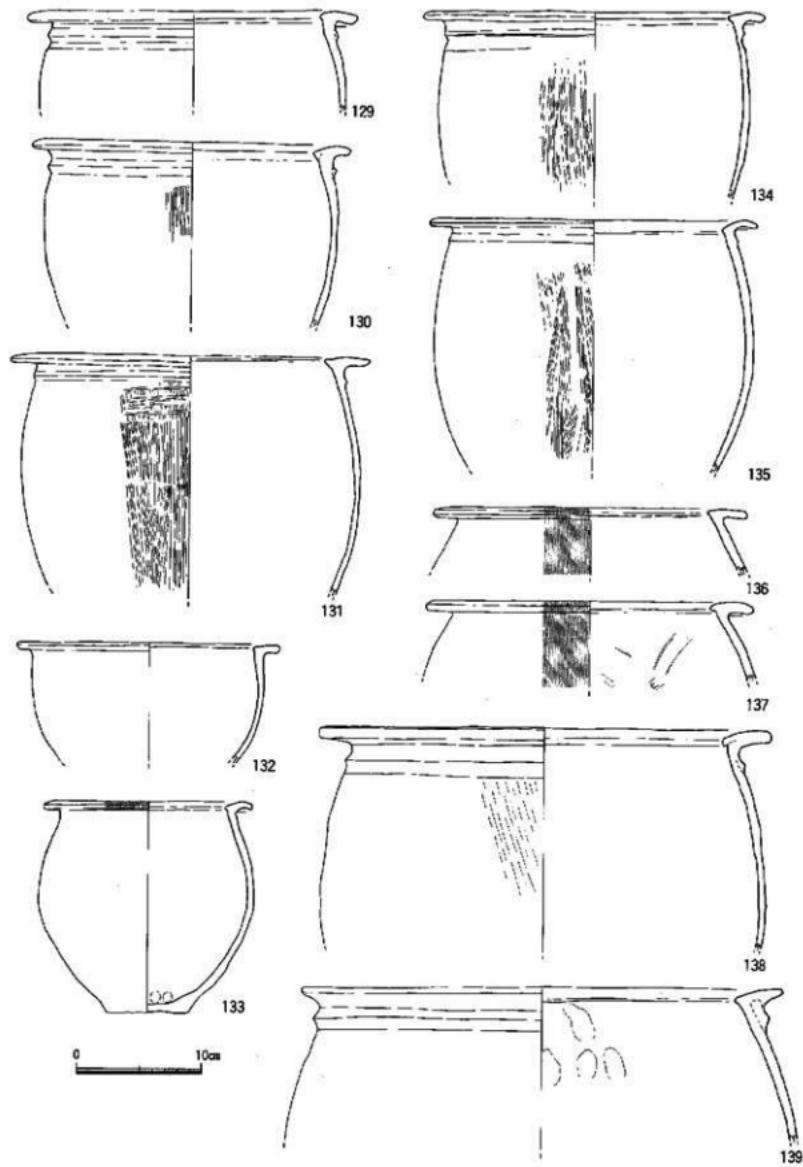


Fig.17 SD08出土遺物実測図4(1/4)

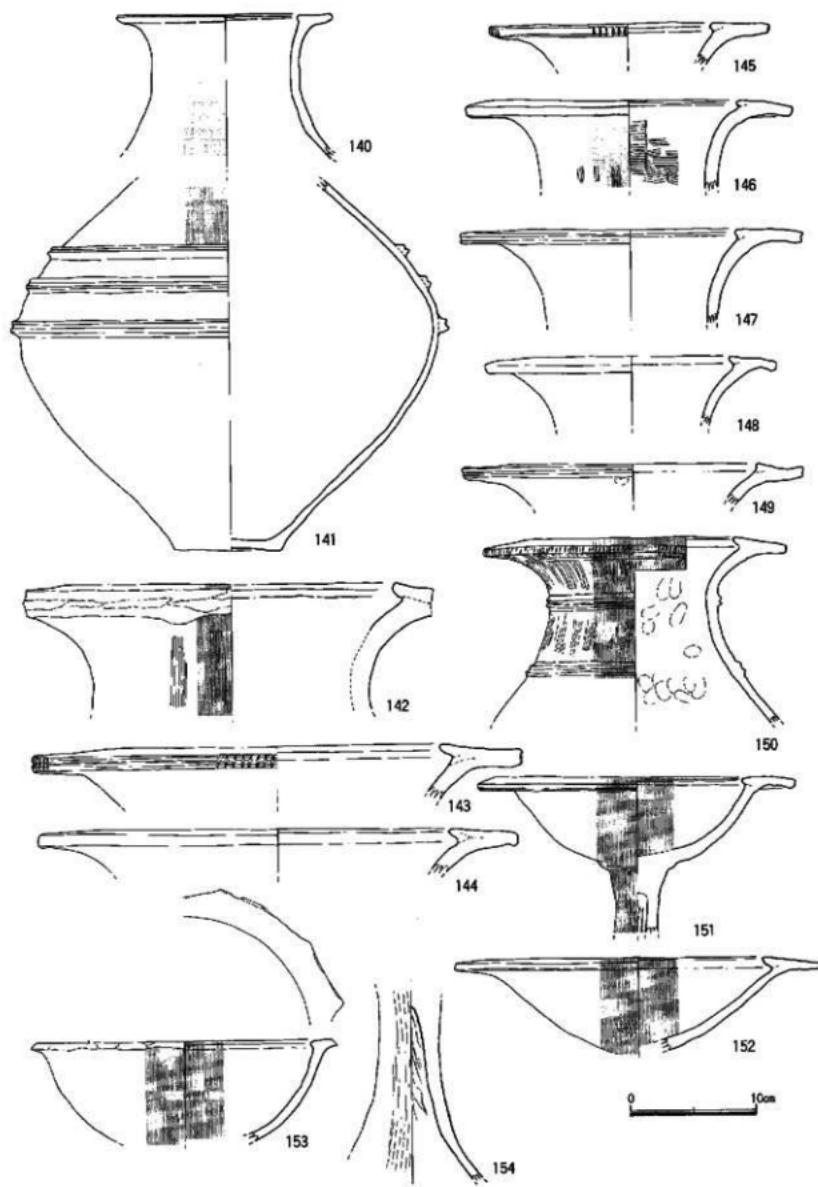


Fig.18 SD08出土遺物実測図5(1/4)

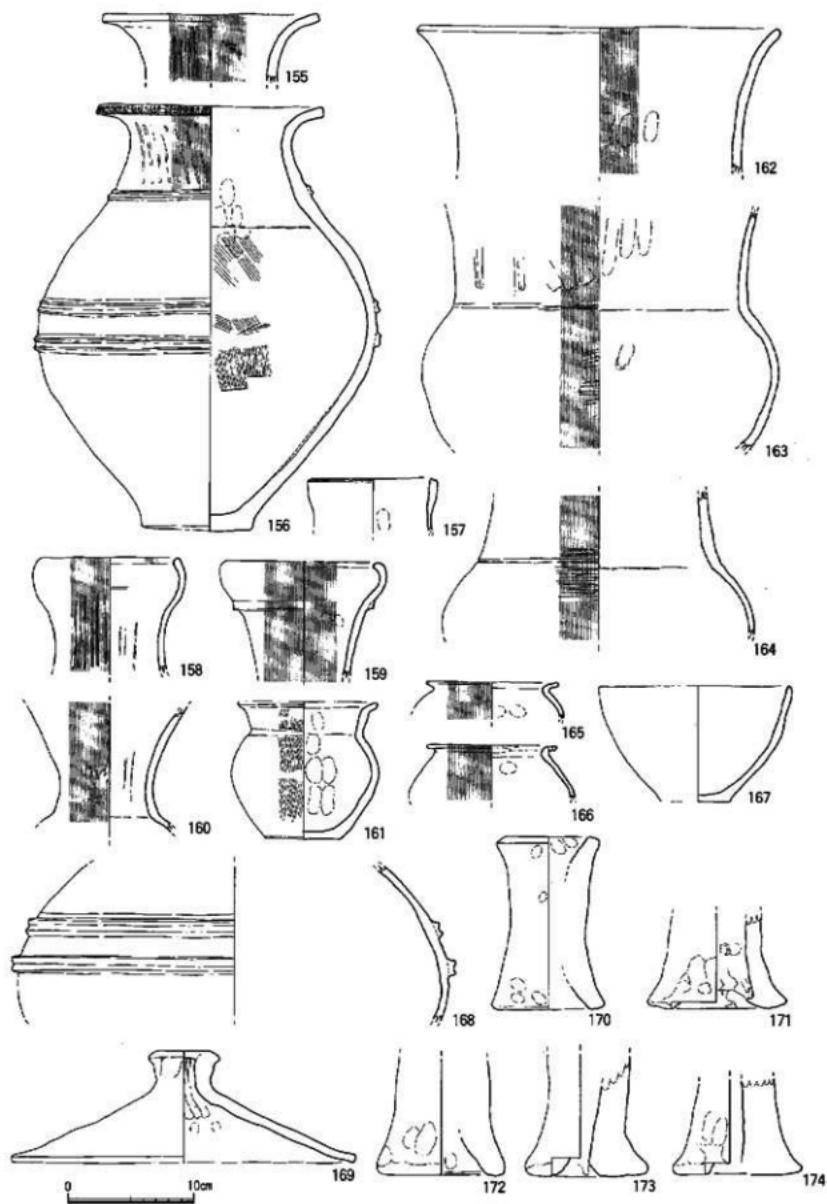


Fig. 19 SD08出土遺物測量圖6 (1/4)

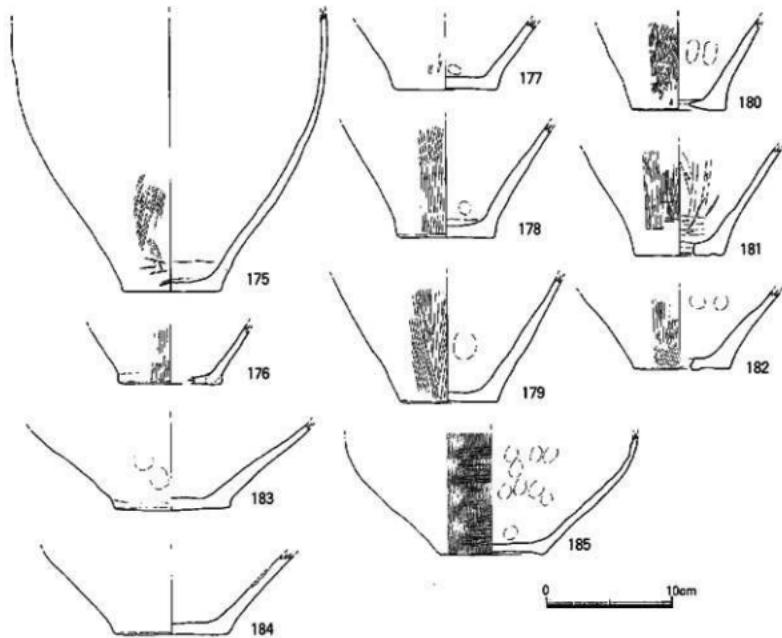


Fig. 20 SD08出土遺物実測図7(1/4)

難い。北壁ではレンズ状の堆積が認められる。遺物の取り上げは最上層、上層、上層下部、下層に分けた。層位的には最上層が北壁の19層、上層、上層下部が南壁の11層、下層が同12層にほぼ対応する。以下出土遺物を示すが、12層出土遺物は図示できるものがなかった。

遺物はSD04よりも多いが、散乱した破片がほとんどで完形に復元できるものは少ない。遺構の削平による依存具合や接合作業の条件にもよるとも思われるが、SD04と廃棄の仕方が異なる可能性もある。破片は1/4以上の大きさのものが多い。また、遺物は西岸よりに集中しており西側からの破棄が想定できる。図化にあたっては1/3以上が残る破片を中心に行った。

最上層(Fig.14) 小さな破片が多い。95から98はし字または錐形口縁の壺である。99は口縁部から外面に赤色顔料を塗り、100は内面に塗るが外面は粗れており不明である。無頸壺と鉢か。102、104、105は内外面に、104は底にも赤色顔料を塗っている。

上層(Fig.15) 大型の破片が散乱する。その中で壺131、199がほぼ1.2mおきに倒置された状態で出土した。また、高杯151は正置された状態で131の横から出土している。これらの出土状態は偶然とも考えられるが、廃棄の仕方を示している可能性もある。

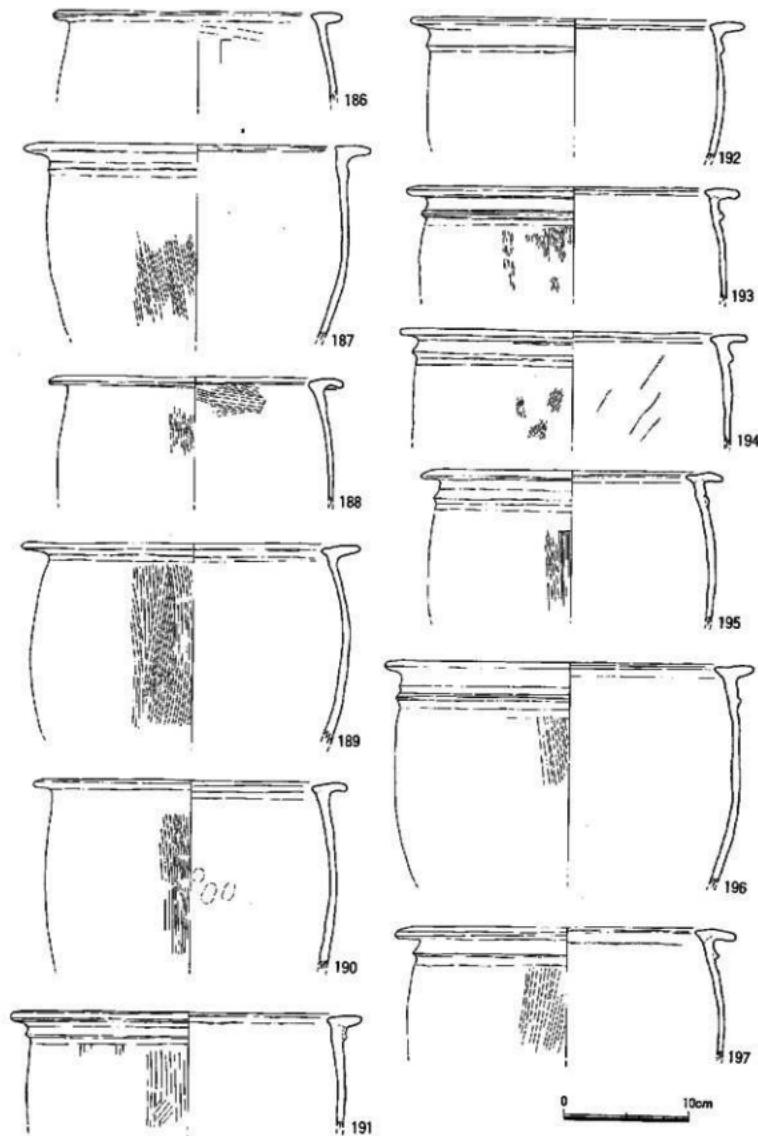


Fig. 21 SD08出土遺物実測図8(1/4)

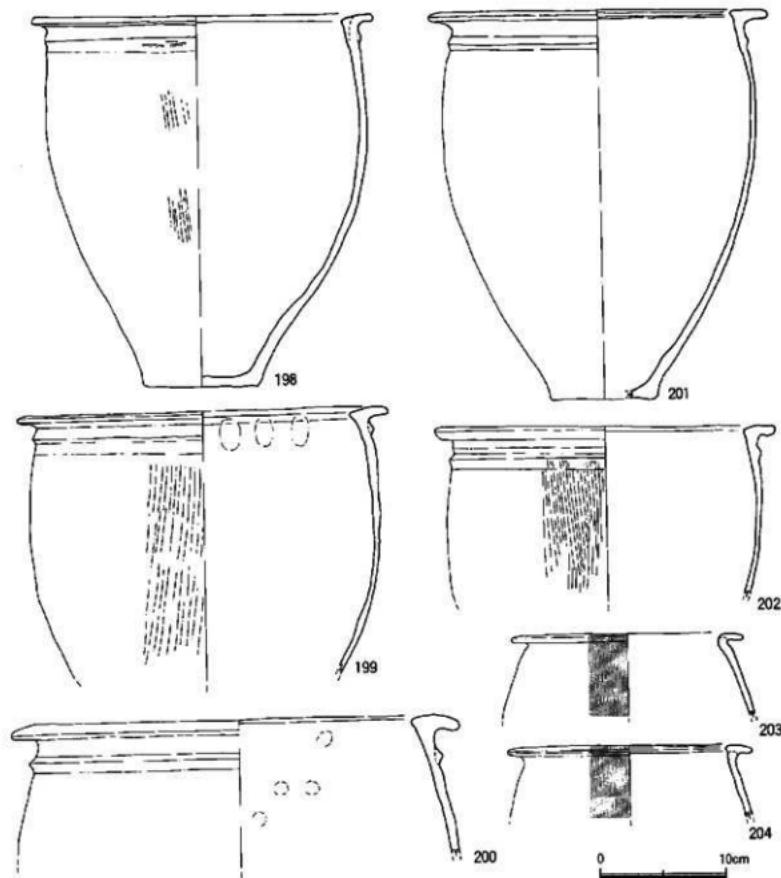


Fig.22 SD08出土遺物実測図9(1/4)

106から139は逆L字または鈍形の口縁部壺である。口縁下に断面三角形の突帯を持つもの、強いよこなでにより突帯状に見えるもの、ないものがある。122には内外面に赤色顔料を施す。133、136、137は外面に赤色顔料を施す。これらは無形壺に含める考え方もあるが、133は器高が高く、136、137は口縁部が厚く大型で壺に近い。140から150、155から166は壺の口縁部である。鈍形口縁、広口口縁、袋状口縁のものが大半を占める。多くは赤色顔料を施すが、器面が粗れのため不明なものもある。156は南腰中より出上した。上部が1/4ほど欠けるが他は割れていない。外反する口縁を持ち頸部より上に赤色顔料を施す。器壁が厚く重い。151から154は高杯で153は口縁部の外端を打ち欠いている。175から182は壺の底部で180と181は焼成後、182は焼成前の穿孔がある。183から185は壺で185外面に赤色顔料を施す。

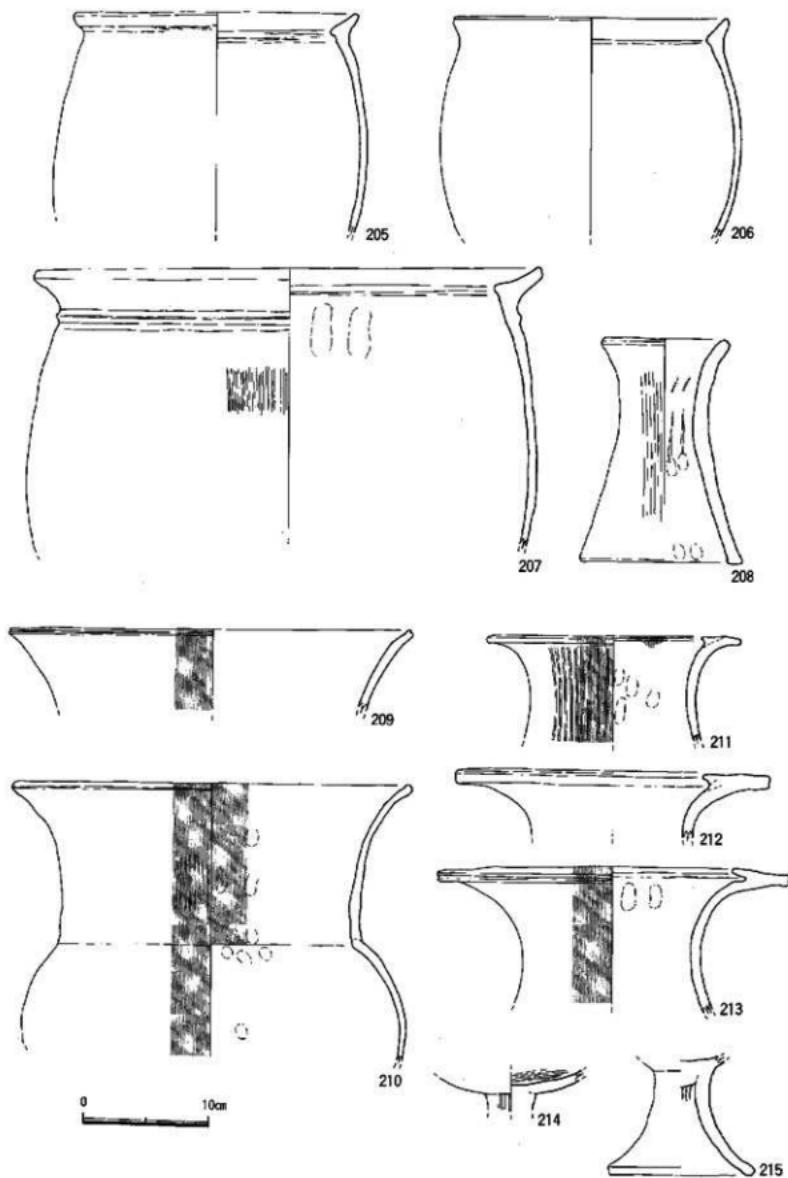


Fig.23 SD08出土遺物實測圖10(1/4)

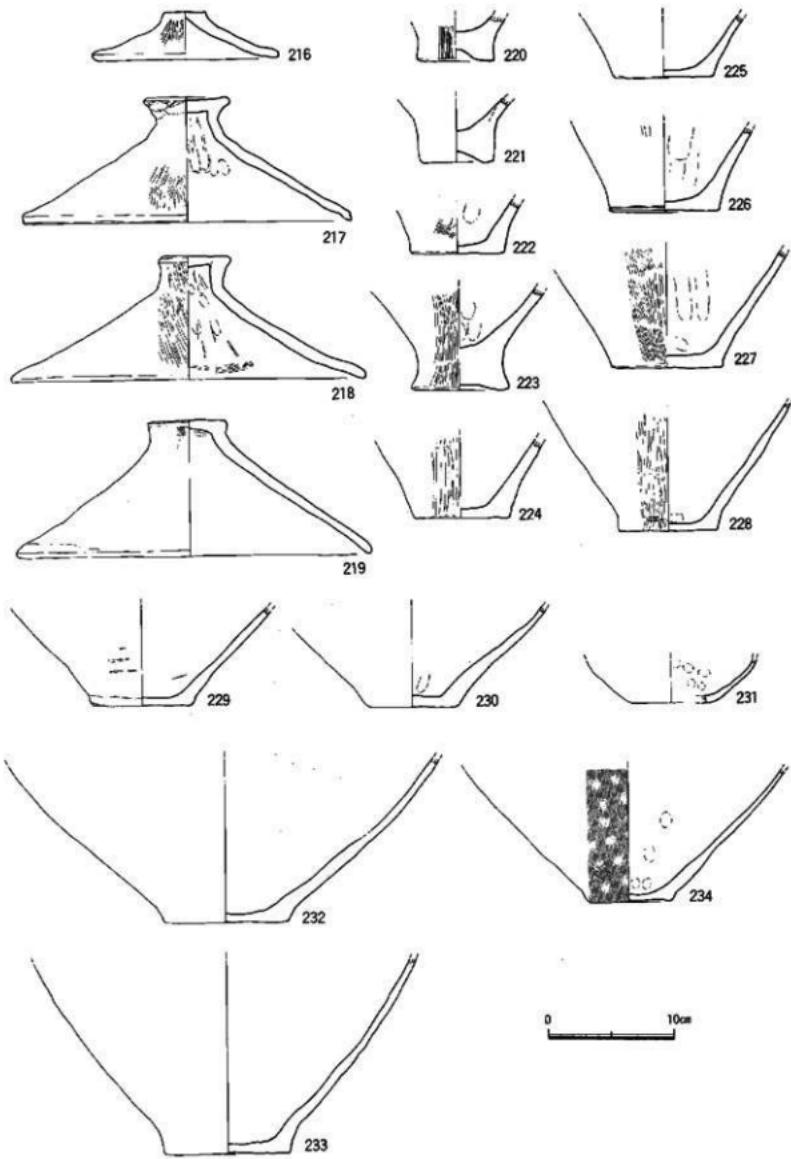


Fig. 24 SD08出土遗物实测图11(1/4)

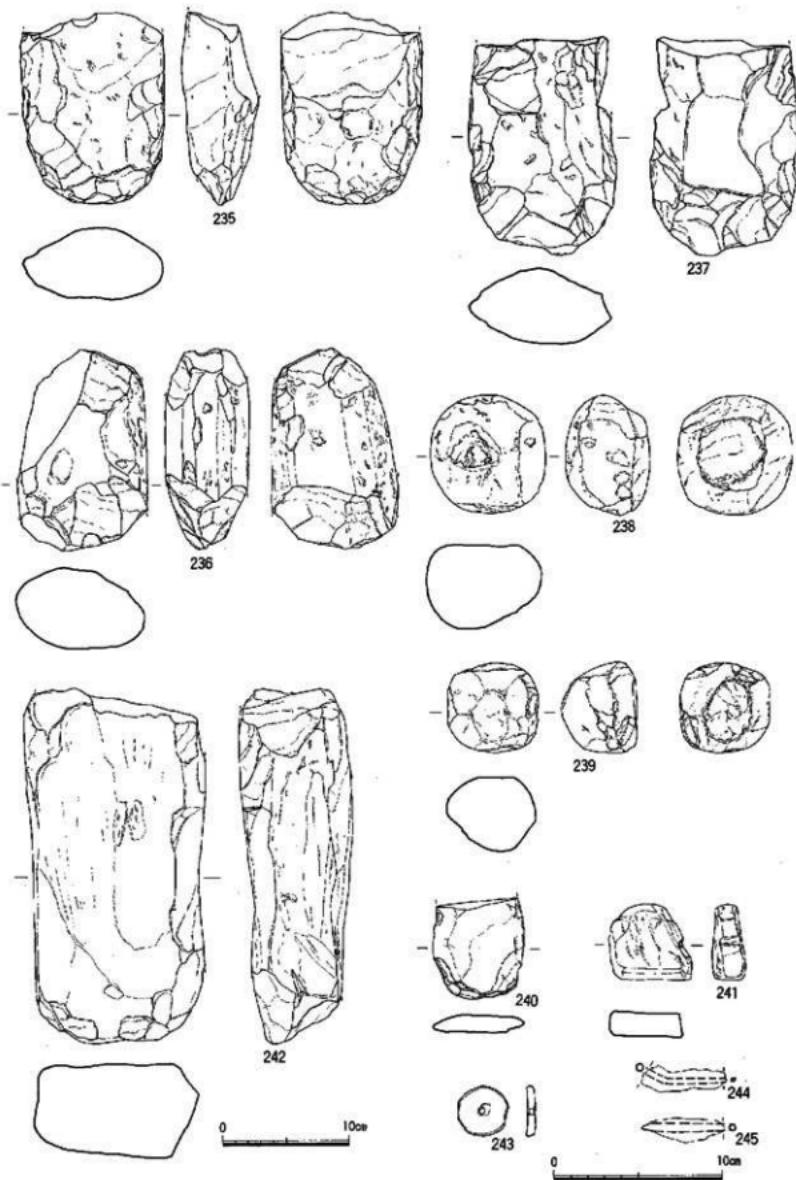


Fig.25 SD08出土遺物実測図12(1/3,1/4)

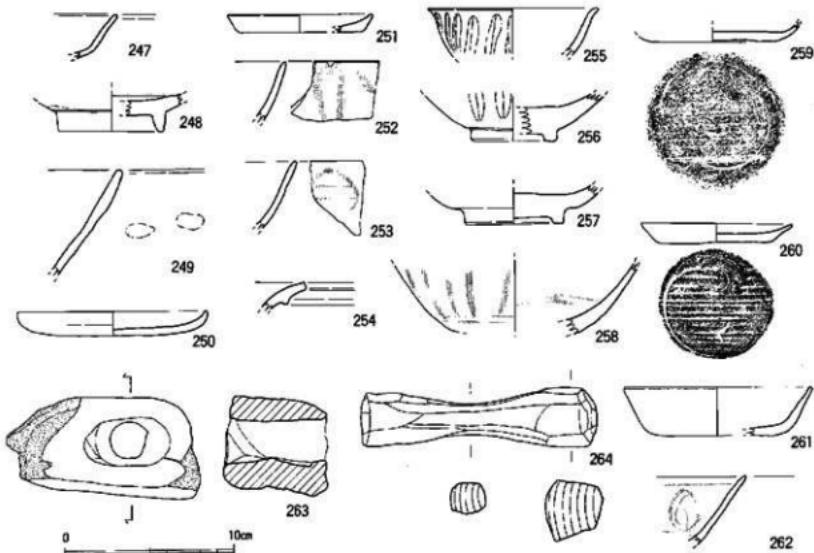


Fig. 26 SD01, 02, 土坑出土遺物実測図(1/3)

上層下部層(Fig. 21~24) 1層土器と接合するものが多く、上層と同一と考えられる。186から202は壺である。198、201はほぼ完形に復元でき、破片も大きなものが多い。203、204は外面に赤色顔料を塗る。無形壺に近いが壺である。205から207はくの字口縁の壺で口縁は一回残る。209から213は壺で赤色顔料を施すものが多い。214、215は高杯で215は二次焼成を受ける。216は壺の、217から219は壺の蓋である。216は外面に赤色顔料を塗り研磨調整である。220から228は壺の229から234は壺の底部である。

石器(Fig. 25) 上層から石器が出土している。235から237は玄武岩製の石斧の木製品である。重さは順に572g、646g、779gである。238、239が石斧未製品としばしば共伴する緑色の多孔質の円盤で敲打具と考えられる。重さは401g、217gを測る。242は砂岩製の砥石で片面を使用し欠損している。現存長283mm、幅144mm、厚さ90mm、重さ5500gを測る。240は玄武岩製の石斧未製品で偏平である。241は砥石か。243は土器の胴部破片を紡錘車として加工している。244、245は鉄器で鍛のため詳細は不明だが釘状の形状をもつ。

S D01

調査区の東端をS D02と並行して横断しN-11°-Wの方向に走る。十層観察によると耕作土直下からの掘込みで、その面からレベルを下げて検出した。上層から幅2.5m以上で確認できる深さは、50cmを測る。そのうち中央部分が幅60cmと深く2段になる。覆土は黄灰褐色土で粗砂混じりで上部はやや粘質をおびる。遺物から15、16世紀のものと考えられる。

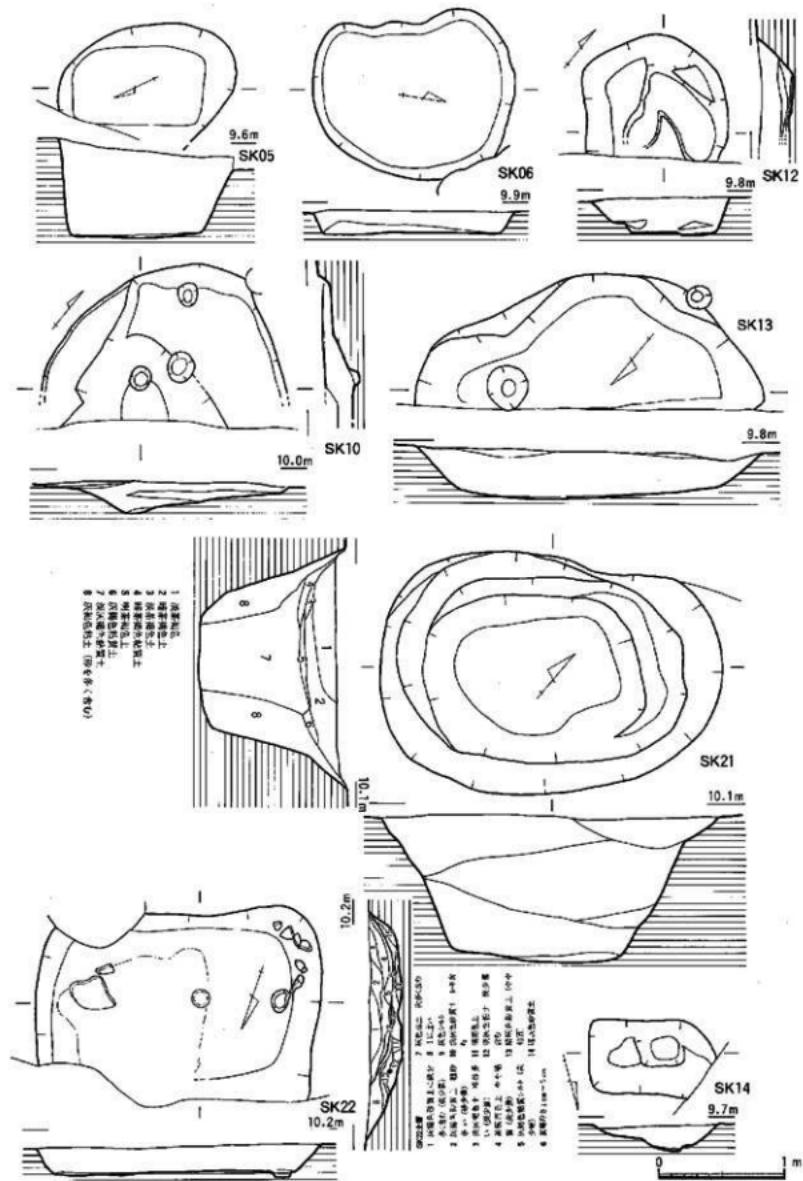


Fig.27 SE05,22,SK06,10,12,13,14,21(1/40)

出土遺物(Fig.26)

247は李朝青磁、248は白磁V類と考えられる。249は土鍋で煤の付着はなく赤茶けた発色である。

S D02

S D01と1.2mの間隔をおいて並行して走る。土層から幅1.3m、深さ35cmを測る。西側1mが深くなり段がつく。黄灰褐色土を覆土とする。

出土遺物 明確に遺構から出土した遺物は弥生土器片のみだが、北側壁清掃中に出土した250がSD02覆土のものと考えられる。250はへら切り底の土師皿の完形品で口径11.2cm、高さ1.5cmを測る。極く細かな胎土で内面を回転などで仕上げ、わずかに煤が付着する。

S D20

調査区中央をN-8°-Wの方向に走る。包含層を切る。幅190cm、深さ38cmを測る。暗褐色粘質土を覆土とし、底はシルト質である。青磁等も含むが近代の染め付けも出土している。

この他全体図中でSD03、SD07としたものは、堅く締まった砂砾を覆土としており遺物を含まない。自然流路と考えられる。

(2) 土坑(Fig.27)

SK05 北側が調査区にかかる。丸みをおびた長方形のプランで140×100cm、深さ80cmを測る。限られた遺物から時期を推定すると12世紀前半と考えられる。

出土遺物 251から254が出土した。251は土師皿で1/4からの復元径8.7cmを測り、板目压痕が見られる。252、253は龍泉窯系青磁碗で片切連弁文を施す。254は須恵器の壺の口縁である。他に石鍋の破片が出土した。

SK06 不整形の土坑でSD04を切る。規模は164×114cm、深さ18cmを測る。遺物は青磁、糸切り底の土師皿の小片の他は弥生土器、須恵器片で、中世の遺構であると考えられるが詳細は不明である。

SK10 南側が調査区にかかる。120以上×196cm、深さ26cmを測る。内側に段がある。上器の小片が出土しているが時期は不明である。

SK12 SD02の西に隣接する土坑で112×98cm以上、深さ30cmを測る。中央部がくぼみ段状になる。土師器片が出土し、中世のものと思われるが明確ではない。

SK13 不整形の土坑で北側が調査区外になり企形は不明である。280×110cm以上、深さ40cmを測り、床は平たい。遺物は出土していない。覆土から風削木痕の可能性が考えられる。

SK21 調査区の西側で検出した土坑で隅丸方形または梢円形を呈し、270×190cm、深さ118cmを測る。覆土は最上部は茶褐色土がレンズ状にたまり、検出面から40cm弱で中央部の径80cm床では径50cmが暗灰褐色の粘土、その外側が青灰色粘土である。中央部には井筒状のものがあったと考えられ、遺構の性格は井戸と考えられる。調査中は水が湧いた。出土遺物から、時期は13世紀中頃から14世紀はじめと考えられる。

出土遺物 255から258、263、264が出土した。255から258は青磁の碗で255は緑色がかかった青色を呈し錦辯文を施す。256は暗い緑色を呈し錦辯文を施す。257はくすんだ緑色の厚い釉を施す。263、264は木器で263は角材に孔が通る。長辺の両側が欠ける。長さは現存で11.5cm、幅5cm、厚さ5.5cm、孔径2.1cmを測る。264は彫垂と考えられ、長さ14cm、幅は太いところで3.4cm、細いところで1.8cmを測る。火を受けたのか一部黒変する。

SK22 調査区中央付近で検出した遺構で北側が調査区にかかり全形は不確かだが隅丸長方形を呈し223×150cm、深さ23cmを測る。覆土は床より5cm上で炭が東側を中心に薄くたまり、一部床が焼けている。出土遺物から12世紀後半から13世紀前半と考えられる。

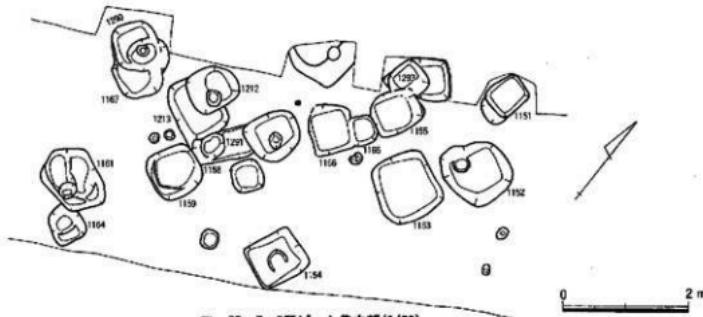


Fig.28 7、8区ピット集中部(1/80)

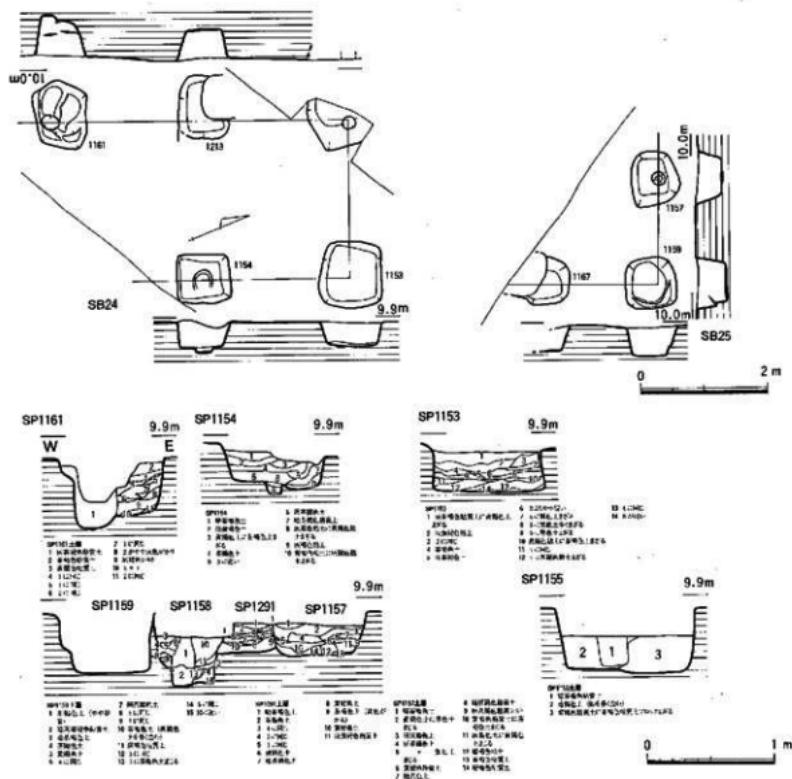


Fig.29 SB24、25、大型ピット(1/80, 1/40)

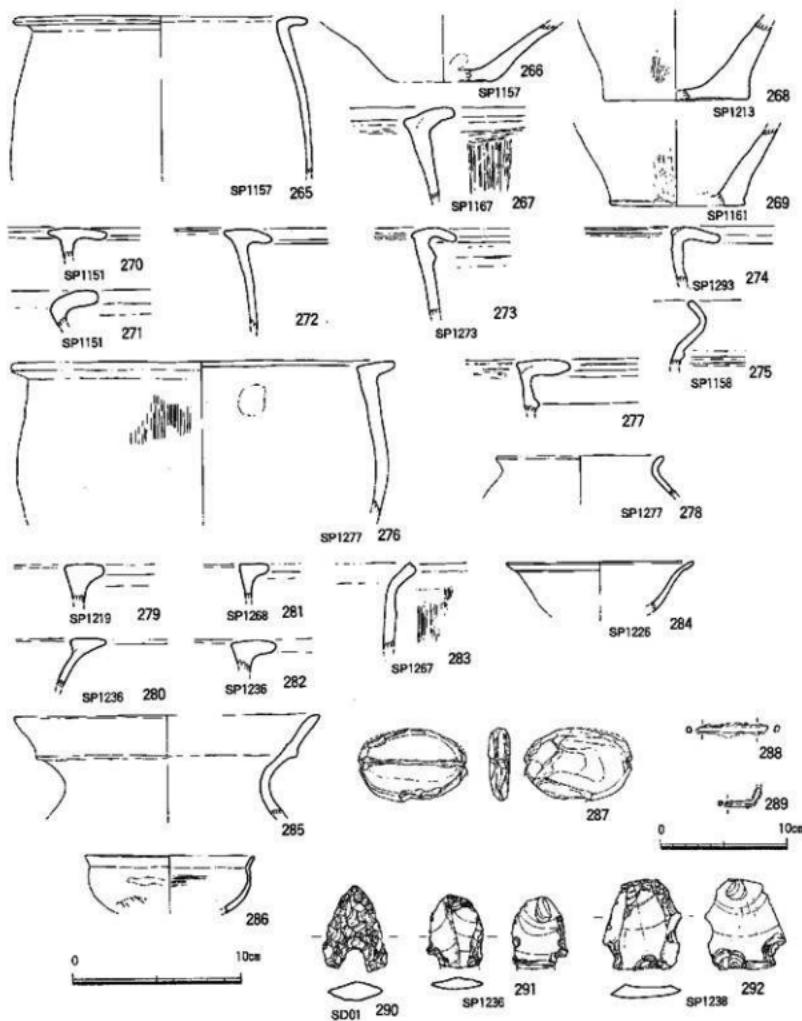


Fig.30 ピット出土およびその他の遺物実測図(1/3,2/3)

出土遺物 259から262が出土した。259から261は糸切り底に板目圧痕がある七師皿である。260は完形でややひずみがあり口徑8.9~9.15cmを測る。261は1/6からの復元径11.2cmを測る。262は龍泉窯系青磁I類である。他にコネ鉢、石鍋、須恵器片、釘が出土している。

(3) 掘建柱建物

調査区内では多くのピットを検出し、柱痕跡があるものもあるが、調査区の幅が狭く建物を把握することは難しい。調査区中央の7、8区には堀方の一部が1m前後の方形ピットが集中し(Fig.28)版築状に埋上を固めているものが多い。並びそうなものは多いが、展開が不明でまとめ難い。また6区では径60cmから100cm大、深さ50cmほどのピットが多い。10から13区ではやや散漫ではあるが1辺60cmほどの方形の堀方のものが見られる。その中で、建物としてまとまりそうな2棟について報告する。

S B24 (Fig.29) 7、8区の方形ピット集中部で確認した建物で、1間×2間と推測される。北西端は未掘で南東端は調査区外と考えられる。調査区外に広がる可能性もある。梁行250cm、桁行465cmを測る。堀方は1辺80cmから100cmをはかり、埋上はS P213をのぞいて黄褐色土と暗茶褐色土の互層で、版築状を呈す。堀方からは弥生土器が出土した。

出土遺物 268がS P1213から、269がS P1161からそれぞれ腹土巾より出土した。いずれも弥生時代中期の壺の底部である。

S B25 (Fig.29) 7、8区の方形ピット集中区では堀方が切り合い、並びそうな方角も近く、限られた範囲ではまとまりが把握し難い。S B25としたものは、S P1159を角として等間隔に位置しており、建物の一部と想定した。柱間隔は180cmほどと考えられS P1157では版築状の壺土が見られる。堀方からは弥生土器が出土した。

出土遺物 265、266がS P1157から、267がS P1167から出土した。いずれも弥生時代中期のものである。

ピットおよびその他の出土遺物

ピットのうち半数以上のものから遺物が出土しているがほとんどが弥生土器でそれ以降の遺物が出土したものは少ない。大型の堀方のものは弥生土器のみである。その内の図示できるものを示した。270から282は弥生中期の土器でいずれも小片である。283は外反する口縁部を持つ弥生前期の壺である。284は円窓の青磁碗で薄い青白色を呈す。291、292は崖窓石製のつまみ型石器で10区の隣接したピットからの出土である。長さ22mm、幅16mm、厚さ4mmを測る。長さ22mm、幅24mm、厚さ4mmを測る。

285から289はS D04付近の包含層上位で285は二重口縁壺で粗れのため調査不明である。286は丸底の壺である。287は表採品の石錐で両端に刻みを入れ、片面には深さ2mmほどの溝を彫っている。長さ63mm、幅42mm、厚さ12mm、重量53.22gを測る。228、229は出土構造不明の鉄器で釘状を呈す。S K22出土の可能性もある。290はS D01出土の黒曜石製の石錐で長さ24mm、幅18mm、厚さ5.5mmを測る。

小結

縄文時代ではつまみ型石器が出土した。3次調査では晚期前半の土壤が検出されており、本調査地点の周辺にも後期から晩期の遺構が存在する可能性がある。石器が出土したピットがその時期になるのかは不明である。

弥生時代ではS D04とS D08の性格が問題となる。特にS D04のように大量の遺物を含んだ断面V字形の溝からは環濠集落が想起される。調査範囲が限られる今回の調査で明確なことはいえないが、西側に集落域が広がり環濠がめぐる可能性は十分考えられよう。調査区はS D04から西に80mあるが対応する溝は確認できていない。また、S D08はS D04に平行し、これも環濠であれば2重となるが、

いずれも推測の域を越えない。

また、溝の時期であるが、S D04、08とも大量廃棄された土器は中期後半のものではほとんど同時期と考えられる。その中にはS D08の220や221の様に中期前半でも古手のものが含まれ、少なくともこの付近その時期から遺跡が営まれたと考えられる。溝の掘削の時期も前半までさかのばる可能性がある。大量廃棄の時期は、中期後半の編年的な問題に関わってくる。土器の中で量が多い壺は逆し字形口縁のものと鋸形口縁を持つもので占められ、くの字口縁のものは見られない。口縁部は外側への張り出しが小さめのものが多く中期後半でも古手の様相を示すが、胴部の張りなどに新しい要素も見られる。また、S D04の最下層からは壺棺92が出土しており、日常土器との平行関係を考える上で良好な資料である。92は上半が内側に傾き顯著な突帯がめぐるが、丸みを持った壺棺の一例で、K IIIa式の中でおさまり必ずしも新しくする必要はないと考えられる。また、90や205から207のように内湾するくの字口縁をもつ壺もしばしば時期的位置づけが問題となる土器である。今回出土したものは、内面の稜が弱く、内湾も顯著ではなく、このタイプの中では古手のものと考えられる。これらの土器の位置づけを詳細に論ずることはできないが、調査時の位置づけとしては中期後半の古手の時期を考えておきたい。今後、細かな地域色を念頭に入れた検討の中で位置づけていく必要がある。

掘建柱建物からは弥生土器のみが出土している。中世の遺構から多くの弥生土器が出土しているため混じり込みの可能性も残るが、今回の調査の状況では弥生時代中期の遺構として位置づけておきたい。出土した土器はS D04、08とは同じ時期で、環壕または溝で区画された集落内の遺構ということになろう。今回は調査範囲が限られたため把握できなかったが、方形の大型ピットの分布からして、多くの建物が展開するものと考えられる。溝の延長とともに周辺での調査が期待される。

3. 飯氏遺跡 9次調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

飯氏遺跡は高祖川北麓に広がる扇状地上に立地する。今回の9次調査は、遺跡範囲の北側先端付近で行われ、その結果、弥生時代中期後半、中世初頭の遺構・遺物が検出された。このうち、弥生時代中期後半の溝2条は、集落を区画する環濠の可能性が考えられている。今回の自然科学分析調査では、この溝埋積物について、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析を実施し、溝内およびその周辺の古環境に関する情報を得る。

1) 試料

調査は溝SD04について実施する。本溝の形状は幅約2.5m、深さ約1.3m、断面がV字形を呈する。溝内からは、弥生時代中期後半の土器などの遺物が多量に出土している。埋積物の状態は、砂混じり粘土・シルトからなる。この上位を中心の堆積物が覆う。これら

堆積物は、発掘調査時に1層～15層に区分されている。このうち溝埋積物は8層～15層が相当する。試料は、SD04北壁断面地点において、15層～8層の溝埋積物から層位試料として12点が採取された。今回は、この中から表1に示す試料について分析を実施した。

2) 分析方法（省略：編者）

3) 結果

(1) 硅藻分析

結果を表2に示す。珪藻化石は非常に少ない。保存状態も悪く、珪藻殻は溶解したり、壊れている。検出された種群は、陸上好気的環境に耐性がある陸生珪藻（伊藤・堀内、1991）の*Amphora montana*, *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*などである。

(2) 花粉分析

結果を表3に示す。花粉・胞子化石は少なく、保存状態も悪い。検出された種類は、木本花粉ではマツ属・スギ属、草本花粉ではイネ科やアブラナ科などである。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表4に示す。各試料からは植物珪酸体がわずかに検出されるに過ぎず、保存状態も悪い。底部の試料番号11、埋積物の試料番号9、試料番号4ではタケア科、ヨシ属、ウシクサ族などが認められ、いずれもヨシ属の産出が目立つ。

4) 考察

弥生時代中期後半の溝SD04埋積物からは珪藻化石がほとんど検出されなかった。そのため、溝内の堆積環境を特定することはできない。ただし、わずかに検出された種群のほとんどが陸生珪藻であったことから、溝内が空堀のような状況を呈していた、あるいは溝周囲の土砂が流れ込んでいる可能性などが考えられる。

また、埋積物中からは花粉化石や植物珪酸体もほとんど検出されなかった。これは、堆積時・後後

表1 SD04北壁の分析試料

試料番号	層位	D	P	PO
1	8層 上部	●	●	
4	9層 中部	●	●	●
9	11層 中部	●	●	
11	14層 中部	●	●	●

●：分析試料、D：珪藻分析、P：花粉分析、PO：植物珪酸体分析

表2 SD04北壁の珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	8層	9層	11層	14層
	塩分	pH	流水		1	4	9	11
Cocconeis scutellum Ehrenberg	Euh-Meh			C1	—	1	—	1
Nitzschia spp.	Meb			—	1	—	—	—
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	RA	2	1	—	—	—
Cyclotella spp.	Ogh-unk	unk.	unk	—	—	1	—	—
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	2	5	—	—
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	2	—	—	—
Navicula paramutica Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	1	—	—	—
Neidium alpinum Husstedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	—	4	—	—
Nitzschia permittens (Grun.) Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	—	1	—	—
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	3	—	—
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	—	1	2	—	—
Stauroneis obtusa Lagerstedti	Ogh-ind	ind	RB	—	1	—	—	—
海水生種合計					0	0	0	0
海水-汽水生種合計					0	1	0	1
汽水生種合計					0	1	0	0
淡水-汽水生種合計					0	0	0	0
淡水生種合計					9	17	1	0
硅藻化石総数					9	19	1	1

凡例

H.R.: 塩分濃度に対する適応性

pII: 水素イオン濃度に対する適応性

C.R.: 流水に対する適応性

Euh-Meh: 海水生種-汽水生種

al-il: 好アルカリ性種

ind: 流水不定性種

Meh: 汽水生種

ind: pH不定性種

unk: 流水不明種

Ogh-ind: 貧塩不定性種

unk: pH不明種

環境指標種

C1: 海水藻場指標種 (小杉, 1988)

S: 好汚泥性種 U: 広適応性種 (以上はAsai,K. & Watanabe,T.1995)

R: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群, RI:未区分陸生珪藻、伊藻・地内。1991)

表3 SD04北壁の花粉分析結果

種類	試料番号	8層	9層	11層	14層
		1	4	9	11
木本花粉					
マツ属	—	—	13	—	
スギ属	—	—	4	—	
草本花粉					
イネ科	—	—	11	—	
アカガ科	—	—	1	—	
アブラナ科	3	—	12	—	
ヨモギ属	—	—	2	—	
シダ類胞子					
シダ類胞子	84	36	47	57	
合計					
木本花粉	0	0	17	0	
草本花粉	3	0	26	0	
シダ類胞子	84	36	47	57	
総計	87	36	90	57	

表4 SD04北壁の植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	9層	11層	14層
		4	9	11
イネ科葉部短細胞珪酸体				
タケ亞科		1	—	1
ヨシ属		2	1	1
ウシクサ族ススキ属		1	—	1
不明キビ型		1	—	1
不明ニゲンバ型		3	—	—
不明ランチク型		1	—	—
イネ科身微動細胞珪酸体				
タケ亞科		1	1	—
ヨシ属		8	10	8
ウシクサ族		2	2	2
不明		3	1	1
合計				
イネ科葉部短細胞珪酸体		9	1	4
イネ科身微動細胞珪酸体		14	14	11
総計		23	15	15

に風化作用の影響を受け分解・消失した可能性と、堆積物の堆積速度が早いために取り込まれる化石数が少なかったことなどが原因として考えられる。両化石で検出された種類は、木本植物由来がマツ属・スギ属の2種類、草本植物由来がイネ科（タケアキ科・ヨシ属・ウシクサ族ススキ属を含む）・アカザ科・アブラナ科・ヨモギ属などである。これらの種類は溝刷辺に分布していた種類の一部とみられる。マツ属は樹陽であり、ヨモギ属などは開けた場所に生育する植物であることから、遺跡周辺は開けた場所であった可能性がある。また、ヨシ属は水湿地に多い種類であることから、溝内などに主に分布していた可能性がある。

以上、今回の調査では、弥生時代中期後半の古環境については断片的な情報が得られたにすぎない。今後は、本遺跡が位置する扇状地のより低い場所などで、今回と同様の分析を行い、今回の結果を含めて、本遺跡を取り巻く古環境について検討していきたい。

引用文献

- Asai,K. and Watanabe,T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprofilius and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, p.35-47.
- 伊藤良永・堀内誠志 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p.23-45.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析、その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae.
Band 2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae,
Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales,
Fragilariaeae, Eunotiaceae. Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. and Lange-Bertalot,H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae,
Kritische Ergänzungen zu *Navicula* (Lineolatae) und *Gomphonema*. Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer,K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, p.1-353., BERLIN-STUTTGART.



Ph.1 調査区東半(西から)



Ph.2 調査区西半(西から)



Ph.3 調査区東半(東から)



Ph.4 6区付近(東から)



Ph.5 SD04上層(南から)



Ph.6 7,8区(南西から)



Ph.7 SD04南壁(北から)



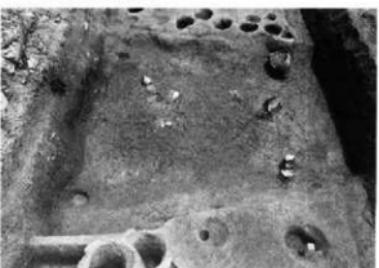
Ph.11 SD04下層(東から)



Ph.8 SD04北壁(南から)



Ph.12 SD04上層遺物(北から)



Ph.9 SD04最上層(西から)



Ph.13 SD04最下層(南から)



Ph.10 SD04上,下層(南から)



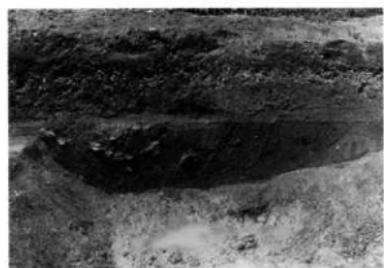
Ph.14 SD04完掘後(南から)



Ph.15 SD08南壁(北から)



Ph.19 SD08上層(西から)



Ph.16 SD08北壁(南から)



Ph.20 SD08上層作業(南から)



Ph.17 SD08最上層(南から)



Ph.21 SD08上層遺物(西から)



Ph.18 SD08上層(南から)



Ph.22 SD08上層遺物(西から)



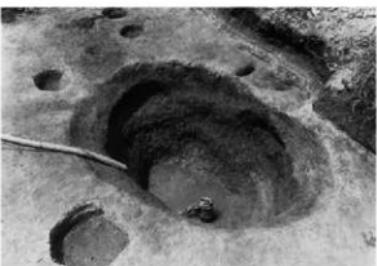
Ph.23 SD08南壁中遺物(北から)



Ph.27 SK13(南から)



Ph.24 SD01,SD02(南から)



Ph.28 SE21(南から)



Ph.25 SE05(東から)



Ph.29 桁建柱建物(南東から)



Ph.26 SK06(南から)



Ph.30 SP1159(南西から)



23



24



25



26



27



28



29



31



32



44



48



50



52



47



49

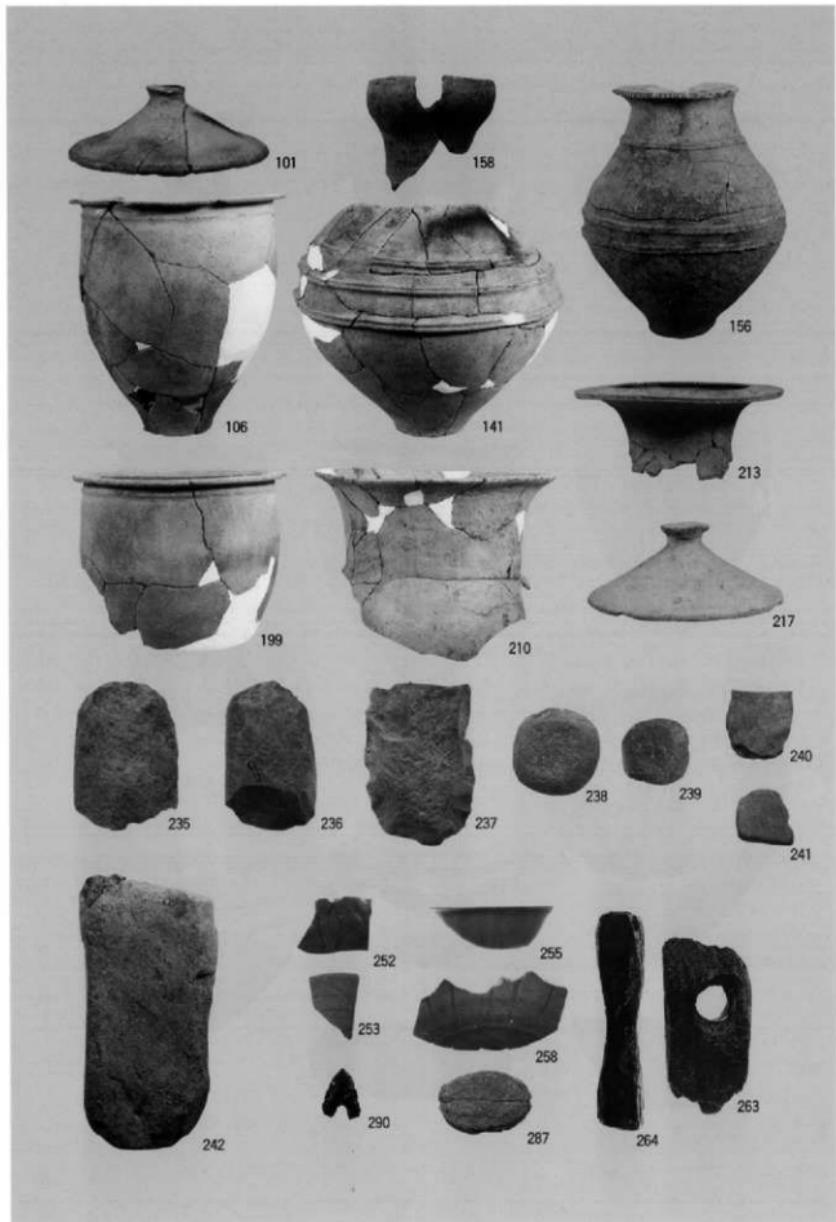


49

Ph.31 出土遺物 1



Ph.32 出土遺物 2



Ph.33 出土遺物 3

IV. 蓮町遺跡 2次調査

蓮町遺跡は高祖山から北に伸びる丘陵の西側斜面に位置し、飯氏遺跡とは谷響川を挟んで隣接する。これまでに道路建設に伴う1次調査が行われ、弥生時代後期から古代、中世の遺構、遺物が出上している。

本調査に先立ち4カ所で試掘調査を行った結果、最南端の台地の落ち際で遺構を確認し、この地点について本調査を実施した。他の1から3のトレンチでは、60から70cmの客土の下が地山となり遺構は確認できなかった。大きく削堀を受けているものと考えられる。

調査地点は丘陵の先端部近くにあたり、丘陵を横断する幅約3m、長さ36mである。現耕作土を除去すると、黄茶褐色土、茶褐色砂質土の山上となり、この上面で遺構を検出した。

遺構は、現代の溝の他は約50個のピットである。土師皿、古墳時代後期の遺物が出土したピットがあり、大きく2時期に分かれると考えられるが、まとまりとしてとらえることができない。おそらくは、畠地造成の際、大きな削堀を受けているものと考え



Fig. 1 調査地点位置図 (1/2000)

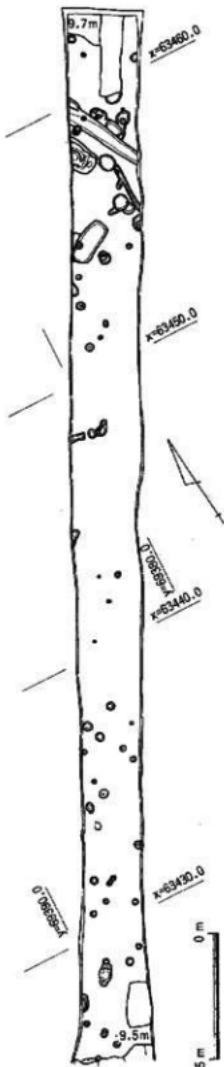


Fig. 2 遺構配置図 (1/2000)

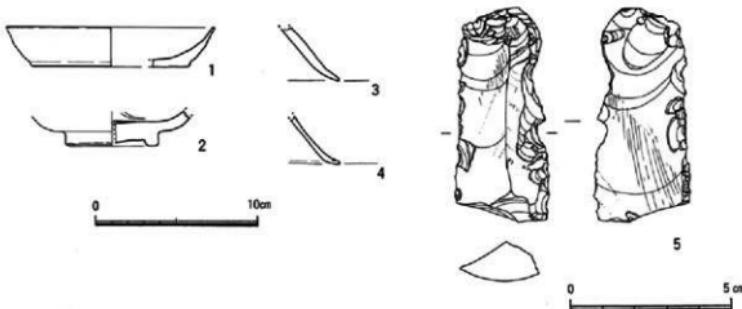


Fig. 3 出土遺物 (2/3, 1/3)



Ph. 1 薩町遺跡調査区全景(東から)

られる。

出土遺物 (Fig. 3)

1は土師皿で1/4からの復元口径12.8cmを測る。器面の粗が著しく調整は不明である。2は龍泉窯系の青磁で、疊付からその内部が露胎で、他は青みを帯びた緑色の釉が厚くほどこされる。内面には片影りの文様が見られる。3、4は高坏の脚と考えられるが、器面の粗が著しく詳細は不明。5は黒曜石の縱長の剥片の偏辺に細かな剥離がみられる。旧石器時代の資料と考えられる。1、3、4はピット出土、2、5は表採品である。

V. 今宿遺跡第5次調査

1. はじめに

1) 調査の経緯

鶴川橋西側に隣接する本地点は、路線拡幅とともに橋梁工事の進入路であるため緊急性が高く、今回の中事業地では最初の調査地点となった。対象地は史跡元寇防塁の東100mに位置し、元寇防塁推定線上にある。このため、元寇防塁の延長が確認された場合の計画の設計変更をも想定した上で調査に着手した。平成9年4月14日試掘調査を行ったところ、鉄道工事に伴うと思われる擾乱中から石が出土するものの石垣は確認できず、表土直下より古墳時代前期の遺構と遺物が出土した。このため全面の調査を行うことを決定し、同15日に表土剥ぎを開始して、6月9日調査を終了した。

2) 遺跡の立地と環境

福岡、佐賀との県境を東西に走る背振山塊から北の博多湾へ延びる丘陵は福岡、早良平野と今宿、糸島平野を東西に分け、それぞれの地域を形作る。長垂山はその丘陵の先端にあたり、本調査地点は長垂丘陵から北西の今山にのびる砂丘上に位置する。砂丘は長垂山から西に向かって発達した砂嘴で、丘陵の裾に鶴川の河口を隔てて隣接する本地点はその基部に当たる。



Fig. 1 調査地点と周辺の遺跡(1/16000)

本調査地点は元寇防塁推定線上に位置するが、調査では弥生時代から古墳時代の遺構、遺物が出土し、むしろ同じ砂丘上に位置する今宿遺跡の様相に近い。このため本調査地点まで今宿遺跡の範囲が拡大すると理解するのが妥当と判断した。

今宿遺跡は長垂山から今山にかけての砂丘上に位置する遺跡で、砂丘の東側には史跡元寇防塁があり、同じ砂丘上に元寇防塁の推定線がある。これまで4次に及ぶ調査が行われ、弥生時代前期の壺棺を中心とした墳墓、古墳時代前期の土器および製塩土器が確認されている。これらの調査の概要については「今宿遺跡」1994に詳しい(注)。今宿遺跡の北東の今山遺跡は、早くから弥生時代の石斧工房跡として著名であり、今宿遺跡に続く麓の砂丘上にはやはり弥生時代の壺棺、古墳時代前期の住居跡、製塩土器が出土している。長垂山の裾ではショウガ谷製鉄跡、油坂古墳群が知られるが調査例はない。長垂には箱式石棺出土とされる方格規矩鏡が知られているが、現在では正確な位置は不明である。丘陵裾部南900mには鷹崎遺跡、鷹崎古墳がある。鷹崎遺跡では1次調査が行われ、弥生時代中期前半の住居跡が確認されている。鷹崎古墳は初期横穴式石室を埋葬主体とする前方後円墳として著名である。調査地点の南側は後背湿地と考えられ、現状では埋め立てによる平地が続くが、土地地形分類図によると沖積平野の中に低位段丘が存在し、遺跡の分布も考えられる。

注 1988年に3次調査が行われており「今宿遺跡」1994で報告されている3次調査は4次調査となる。

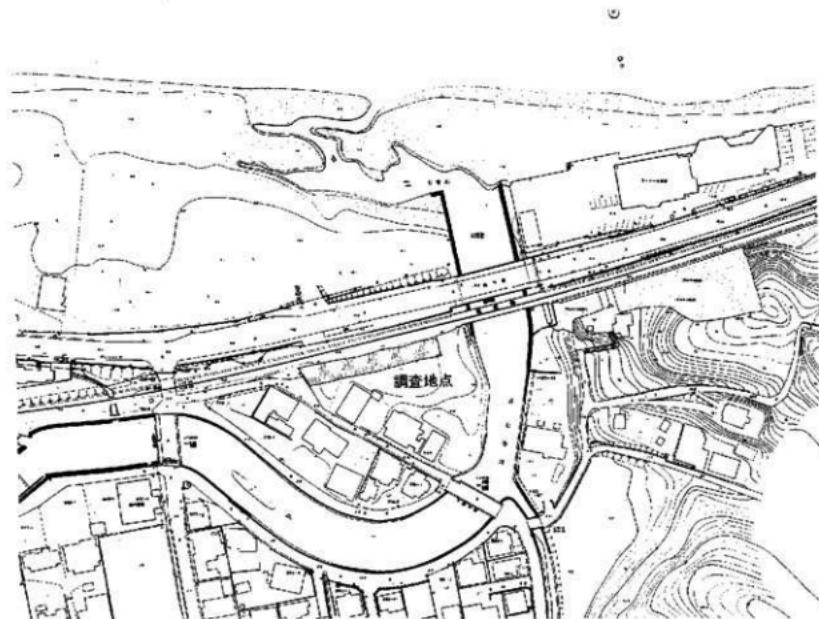


Fig. 2 調査区位置図 (1/1000)

2. 調査の記録

1) 調査の概要

調査前は、周囲より1~2mほど高い東西に延びる頂部の標高5mの砂丘の高まりで、これがちょうど史跡元寇防塁の延長上にある。調査区はこの高まりを斜めに切った位置で、中央部分が高く、東側では調査区外に高まりが続く。西側および北は現行の鉄道路線によって砂丘が大きく削られている。現状では籠等が繁る荒れ地であるが、住民の方のお話では大正時代の筑肥線敷設前までは松林であったとのことである。

調査区中央部の砂丘の残りがよい箇所では上下2面の遺構を確認した。上面は表土直下の茶褐色砂に暗褐色の砂を埋土とする古墳時代の遺構を検出し、少なくとも3軒の竪穴住居と12基の土坑を確認した。住居跡の上では製塙土器が赤色に焼けた砂に混じった状態で出土し、遺構中にも多くの製塙土器が含まれている。下面では弥生時代前期から中期にかけての13基の甕棺と、木棺もしくは土塚墓と考えられる上槽を26基検出している。調査区の東側は砂丘の高まりからはずれ、また鉄道工事によると考えられる擾乱により遺構の残りが悪く、下面に相当する遺構のみを検出した。西側も高まりからはずれ、擾乱のため遺構は少ない。遺構調査後にはトレーン調査を行い、縄文時代の遺物を検出した。調査は西側半分から着手し、土砂の反転後に東半分の調査を行った。遺構面は明確に上下の面を確認していないが、便宜的に古墳時代以降の遺構を上面、弥生時代以前の遺構を下面の遺構としている。遺構番号は001から付し、下面の遺構については101からとした。また、主に遺構について調査担当者の間で見解が分かれる部分もあるが、報告にあたっては作図者の意見に従った。

調査中には磯望(西南学院大学)、溝口孝司(九州大学)、岡部裕之(前原市教育委員会)の各氏および本市文化財部諸氏の来訪を受け、様々なご教示を賜った。

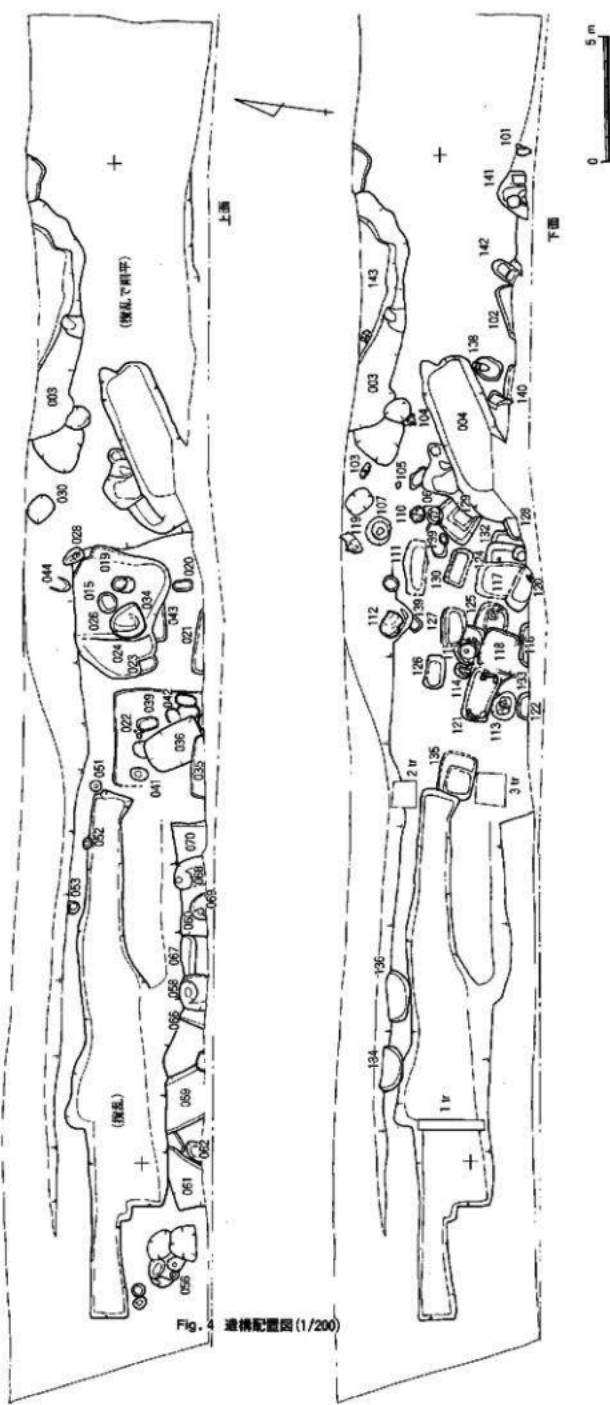
2) 層序

調査区全体についての上層図は作成していないが、調査区南端の一部の十層図を作成した。また遺構調査終了後には縄文時代の遺構遺物の確認、砂丘形成過程の検討を目的に第1から3のトレーンを設定して試掘を行い、さらに湧水点まで重機による深堀を行って下部の土層の確認に努めた。Fig. 3はそれら3種の図を合成した概念図である。

1, 2層は表土、表土と根による汚染を受けた砂で2層の上からは古墳時代の遺構が切り込むと考えられ、完形に近い遺物も出土している。3層は古墳時代の遺構、4層は弥生時代の遺構である。弥生時代の遺構は古墳時代の遺構に削平を受け、暗褐色砂を覆上とする古墳時代遺構の汚染により6層近くまで下



Fig. 3 調査地点土層略図(1/40)



げて確認できたものが多い。5層から11層までは風成砂で下部ほど白色に近い淡い色調である。6層、10層で縄文土器が出土している。12、13層は粘質シルト、泥砂で12層下部に鉄分が沈着し、13層では有機質を多く含む。14層から15層はしまりが強い粗砂で河川堆積物である。下部ほど粗くなる。標高1m付近で湧水し、鉄分が多い。16層は黒灰色の粘土で枝等の有機質を含み、C14年代測定でB.P.6170年という結果がでている。

12、13、16層では土壤について珪藻分析を行った。16層では淡水生種が多くを占めるなかで2割の海生種、汽水生種が産出し、河口付近での堆積が推定されている。12、13層は化石がほとんど検出されていないが13層で海水～汽水生種が確認され、海成ないし海岸付近の堆積が推定されている。

以上から遺構形成時までの立地の変遷を簡単に追ってみる。まずB.P.6170年期には海岸近くの湿地または潟湖で16層が堆積する。その後河川堆積が湿地を覆い14、15層がデルタ堆積である。15層の段階まで河川堆積が続き、デルタのトップまたは海浜となる。その後砂丘の後背地となり12、13層が堆積し、海水の影響を受ける状況にあったと考えられる。10層から上は風成砂で、縄文時代後期以降に砂丘が形成されていく。その過程で縄文晩期に人の活動があり、弥生時代前期に至って砂丘の後斜面に遺構が形成される。最近、今山遺跡の海岸付近で縄文時代前期の遺物包含層が確認されており今後、周辺の砂丘地形形成についての資料が加わり、検討、検証がより詳細にできるものと考える。

層序については磯原氏に多くの御教示を頂いた。

3) 弥生時代以前の遺構と遺物

古墳時代の遺構の床面レベル付近で壺棺や弥生土器がまとまって出土したが、遺構のプランを検出することは困難であったため、徐々に下げながら遺構検出に努めた。その結果、壺棺14基および木棺もしくは土坑墓と考えられる土壙26基を検出した。検出のレベルが異なったり、掘りすぎや切り合いを確認できなかったものもある。土壤は副葬土器をもつものがあるため、遺構検出面を下げる途中で出土した土器の位置の記録に努め、下のレベルで検出した遺構との関連付けができるよう努めた。また、副葬品と推測される土器のレベルは標高約1～1.3m付近になり、これよりやや上のレベルが墓地形成時のレベルと考えられる。調査区中央では古墳時代の遺構に、東側では擾乱に多くの弥生時代の遺物が含まれており、削平された遺構も多いと考えられる。

(1) 壺棺墓

101号壺棺(Fig. 6, 7, 17) 今回最も東側で出土した壺棺で、擾乱により削平を受け、原位置で残存するのは壺の胴部以下ののみである。主軸方向はN-16°-Eではなく水平に設置する。単体での出土であるが、上壺が存在する可能性もある。

出土遺物 1は中期の大型棺で擾乱中より採集した口縁部片が接合し、全体を反転により復元した。胴部上半から口縁部が内側に入り、丸みをもつ壺棺と称される一群のものと考えられる。器高72cm、口縁部径38cm、胴部最大径55cm、底部径11cmを測る。胴部最大径部に2条の断面三角突帯がめぐる。外面は上部をJ字型のナデ、下半に縦方向の刷毛目調整を施す。内面はナデ調整でわずかに縦方向の擦痕が見られ淡灰褐色を呈す。K III a式のものと考えられる。32、33が棺の直上で出土した。混じり込みの可能性もある。32は圓形口縁の壺で1/6ほどの破片。33は壺で肩部に三角突帯がめぐり外面研磨調整で光沢があり赤みをおびた茶色を呈す。

103号壺棺(Fig. 6, 9, 17) 調査区中央東よりの北端で出土した小型の合わせ口壺棺で、擾乱による削除で床付近のみ残存する。主軸方向はN-75°-Wではなく水平に設置する。挿入角度は9°を測る。掘り方のプランは確認できず壺に接した床のみを確認した。

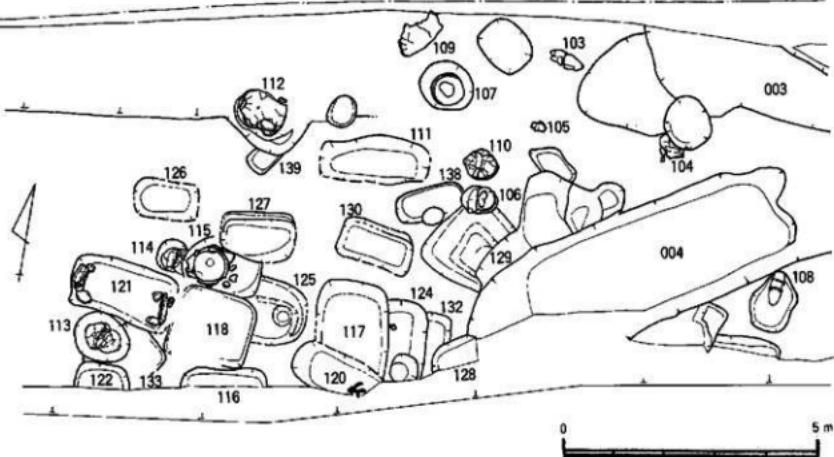


Fig. 5 下面遺構集中部(1/100)

出土遺物 上下壺とも中期の壺の小型棺だが日常土器と比べると大きい。いずれも径の1/2強の残存で反転復元した。17は上壺で現存高39.5cm、口径30cm、胴部最大径29cm、底部径7.7cmを測る。動形の口縁下に断面三角形の小さめの突帯がめぐらしく横ナデを施す。外面は縱方向に刷毛目を顕著に残し、内面はなで調整で仕上げ、下部に指押さえの痕跡が残る。淡い黄褐色を呈する。18は下壺で器高40.5cm、口径部径33cm、胴部最大径30.5cm、底部径7.4cmを測り、上壺よりやや大きいが、その他の特徴は同様である。須玖II式の古い段階のものと考えられる。44は墓壇内からの出土で外面研磨調整の壺の底部である。

104号壺棺(Fig. 6, 7, 17) 搬乱010および003に切られ、原位置を留めるのは胴部の一部であるが、010、003から出土した破片が接合した。残りが悪く不明確ではあるが、主軸はほぼ北を向き、挿入角度は31°くらいと考えられる。断面の上のレベルが底部側で上壺に相当する状態だが、遺構を切る010も下壺を全て削平するほど深くはなく、単棺の可能性がある。

出土遺物 2は下部がほぼ一周するものの上部は一部のみである。胴部上部は直線的にわずかに内傾し、胴部下部に大きめの断面三角形の突帯を2条めぐらす。残存する器高90cm、最大径60cm、底部径13cmを測る。器面調整は内外面ともなどで、下半には木口痕が残る。口縁部を欠くがその他の特徴から須玖式壺棺でK II b式と考えられる。34, 35は小壺で棺上の覆土からの出土で、それぞれ024, 028出土片と接合し、混じり込みと考えられる。34は1/8からの復元で胴部最大径部に2条の沈線を施す。その沈線から左上に2条の沈線条の痕跡があるが器面粗れのためはっきりしない。外面は研磨もしくは丁寧なで内面はなで調整で淡黄褐色を呈す。35も1/8ほどからの復元で外面は丁寧な研磨、内面は刷毛目調整が明瞭に残る。

105号壺棺(Fig. 6, 7) 103号の南に隣接する。底部から胴部下部の残存で原位置を留めているのか疑問が残る。復元される主軸の方向はN-112°-Eで、埋置角度は判断しがたい。掘り方は検出していない。

出土遺物 3は壺の下半で直線的に立ち上がり胴部最大径部よりやや下に小さめの断面三角形の突帯を1条めぐらす。器高25cmが残り、残存するなかでの最大径34cmを測る。外面は丁寧な研磨調整を底部付近は上下に、他は横方向に丁寧に施し光沢がある。外面は淡茶色、内面は灰茶色を呈す。中期初頭から前半の壺と考えられる。

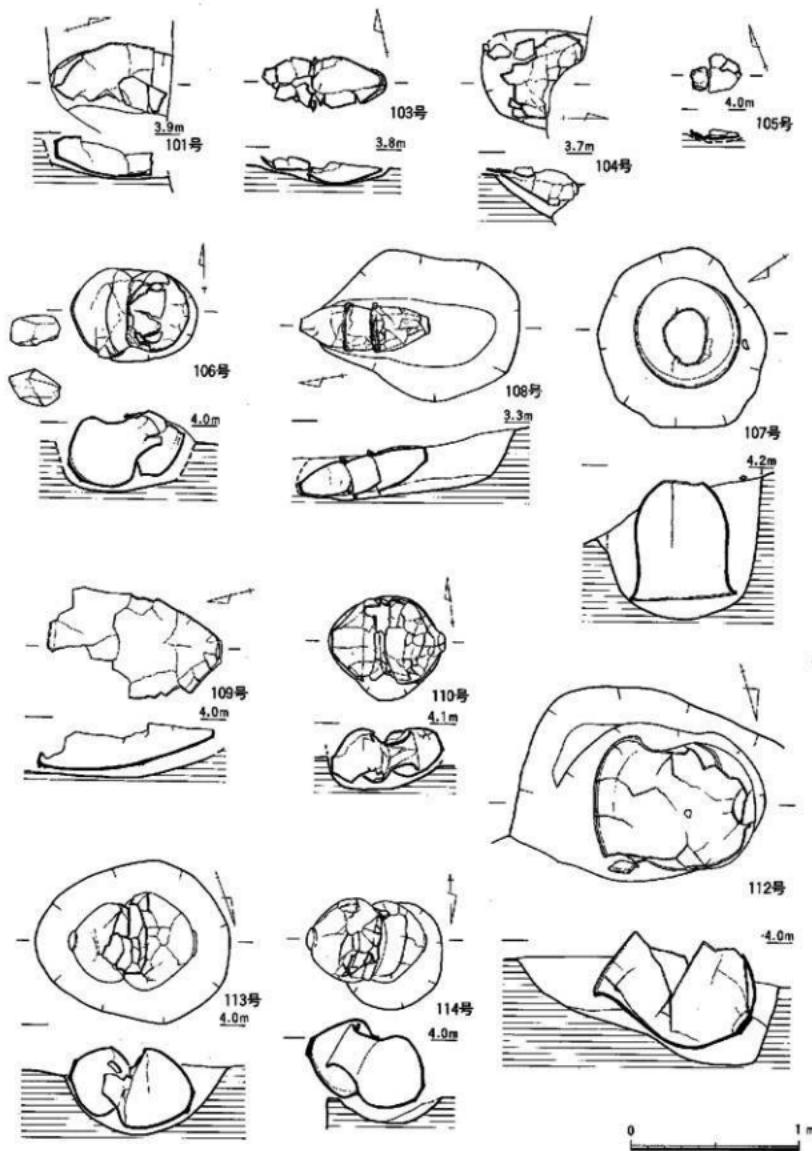
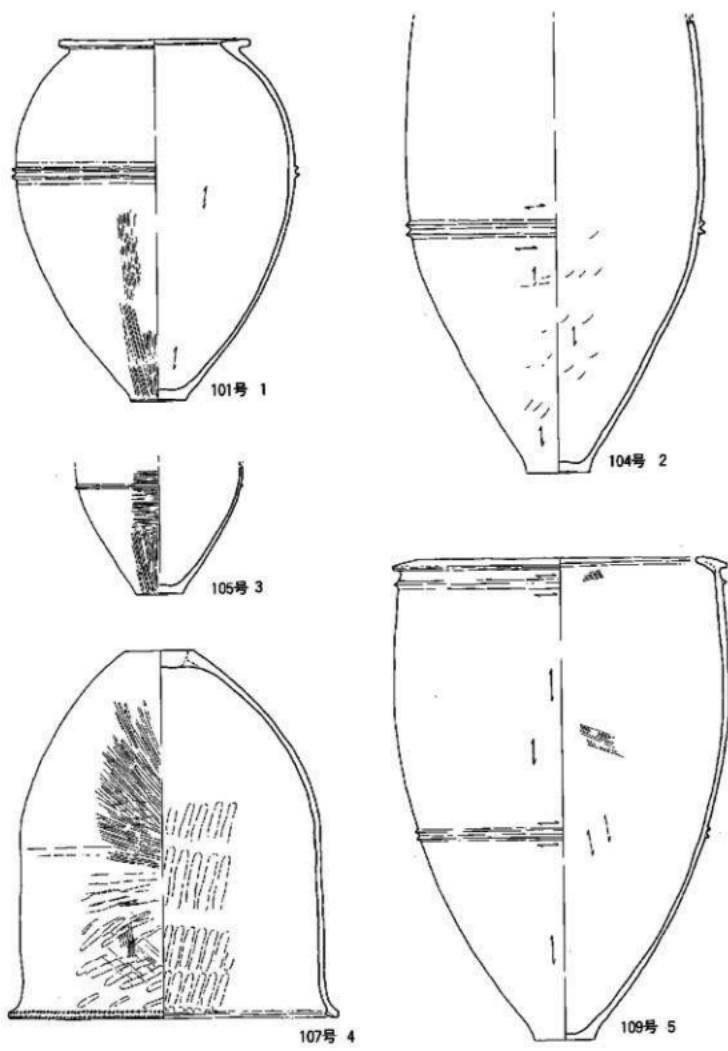


Fig. 6 101,103~110,112~114号岩相圖(1/30)



0 20cm

Fig. 7 101,104,105,107,109号炮枪实测图(1/10)

106号壺棺 (Fig. 6、8) 調査区中央から攪乱で東側に落ちる斜面に110号壺棺と並んで出土した。上下棺とも壺で、上壺は頸部から上を打ち欠き下壺を覆う。上壺は攪乱により残りが悪い。主軸方向はN-93°-Eで、挿入角度は34°である。掘り方は棺の大きさに合わせた最少限の掘削のようで、埋土は浅い灰色砂である。下壺の底部の上部分に30cm大の様があり、標石等の可能性から図示した。

出土遺物 上下棺とも板付式の大型壺である。上壺6は頸部下部から上を打ち欠き球形の胴部のみである。底部は内側に崩落した状態で出土し接合しない。外面は赤みを帯びた茶色、内面は灰褐色を呈し、現存の器高36cm、胴部最大径43cmを測る。最大径部は上位にあり、頸部に向かって大きく内湾する。外面上部は横方向、最大径より下は斜方向の研磨で下部ほど縦方向に近くなる。内面はなでで、調整痕は木口痕がわずかに残っている程度である。下壺7は口縁部を打ち欠き、残存する器高54cm、胴部最大径49cm、底部径13cmを測る。内傾する頸部と胴部の境には沈線を施すが一部のみである。他の壺棺と比べて頸部径が小さく、細く見える。胴部は最大径部上位にあり肩が張る。外面は口縁部から胴部最大径部まではほぼ横方向の磨きで、胴部中位から斜方向となり、下部では縦方向となる。口縁部はナデのため磨きは消えかかる。口縁部の段の直下および底部付近には磨き調整の前の刷毛目が見られる。内面は口縁部は横方向の刷毛目が残り、頸部には指押さえの痕跡が残る。全体にナデ調整でわずかに刷毛目の痕跡が残る。底部には径3mmほどの穴があり貫通しない。

107号壺棺 (Fig. 6、7、17) 調査区の北寄りに位置する。この周辺は壺棺が密集する。単棺の倒置棺で、ほぼ直に埋置され、ほぼ完形で出土した。墓壙の掘り方は径100~130cmの円形のプランで深さ90cmを測る。近年の調査例から下に板を敷いていたとも考えられる。底部は調査中に落ち、検出時には棺の内側の底部付近にはわずかな空間が残っていた。墓壙内には壺の破片が出たが、副葬品ではなく混じり混みと考えられる。

出土遺物 4が107号壺棺で壺の形態を残し金海式壺棺の範疇にあるものである。外反する口縁部内面を肥厚し、口縁部端にはヒドリに刻目を施す。器高73cm、口径66cm、胴部最大径60cm、底部径18.5cmを測る。外面は上部は斜めにナデた痕跡とわずかながら擦痕が残る。下半は研磨で底部に近いほど縦方向に近くなる。最大頸部には明瞭ではないが段状の不整合が見られる。内面はナデ調整で上半には指押さえ痕が見られる。器前の凹凸から幅8cmほどの粘土帶の積み上げにより成形されたものと考えられる。黄白色を呈し、胴部2カ所に小さめの黒斑がある。39が墓壙の上部で出土した。壺の胴部片で外面を研磨調整により平滑で、内面は粗めている。024出土の破片と接合する。混じり込みか。

108号壺棺 (Fig. 6、9) 調査区東側で攪乱を免れた状態で出土した小型壺の3連棺である。主軸方向はN-171°-Wで挿入角度は15°である。墓壙は120×85cmの不整形で長方形に近く、床では棺の幅に近く40cm弱を測る。覆土が暗褐色砂でプランも明瞭に検出できた。棺は上壺と中壺を逆さにして下壺と合わせる。中壺は胴部下半から打ち欠く。

出土遺物 14、15、16が上、中、下壺でいずれも彫形口縁の壺で日常七器と同様である。大きさも近く、器高は上壺が32cm、下壺は30cmで中壺は残存部で17cmを測る。口縁部形は上から34、33、36cmを測る。14は口縁下に小さめの断面三角形突起をめぐらすが、15、16は強いナデによりわずかに突起状の高まり、段があるのみである。器面調整は外側をいずれも縦方向の刷毛目調整を施し、内面はナデで14、16に擦痕が残る。器面は淡黄褐色を呈す。

109号壺棺 (Fig. 6、7) 調査区の北端で表土直下で床付近のみを検出した。口縁部が調査区の際に接するが、北側の調査区外には続かず、单棺になると考えられる。主軸方向はN-17°-Eで挿入角度はほぼ水平と考えられる。

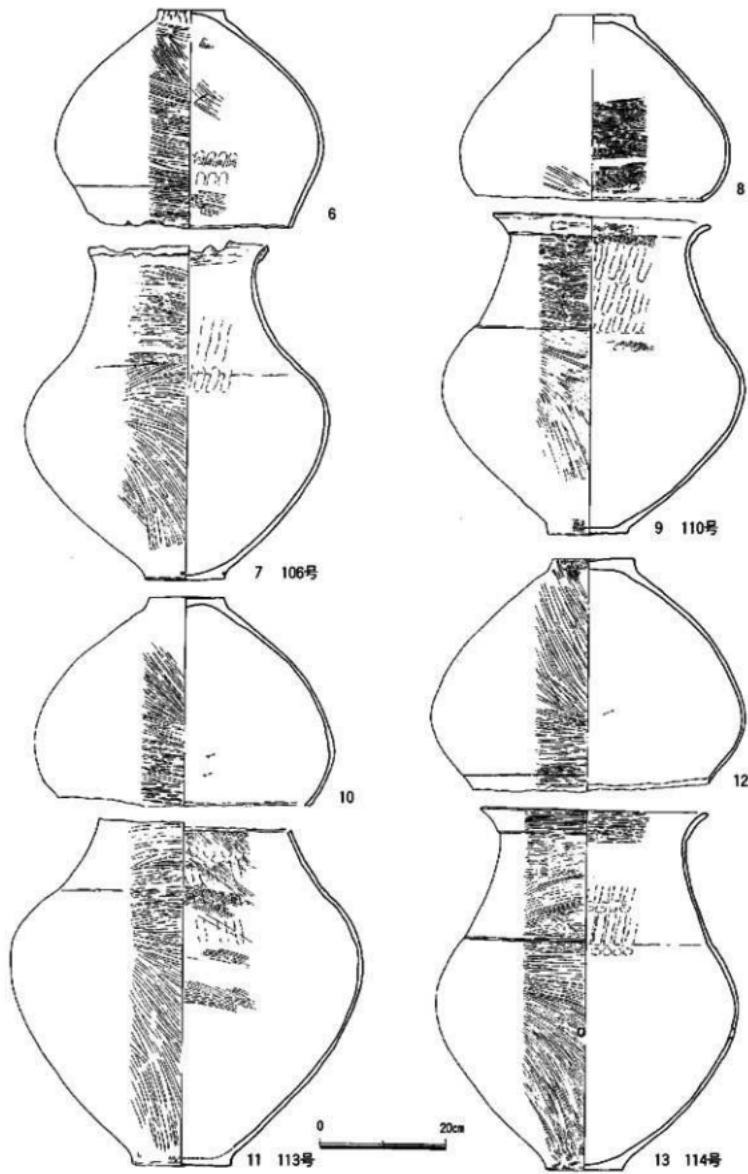


Fig. 8 106,110,113,114号要件実測図(1/8)

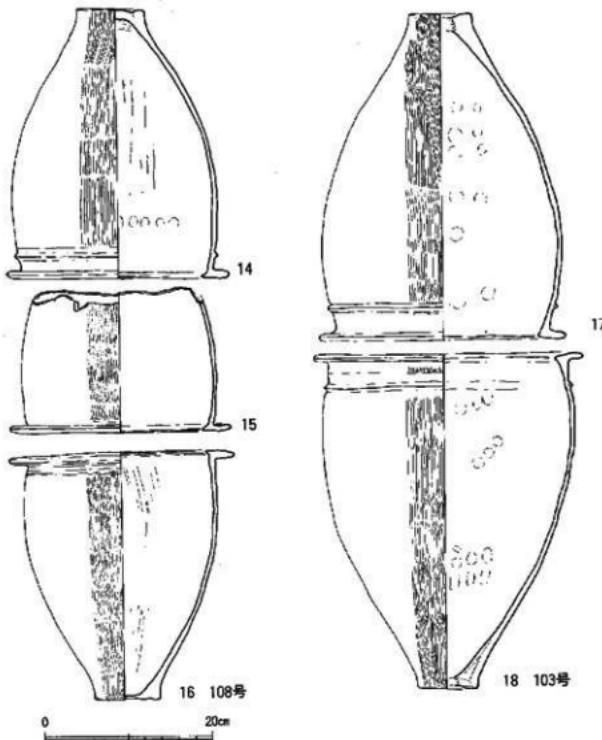


Fig. 9 103,106号壺棺実測図(1/6)

出土遺物 5が9号壺棺でT字形口縁が内面に張り出し、口縁外端部は強いナデによりくぼむ。口縁直下に大きめの断面三角突帯を1条、胴部下部にやや小ぶりの突帯を2条めぐらせる。胴部上半はわずかに内側に入るが全体としては上に開く器形である。内外面とも丁寧なナデ調整を施し内面に擦痕が見られる。外面は暗灰褐色、内面は茶褐色を呈す。汲出式でK II a式と考える。

110号壺棺(Fig. 6, 8) 106号壺棺の北側横に10cmの間隔をおいて並ぶ、埋置の方向、角度もほぼ同じである。上下棺とも壺で、上壺は頸部から上を打ち欠き下壺を覆う。主軸方向はN-97°-Eで、挿入角度は11°である。掘り方は底のみを確認した。

出土遺物 上下棺とも板付式の大型壺である。上壺8は頸部から上を打ち欠く。現存の器高29cm、胴部最大径43cmを測り、下壺より若干小さい。最大径部は上位にあり、頸部に向かって大きく内湾する。外面は器向粗れのため調整は不明瞭だが、斜方向の研磨で下部ほど縦方向に近くなる。内面は上半部は刷毛目調整で指頭圧痕が見られ、下部はナデ調整である。外面は赤みを帯びた茶色、内面は灰褐色を呈し、砂粒を多く含む。下壺9は器高50cm、口径35cm、胴部最大径28.5cm、底部径13cmを測る。

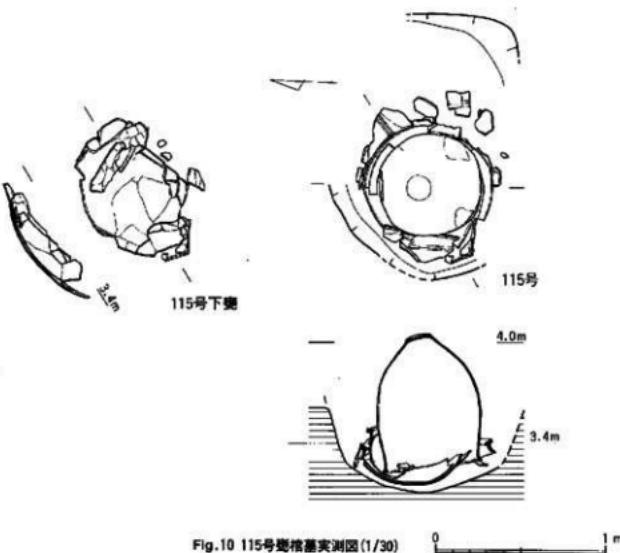


Fig. 10 115号斎棺基底測図(1/30)

口縁部は大きく外反し、肥厚により段がつく。内傾する頸部と胴部の境には沈線状の段をつくる。この部分の径は40cmと大きく、このため肩部がナデ肩になる。胴部はやや扁平で最大頭部は上位にある。外面は口縁部から胴部最大径部まではほぼ横方向の磨きで、胴部中位から斜方向となり、下部では縱方向となる。口縁部はナデのため磨きは消えかかる。口縁部の段の直下および底部付近には磨き調整の前の刷毛目が見られる。内面は口縁部は横方向の刷毛目が残り、頸部には指押さえの痕跡が残る。全体にナデ調整でわずかに刷毛目の痕跡が残る。外面は淡茶色から暗茶色で肩部の2カ所に黒斑が見られ、内面は灰褐色を呈す。砂粒を多く含む。胴部以下の1/3ほどを欠き、下部ほど焼成の甘さのためか残りが悪く、細かに割れた。

112号斎棺(Fig. 6, 11, 22) 単棺の金海式斎棺で、調査区中央北側に位置し上部に削平を受ける。主軸方向はN-106°-Eで、挿入角度は39°である。墓壇の掘方のプランは長方形に近く300×230cm以上を測り、棺に接するレベルでゆるやかな段を成す。

出土遺物 19が斎棺で胴部は1/2弱が欠ける。器高86cm、復元口径81cmを測る大型品で器形は壺形を残し胴部最大径部が低く73cmを測る。口縁下と胴部中位にいずれも3本の沈線をめぐらす。口縁部は厚く器壁2.8cmを測り、内面に小振りの突起がめぐり内外面に段を設ける。最大径部の直下には穿孔が見られ、出土状況では床に接する部分にあたる。外面は胴部最大頭部を横方向の、上部と下部を左上がりの斜方向の擦痕、木山痕が残る。内面はなで調整状の擦痕で中位には小口痕が多く見られる。色調は淡黄白色を主体とするが、外面の大部分は黒蓮状の暗褐色を呈す。167は覆土上部から出土した翡翠製の勾玉片で穿孔部分で破損し、小型の短く直線的な形になると考えられる。厚さ3.2mmをはかる。青みがかった緑色を呈す。他の遺構からの混じり込みの可能性もある。

113号斎棺(Fig. 6, 8) 調査区中央の南側に位置しST21, 37を切る。上下棺とも壺で、下壺は

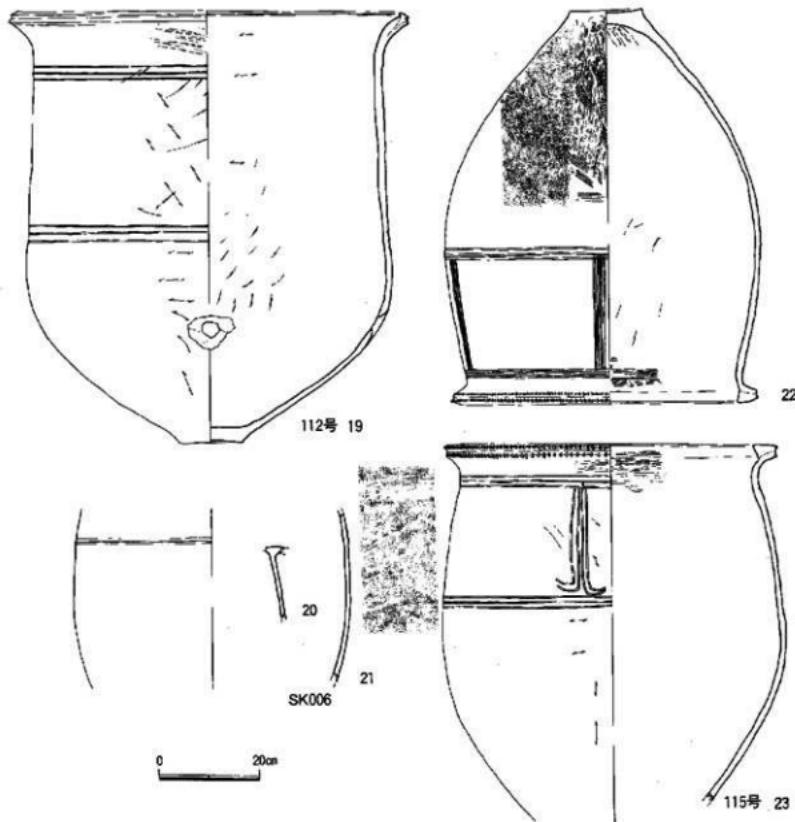


Fig.11 112,115号壺、SK006出土遺物実測図(1/10)

頸部中位から打ち欠き、上壺は頸部から上を打ち欠き下壺を覆う。割れていたが棺自体は削平を受けていない。主軸方向はN-110°-Eで、挿入角度は12°である。掘り方は不整梢円形を呈し、230×192cmを測る。

出土遺物 上壺は板付式、下棺は夜臼式と考えられる大型の壺である。上壺10は頸部と胴部の境の沈線部分から上を打ち欠く。現存の器高33cm、胴部最大径47cmを測り、下壺より若干小さい。最大径部は上位にあり丸みをもつ。外面は器面粗れのため調整は不明瞭だが、上位は横方向、下位は斜方向から縱方向の研磨で底部付近はナデ調整を施す。内面は顯著な指押さえ痕は見られず、横方向のナデ調整である。外面は赤みを帯びた茶色、内面は灰褐色を呈し、砂粒が少ない。下壺11は頸部中位から打ち欠くが、その高さにばらつきがある。現存高55cm、打ち欠き部の径30cm、胴部最大径56cm、底径16cmを測る。頸部と胴部の境には浅い沈線があり、この部分の径は44cmと大きい。頸部は傾斜が強

く頸部最大頭部が上位にあり、肩が張り気味であるが頸著ではない。外面は研磨調整で頸部から肩部は横方向、胴部は斜方向から下部に向かって縦方向に施し、わずかに光沢がある。底部付近にはわずかに刷毛目がのこる。内面は頸部から胴部上位には刷毛目がみられ上位ほど明瞭に残る。頸部、肩部には指押さえ痕がみられる。胴部下部はナデ調整で器面は粗れる。上壺を被せると余裕があり、口縁部が大きいため打ち欠いたとすると、かなり外反する事になる。外面はくすんだ橙色で2カ所に黒斑が見られる。内面は灰褐色から灰茶色を呈す。

114号壺棺(Fig. 6, 8, 18) 調査区中央に位置し、115号壺棺に接する。切り合いについては後述。上下棺とも壺で、上壺は頸部基部から上を打ち欠き下壺を覆う。割れていたが棺自体は削平を受けていない。上面の遺構SC022の床直下で棺のレベルになる。主軸方向はN-91°-Eで、挿入角度は29°である。掘り方は床を確認したのみである。詳細な位置は不明だが、取り上げ時に小壺片52が出土している。

出土遺物 上下壺とも板付式の大型の壺である。上壺12は頸部と胴部の境の沈線からやや上を打ち欠く。現存で器高37cm、沈線部分の径40cm、胴部最大径50cm、底部径13cmを測り、下壺より小型で10号壺棺の下壺に器形、大きさとも近い。最大頭部はやや上位にあるが、全体に丸みを持つ。外面は研磨調整を施し、上部は横方向、下部は斜方向に施す。内面はナデ調整で、上部は横方向である。頸著な指押さえ痕は見られない。下壺13は器高57cm、口径36cm、胴部最大径48cm、底部径12cmを測る。口縁部は大きく外反し、外面肥厚により段がつく。内傾する頸部と胴部の境には沈線状の段をつくる。胴部はやや扁平で最大頭部は上位にあるが、張らずに丸みを帯びる。外面は口縁部から胴部最大径部まではほぼ横方向の磨きで、胴部中位から斜方向となり、下部では縦方向となる。底部付近には刷毛目が残る。胴部最大頭部には径1cmほどの穿孔がある。内面は口縁部が横方向の研磨で、頸部には指押さえの痕跡が残る。全体にナデ調整である。外面は黄色を帯びた淡茶色から茶色で明るく、胴部の対称する位置2カ所に黒斑が見られ、内面は黄茶色を呈す。砂粒を多く含む。52は小壺の口縁部で外面肥厚し、なで調整を施す。同一個体と考えられる破片が115号壺棺覆土から出土している。

115号壺棺(Fig. 10, 11, 17, 18) 調査区の中央に位置する。上壺は倒置棺で若干北に傾く。下壺は特異で、割れた1個体の破片を利用している。まず大きな胴部片を2枚重ね、その上に上壺を設置し、その裾を覆うように口縁部片を立てかける。接合するとほぼ完形に復元できる。Fig. 10では下壺の平面と主軸方向での断面を左に図示した。墓壙はST118に切られごく一部が残存し、310×220cm以上の掘方で西側は棺から1m強の余裕がある。西側は114号壺棺が接し、114号がレベル的に上にあらため一見切っているような位置関係にある(ph.18)。切り合いがわかるような墓壙は確認できていない。棺の型式からして115号が新しいのは明らかで、114号の東側に墓壙を掘りその西側の壁に114号の上壺が頭を出す様な関係にあったと考えられる。西側の114号に接する位置の床は砂が赤く、赤色顔料をまいたようで、114号棺との関連も想定されよう。墓壙内からは棺以外の日常土器片も出土し36, 37, 52を図示した。また、40は上面の古墳時代の遺構023, 024, 025, 033出土の破片が接合したもので胴部の大部分が復元できた。これらの遺構は114, 115号壺棺、ST118の上にあたり、現位置に近いと考えられる。115号壺棺またはST118の副葬品の可能性がある。

出土遺物 上下棺とも金海式壺棺である。上壺22は壺の形態を残し、強く外反する口縁部内面に厚い粘土帯を張り付け、口縁部上面に平坦部を作る。口縁部外面には突出する2箇所に刻み目を同時に施す。口縁部下および胴部中位には3条の沈線を施した後、縦方向に4条の沈線を胴部の周囲をほぼ均等に6箇所施す。器高は79cm、口縁部径62cmを測る。外面胴部下半は、叩きの後に縦方向に細かな刷毛目を施す。叩き痕、刷毛目とも明瞭に残る。上半はなで調整である。内面は口縁部に横方向の刷

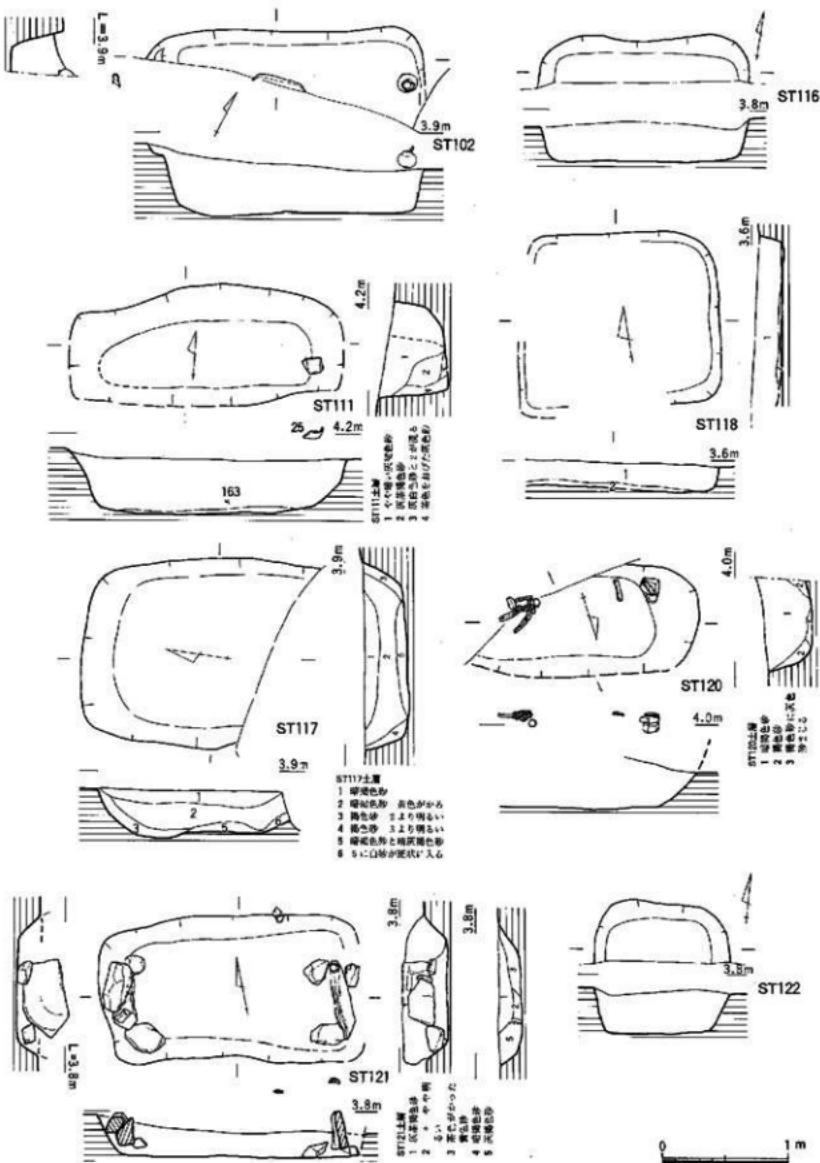


Fig.12 ST102,111,116,117,118,120,121,122実測図(1/40)

毛目が見られる他はなで調整で、木口痕が見られる。また下半は粘土帶の痕跡と考えられる凹凸があり、幅8cmほどの粘土帶が復元できよう。胴部中位で2箇所が焼成不良のためもろく、洗浄時に器壁が溶けた。下臺は上臺と同様の器形だが胴部最大径部が少し下がる。底部はあるが焼成不良で残りが悪く接合もしない。縦方向の沈線は4箇所にあり、そのうち3箇所は下側が2本づつ左右にはね、1箇所は4本とも右にはねる。また、口縁部下の沈線は一筆書きである。器面は茶褐色を呈す。器高は図示した部分で75cm、全体で85cm程度と考えられ、口縁部径68cmと上臺よりやや大きい。40は壺の胴部で最大径部に断面三角突帯をめぐらす。外面は丁寧な研磨調整で平滑で淡黄茶色から茶褐色を呈す。内面はなで調整である。36、37、52は115壺棺墓壙内出土である。36は肩部に浅い沈線をもつ壺の肩部片で研磨調整、37は下面検出面出土のものと接合する大型の壺で丁寧な研磨調整を施す。他に安山岩のフレークが出土している。

(2) 土壙

下面の甕棺が半ば形を表したレベルで淡黄灰色、暗褐色砂を覆土とする土壙を検出した。掘り方、切り合いが判然とせず、掘りすぎた部分も多い。土壙のプランは長方形のものが多く、ST121の様に木口に礫を配するや小窓を伴うものがあり、甕棺墓の間を埋めるように分布することから、そのほとんどが土壙墓もしくは木棺墓と考えられる。調査区の中央付近に多く分布するが、特に東側は削平により失われたものが多いと考えられる。

S T102(Fig.12, 16) 調査区の東側に位置し南半は調査区外である。長方形プランと考えられ、長辺220cm、深さ80cmを測る。掘乱の立ち上がり斜面で検出したため調査した北半の上部は削平を受ける。東側隅の掘り方の中位のレベルに正立した小壺を剖葬する。覆土は淡灰茶色砂である。掘り方の中央に径40cm、厚さ5cmほどの円盤状の礫がおかれ、標石の可能性も考えておきたい。長辺の方向はN-65°-Eを測る。

遺物は24が出土し、擾乱で欠けている他は完形で、副葬品と考えられる。

出土遺物 24は精製の小壺ではほぼ完形である。口縁部と頸部の境の外面には段を設けるが口縁部の肥厚はない。頸部と胴部の境には外面に段を設け、内面は屈曲部をもつ。肩部には有軸羽状文を赤色顔料で施文するが残りが悪い。頸部、口縁部外面にも彩文があるようだがはっきりしない。外面は丁寧な横方向の研磨調整を施し、内面は口縁部を研磨、頸部、胴部はなで調整で底部は刷毛目調整が資の予状に残る。

S T111(Fig.12, 16, 17, 22) 長方形プランで220×95cm、深さ53cmを測る。長辺の方向はN-80°-Eである。灰褐色砂を覆土とするがプランが分かりづらく掘りすぎた箇所もある。遺物は高杯の脚部25が検出面よりも20cm上でプランの東端の位置に出土し、遺構に伴う副葬品等の可能性があると考えられる。また、床面近くからは石鏡163が出土している。

出土遺物 25はほぼ正立した状態で出土した高杯の脚部で前期前半のものと考えられる。裾部が厚く、内外面に緩やかな段がつく。外面は粗れが著しい。わずかに残る部分は研磨調整で赤みをおび、赤色顔料を塗っている可能性がある。内面は指押さえ、刷毛目の木口が残り、ナデ調整で仕上げる。全体に器面が粗れる。胎上は砂粒を多く含む。163は黒曜石製の石鏡で側片を鋸歯状に調節剝離を施し先端近くに突起をもつ長さ22mm、幅21.5mm、重さ1.2gを測る。43は覆土中からの出土の壺で外面は細かな刷毛目、内面は指押さえが頭著である。

S T116(Fig.12) 調査区南端に位置し遺構は調査区外である。東西が長辺の長方形プランと考えられる。長軸168cm、深さ32cmを測る。長辺の方向はN-82°-Eである。細い空帯をもつ胴部片が1点出土している。

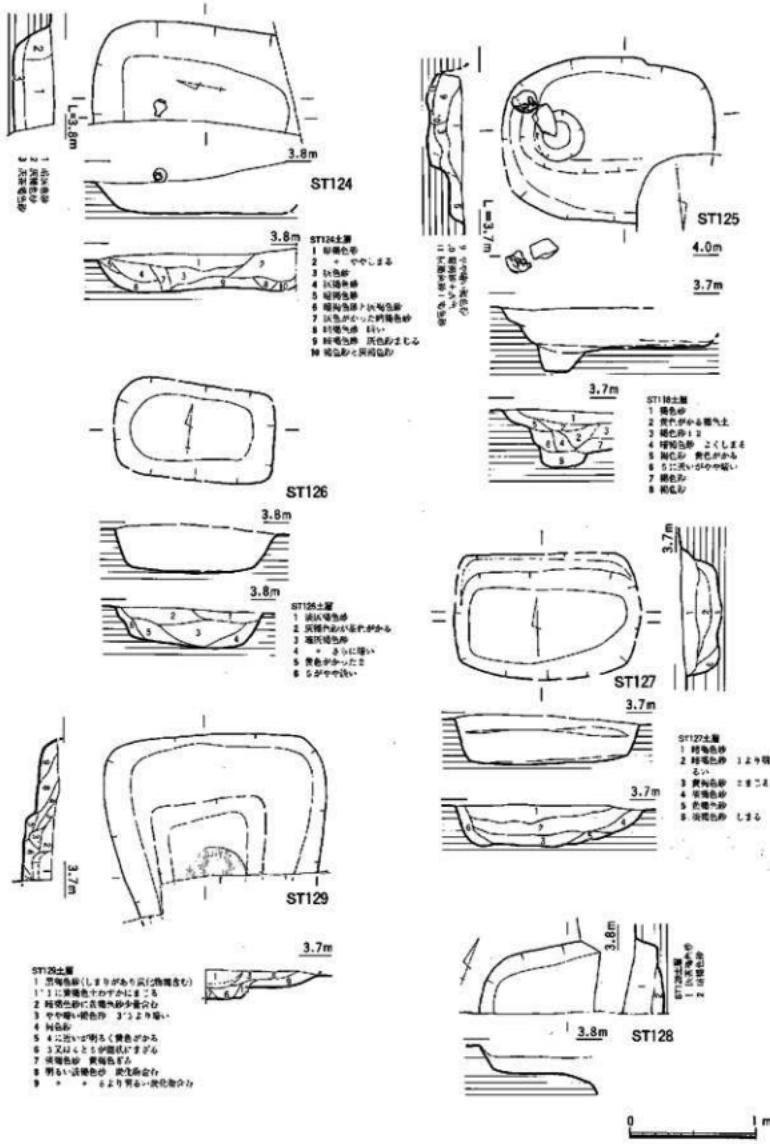


Fig.13 ST124,125,126,127,128,129実測図(1/40)

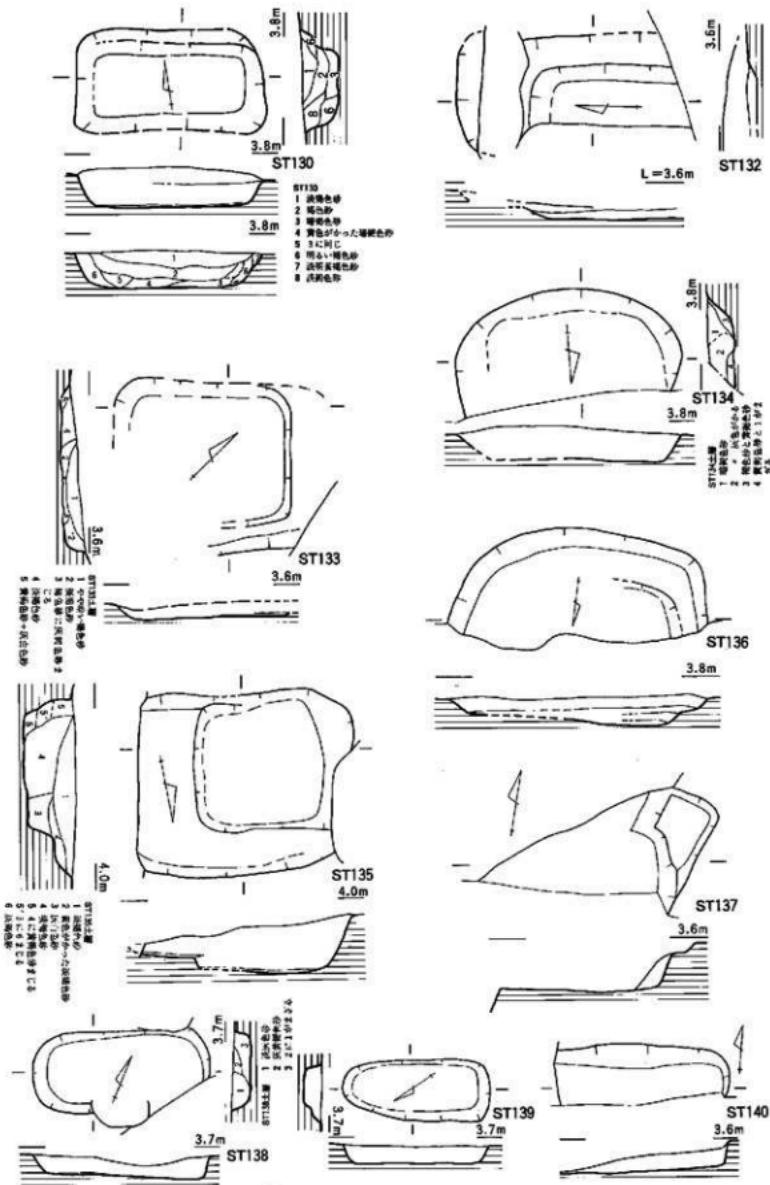


Fig.14 ST130,132,133,134,135,136,137,138,139,104実測図(1/40)

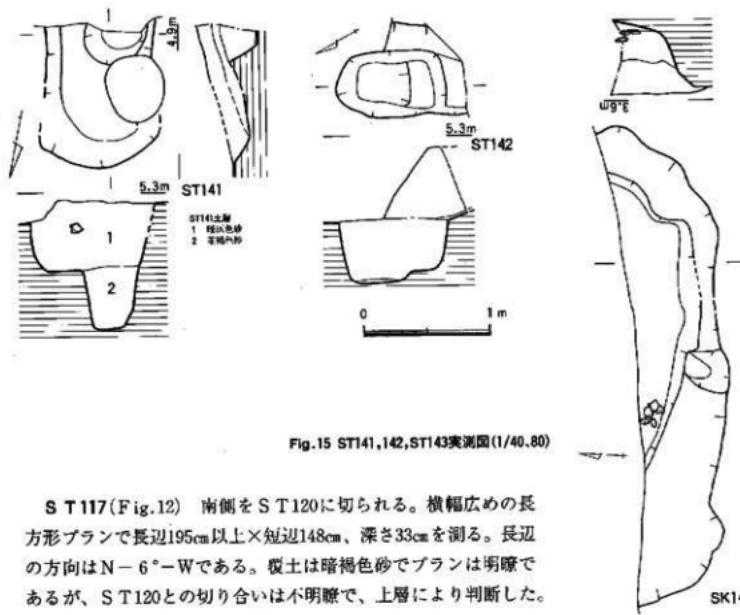


Fig. 15 ST141, 142, ST143実測図 (1/40.80)

S T 117 (Fig. 12) 南側を S T 120に切られる。横幅広めの長方形プランで長辺195cm以上×短辺148cm、深さ33cmを測る。長辺の方向はN-6°-Wである。覆土は暗褐色砂でプランは明瞭であるが、S T 120との切り合いは不明瞭で、上層により判断した。遺物は2~3cm大の軽石が出土している。

S T 118 (Fig. 12) 115号壺棺とS T 125を切るが、115号壺棺との切り合いは不明確である。またS T 121との切り合いも不明である。方形プランで162×156cm、深さ24cmを測る。長辺の方向はN-89°-Wで覆土は灰褐色砂である。遺物は出土していない。

S T 120 (Fig. 12, 16) S T 117を切り、南側は調査区外にである。丸みをもった長方形プランで長辺175cm以上×85cm、深さ45cmを測る。長辺の方向はN-72°-Wで覆土は暗褐色砂である。遺構の検出面より40cmほど上で、大型壺の口縁部片26が出土した。破片は壺方のプラン内におさまり、東側の部分に集中し西側にも2片が分布する。遺構に伴うものと考えられる。

出土遺物 26は破片が接合し、ほぼ1周分が出土した。前期の大型壺の口縁部で内外面を肥厚し、横なで調整を施す。棺として使用する際に口縁部を打ち欠いた残りの可能性もある。

S T 121 (Fig. 12, 16) 長方形プランでS T 118との切り合いは不明。木口に板状の縁を配し、その両側全面に15cm大の角縁をおく。長辺200cm強、短辺110cm、深さ25cmを測る。長辺の方向はN-78°-Wである。遺物は遺構検出面より40cmほど上のプラン内で壺2点(27, 28)が出土している。いずれも破片で確実にこの遺構に伴うかは不明である。

出土遺物 27は2mほど離れた破片が接合し、動いている可能性がある。壺で頸部から口縁部の外反が強く頸部と胴部の境には

浅い沈線を施す。外面は研磨及び擦痕、内面はなで木口痕が見られる。28は底部が墓壙プラン内で出土した。頸部下部に2条、胴部最大径部に3条の浅い沈線がめぐる。外面は研磨、内面はなで調整で灰褐色がかった黄色を呈す。

S T 122(Fig.12) 検査区南側にかかり全形は不明。長方形プランとすれば南北に長軸をとり、幅110cm、深さ40cmを測る。長辺の方向はN-90°-Eとなる。遺物は出土していない。

S T 124(Fig.13, 16) 西側をS T 120に切られ、検査区の南側にかかる。南北方向に長軸をとる長方形プランと考えられ、現存で長辺160cm×幅75cm、深さ40cmを測る。長辺の方向はN-8°-Wである。覆土は暗褐色砂である。覆土中より小壺30が横たわった状態で出土し、副葬品の可能性が高い。

出土遺物 30は口縁部から頸部の一部が欠けるが他に割れはない。口縁部は外反し、胴部で緩やかに屈曲する。頸部外面は凸凹が、内面には接合痕が明瞭に残り幅2cmほどの粘土帯を形成したことが分かる。外面は横から斜方向の研磨調整で黄色を帯びた灰褐色を呈す。内面は口縁部のみ横方向の研磨を施し、頸部は指押さえ、胴部は丁寧なで調整を施す。

S T 125(Fig.13, 16, 17) S T 115, 118に切られる。隅丸の長方形プランで170×130cm、深さ30cmを測る。長辺の方向はN-88°-Wである。北側に段を持ち、東側の床には径40cm、深さ20cmのピットがある。遺構検出面より30cmほど上に壺29が正置されており副葬品と考えられる。覆土は暗褐色砂で黒曜石片が出土した。

出土遺物 29は板付式の壺で口縁部外面を肥厚し、頸部と肩部の境には2条の浅い沈線がめぐり肩部には3条の重弧文を9または10個施す。頸部には縦方向で少し傾く併行沈線4条を3箇所に描いている。外面は横方向の研磨調整で内面は粗れている。胎土は砂粒が多く含み、くすんだ黄褐色を呈す。38は覆土中からの出土の壺の口縁部で内外面とも研磨調整である。

S T 126(Fig.13) 長方形プランで128cm×75cm、深さ30cmを測る。長辺の方向はN-84°-Eである。覆土は灰褐色砂でS T 127、S T 130と類似する。

S T 127(Fig.13) 115号壺棺を切る。長方形プランで150×100cm、深さ40cmを測る。長辺の方向はN-89°-Wを測る。北側の長辺にわずかながら段がある。

S T 128(Fig.13) S T 132を切り、東側は搅乱004に切られる。南側は検査区にかかり隅角のみの検出である。外面研磨調整の壺の小片が出土している。

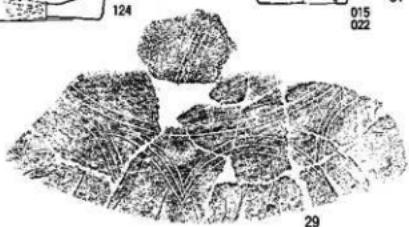
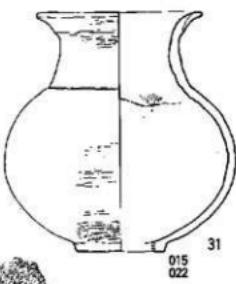
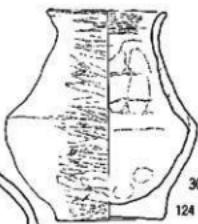
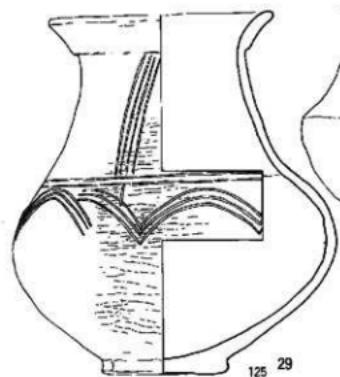
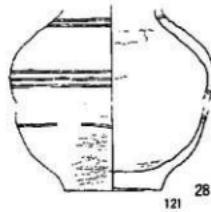
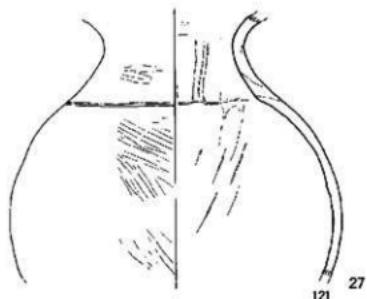
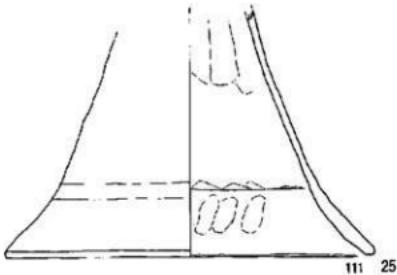
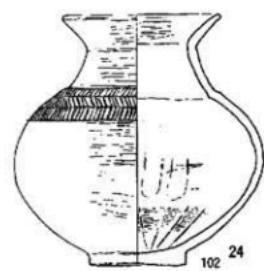
S T 129(Fig.13, 17) 搅乱に東側を切られる。長方形プランで東西が長軸になると考えられる。現存で150×180cm、深さ27cmを測る。長辺の方向はN-53°-Wである。平面プランでは確認していないが、土層により中央部分に段掘りを復元した。また、搅乱に切られた断面の中央部分に暗褐色砂層が掘り込み状を呈し、比較的明瞭に周囲と区別できる。削り抜き木棺の痕跡との考えもあり、そうなると長辺3m近くの大型の墓壙を持つことになろう。

出土遺物 42は覆土中から出土した壺の底部で底が丸みを持つ。1/4の破片から復元した。

S T 130(Fig.14) 長方形プランで150×80cm、深さ33cmを測る。長辺の方向はN-80°-Wで淡褐色砂を覆土とする。胎土がきめ細かい壺と考えられる小土器片と条痕調査の縄文土器が出土している。

S T 132(Fig.14) 西側をS T 124に東側をS T 128に切られ、南側は検査区外に延びる。北側には搅乱がある。南北方向に長軸をとる長方形プランと考えられ、現存で170×75cm、深さ25cmを測る。長辺の方向はN-2°-Wである。

S T 133(Fig.14) 113号壺棺、S T 121, 122に切られる。方形プランと考えられ140×115cm、深さ18cmを測る。長辺の方向はN-44°-Eで褐色砂を覆土とする。外面なで調整の壺の小片が出土している。



0
10m

Fig.16 出土遺物実測図 1 (1/3)

S T 134(Fig.14) 北側を擾乱に切られる。楕円形プランと考えられ180×105cm、深さ26cmを測る。長軸の方向はN-85°-Wである。

S T 135(Fig.14) 西、東側を擾乱で切られる。長方形プランで西よりに方形の段がある。現存で170×140cm、深さ42cmを測る。長辺の方向はN-78°-Wである。

S T 136(Fig.14) 北側を擾乱に切られる。隅丸長方形プランと考えられる。現存で205×95cm、深さ22cmを測る。長軸の方向はN-84°-Eで、内側に段がある。覆土は淡褐色砂で検出面に近く、遺構でない可能性もある。

S T 137(Fig.14) 北側を擾乱004に切られ南側は調査区外に延び、床と隅1箇所のみの残存でプランもわからない。段があり、深さ35cmを測る。遺物は出土していない。

S T 138(Fig.14) S T 129に切られる。小型の長方形プランで140×64cm、深さ18cmを測る。長辺の方向はN-63°-Eで淡褐色砂を覆土とする。

S T 139(Fig.14) 112号壺棺に切られる。長方形プランで115×50cm、深さ14cmを測る。長辺の方向はN-35°-Eを測る。

S T 140(Fig.14) 摆乱に東側を切られ南側は調査区外に延びる。長方形プランになると考えられるが不明である。現存で136×30cm、深さ20cmを測る。

S T 141(Fig.15) 101号壺棺の西に隣接し、北側および上部に擾乱を受け、南側が調査区外にでる。長方形プランと考えられ、床面からの深さ45cmのピットがある。覆土中から壺41が出土した。

出土遺物 41は中期の錐形口縁の壺で口縁部外端に刻み目を施し、頸部には暗文が入る。内外面ともに横方向の研磨調整である。

S T 142(Fig.15) S T 102の東に隣接する。南は擾乱を受け南側は調査区外にでる。2段掘りで内側は長方形で78×54cmを測り、深さは全体で108cmである。

S K 143(Fig.11, 15) 大きな掘り込みで北側が調査区外にでるためプランは不明。上部は最近の擾乱を受けている。現存で最大長9.6mを測る。内側で壁が立ち、その部分の最大長5.8mを測る。床面の西端で壺棺片20、21がまとまって出土した。

出土遺物 20は肩部片で1/4からの復元径56cmを測る。21はT字型口縁で内外側を欠くため詳細は不明だが内側に張ると考えられる。20と器面の色調などは類似し、同一個体の可能性はある。

(3) 出土遺物

① 弥生土器

壺棺以外に墓壙、擾乱、上面遺構等から多くの遺物が出土している。その多くは埋葬遺構に関連する遺物と考えられよう。出土遺物のうち、特徴が固化できるものをFig.16以下に示した。遺物番号横の番号は出土した遺構番号で、遺構に伴わないものも多いが、現位置を反映するものもあると考えしめた。24から30、40は出土位置から副葬品の可能性があるもので、各遺構の項で出土状況も含めて述べた。32から44は下面遺構の覆土出土の土器で、少なくとも遺構の下限を示すと考えられる。これについても各遺構で述べた。今回は良好な試料は得られなかつたが、壺棺の覆土出土遺物はの検討の積み重ねは、日常土器との併行関係を検討する手がかりになりうると考える。以下はこれまで触れていない、上面遺構、擾乱等の出土遺物である。上面遺構では調査区に占める面積が大きいS C015、022出土のものが多い。これらの遺構の直下から14号、15号壺棺の一部が出土しており、下面遺構の上部を削平していると考えられる。また、擾乱004からは多くの弥生土器片、石剣、管玉が出土し、壺棺、木棺墓を破壊したことが分かる。

31、45から76は小型の壺で通常副葬品と考えられる。この数を考えれば失われた遺構は多く、検出

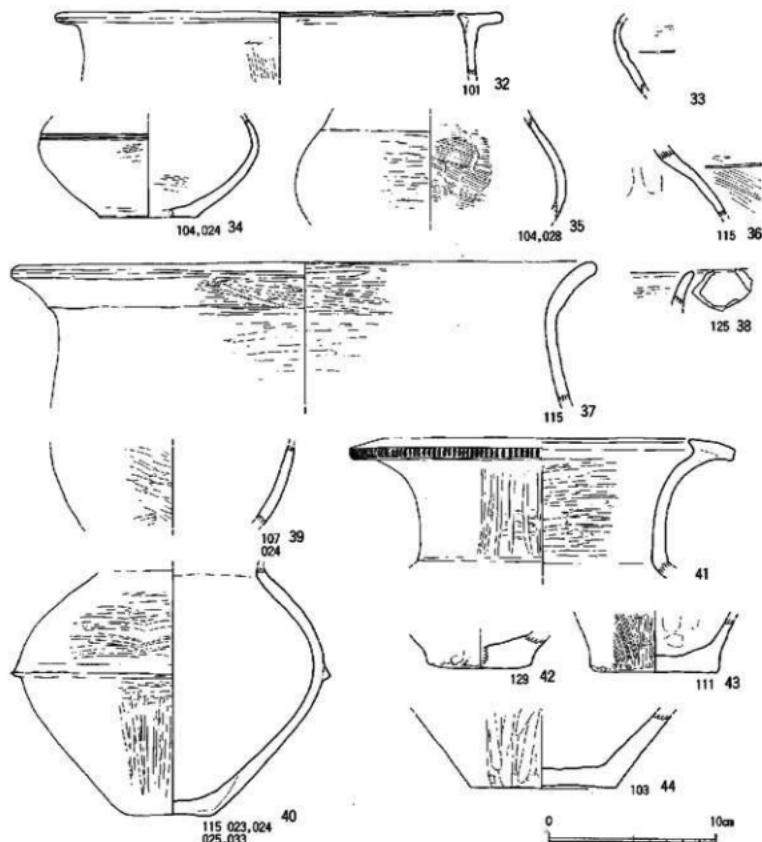


Fig.17 出土遺物実測図2(1/3)

したなかでも副葬壺をもっているもの多かったものと考えられる。31はSC015、022出土の破片が接合して胴部の約2/3、口縁部の一部が接合した。口縁部は外面肥厚し、頸部は全体に内湾する。胴部は球形で頸部との境に段を設ける。外面は平滑な横方向の研磨調整で、内面はナデ調整だが粗れている。淡黄褐色を呈し、砂粒をあまり含まない、きめ細かな胎土である。

45から49は外側肥厚しない。48は頸部の内径が強く口縁部の外反が小さく古手の形態を残す。49は撲乱004からの出土で1/3弱が残る。成形が雑で器壁に凹凸が多く擦痕が残り、内面には接合痕が見られる。頸部と肩部の境に3本の沈線を施し、肩部に山形文を深めの断面三角形の沈線で施文するのが雜である。底部裏面は削りを施す。50から53は口縁部の粘土帯の接合部外側を段にをつくる。50は口縁下に3条の浅い沈線がめぐり赤色顔料を施す。頸部には3条の併行沈線を施す。53は口縁部と頸部の境に沈線を施し、彩文しているようだがはっきりしない。丁寧な研磨調整で光沢がある。51、55はなで調整で同一個体の可能性がある。54、57から59は強く外反する口縁部をもつ。55は研磨、他はナデ

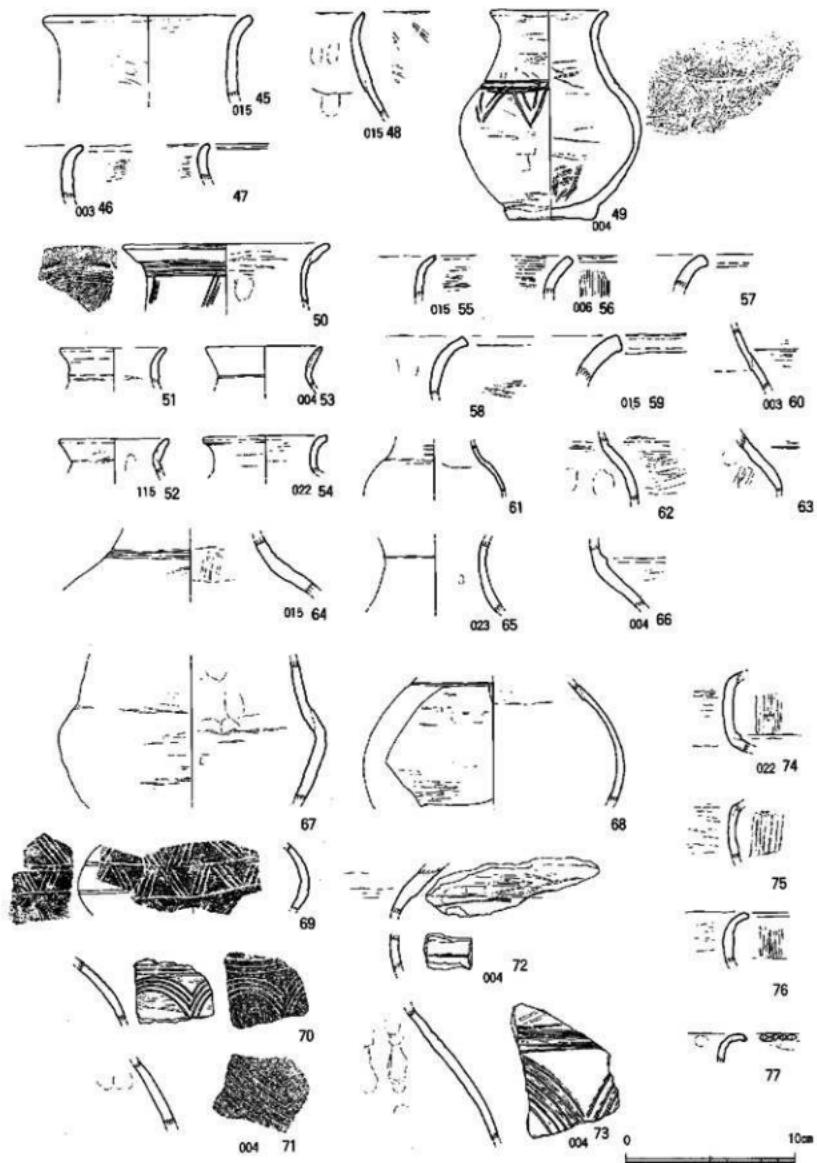


Fig.18 出土遺物実測図3(1/3)

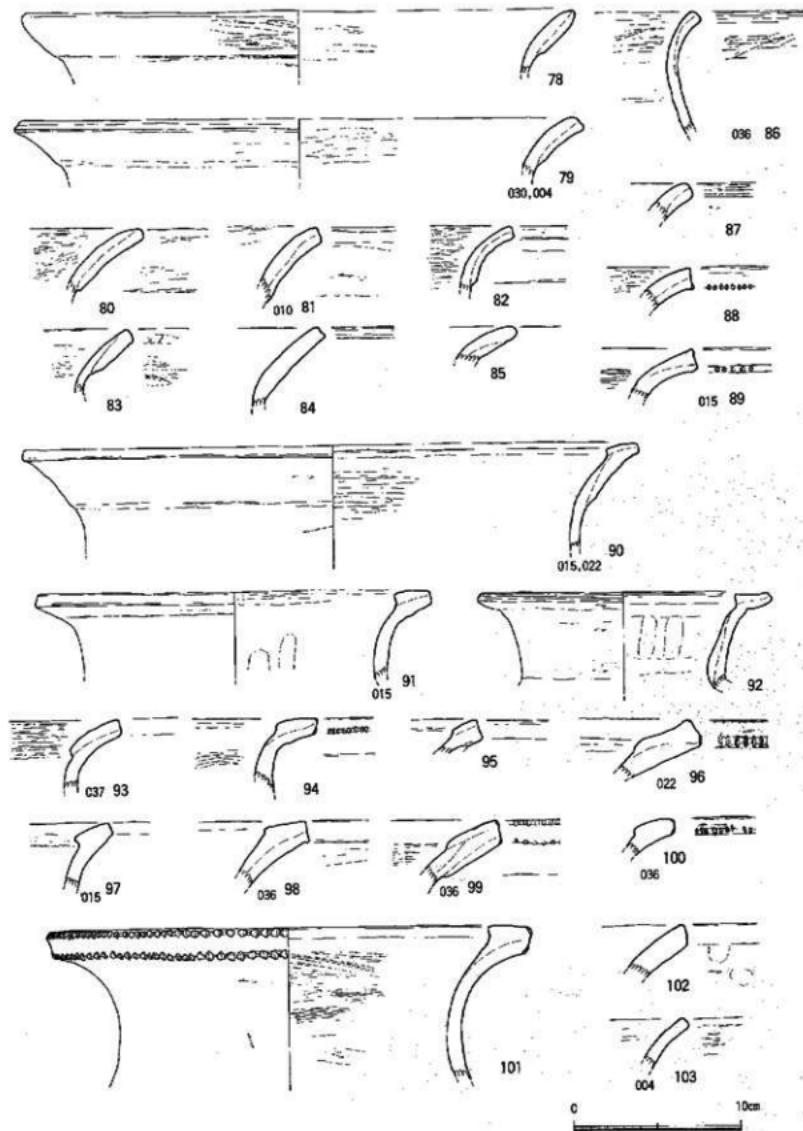


Fig. 19 出土遺物実測図4(1/3)

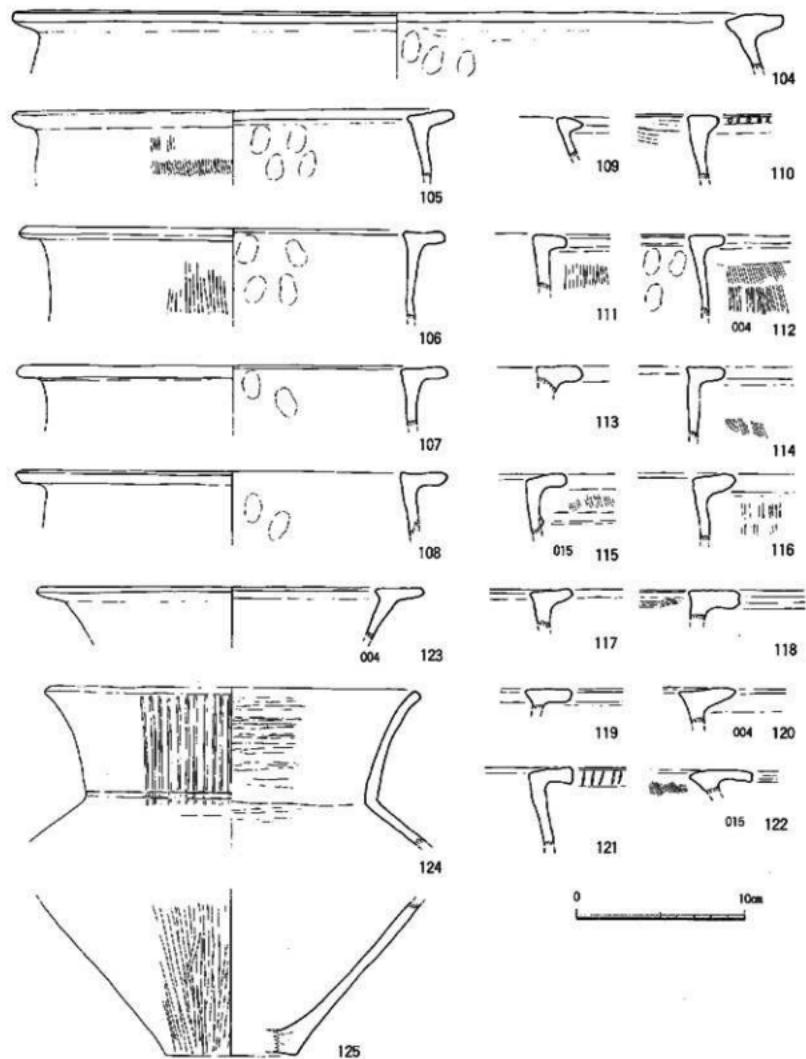


Fig. 20 出土遺物実測図5(1/3)

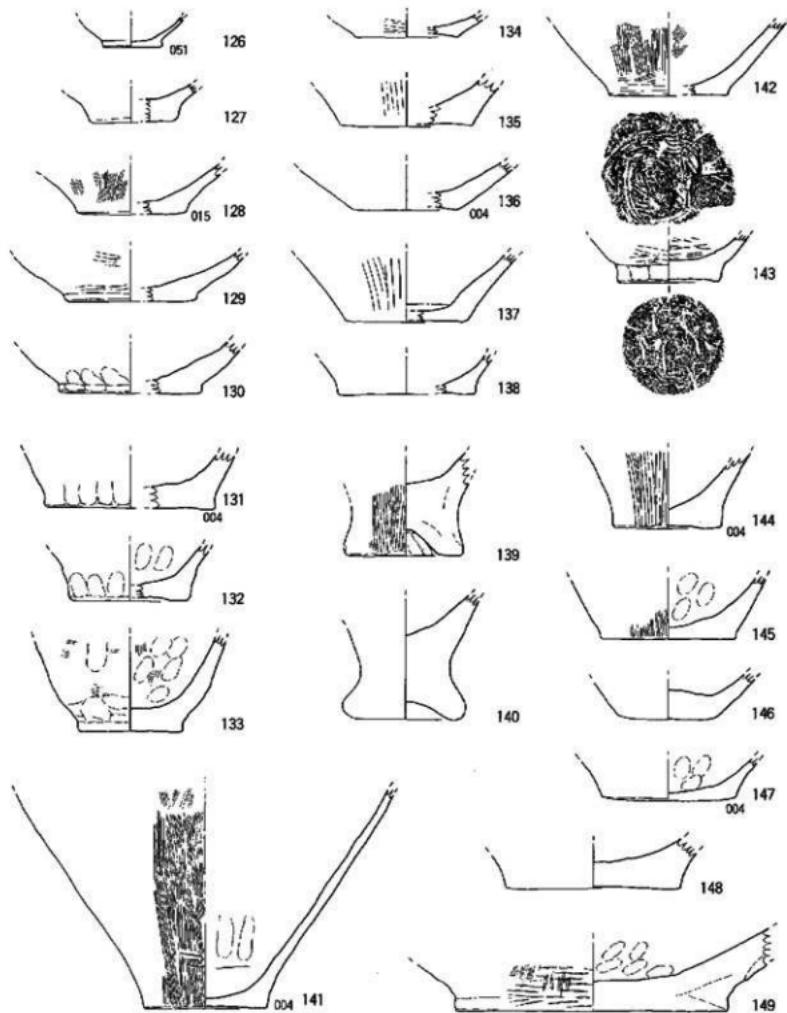


Fig. 21 出土遺物実測図6(1/3)

調整仕上げである。60から73は頸部および肩部、胸部である。61は小片で頸部に赤色顔料による3条の平行線がわずかに残る。外面は丁寧な研磨で光沢がある。62は深い沈線で段をつくりその上に浅い沈線を施す。65の口縁下の段も沈線による。67は頸部と肩部の境で粘土帯の接合をし、内外面に段がつく。成形、器面調整が粗く胎土に砂粒が多い。カクセン石を含む。なで調整で横方向の擦痕が残る。68は肩部、頸部の境に沈線がめぐり球形の胴部の上部に横方向および横方向の赤色顔料による彩文が施されるが極めて不明瞭である。外面は研磨で茶褐色、内面はなで淡茶色を呈す。69から71は沈線文を施す。69は横走する沈線間に浅い3条の併行沈線による山形文を施す。外面は研磨もしくは丁寧なでである。70は3条もしくは4条の横方向の併行沈線の下に上向きの円弧文を施す。横方向の研磨調整で赤みをおびた茶褐色を呈す。71は浅い6条の沈線で山形文を描く。研磨調整で淡灰色を呈す。いずれも胎土に砂粒を含む。72、73は同一個体と考えられる。頸部に横方向の平行線を赤色の彩文を施し、頸部と肩部には3条の沈線の両側に、肩部には6条の重弧文の上側に彩文を施す。外面は粗いへらなで状の研磨を施し淡黄褐色を呈す。内面は淡黄褐色でなで調整を施す。胎土は細かいが砂粒を含む。74から76は直線的に立ち上がる頸部で口縁部が急に外反する。頸部外面は縦方向の研磨で75は暗文を施す。56、77は壺で56は内外面刷毛目調整、77は外反する口縁部に刻み目を施す。なで調整で淡灰褐色を呈し成形は雑である。

78から103は大型の壺の口縁部で棺として使用されたものがほとんどと考えられる。78から85は外面を肥厚する古手の壺である。器面が粗れており調整ははっきりしないが研磨もしくはなでである。78、83は外面の肥厚が厚く丸みを持つ。80、85は薄い肥厚で壺底として取り上げた4基に近い。79、81、82、84は口唇部を横なでにより面取し、79、84は外端が鋭い。86、87は夜白式系で赤色顔料が残る。88、89は外反する口縁部端を強くなで、下端に細かな刻み目を入れる。90から101は内面を肥厚し段を持つ。そのうち90、99には外面にも段がある。90は口径36cmを測り、外面横なで、内面研磨調整を施す。91、92、101は中壺の壺でなで調整を施し、101は金海式壺底の形態である。

104から122は中期の壺で前半のものが多い。外面と内面口縁部付近を刷毛目調整し、内面をなで調整するものが大半である。109から111は城ノ越式でこの中では古手で、122などが後半のもので器面あれのため不明確だが赤色顔料を塗っていると考えられる。123、124は壺で錫型、広口縁をなす。103は広口壺の口縁と思われる。いずれも棺もしくは祭祀土器として使用されていたものと考えられる。

126から149は底部である。126は小型壺で細かな胎土で丁寧な研磨で茶褐色に光沢があり、53と同一個体の可能性がある。127から130はやはり壺、131から133は壺で前期のものと考えられる。134から137、145、146は中期の壺で研磨を施す。139、140は上げ底で厚い前期末のものである。141、144は中期の壺で全面に刷毛目を施す。143は壺で外面はなで調整で内面に条痕を残し底は削りを施す。147は壺で底がやや丸味を持つ。148は前期の大型壺、149は金海式壺底であろう。

②繩文土器

層序の項で述べたように下面の造構を検出した灰白色砂層中より少量ではあるが繩文土器が出上した。150は粗製土器で外面は横方向の条痕、内面はなでである。151から154は外面条痕状の粗い調整、内面はなでで擦痕が残る。器面に気泡状のくぼみが多い。3、4mmの大砂粒は少量含むが細かな砂粒は少なく、淡茶色を呈す。155は内外面を研磨する清製品で外面黄褐色、内面暗褐色から黒褐色を呈す。156は断面台形の底でなで調整を施す。157はなで調整で砂粒を多く含み淡灰色を呈す。158は底がやや丸みをおびる。外面は縦方向の条痕状の粗い調整で外面茶褐色、内面灰褐色を呈す。151に近く同一個体か。

③石器

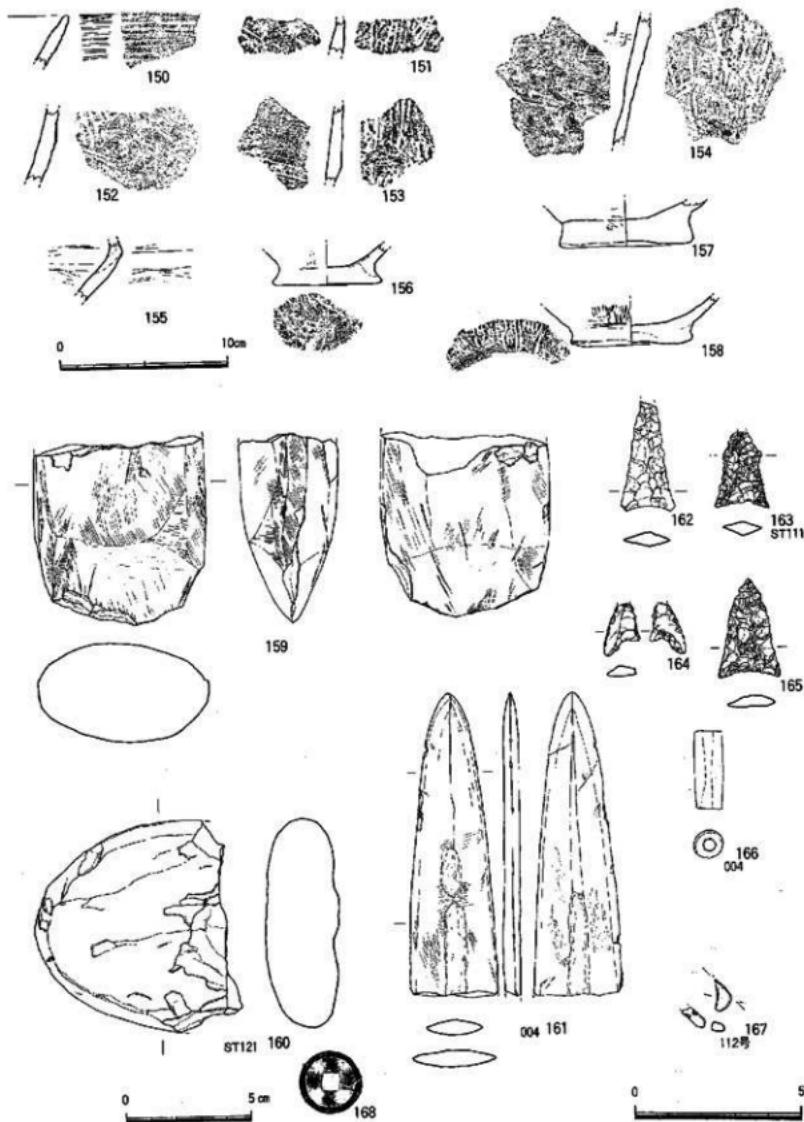


Fig. 22 出土遺物測量圖7(1/3,2/3)

159は玄武岩製の磨製石斧で丁寧に成形し表面が平滑である。整形時の擦痕が明瞭に残る。残存長75mm、幅68mm、厚さ40mm、重さ304gを測る。表採品である。161、166は攪乱004からの出土で副葬品であろう。161は粘板岩製の磨製石剣である。先端から8cmは鏽があり断面菱形を呈し刃部は研ぎが鋭い。現存長132mm、幅36mm、厚さ6mmを測る。166は碧玉製の管玉で暗い青みがかった緑色を呈し、長さ23mm、幅9mm、孔径4mm、重さ2.8gを測る。160はS T121出土の滑石、167は12号壺棺で出土した碧玉製勾玉で先に述べた。162から165は石鎚で163はS T111出土、他は上面遺構出土と表採品である。163から165は黒曜石製、162は安山岩製である。164は主剥離面を残す薄片鎚である。162は長さ33mm、幅16mm、厚さ3.2mm、重さ1.6gを測る。164は長さ16.5mm、幅11mm、厚さ3.3mm、重さ0.38gを測る。165は長さ29mm、幅18.2mm、厚さ3.4mm、重さ1.5gを測る。168は銅鏡「寛永通寶」で表採品である。

(4) 小結

縄文時代については、155や156が晩期のものと考えられる。西新町遺跡でも晩期前半の遺物が出土しており、この時期に砂丘上で何らかの活動があったことを窺わせるが、遺構は確認されていない。今回も遺物量は少なく、それも弥生時代の遺構の下から出土であり、今後の調査ではこの時期を考慮に入れて進める必要がある。

弥生時代の遺構は、壺棺14基、土墳26基を検出した。報告で触れたように土墳のほとんどが土積墓もしくは木棺墓と考えられる。墓域および墓地の構成は、調査区が限られ、攪乱で大きく削除されているため部分的にしか分からず。以下、煩雑ではあるが、時期ごとに変遷をたどっておきたい。

遺物から時期が明らかな遺構は、壺棺と副葬壺を伴った土墳に限られる。その中で古手としてあげられるのがFig. 8に示した106、110、113、114号壺棺の下壺である。113号は夜臼系の壺に板付系の壺が上壺として覆い、板付I式並行と考えられる。106号、110号は並んで出土しており同時性が高い。114はなで肩で新しい傾向があるが、ほぼ同時期と考えられる。板付I式からIIa式の範囲と考える。これらの壺棺より古いものとしては、106号に切られるS T129、113号に切られるST133がある。遺物はST129の底部片のみで時期は決めがたいが、壺棺を大きくさかのばるものではなかろう。次に、古手の副葬土器を持つものにST102、111、124、125がある。小壺は時期が決め難いが、板付I式からIIa式の古手に位置付けられよう。遺構の切り合いで他の遺構に切られ矛盾はない。また、ST132はST124に切られ、古くなる。次にST120が遺構上に散らばる壺の口縁部から板付IIb式段階の遺構と考えられる。また、これに切られST124を切るST117も板付II式の時期と推定できよう。次に続く遺構は金海式壺棺107、122、115号で、その中でも115号壺棺が古式である。この金海式壺棺を切る遺構にST127、118があり、ST127と方向を同じくするST126、130も近い時期と推定される。以上の遺構は、例外はあるが基本的に砂丘の方向に沿った東西方向を向いている。次に続く弥生中期では105、109号壺棺が前半、103、108、101が後半のもので調査区の東側に分布する。また、南北方向でそれまでの段階と異にする。

さらに、遺構に伴わない遺物を見ると、夜臼式の壺棺、板付I式からII式の壺棺と考えられる破片や小壺が多く出土している。のことから、攪乱された特に東側にこの時期の墓域が広がり、少なくともST102付近までは調査区中央部で見た状況が続いている可能性がある。また、博多区下月隈天神森遺跡3次調査のようにほとんどの土墳に副葬壺が伴う状況が想定される。これに続く弥生中期の前半から後半の小型の壺の破片も多く、小型棺が分布していたと考えられる。壺棺片は見られなかった。

限られた範囲ではあるが、弥生時代初頭から中期までの墓地の一端を調査することができた。南東側には砂丘の高まりが残っており墓域がひろがると考えられる。倒置棺、細かな遺物の位置づけ、他の遺跡との比較など検討すべき問題は多いが今後の課題としたい。



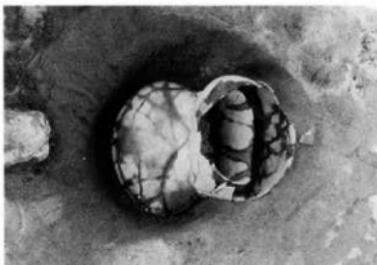
Ph.1 下面調査区東半(西から)



Ph.2 調査区西半(東から)



Ph.3 下面遺構(西から)



Ph.7 106号壺棺(南から)



Ph.4 101号壺棺(東から)



Ph.8 107号壺棺(西から)



Ph.5 103号壺棺(北から)



Ph.9 108号壺棺(西から)



Ph.6 105号壺棺(北から)



Ph.10 109号壺棺(東から)



Ph.11 106,110号壺棺(北から)



Ph.15 115号壺棺(東から)



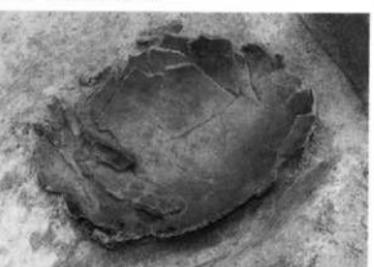
Ph.12 112号壺棺(北から)



Ph.16 115号壺棺(北から)



Ph.13 113号壺棺(西から)



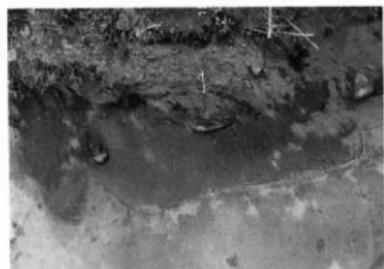
Ph.17 115号壺棺下壺(南東から)



Ph.14 114号壺棺(北から)



Ph.18 114,115号壺棺位置関係(北から)



Ph.19 ST102検出状況(北から)



Ph.23 ST117(北から)



Ph.20 ST102遺物出土状況(北から)



Ph.24 ST120(西から)



Ph.21 ST102(北から)



Ph.25 ST121(北から)



Ph.22 ST116(北から)



Ph.26 ST124(北から)



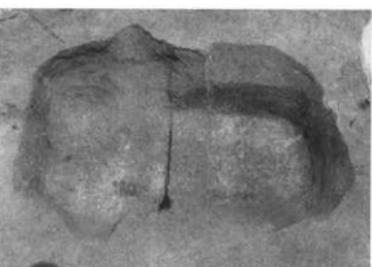
Ph.27 ST124遺物出土状況(東から)



Ph.31 ST129(南から)



Ph.28 ST125遺物出土状況(東から)



Ph.32 ST130(南から)



Ph.29 ST125(北から)



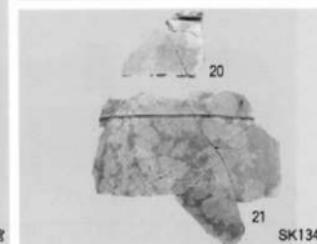
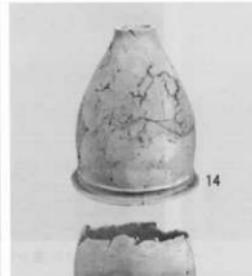
Ph.33 ST134,136(東から)



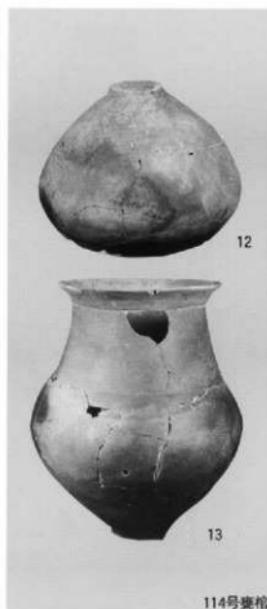
Ph.30 ST127(南から)



Ph.34 SK143(東から)



Ph.35 出土遗物 1



106号墓棺

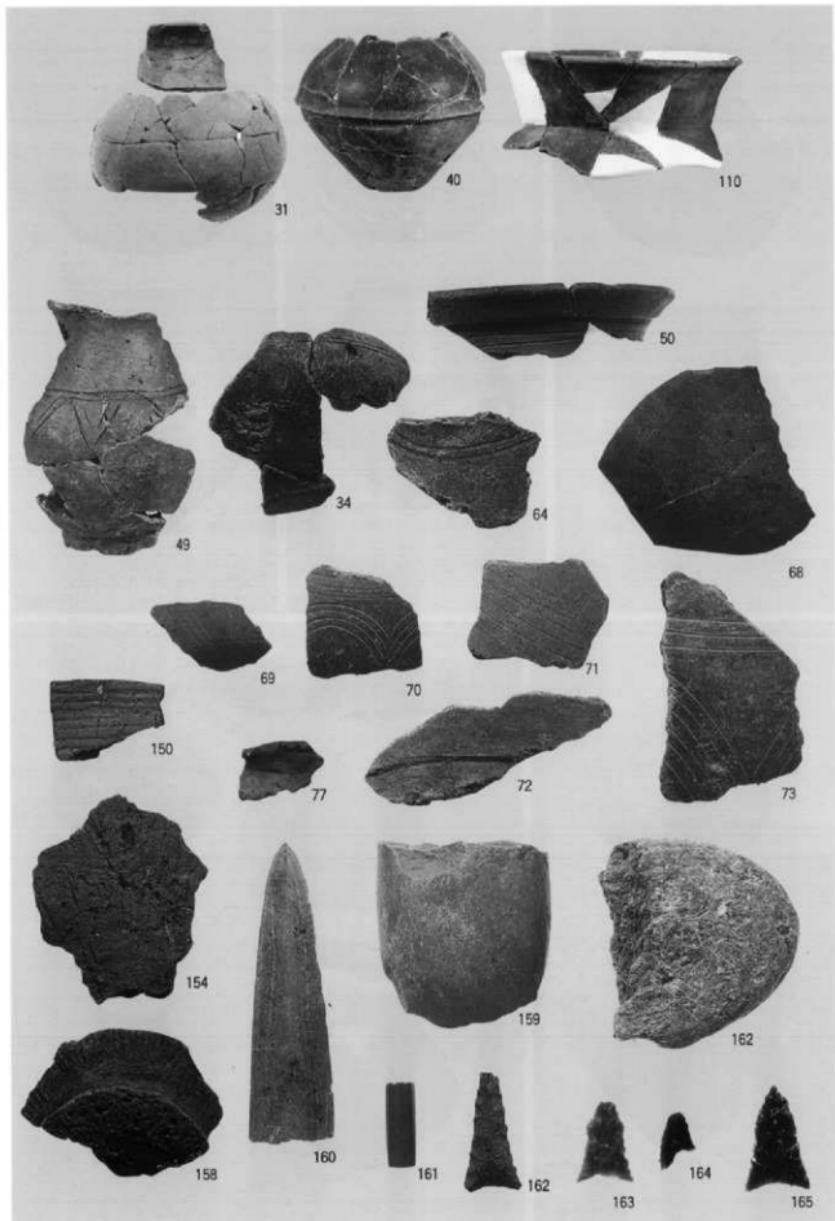
110号墓棺

114号墓棺



113号墓棺

Ph.36 出土遗物 2



Ph.37 出土遺物 3

4) 古墳時代以降の遺構と遺物

(1) 上面検出遺構の概要

調査の概要のところで述べたように、古墳時代以降の遺構を検出したのは現地表下40~60cm前後の茶褐色砂または黄褐色砂の面である（これを「上面」としている）。しかし、調査区中央にのみこれが良好に残っていた他は（Fig.23）、調査区東側ではほとんど残っておらず、反転後の西側では調査区南端にわずかに残っていた程度であった。

遺構は、主に褐色から暗褐色の覆土を呈するが、その底面については、下部の弥生時代包含層もにぶい濁った黄褐色砂を呈するため、判然としない場合が少なくなく、土層ベルトでの確認や、遺物の出土状態（特に下面の遺物が出てきてしまう場合があった）によって、結果的に掘り過ぎと判断される場合があった。下面の遺構は弥生前・中期であるが、遺物からは弥生後期前半～中頃のものが存在せず、弥生後期後半以降のものが上面以降の覆土中より出土している。ただし時期の明確な遺構は古墳初頭以降のものである。古墳初頭（前期）～中期初頭（須恵器出現以前）の遺構が主体であるが、遺構上面や上部包含層からは古墳中期・後期および古代の遺物も出土している。検出された遺構のうちでも、調査区層序（前述）2層に近い明黄褐色を呈するものは古代以降のものと見られる。また、遺構の清掃中や上面から下面への掘り下げ中には、「包含層」中から古墳前期の遺物を少なく



Ph.36 上面住居群検出状況(西から)

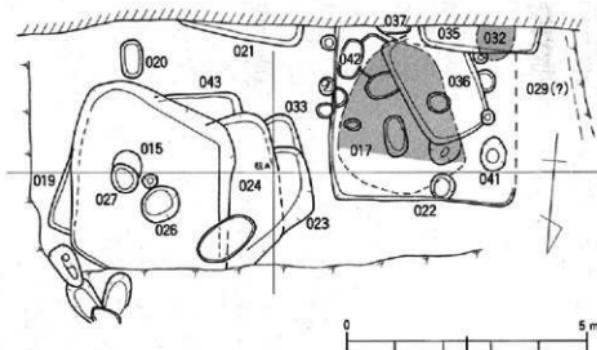


Fig.23 上面遺構集中部平面図 (S=1/100)

ない量で検出しておらず、層位学的には存在したはずの遺構を確認できなかつたものがいくつあると考えられる。得に製塙上器の破片はいきなり出土することが多く、覆土の不明瞭な掘り込みがいくつかあったと推定される。砂丘の遺跡の調査にはよくあることではあるが、他の確認できた遺構も、前述したように底面が不明確であったり、範囲も分かりづらいもの多かった。加えて、砂地であるために検出や清掃によって消えてしまつたり掘り過ぎてしまう場合もあった。以下の各遺構の記述や図面はこのあたりの事情をかんがみて報告している部分があることをお断りしておきたい。

(2) I 区の遺構

反転前の調査区東側～中央を I 区としているが、上面の遺構は調査区中央に良好に遺存していた (Fig.23)。検出遺構は古墳前・中期の竪穴住居 4 棟以上を主体とし、同時期の土坑、性格不明遺構 (SX)、製塙関連遺構などである。以下、主な遺構について報告する。

・ SX017 (Fig.24, Ph.39~41)

調査区中央で検出した範囲が不明確な遺構である。後述する SC022 の埋没過程に構築された遺構であり、南北 2.4 m 以上 × 東西 2.7 m、深さ 40 cm を測る擂鉢状の土坑であるが、北側が不明確であったほか、南側上部は本来さらに広がる可能性がある（調査区南壁土層による。Fig.27 右側の 3、4 層）。土器群は上層から下層にかけて連続して出土した。上下 2 群の廃棄に別れる可能性があるが、様式的には同じ段階のものである。覆土は焼けたようなやや赤っぽい黄褐色砂の混入の多い褐色砂質土であ

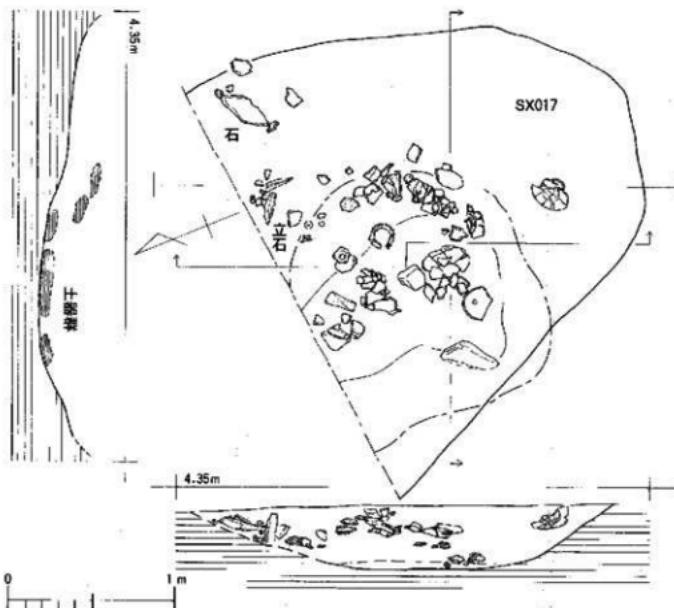


Fig.24 SX017平面図・断面図 (S=1/30)

るが、製塩土器の破片も多く出土しているので、当時の生活面で営まれた製塩作業に由来する覆土であろうか。土坑内には土器の他に大きいものは人頭大の礫も出土しているが、土坑東壁面のものは立石状を呈するなど意図的に据え置かれた感のあるものもあり、手培形土器の出土など祭祀的な色彩の強い遺物も出土するので、「集落内祭祀」の小磐座的な施設かもしれないが断定できない。出土土器には、在来系の長胴壺、布留系壺、伝統的V様式系の高壺・鉢、手培形土器、製塩土器などがあり、これらから造構の時期は、古墳時代前期前半（久住編年ⅡC期）^{*}となる（以下、弥生時代終末から古墳時代前期中頃までの時期の記述、土器の系統分類などは、久住猛雄1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』X IX、庄内式土器研究会、大阪、によることとする）。

・SC022上部の造構（Fig. 25, Ph. 42・43）

SC022の上部には、SX017の他に造構プランの不明瞭な一括土器廃棄がいくつか存在した。後述する製塩土器廃棄造構のSK032もその一つである。SX025は、SC022東側上部に一括廃棄された土器群である。東側はSC023の上部にもかかっている。B系統（伝統的V様式系）の壺などが出土している。SX017よりは前の土器群である。ⅡC期。SX031はSC022西側上部に廃棄された土器群。SX017を切っている可能性がある。SX017と同様に人頭大の角礫が配置されたように出土しており（Ph.43）、同様な造構か。ただし土器量は少ない。B系統の壺・高壺などが出土したⅡC期。

・SC022（Fig. 26, Ph. 44・45）

調査区中央、SX017の下部で検出した造構である。東西3.9m、南北3.6mであるが、おそらく正方形の竪穴住居となるだろう。深さは20cm強を確認したが、調査区南壁土層の観察では（Fig.27）40cm前後の掘り込みが考えられ、掘り込み上層に相当するレベルからも遺物が出土している（上層遺物、Ph.44）。これらの上層遺物は、SX017などと変わらない様相である。住居址プラン確認以下のレベルの遺物（中下層遺物）が（Ph.45）、住居址の廃棄直後の一括土器群であり、造構の時期を決める根拠となる。中下層の遺物は、ⅡB期からⅡC期の過渡的な様相を呈する。中下層・上層ともに、出土



Ph.39 SX017上層出土状況(北から)



Ph.40 SX017上層出土状況近景(西から)



Ph.41 SX017中下層出土状況(西から)

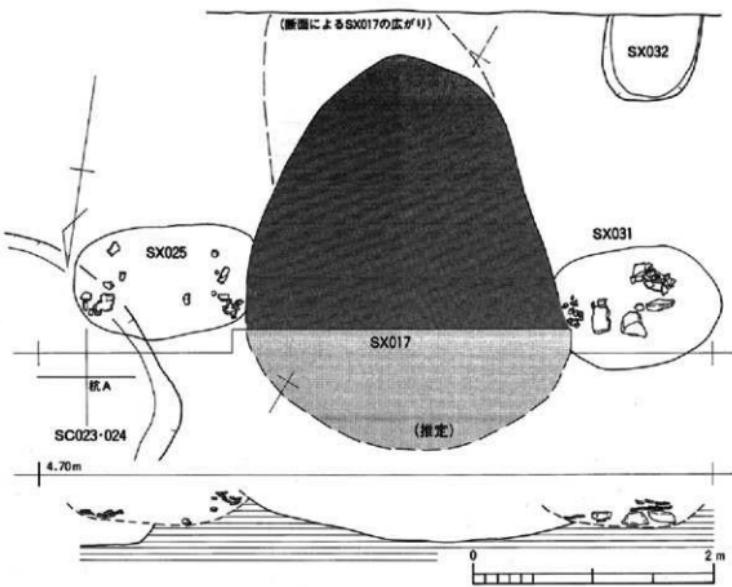


Fig.25 SX017-025-031-032平面図・断面図 (S = 1/40)



Ph.42 SX017(中央)、SX031(手前)、SC022検出状況(西から)

Ph.43 SX031出土状況(南から)

土器の系統は、在来系（A系統）・伝統的V様式（B系統）・布留系（D系統）が交錯して共存している。上層遺物はⅡC期である。床面において、いくつかの柱穴や土坑と、次に記述するSC036を検出した。また、SC022の西壁は不明瞭で、別の住居址（SC029？）が存在すると考え反転後の確認に託したが、擾乱等で残りが悪いためか結局不明なままでなっている。なお、調査区南壁寄りのSC035はSC022を切るもので、プランは不明瞭であったが、遺構037も土層からは同一のものと考え



Ph.44 SC022上層土器出土状況(東から)

Ph.45 SC022-036発掘・下層土器出土状況(西から)

られる。また、SC022東壁を切る形の三つの柱穴は、黄褐色の覆土であり、上面から古代の遺物が検出されていることもあり、奈良時代頃の建物が存在した可能性がある。そのほか、住居址中央北寄り

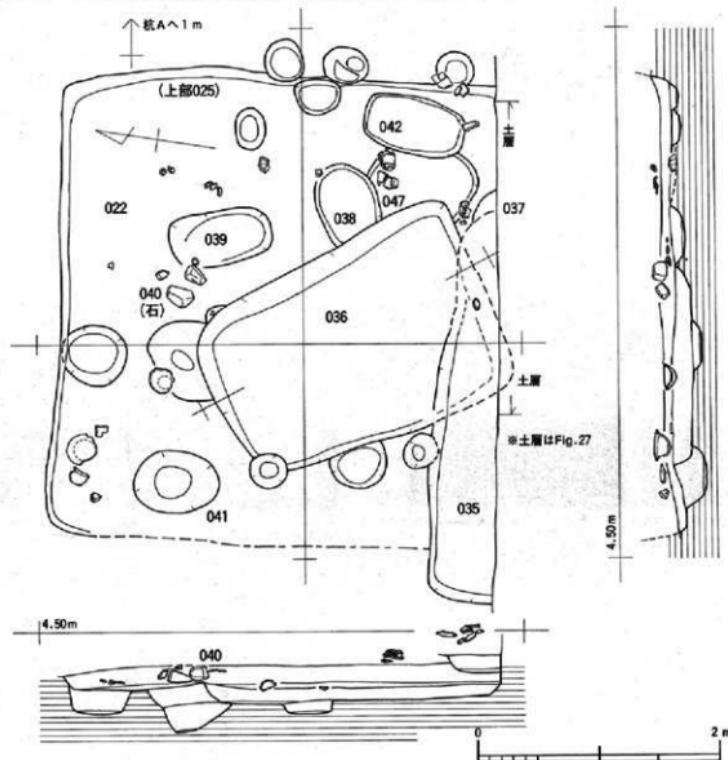


Fig.26 SC022-036他平面図・断面図 (S=1/40)

床面上（図では浮いて見えるように見えるが、前述の理由により実際は床直の可能性が高い）には人頭大の角櫛が配置されたようになっており（SX040）、SX031と同様の施設と考えられる。また、覆土中からは製塙土器の破片も少くない量で出土している。

・SC036 (Fig.27左上、Ph.45)

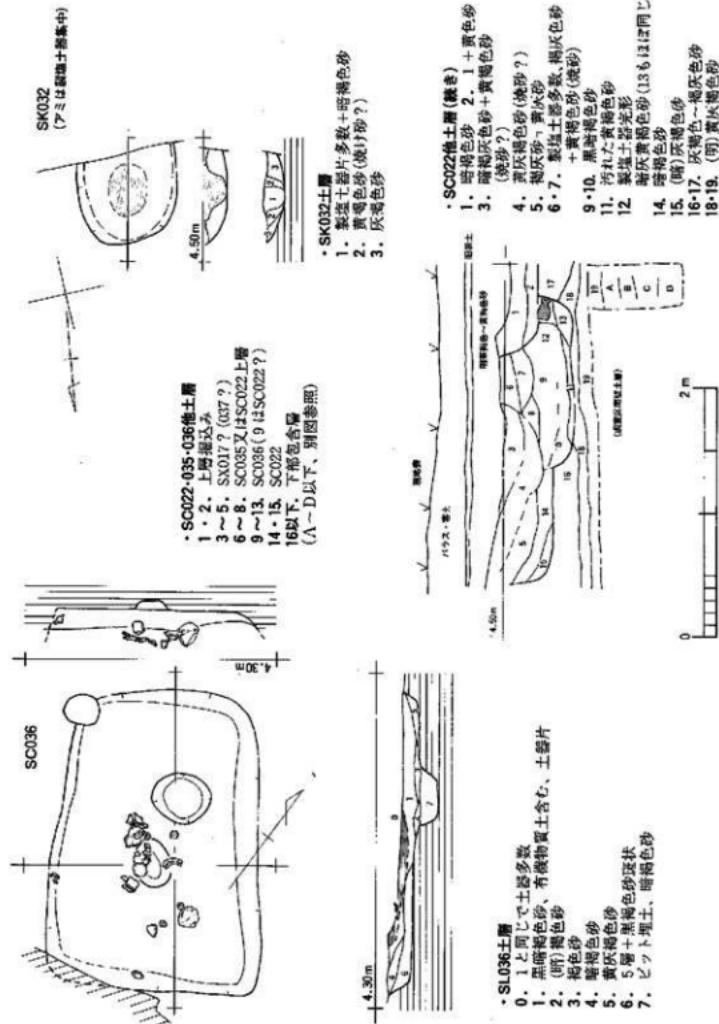


Fig. 27 SC036・SC032平図・断面図・断面図・断面図 (S=1/40)



Ph.46 SC032製埴土器出土状況(北から)



Ph.47 SC015上層土器出土状況(西から)

SC022の床面中央で検出した遺構である。土層の観察ではSC022下層の覆土と区別困難であり、SC022を切り込んでいるようにも見えたが、検出の順番や上部の遺物の出方から、SC036の方が古いと判断される。遺構は、 $2.5m \times 1.6m$ の長方形を呈し、SC022の床面からの深さは20cm前後である。住居址というよりは土坑的だが、底面が平坦であり、土器のセット関係も他の住居址の出方に類似しているので、住居址の一部のやや深い部分（あるいはベッドを持つ竪穴住居の中央部分か？）を検出した可

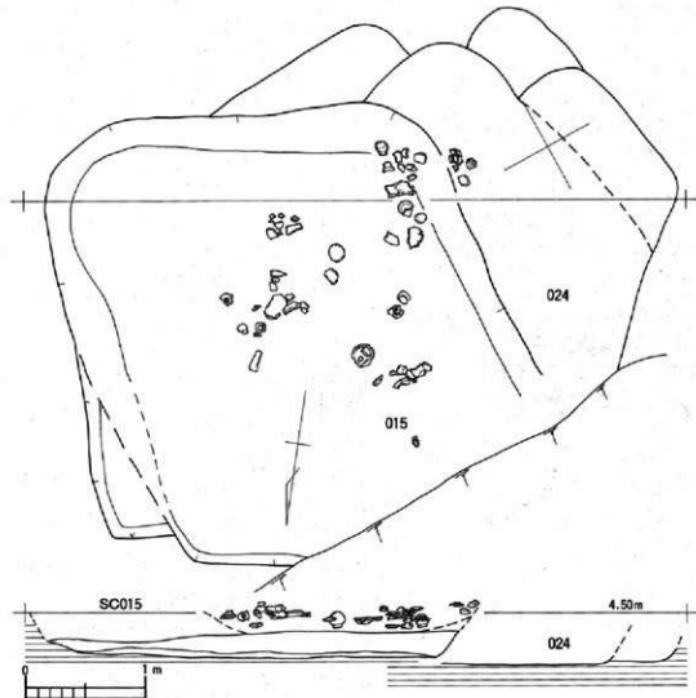


Fig.28 SC015上層土器出土状況図 (S=1/40)



Ph.48 SC015上層検出状況(西から)

Ph.49 SC015先端・下層土器出土状況(西から)

能性がある。遺物は、SC022直下の上層中央に集中している。II B期のA・B・D各系統の土器が出土しているほか、製塩土器がやまとまって出土した。調査区南壁から出土したほぼ完形の製塩土器は(Fig. 27右下の12層)、この遺構に帰属すると考えられる。また機能は不明だが、遺構中央北寄り底面に柱穴が一つ存在する。

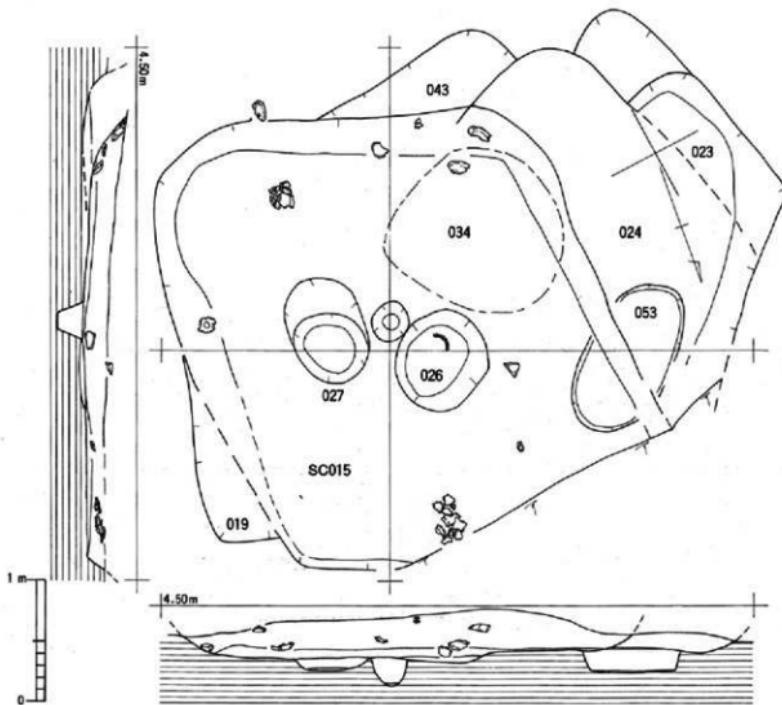


Fig.29 SC015中下層出土状況・平面図・断面図(S=1/40)



Ph.50 SC015南壁下層出土状況(北から)



Ph.51 SC024外堀状況(西から)

・SK032 (Fig.27右上、Ph.46および巻頭図版)

SC022上部で検出した遺構。製塩土器の小破片が集中して出土した。焼けたような砂質土の覆土を含み、製塩そのものに関連する遺構(炉址)の可能性がある。ただし、そのプランは小規模で、製塩自体の操業規模を反映するとは早計であろうか。南北80cm以上、東西80cm前後、深さ20cm前後を測る遺構である。

・SC015 (Fig.28・29、Ph.47~50)

調査区中央東寄りで検出した。住居址の平面プランの全体を確認する前に、多量の土器群をまとめて検出した (Ph.48、Fig.28)。これらの土器群は住居址廃絶後ある程度埋没が進んでから一括発見されたもので、住居址の時期を直接示すものではない。これらを除きさらに掘り下げて住居址を全掘

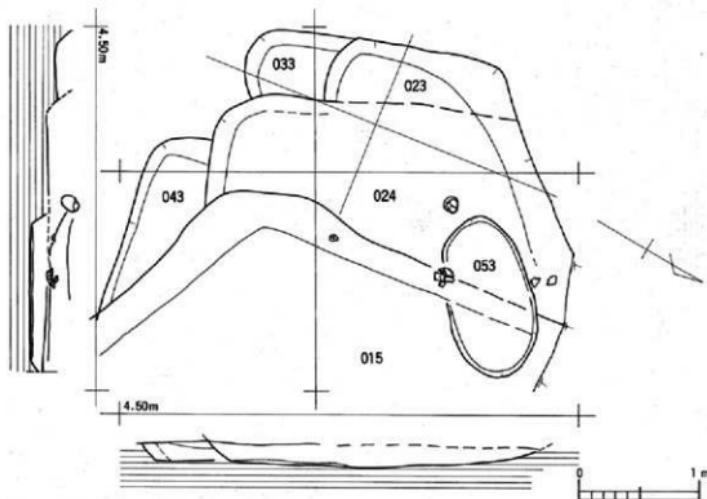


Fig.30 SC024他平面図・断面図 (S=1/30)

した (Fig. 29, Ph. 49)。プランはやや歪んだ方形を呈し、南北4.0m前後、東西3.4m前後を測り、確認面から床面までの深さは40cm弱である。覆土の中・下層から散漫に遺物が出土したが、住居址廃絶からあまり時を経ない頃の廃棄とみられ、住居址の時期を示すとみられる。床面では中央付近に柱穴や浅い土坑を検出した。なおSX034としたものは、「下部の弥生時代壺（壺）」の壺方の落ち込みを誤って掘ったものとみられる。SC015は、SC(SX)019,023,024,043などのより古い住居址などの遺構を切っており、そのためか覆土中にやや古いと判断される土器もいくつか含んでいる。上層土器群の時期は、ⅢB期（古墳時代前期末頃。重藤輝行・西健一郎1995「埋葬施設にみる古墳時代北部九州の地域性と階層性」『日本考古学』第2号、日本考古学教会、東京、の編年の「ⅢA期」に相当する）。また、柳田康雄1991「土師器の編年 九州」「古墳時代の研究」六、雄山閣、東京、の「Ⅲa式」の前半部分に相当するもの）であり、布留式新相併行の小型丸底壺をはじめとする良好なセット関係を示している。中・下層の上器群の時期はやや古く、ⅢA期（前掲・久住1999参照）に相当すると考えられる。覆土中には、日常土器に加えて製塩土器の破片も少なくない量で出土している。この時期（ⅢB期）まで製塩を行っている可能性があるが、製塩土器の型式がほとんど変化していないので、前代の混入である可能性も否定できず、今後の検討が必要である。

• SC015に切られる遺構 (Fig. 30, Ph. 51)

前述したように、SC015はいくつかの遺構を切っている。SC024はSC015の西側で確認で構で、南北3m前後の住居址である。SK053（番号重複）はこの底面から検出された。古墳前期初頭（ⅡA期）のA・B・D系統の上器が出土している。SC024の西側は不明確であったが、別の遺構SC023と重複しているようである。SC023からは弥生時代後葉の壺などが出土している。SC033,019,043,033などは、古墳前期初頭～前半の住居址ないし土坑とみられるが、残存度が少なく、遺物も少なく詳細不明である。

• I区東半の遺構 (Fig. 4)

この範囲は擾乱が多く、古墳時代以降の遺構面の残りが悪く、確実な古墳時代（以降）の遺構はない。しかし、SX003は古墳時代前期中頃（ⅢA期）の遺物をまとめて出土し、本来は同時期の竪穴住居などの遺構が存在したものとみられるが、その可能性がある。同様にSX004からもⅡA期前後のB系統の上器が出土し、その時期の遺構を破壊した擾乱の可能性がある。

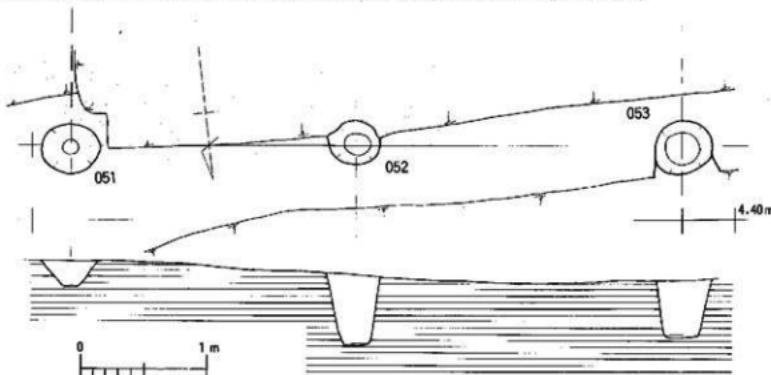


Fig. 31 SP051~053平面図・断面図 (S = 1/40)

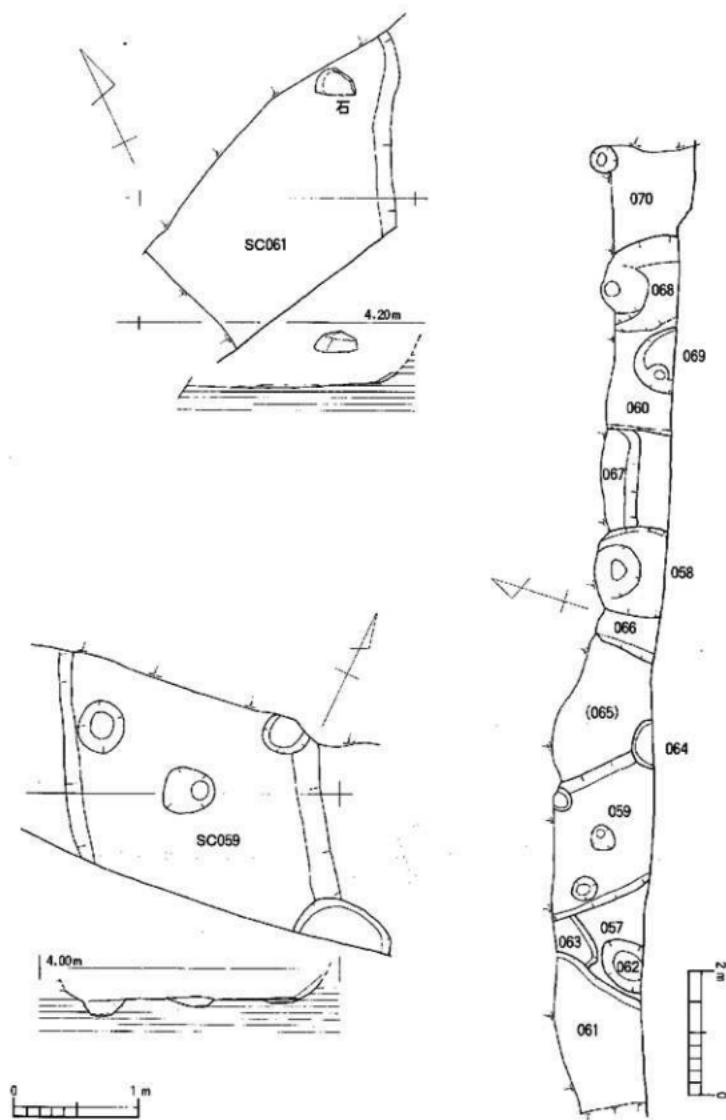


Fig. 32 II区上面造構分布図 ($S=1/80$)、SC061-059(左、 $S=1/40$)

(3) II区の遺構

ここまで記述した調査区中央の主要な遺構の他に、調査区西半(II区)等にも若干の遺構が検出された。以下それらについて記述する。

• SB01 (Fig. 31)

II区北東側で検出された柱穴列である。長さ5.3mを測り、各柱穴の深さは20~50cm前後である。調査区北側は鉄道敷による擾乱、南側のII区中央は東西に大きな擾乱があるので、この柱穴列がどちらに折り返すのか不明だが、覆土の色や質から古墳時代前期の遺構と考えられ、おそらく倉庫などの建物を構成する柱穴の一部であろう。遺物は出土していない。

• II区南側の遺構 (Fig. 32)

かろうじて残ったII区南側の遺構は、いずれも残りが悪く、同時に遺構密度自体は濃密であったため、それぞれの遺構の規模やプラン、性格がよく分からなかったものが多い。遺物も掘り下げながら確認している最中で出土したものが多く、各遺構に確実に伴うものは少ない。

SC061 (Fig. 32左上)は、調査区西端で確認した遺構で、少なくとも一辺が2mはあると予想されるもので、おそらく住居址であろう。遺物は少なく、床面よりかなり浮いた状態で、平坦な面を持つ35×20cmの台石状の礫を検出している。SC059 (Fig. 32左下)は、SC061の東側で検出した遺構で、東西2m、南北2.5m前後の住居址ないし住居址の一部である。SC059とSC061にはさまたたSC057は、あるいはSC059と同一

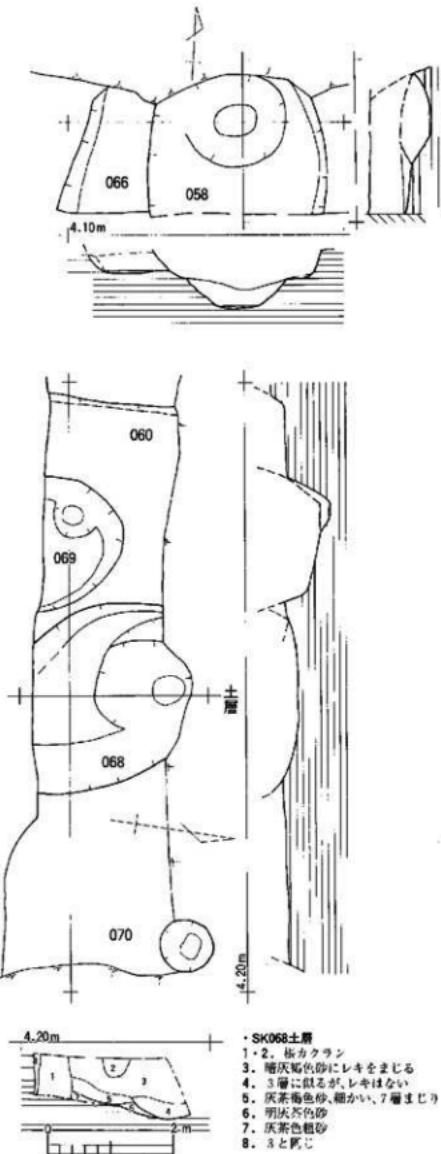


Fig. 33 SK058-068他平面図・断面図 (S=1/40)

の可能性があり、ⅢB期の小型器台などが出土している。造構プランや規模の不明な、SC (SX) 070, 060, 066, 067なども住居址の可能性があるが、遺物も少なく詳細は不明である。SK058は径1.5m前後の土坑で、深さ50cm前後であるが、時期は不詳である。覆土から古墳時代と推察する。SK068は径1.4m程度の土坑で、深さは浅く20cmぐらいである。時期は覆土からおそらく古墳時代。SK069は径1.1m程度の土坑で、深さは40cm前後である。やはり覆土から古墳時代か。

(4) 出土遺物

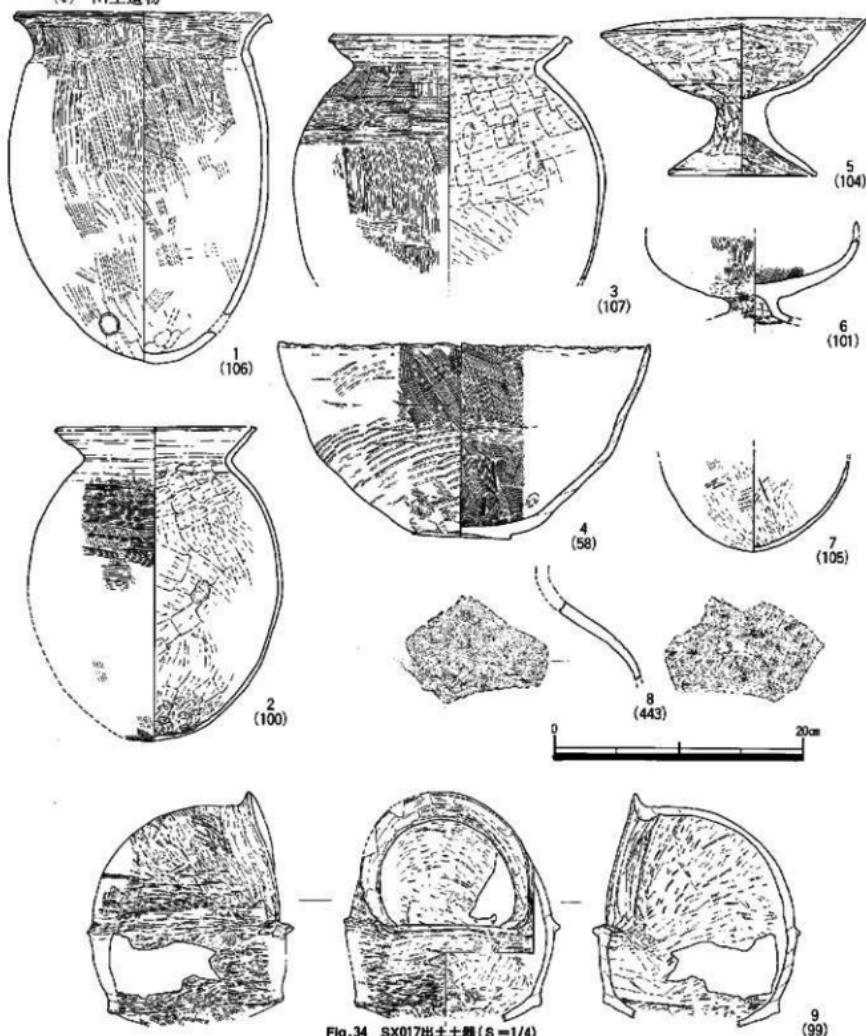


Fig.34 SX017出土土器 (S-1/4)



上面では、古墳時代前期初頭から中期初頭（須恵器出現以前）にかけての土器を主とする多量の遺物が出土した。また一部、弥生後期後葉から終末の土器も出土している。また古墳中期・後期・奈良時代の遺物も若干検出した。以下、これらもあわせて報告する。なお、弥生終末から古墳前期の土器の記述にあたっては、編年・分類については前述のように、久住猛雄1999によるものとする（久住編年）。なお久住編年のⅢA期について、重藤輝行1995の編年（前掲）を援用するが、その使用にあたり、重藤の「ⅢA・ⅢB期」が、久住編年のⅢA期に後続するものであるので、これらを「ⅢB・ⅢC期」と読み替える。なお、今回の報告では紙面上の都合により、一つ一つの土器について、法量・調整・胎土・焼成などの各観察項目に関する詳しい記述ができなかった（法量・調整については実測図から読み取って頂きたい）。御寛恕されたい。また、挿図中の各遺物には図ごとで枝番号を付し、これにもとづいて本文中で説明記述するが、各番号下に付した（ ）内の番号は収蔵予定番号（通し番号）の下3桁であり、写真（Ph.）中の番号はこれに一致する。注意されたい。さらに、製塩土器については、田中裕介・大久保徹也両氏からの有益な御教示があったことを述べておきたい。

・古墳時代（弥生後期を一部含む）の日常土器

SX017出土土器 (Fig. 34, Ph. 53)

1は在来系の長胴壺で、壺AのⅢC類。高さ28.4cm。内外ハケメ仕上げ。底部よりやや上に焼成後の穿孔あり。2・3は布留系の壺D。2は高さ25.2cmで、やや長胴気味で、法量的には折衷壺D-Aとなるが、この固体は灰白色気味の色調、胎土の特徴、精巧な作りなどから福岡平野中枢（比恵遺跡付近）の生産の可能性が高く、その中ではやや珍しいものである。ⅡC期。3は、口径19.6cmを測り、やや大型の壺である。口縁部が短く端面が外傾する一見古い特徴を持つが、胴部上半の器壁が厚く、

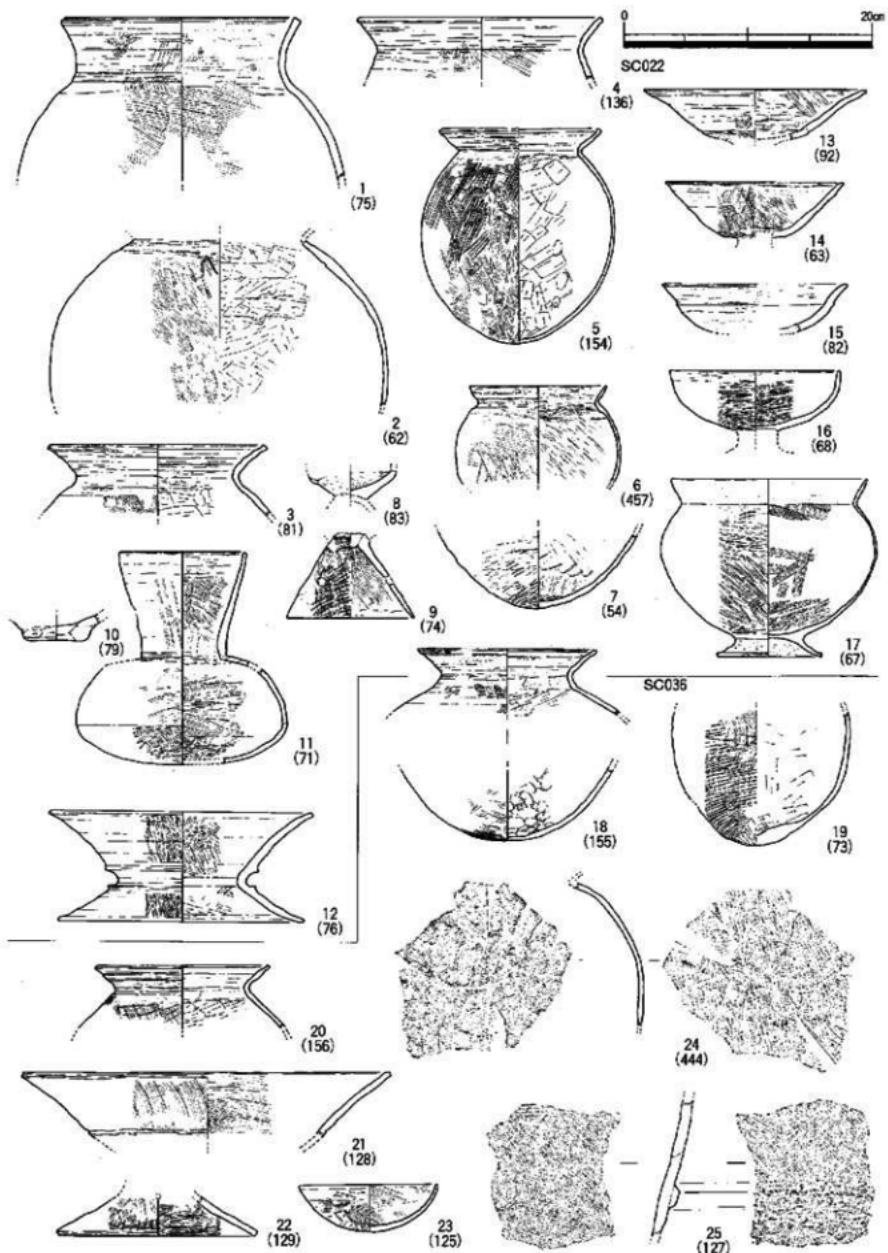


Fig. 35 SC022-036出土土器 (S=1/4)



Ph.54 SC022出土土器 *番号はFig.35に一致

1と同じ純い黄褐色であるのが注意される。布留系技法をよく習得しているが、型式変遷は中枢地域と必ずしも併行しない好例である。4~6はB系統の土器。4は、タタキや底部輪台(写真参照)など伝統的V様式の特徴をよく残す大型の鉢。全体に雑な作り。5は高坏Bで、脚柱状部が忠実なのが特徴。内外面ともに、ハケメ後、板ナデ・ナデ仕上げ。6は坏部が椀状の開脚高坏。7は小型の壺で、内面ケズリが顕著ではないが(ナデ仕上げ)薄い器壁であるのが特徴。胎土・色調の類似と外面にかすかに右上タタキがあることから、製塙土器技法による布留壺の模倣品か。8は山陰系壺(やや大型品か)の肩部片。外面ヨ

コハケ後、ハケメ工具木口で斜線文を二段に施す。9は手焙形土器。鉢部と覆部の成形は一見連続的に見えるが、詳細に観察すると単口縁の鉢部の上に、壺Bを半裁したような覆部を接合していることが分かる。鉢部は口縁付近と下部に突帯があるが、口縁部の突帯は小さいが貼付、下部のものはヨコナデで引き出して「突帶」風にしたものである。底部は欠損しているが、おそらく平底に近い広い丸底であると推察する。鉢部は「く」字状になったり受口状になったりせず、覆部前方の「面」は「面」状というよりはまさに口縁部風であり、形態的に、類例の少ないローカルな作品である。残存高は18.4cm、鉢部口径は前後16.7cm、左右17.4cm、覆部接合幅は15.6cm、覆部高は11.1cm、覆部角度は102°をそれぞれ測る(以上の計測点の基準は、高橋一夫1998『手焙形土器の研究』六一書房、東京、に主によった)。外面調整は、鉢部・覆部とともに、細かいハケメ後、ナデ、さらに細かいミガキを施す。ミガキが中途半端で雑な印象である。覆部頂部付近にはタタキの痕跡がある。内面は、全体的にケズリ仕上げであるが、主に鉢部にはハケメ後ナデの下調整が若干残り、鉢部・覆部とともに粘土紐の接合痕が一部に残る。器壁は厚い傾向にある。胎土・色調は、1・3・5などに類似する。以上のSX017の土器群は、A・B・Dおよび庚甌土器系の技法で作られてものが共存する特異なセットであるが、それぞれの型式的位置は共存してもよいものである。出土状況も、祭祀的な状況を重視すれば一括と判断でき、II C期の指標とことができる。

なお、Ph.52の手焙形土器のうち写真右は比恵遺跡50次SD294出土のものである。報告書(第451集)には未掲載であるが、今回参考のために紹介する。残存高12.9cm、覆部高11.6cm、鉢部口径17.9cm、覆部接合幅14.4cm、覆部角度127.5°、面の幅2.3~3.0cmをはかる。鉢部口縁は「く」字状、面の形状は「T」字状ないし錐先口縁状を呈す。内外面磨滅し、調整は不明瞭だが内面はハケメが残る。器壁は4~5mmで比較的の薄い。胎土は精良水漉胎土で、明橙色の色調。磨滅のためか、内面の煤は不明。

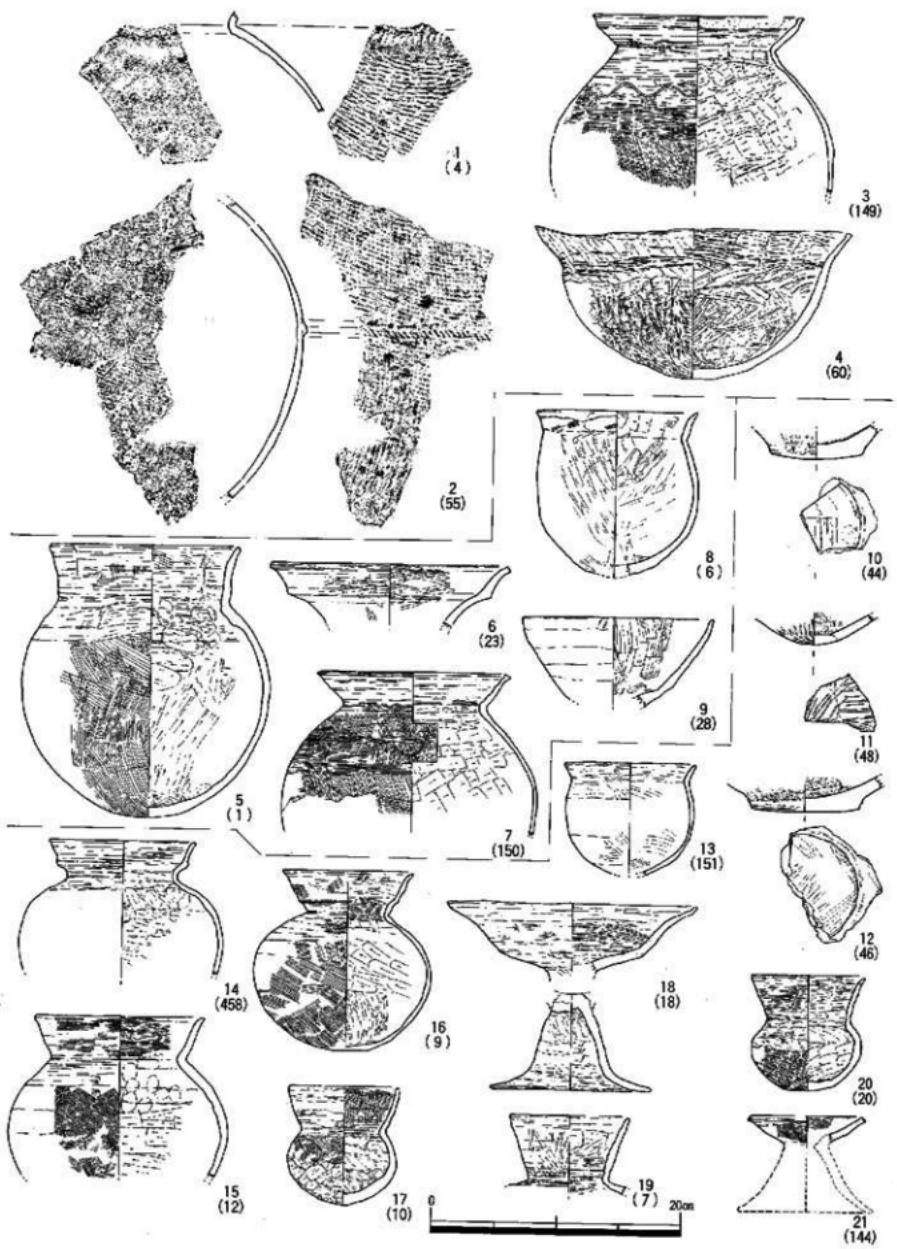


Fig. 36 SC022(2)-SC015(1)出土土器 (S = 1/4)

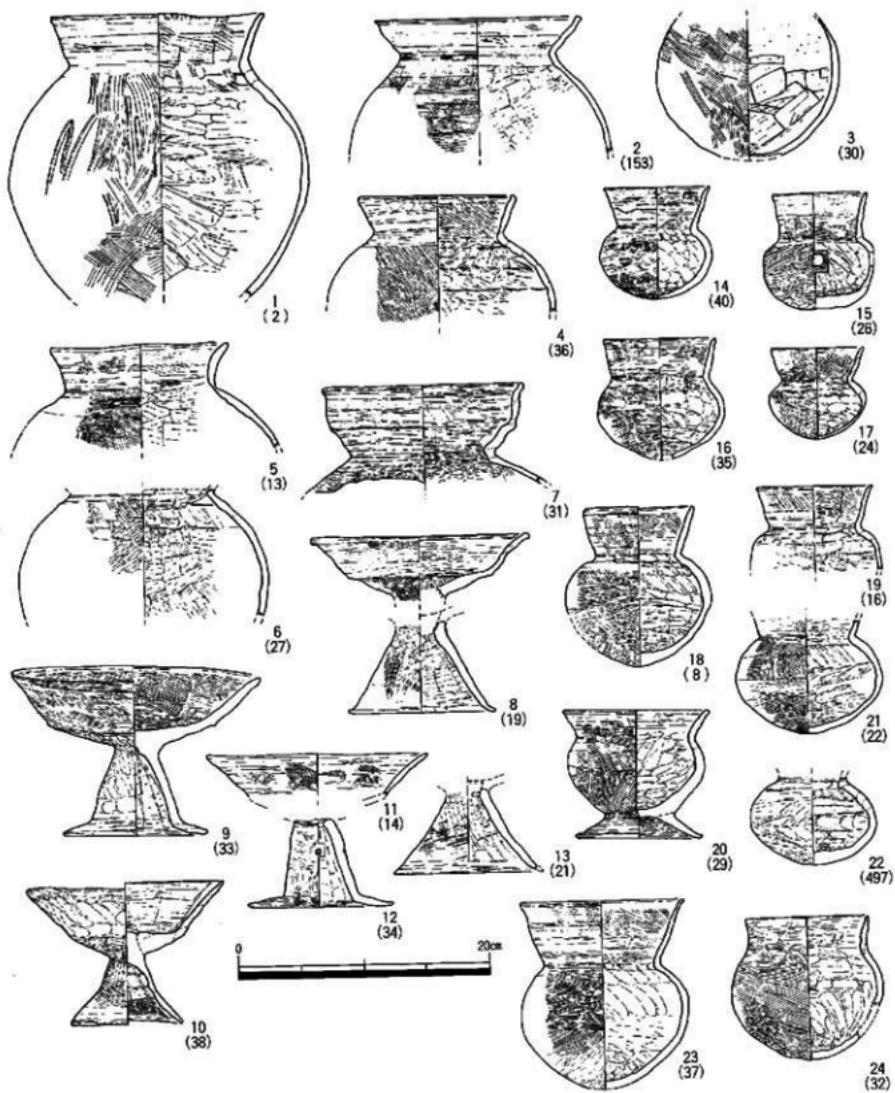


Fig. 37 SC015上層出土土器 (S=1/4)

(SX017の個体も内面に泥の汚れは付着するが煤は確認できない)。比惠50次例はⅡA～ⅡB期の土器群と共伴する。同じ北部九州の手培形土器でもかなり異なる2個体である。

SC022出土土器 (Fig. 35・36, Ph. 54)

Fig. 35-1, 3～6, 12, 15, Fig. 36-3, 4が床直を含む下層で、他は上層出土である。前者の方がわずかに古い様相があり (ⅡC期古相)、後者は厳密には一括ではない (ⅢC～ⅢA期)。またFig. 35-1, 4,

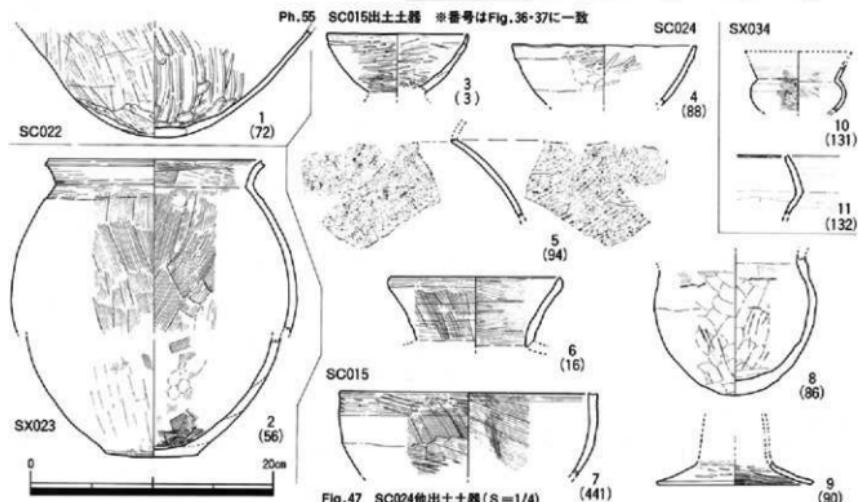


Fig. 47 SC024他出土土器 (S=1/4)

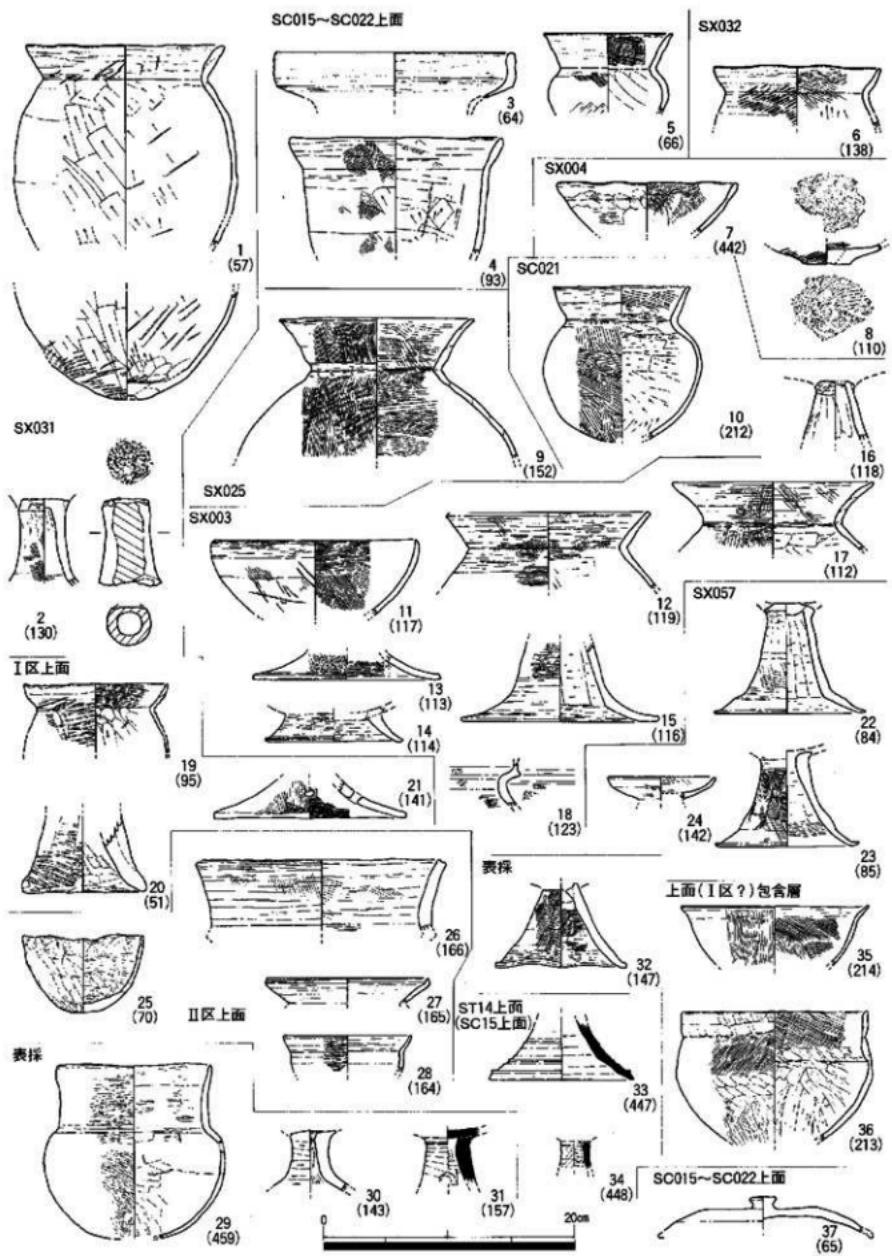


Fig. 38 上面遺構他出土古式土器類ほか (S=1/4)

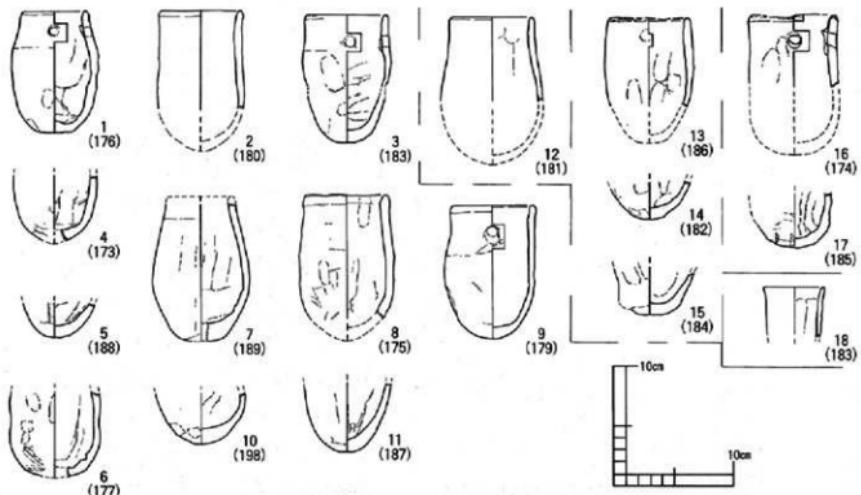
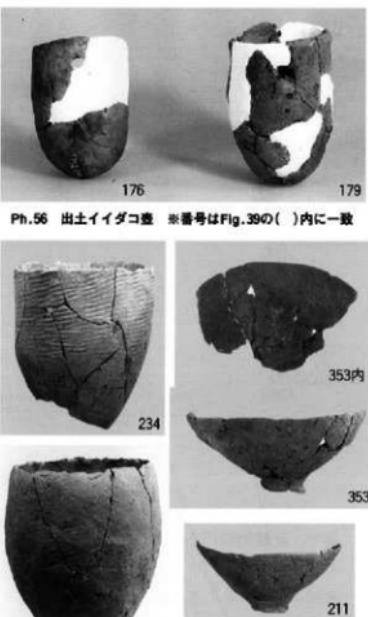
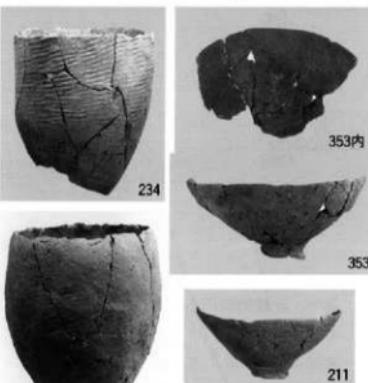


Fig. 39 イイダコ壺・実測図(8=1/4) * ()内の番号は収蔵番号の下3ヶタ

Fig. 36-1, 2, 4はA系統、Fig. 35-2, 5~11, 13~16はB系統ないしD系統を模倣・技法一部習得したB(D)、Fig. 35-3, 12、Fig. 36-3は真正のD系統（山陰系含む）である。Fig. 35-1はやや大型の、4は中型の壺A。2は外面タテハケ、内面ケズリ粗い壺B(D)。ⅢA期以後の布留系壺ではない粗雑な壺（壺F）の系譜。3はやや精巧な布留系壺（壺D）で、やや古い様相。5は布留系壺だが、肩部ヨコハケ後に構状タテハケを施し、底部押し出し技術を用いないなど違和感がある。口縁部など一見古いが、おそらくB系統工人による壺Dの精巧な模倣品で、胎土・色調から在地品。6は壺というよりは鉢。13, 14は高壺Bだが、形態的に高壺Dの影響がある。13は擦痕の強いナデ仕上げ、8はハケメ仕上げ。15は異形の高壺ないし小型器台。ナデ仕上げ。16は楕状開脚高壺の坏部。底部外面に脚部頂部の接合の刻みが写る。内外細かい横ミガキだが、胎土が精良な水流胎土には至ら無い。8は小型器台の受部か。9は小型器台の脚部で、タタキ後ハケメ。内面簾状ハケメで、さかさにすればV様式系の鉢の作り。10はB系統の壺の底部。壺の底部はこのよう突出した平底が遡くまで残る。11は長頸壺。D系統の精製器種B群長頸壺を模倣。形態がやや異なる。12は鼓形器台。小型



Ph. 56 出土イイダコ壺 * 番号はFig. 39の()内に一致



Ph. 57 出土製塙土器(1)
※番号はFig. 40~4の()内2に一致

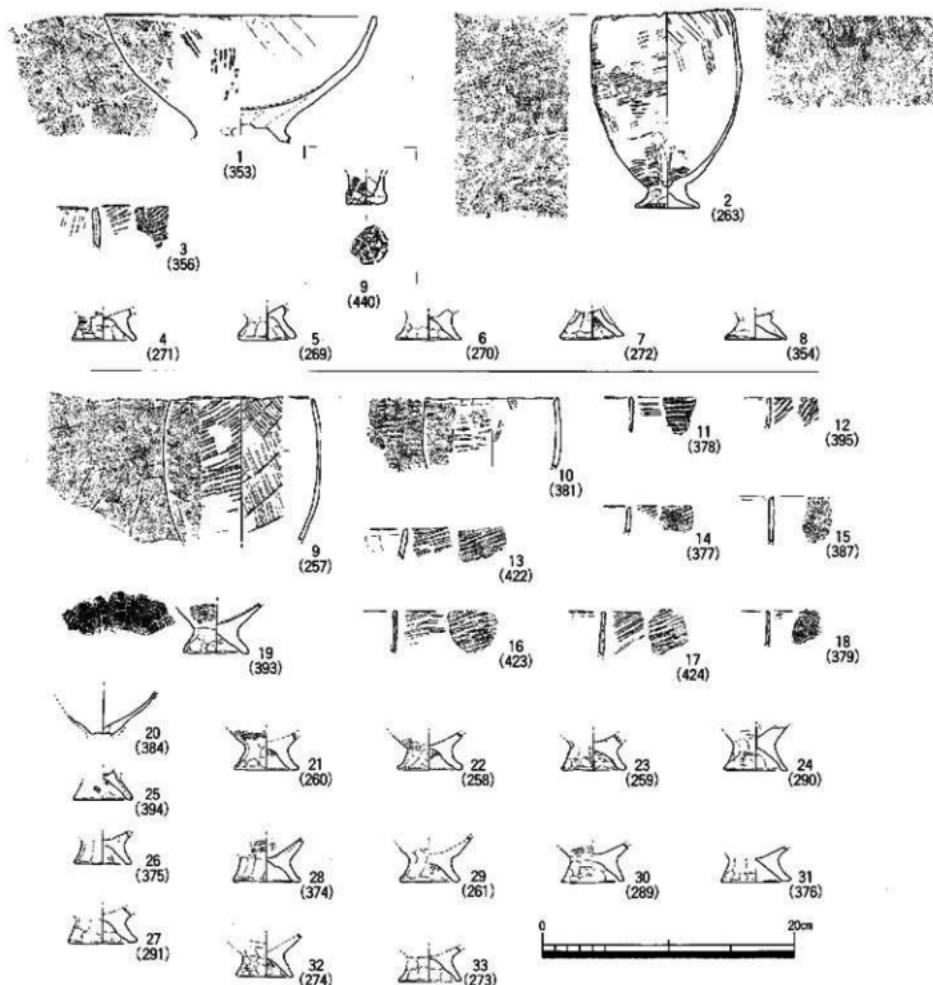


Fig. 40 製塙土器実測図(1)(S=1/4)

品で、比較的精巧な作り。白っぽい色調で、早良ないし福岡平野からの搬入か。7は甕Bの丸底のもの。外面タタキ。タタキ丸底化技法。B4型式。この時期まで残る好例。17は脚付鉢。側部外面ナデ後細かいミガキ、下半にケズリ痕跡、一部タタキの痕跡。内面は細かい擦痕のハケ（板ナデ）後ナデ。器壁が全体に薄く、内面の調整など後述する製塙土器の多くに類似。特に脚部の形状（やや大きいが）

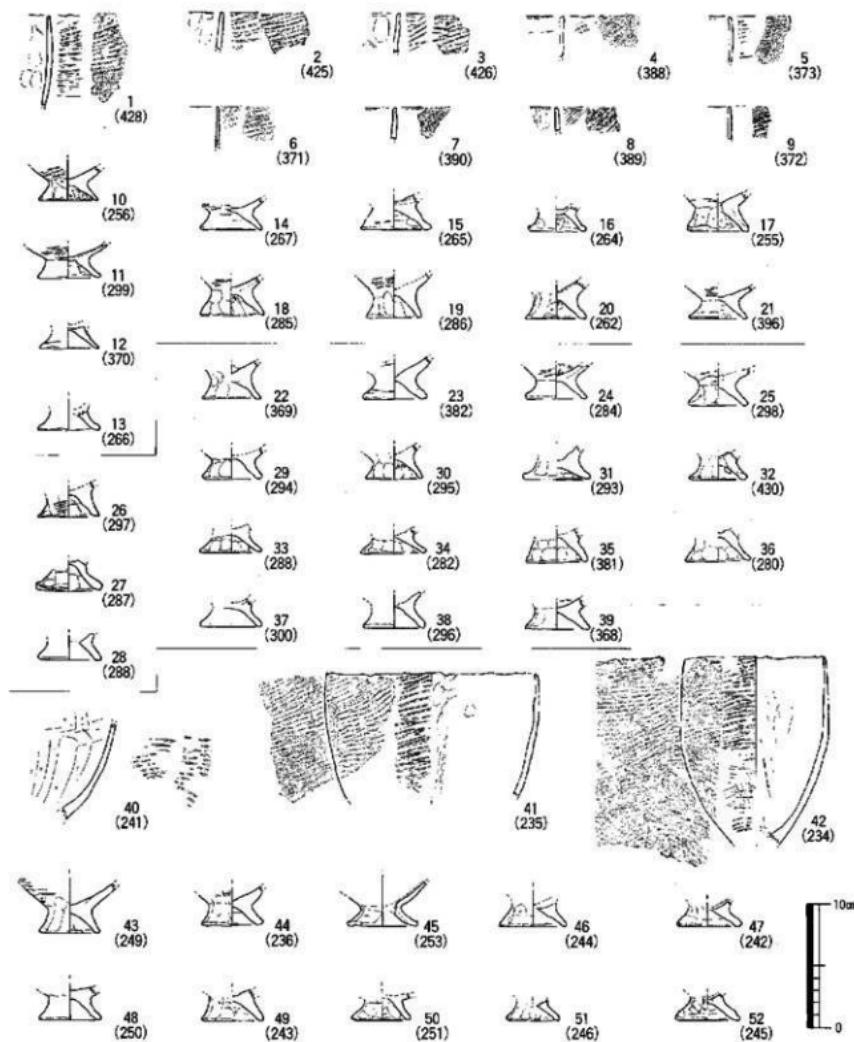


Fig.41 製塩土器実測図2(S=1/4)

やヨコナデのあり方が、製塩土器の1タイプによく似ている。胎土・色調も類似し、製塩土器の製作者が作った日常土器であろう。Fig.36-1,2は同一個体。A系統のやや大型の壺の破片。胴部外面左上のやや粗いタタキ、頸部に刻み、胴部中央付近に細い凸状の突帯があり刻みを施す。内面丁寧なやや左上のハケメ。突帯の形状からわずかに古い時期の混入か。3は壺Dで、口縁部が内湾し縫部が水

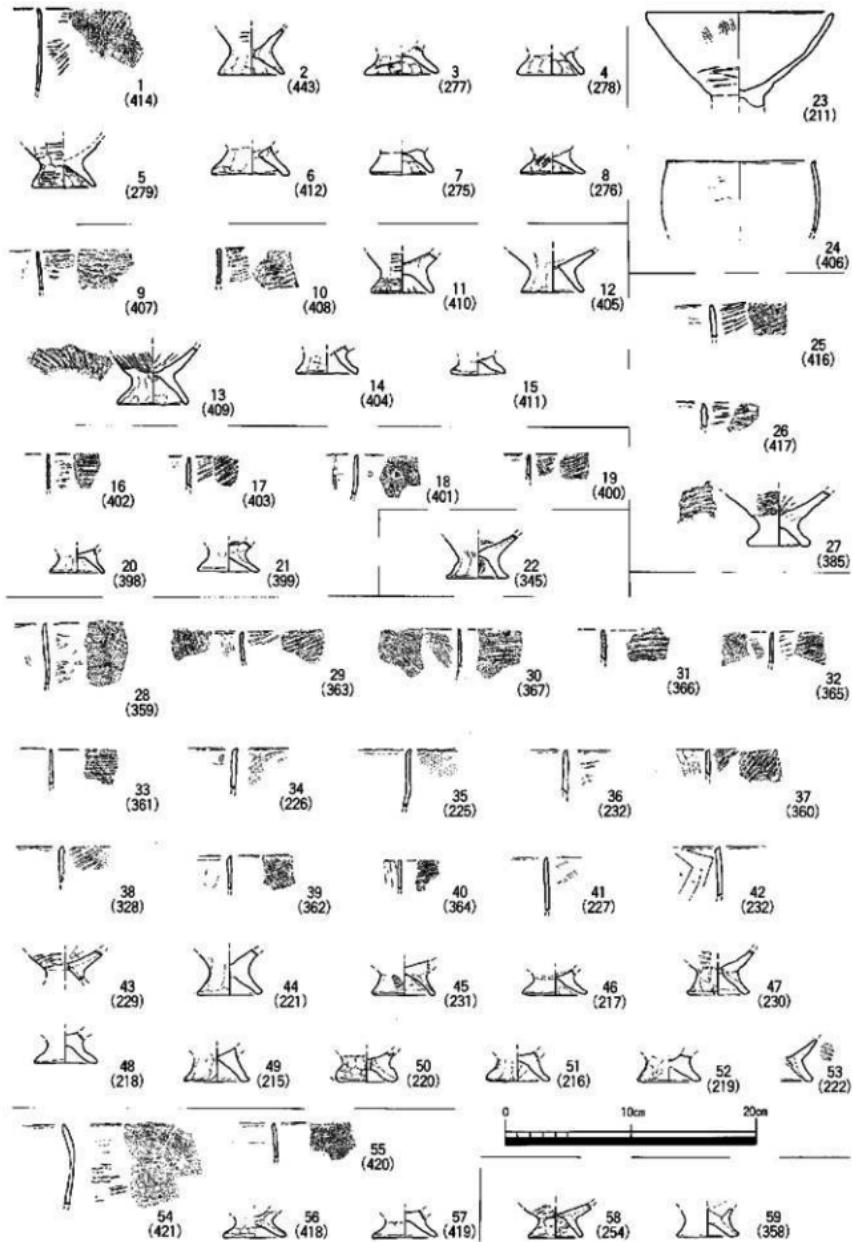


Fig. 42 製壇土器実測図(3) (S=1/4)

平気味。やや新相傾向だが床面近くの出土。明黄褐色～橙色を呈し、形態などからも早良平野からの搬入か。4はA系統の鉢。きわめて雑な調整。外面タキ、ナデ、ケズリ、ミガキ、内面ハケ、ナデ、ケズリ、ミガキだが、いずれもミガキが半端で凹凸が激しい。全体の形も歪む。Fig.47-1は下層出土の壺Aの底部。丸底で内面に顯著なユビナデおよび押し出しの痕跡がある。外面原体不明のナデ仕上げ。

Ph.54左で見るよう、外面に大きな剥離痕。内面にコゲの痕跡が無く、使用していないとすれば、焼成時の「破裂痕」の可能性がある。これが正しければ、近辺（集落内）で土器を生産していた証拠となる。

SC036出土土器 (Fig.35)

18は上下同一個体。底部押し出し丸底

技法、口縁部から肩部外面は顯著な丁寧な回転ヨコナデの布留系壺。なで肩で口縁部外反。形状的に中西部瀬戸内の布留系壺か (Fig.35-3もその可能性あるが不詳)。19は壺B、B4型式。内面ケズリ後ナデ。20は北部九州の壺Dで、口縁部短く端面が外傾する古相の型式。淡黄褐色を呈し、胎土・作りから福岡平野中枢（比恵など）の生産か。21,22は在来系の高坏A。24は壺Bで、B5型式。25はA系統の大型壺の破片。以上の土器群は、SC022の一群众よりやや古く、II期に位置付けられる。この時期には確実に製塙土器が共存する。

SC015出土土器 (Fig.36・37、Ph.55)

Fig.36-5～9は下層出土、同10～21は取り上げ時の層位が不明だが、多くは上層出土らしい。Fig.37は上層一括土器群（ⅢB期新相）。Fig.36-6はB系の二重口縁壺。7は壺D。口縁部が直線的に延びる。波状文あるが一部途切れる。灰白色気味で精巧な作りで、福岡平野中枢部（博多など）の製作か。5は粗製の壺で（壺F）、直立する口縁。内面のケズリはやや粗い。技法的にはB系統の系譜。にぶい黄褐色で表面が黒っぽい。8も粗製の小型壺。内外面に粗いケズリ。以上は、7の型式からⅢA期。14は山陰系の小型壺だが、口縁の形状などB系の手法が残る。明赤橙色。12は粗製の壺ないし壺。にぶい黄褐色。新相の型式。16は小型の二重口縁壺。外面ハケメ残り、上層の小型丸底壺に近い様相。17,20の小型丸底壺は上層のものと同様相。21の外面ハケメ残小型器台はハケメ仕上げで、新相の小型丸底壺と同じ調整の様相。X形器台とすれば新しい。18の高坏は上下同一で、上層の高坏と類似。10,12は弥生後期後半の壺の底部。11は弥生終末の壺の底部。15-17,19-21は赤褐色気味の色調。上層の丸底壺に類似。Fig.37-1はきわめて粗雑な調整の壺F。外面タテハケだが、原体に粗密2種あり、一部ミガキ状の調整。内面は粗いケズリ。色調・胎土はFig.36-5と類似。2は精製の壺D。口縁部が延び、端面が水平気味。新しい段階のものでよい。灰白色気味で福岡平野方面の製作か。3は粗雑な小型の壺。明赤褐色。4,5は粗雑な壺で、より新相の型式。次の時期（ⅢC期）に主体となる型式。黄褐色。5内面接合痕残る。6は壺で、外面ミガキが粗雑で半端。7は山陰系壺だが、本来の形や作りから離れた粗雑なもの。14-21の小型丸底壺（一部脚付）は、全てミガキの消失した段階のもの。外面ハケメ仕上げが多く、一部ナデを用いる。ややにぶい橙色ないし明褐色または明赤褐色。22は長頸壺といべきか。様相的には小型丸底壺の一群と同じで赤褐色気味。23は粗雑な丸底の壺。高坏にはバラエ



Ph.58 出土製塙土器(2) 番号はFig.40～42に一致

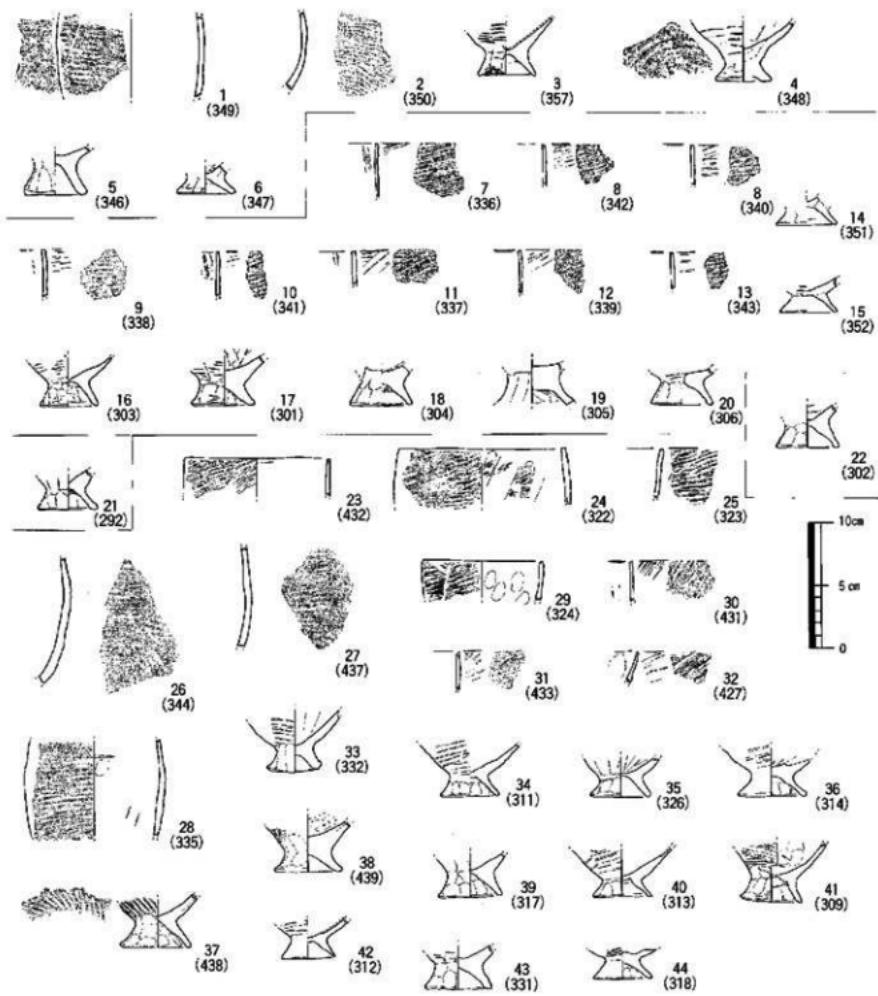


Fig.43 製塙土器実測図(4)(S=1/4)

ティがある。9の高坏は分厚く重い作り。暗褐色の表面。10は坏部外面難なナデのまま。脚部を坏部に挿入する接合法。にぶい褐色。11.12は同一の可能性。明赤褐色。他の高坏に比較すれば丁寧な作り。12の脚柱状部には、穿孔を途中でやめたような痕跡がある。8は上下同一。黄褐色ないし明褐色。坏部はFig.36-18に類似するが、脚部は異なる。この時期の高坏の分類は、脚部と坏部を別に分類し、その組合せを考えるべきか。13は8と同様の高坏の脚だが、タキの痕跡があるのが重要。この時

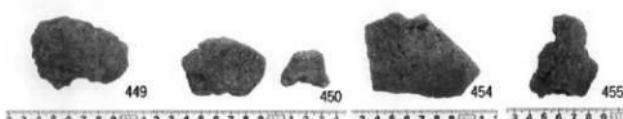
期もタタキ成形が潜在的に存在している証左である。赤褐色気味。高坏は、重藤の分類では（前掲文献）、Fig.36-18、Fig.37-9がB類、Fig.37-11,12がA類、同8,13がC類、同10はBとC類の中間形態となるが、坏部の形態が複数あり、やや問題がある。以上のSC015上層土器群は、ⅢB期（重藤のⅢA期）の中でも、その新相段階に位置付けられる。様的に畿内の「布留式設定土器群」に併行する内容である（現在の布留式新相）。

その他の遺構の土器 (Fig.47, 38) Fig.47-2 (SC023) は、弥生後期後半の壺。同3～9はSC024。3はB系の鉢。細密ミガキは精製器種B群を模倣。4, 5, 6もB系統。7, 8はA系統の鉢と小型壺。9は高坏D。10, 11はSX034 (SC015床)。11はⅡA期頃のA系複合口縁壺。Fig.38-1は壺B, B5型式。ⅡC期。同6の壺Bは古相で混入か。同9の壺は壺Bと同じ作り。同10はSC021（調査区中央南壁際の東西2.7mの住居址）出土で、壺B(D)。ⅢA期。同11～18はSX003出土。12は壺D-A、15は高坏D1、17は壺B(D)ないし壺F。18は山陰系壺。明るい色調で福岡平野のものか。16は高坏D10。11はB系鉢。13は高坏A。一部古いものがあるが、おおむねⅢA期。8 (SX004) はB系統の壺の底部。22～24 (SX057) は、ⅢB期の高坏と小型器台。27は庄内壺か。28はⅡA期の小型丸底壺。33は、初期須恵器の高坏。29は6世紀後半の丸底壺。31はⅠ期後半の須恵器高坏。30は土師器のその模倣品か。34は6世紀代の須恵器高坏。以上は古墳時代中・後期を含むが、ここで紹介しておく。

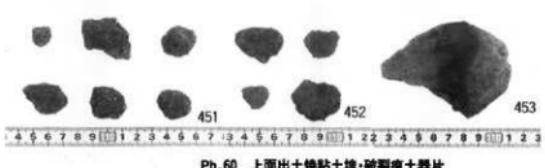
・古墳時代の生産用具土器

飯蛸壺 (Fig.39, Ph.56) 1～4はSC022上層、5～11は同下層、12はSC015-022上層、14, 15はSC015、13はSK006、16, 17はSX005、18はST06周辺出土。色調は橙色から赤褐色、体部から口縁部が直立するものと、口縁部が内傾して下膨れとなるものがある。穿孔は水平タイプと外傾するものの2種がある。SC022で集中出土し、実際に蛸壺漁に関わった集団が生活していた可能性があろう。

製塙土器 (Fig.40～43, Ph.58) 製塙土器は、パンケース15箱程度の出土をみた。先述のように住居址などの各遺構の出土の他に、検出時など包含層中からも多数出土した。Fig.40-1～8はSC036、同34, 9～33, Fig.41-1～39はSC022、Fig.41-40～52はSX017、Fig.42-1～8はSX025、同9～15, 22、同16～21はSC023、同25～27はSX027、同28～53、同54～57はSX031、同58はSC021、同59はSX057、Fig.43-1～6はSX035、同7～15はSK032（炉址）、同16～20はSX003、同21はSX001、同22はSX004、同23～44



は包含層中（一部搅乱）のそれぞれ出土である。SC022出土のうち、Fig.40-9, 14, 20, 26～28, 24, 31は床面直上、同21～23, 29は下層、同32, 33はSX040石組（床やや上）、



Ph.60 上面出土焼粘土塊・破壊痕土器片

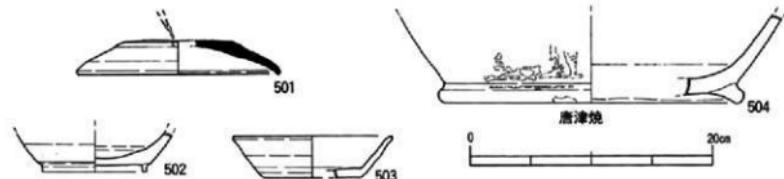


Fig. 44 古代以降の遺物 ($S=1/4$)

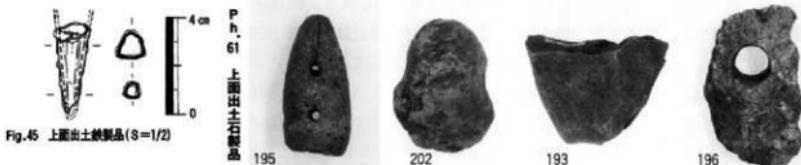


Fig. 45 上面出土鉄製品 ($S=1/2$)

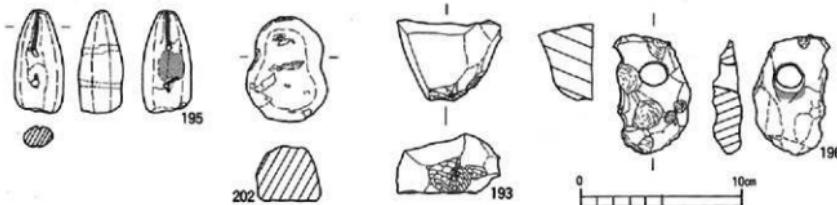


Fig. 46 第1面(上面)出土の石製品 ($S=1/3$)

同図他は層位不明（主に上層）、Fig. 41-1～21は上層、同22～39は検出時上面の出土。図化は可能な限り行ったが、器壁が薄く脆いためバラバラに出土したものが多く、鉢部の接合が困難で、結果として脚台部の図化が多い。製塩土器のはほとんどは、中部瀬戸内の備讃瀬戸系のもので、低い脚台にコップ状の鉢部がつくものである。鉢部の器壁はきわめて薄く、厚くても4mm程度で多くはそれ以下。鉢部のタタキは右上ないし水平（右上気味）で、左上のものが若干ある。口縁部までタタキ仕上げのままであるが、ごくわずかに若干ナデ消したような個体もある。鉢部内面は基本的にナデ仕上げだが、ユビナデの他にかすかな擦痕（条痕）の板ナデを用いるものが4割前後存在する。脚台部は、基本的に顕著なユビナデ調整であるが、雑なユビナデのみで、面が波打ち、厚い器壁のタイプと、ユビ（指頭）ナデ後、軽く横にナデを加えて整え、器壁をやや薄く仕上げたタイプがある。後者は本場の備讃瀬戸に主流だが、前者はむしろ伊予など西部瀬戸内にやや多く認められるものと云い、内面の板ナデも備讃瀬戸にはほとんどないようで、むしろ西部瀬戸内に認められ、とすれば、今宿の製塩土器技法の直接的な故地も備讃瀬戸というよりはその周縁（西側）に求められよう。また脚台部と鉢部の接合は、やや厚く、鉢部と脚台部が別作りないし後で脚部を付加した可能性を持つものと、やや薄く、両側から後で押されたようになっており、輪台状の脚台部から鉢部を連続成形して後で充填したタイプがある。後者の方がやや多い。また、全体に被熱して赤くなったものや、実際の製塩の結果内面が荒れて大きく剥離したものも多い（Ph. 58上）。Fig. 40-2は唯一の完形品（Ph. 57左下）。完形で出土すること自体異例で、埋納されたものか。高さ15.6cm、口径10.7cm、最大径11.9cm、脚台径5.3cm、

脚台高1.9cmを測る。鉢部外面は水平気味の右上タタキだが一部不鮮明でナデ消しか。内面はナデと板ナデ。脚台部はユビナデのみ。端部には刻み状の痕跡あるが、タタキ板を押圧したものか。にぶい赤褐色。胎土に角閃石および流紋岩？を含み他とは違和感がある（搬入品か？他の製塙土器及び日常土器のほとんどは花崗岩、石英、長石の細粒を含み、雲母をごくわずかに含む他、角閃石はあってもわずかで目立つことはない）。Fig.41-42（Ph.57左上）も遺存率の大きな個体。残存高15.0cm、口径11.4cm。タタキ右上～水平、内面板ナデ後ナデ。黄褐色気味で黒斑があり、器壁がやや厚い。あまり一般的でないタイプ。他の備讃瀬戸系の製塙土器の説明は紙面の都合上省略する。実測図によられたい。以下は備讃瀬戸系以外の製塙土器。Fig.40-34は、底部未調整で脚台のないタイプ。外面タタキ、内面ナデ。体部がやや外上方にのびるタイプとみられ、異形であるが、類例は但馬の柄三田遺跡にある。にぶい黄褐色。Fig.40-1は、形態上B系統の椀状高坏であるが、著しく被熱し、内面が剥離し、製塙に使用（転用？）されたものだろう（Ph.57右）。Fig.42-23はそれほど被熱していないが、同様の可能性がある。

なお製塙土器を集中して、または良好な状況で出土したSC036やSC022を営んだ集団は、実際に製塙作業を行った人々であり、そこから出土した各系統の土器群は、自家生産したというよりは近隣（集落内）の複数の供給元から入手した可能性が高い。また、製塙土器出現の確実な初源の時期はⅡB期のSC036で、ⅡA期のSC024にその可能性がある。SC023（弥生後期後半？）出土とするものは、SC024・015との重複があり、問題があり、型式学的に合わない。今回の調査で出土した製塙土器の型式は、「備讃IVa式」近く、一部「IVb式」的なものもあるが（脚台部の開きが小さい、鉢部が長めで胴の張りの少ないもの）、「IVa式」の古相段階での残存であろう。その後SC015段階で出土するものも型式があまり変わらず、変化は瀬戸内とは併行しないようである（最近調査した、今山8次調査出土の古墳前期後半・中期後半の製塙土器も、鉢部はコップ形を保つ）。

・土器生産に関連すると考えられる遺物 焼粘土塊や破裂痕土器が出土している。Ph.60-449～452は焼粘土塊、同453～455は破裂痕土器片の可能性のあるもの。前者は稻藁の上に泥を積み上げた「雲南焼き」の窯の痕跡とされるもので、僅く、纖維状のものや赤色土粒が混入する。後者は焼成時の失敗品や焼け企んだものである。Ph.54-72も同様か。これらから集落内（調査地ないしそのすぐ近く）で土器が実際に生産されていたことが分かる（窯跡研究会編1997「古代の土器生産と焼成遺構」真陽社、京都、を参照）。

・古代以降の土器 Fig.38-37は8世紀中頃の土器器坏蓋。Fig.44-501は7世紀末頃の須恵器の蓋。天井部にヘラ記号。502は土器器の高台付椀。8世紀後半。503は土器器の坏。8世紀後半。504は近世の唐津焼。茶褐色の釉に白色の釉ダレあり。奈良期前後の遺物がまとまるのが注目され、集落の展開が考えられる。

・その他の遺物（鉄製品・石製品） Fig.45はSC036から出土した種類不明の鉄製品。両端は欠損しているか。残存長3.7cm、最大幅1.35cmをはかる。小さな槍状を呈し、断面は三角形に近く、よく見ると鉄板（片）を卷いて作ったようである。何か漁具等であろうか。御教示を仰ぎたい。Fig.46（Ph.59）には石製品を掲げた。195は玄界灘式の石錐。2ヶ所の穿孔と両面に綾溝あり。全長6.3cm。滑石製。202は軽石製の浮子。左右に抉り。193は泥岩？製の敲石。砥石に転用か。196は用途不明の石製品。滑石製。石錐の破片とも考えたが、穿孔途中の痕跡が多数で不明。滑石製。その他同示しなかったが、時期不明（上部包含層ないし擾乱出土で古代以降か）の鉄錐（長頭タイプ）が複数出土している（あるいは漁具か）。

3. 今宿遺跡第5次調査の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今宿遺跡（西区今宿東3丁目所在）は、長垂山塊から西に派生する標高約5mの砂丘上に位置する。今回発掘調査が行われた第5次調査区では、弥生時代前期～中期のかめ棺墓、同時期の木棺もしくは土坑墓などの埋葬施設、古墳時代の堅穴住居跡などの遺構が、各時期の遺物とともに出土している。

今回の自然科学分析調査は、本遺跡が立地する砂丘地形の発達過程を検討することが目的である。調査内容は、放射性炭素年代測定による堆積年代の検討、珪藻分析による堆積物の成因に関する検討を行った。

1) 試料

調査地点は、3トレンチおよび深堀り地点の2カ所である。

3トレンチの堆積物は、上位より1層～13層に区分されている。最下位の13(14)層は、灰色または淡灰褐色の締まりのある細砂混じり粗粒砂からなる。12層は灰白色または黄灰白色の締まりのある細砂混じり粗粒砂、11(13)層は植物遺体混じり暗褐色粘質土、10(12)層は暗灰褐色または黄灰褐色粘土質シルト（本層下部は酸化鉄の沈着のみられる10b層と灰色～青灰色粘土質シルトの10a層の薄層が認められる）、9(11)層は灰色～白色細粒砂、8(10)層は灰白色～灰色粗粒砂、7(9)層は灰色～淡灰色砂、6'(9)層は6層から漸移する層で粗粒砂混じり細粒砂、6(9)層は灰色～白色細粒砂、5(8)層は灰白色砂、4(7)層は淡褐灰色砂混じり灰白色砂、3(6)層は褐灰色～淡褐灰色細粒砂、2(5)層は明灰褐色砂、1(5)層は褐色砂からなる。

深堀り地点は、上位より5層～1層に区分されている。5(10)層は砂からなり、その分級度などから風成砂と考えられている。3(13)層生物擾乱がみられる。2(15)層は泥混じり砂粗からなる。1層は暗青灰色粘土からなり、木片が混じる。

試料は、3トレンチの10(12)層・11(13)層から層位試料として2点（各々サンプルA・B）、深堀地点の1(16)層から層位試料として1点（サンプルC）が採取された。これら3点の試料について、珪藻分析を実施する。また、砂丘形成以前の地層より出土した木材片1点（サンプルE）について放射性炭素年代分析および樹種同定を実施する。（層名の（ ）内の数字はFig. 3の層にほぼ対応する。

：編者）

2) 分析方法

(1) 放射性炭素年代分析

a. 前処理

試料を水でよく洗浄して表面の異物を取り除く。乾燥、粉碎後水酸化ナトリウム溶液で煮沸する。室温まで冷却した後、水酸化ナトリウム溶液を傾斜法で除去する。この作業を除去了した水酸化ナトリウム溶液の色が濃い褐色になるまで繰返す。次に塩酸を加えて煮沸する。室温まで冷却した後、傾斜法により除去する。充分水で洗浄した後、乾燥して蒸し焼き（無酸素状態で400℃に加熱）にする。蒸し焼きにした試料は、純酸素中で燃焼して二酸化炭素を発生させる。発生した二酸化炭素は捕集後、純粋な炭酸カルシウムとして回収する。ただし、試料が少量（試料表中で試料少量と記載がある試料）の場合は水酸化ナトリウム溶液による処理を省略する。

b. 測定試料の調製

前処理で得られた炭酸カルシウムから真空状態で二酸化炭素、アセチレン、ベンゼンの順に合成した。最終的に得られた合成ベンゼン 3 mL(足りない場合は、市販の特級ベンゼンを足して 3 mLとした)にシンチレイターを含むベンゼン 2 mLを加えたものを測定試料とする。

c. 測定

測定は、1 回の測定時間 50 分間を 20 回繰返す計 1,000 分間行った。未知試料の他に、値が知られているスタンダード試料と自然計数を測定するプランク試料と一緒に測定する。

d. 計算

放射性炭素の半減期として LIBBY の半減期 5,570 年を使用する。

(2) 珪藻分析

試料を湿重で 7 g 前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理化学的処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸 600 倍あるいは 1000 倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に 200 個体以上固定・計数する。種の同定は、K. krammer and Lange-Bertalot (1986・1988・1991a・1991b), K. krammer (1992)などを用いる。

同定結果は、海水～汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類はアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種についてはさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度 (pH)・流水に対する適応能も示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数 100 個体以上の試料については、産出率 2 % 以上の主要な種類について、主要珪藻化石群団を作成する。また、産出した化石が現地性か異地性かを判断する目安として完形殻の出現率を求め考察の際に考慮した。堆積環境の解析にあたって、海水生種については小杉 (1988)、淡水生種については安藤 (1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内 (1991)、汚濁耐性については Asai, K. & Watanabe, T. (1995) の環境指標種を参考とする。

(3) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口 (横断面)・極目 (放射断面)・板目 (接線断面) の 3 断面の徒手切片を作製、ガム・クロラール (抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液) で封入し、プレパラートを作製する。プレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3) 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表 1 に示す。

表 1 放射性炭素年代分析結果

試料名	質	年代値	誤差		Lab. No.
			+	-	
サンプル B	木材	6,170	890	800	PAL-419

(1) 年代値 : 1,950 年を基点とした値。

(2) 誤差 : 測定誤差 2 σ (測定値の 95 % が入る範囲) を年代値に換算した値。

(3) PAL : パリノ・サーヴェイ株式会社で測定。

(2) 珪藻分析

結果を表 2・図 1 に示す。珪藻化石はサンプル A・B では少ない。サンプル C では 100 個体以上産出する。サンプル C では、淡水生種が優占するが海水生種も約 20 % 産出する。産出種の特徴は、川の

ような流水域を好む好流水性の *Navicula elginensis* var. *neglecta* が 15% と多産し、流水にも止水にも普通にみられる流水不定性の *Gomphonema parvulum*, *Pinnularia mesolepta*, *Sellaphora pupula*, *Eunotia pectinalis* var. *minor*, 陸上の好気的環境に耐性のある陳牛珪藻の *Hantzschia chia amphioxys* を伴う。このうち、*Eunotia pectinalis* var. *minor* は、沼澤湿地付着生種群（安藤, 1990）の一種である。また、海水生種としては内湾指標種群（小杉, 1988）の一種の *Paralia sulcata* が 11% と多産し、海水泥質干潟指標種群（小杉, 1988）の *Nitzschia granulata* を伴う。なお、化石の少なかったサンプル b では汽水付着性の *Navicula yarrensis* が認められる。

(3) 樹種同定

試料は、全体的に保存状態が悪いが、仮道管を主とすることから針葉樹材と判断できる。晩材部付近に樹脂細胞が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状ではないが保存状態が悪く詳細は不明。以上の特徴から、スギ科あるいはヒノキ科のいずれかであるが、種類の同定には至らない。

4) 考察

深堀り地点 1 (16) 層 (サンプル C) の珪藻化石群集は、好流水生種を始めとして色々な水域や陸域に生育する種類が混在する組成を示した。また、内湾指標種群や海水泥質干潟指標種群も低率ながら認められた。これらの特徴から、本層は海水の影響を受ける河口付近で堆積したことが推定される。

3 トレンチの 10(12) 層・11(13) 層 (サンプル A・B) からは珪藻化石がほとんど検出されなかった。僅かに検出された珪藻化石は保存状態が悪かった。このような産状の原因としては、1) 硅藻化石が堆積後に風化作用により分解消失した、2) 堆積速度が速く、取り込まれる珪藻が少なかった、3) 堆積時の調査地点が珪藻の生育に不適な環境であった（例えば潮上帯のような場所）、などの可能性がある。また、11(13) 層から検出された種群は海水～汽水生種であったことから、本層は海がないし海岸付近の堆積物の可能性がある。

出土した木材片の放射性炭素年代測定値は約 6200 年前を示した。この年代値は、全国各地で確認さ

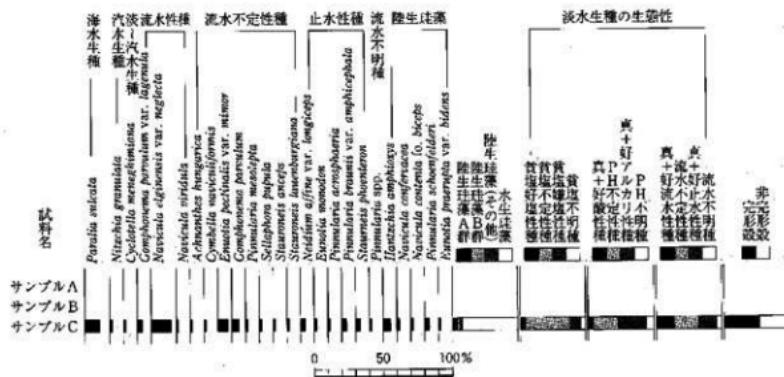


図 1 主要珪藻化石群集

海水～汽水～海水生種比率・各種生出率・完形絶滅率は全体基数、淡水生種の生理性の比率は淡水生種の合計を基準として百分率で算出した。いずれも 100 個体以上検出された試料について示す。なお、+ は 100 個体未満の試料について検出した種類を示す。

表2 球藻分析結果

種類	生息性	環境指標種	サンプル
塩分	pH	流水	A B C
Paralia solcata (Ehr.) Cleve	Euh	B	- 1 13
Navicula yarrensis Grunow	Meh	-	13 1
Nitzschia coconeiformis Grunow	Meh	E1	- - 1
Nitzschia granulata Grunow	Meh	E1	- - 3
Cyclotella meneghiniana Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	l-ph L, S
Achnanthus hungaricus Grunow	Ogh-ind	al-il	ind U
Achnanthus lanceoidea (Bred.) Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph K, T
Cymbella naviculiformis Auerwald	Ogh-ind	ind	ind O
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind T
Eunolla bilunaris (Ehr.) Mills	Ogh-hob	ac-il	l-ph
Eunotia incisa W. Smith ex Gregory	Ogh-hob	ac-il	ind O
Eunotia monodon Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	l-ph O
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind O
Eunotia praerupta var. bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	l-ph RB, O
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind U
Gomphonema parvulum var. jagenua (Kuetzing) Frenguelli	Ogh-ind	ind	r-ph S
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-il	ind RA, U
Navicula confervacea (Kuetz.) Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind RB, S
Navicula contorta fo. biceps (Arnott) Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind RA, T
Navicula egenensis var. neglecta (Krass.) Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph U
Navicula pseudolanceolata Lange Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind U
Navicula viridula (Kuetz.) Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph K, U
Navicula viridula var. rostellata (Kuetz.) Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph K, U
Neidium affine var. longiceps (Greg.) Cleve	Ogh-hob	ac-il	l-bi
Nitzschia romana Grunow	Ogh-ind	al-il	ind U
Nitzschia spp.	Ogh-unk	unk	unk
Pinnularia acrosphaeria W. Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph O
Pinnularia brauni var. amphiccephala (A. Mayer) Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph S
Pinnularia divergens var. elliptica (Grun.) Cleve	Ogh-hob	ind	ind
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind O
Pinnularia mesolepta (Ehr.) W. Smith	Ogh-ind	ind	S
Pinnularia microstauron (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind S
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind RI
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk
Sellaphora pupula (Kuetz.) Merschowsky	Ogh-ind	ind	S
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind T
Stauroneis kriegeri Patrick	Ogh-ind	ind	unk T
Stauroneis laevisburgiana Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind
Stauroneis phoeniceronteron (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph O
海水牛糞合計			0 1 13
海水-汽水牛糞合計			0 0 0
汽水牛糞合計			0 13 5
淡水-汽水牛糞合計			0 0 2
淡水牛糞合計			1 0 98
硅藻化石形数			1 14 118

凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性

Euh : 海水生種
 Meh : 汽水生種
 Ogh-Meh : 淡水生種-汽水生種
 Ogh-ind : 質地不定性種
 Ogh-hob : 付着温湿性種
 Ogh-unk : 質地不明性種

pH : 水素イオン濃度に対する適応性

al-bi : 酸アルカリ性種
 al-il : 好アルカリ性種
 ind : pH不定性種
 ac-il : 好酸性種
 ac-bi : 真酸性種
 unk : pH不明性種

C.R. : 流水に対する適応性

l-bi : 好止水性種
 l-ph : 好止水性種
 ind : 流水不定性種
 r-ph : 好流水性種
 unk : 流水不明性種

環境指標種

B : 内海指標種 E1 : 深水泥質干潟指標種 (以上は小杉, 1988)

K : 中-下流河川指標種 L : 河川泥質地帯生種 O : 沼澤型地帯生種 (以上は安藤, 1990)

S : 好沙済性種 U : 底適応性種 T : 好流水性種 (以上はAsai, K. & Watanabe, T, 1995)

R : 陸生指標 (RA : 蘭, RB : 菖蒲, RI : 未区分丝生种类, 伊藤, 编内, 1991)

れている縄文海進の最高海水準の年代値に相当する。本木材の出土層準に関する情報は、現段階では不足しているため、今後その情報を含めて再評価したい。

ところで、本遺跡の北西方向の玄海砂丘地帯の地形発達過程については角出（1975）の報告がある。それによると、クロスナ層の存在や好古遺物などから、縄文時代前期、縄文時代中・後期、弥生時代～古墳時代、室町時代、室町時代以降の5期に亘る砂丘の固定期が確認されている。これらの砂丘形成は、ユースタティック（eustatic）な海水準変動と深く関係していることは多くの研究者によって指摘されている（例えば遠藤、1969；井関、1975）。本遺跡で認められた砂丘は、その下部で弥生時代前期の遺構が確認されていることや、上記した分析結果などを考慮すると、玄海砂丘地帯で確認されている縄文時代中・後期頃の固定期に形成されたもの可能性がある。このことに関しては、今後、本地域の空中写真判読や、堆積物の粒度分析による海成・風成砂の確認などの調査を行うことで明らかとなっていくと考える。

引用文献

- 安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42, p.73-88.
- Asai, K. and Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom, 10, p.35-47.
- 遠藤邦彦（1969）日本における沖積世の砂丘の形成について。地理評, 42, p.159-162.
- 井関弘太郎（1975）砂丘形成期分類のためのインデックス。第四紀研究, 14, p.183-188.
- 伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古墳解析への応用。珪藻学会誌, 6, p.23-45.
- 石河寛昭（1977）「最新液体シンチレーション測定法」。南山堂, 189p.
- 角田清美（1975）日本海および東シナ海沿岸の主な海岸砂丘地帯の形成期と固定期について。第四紀研究, 14, p.251-276.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae. Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae, Band 2/2 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. Band 2/3 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lincolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von : Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, p.1-353, BERLIN-STUTTGART.
- 日本化学会編（1976）同位体、年代測定。「新実験化学講座10宇宙地球科学」, p.337-353, 丸善。
- 富樫茂子・松本英二（1983）ベンゼン-液体シンチレーションによる¹⁴C年代測定法。地質調査所月報, 34, p.513-527.

VI. 生の松原遺跡 1次調査

1. はじめに

1) 調査の経緯

本調査地点は、JR筑肥線が九州大学農学部演習林内を通る部分の西半、線路北側にあたる。現況は松林で保安林の指定を受けていたが、工事に先立つ保安林指定解除や樹木の伐採、搬入工事用仮道路の敷設など条件整備に時間がかかり、1997年7月半ば調査開始予定が若干遅れ、同年7月24日の開始となった。調査期間は3ヶ月を予定した。調査対象地の中央にある踏切「大谷RC」の西側から工事に入りたいというJR側の要望があり、まずははじめに調査対象地（Fig. 1）の西端であるA区から調査を開始した。重機による廃土上の処理は、細長い調査対象地内での場内処理であったため（基本的に工事=調査対象地以外の演習林内の廃土処理は不可とされていた）、これがその後の調査の進行状況に微妙に影響している。A区は、次のB区にあたる部分が当初未伐採だったので、反転して調査した。この部分は8月6日に調査が終了した。お盆前後の輸送繁忙期におけるJR沿線の工事規制と、実際的な問題で次のB区の伐採が遅れていたため、この調査に入ったのは8月18日である。B区の調査は8月29日に終了。B区の調査では、重機による廃土を終了したA区に一度に搬出できたのでスムーズに調査できた。A・B区は遺構・遺物が少なく、実質的な調査機関は短かった。A・B区終了後、「大谷RC」より東側の調査を開始し、廃土処理・移動を考慮して、東端のD区から調査した。東半調査区は、東よりD・E・C区としている（この調査区名称は、調査開始当初考えた調査順番によるもので、現実は異なることとなった）D区は遺構・遺物が多く、調査期間がやや長く、9月1日に開始し、9月20日に終了した。次にE区は9月22日に調査を開始した。E区は、廃土を終了したD区に搬出するため、その西側から重機による表土剥ぎと遺構検出を開始した。遺構検出の過程で、E区は全体として、特にその西半部において、豊穴住居をはじめとする多くの遺構・遺物が存在することが判明した。この9月末の時点で、E区の調査はもちろん、次に残り100m近くのC区を調査するにあたっては、調査予定期間の10月25日まで終了することが困難であると考えたため、調査期間の延期などの協力を

JR側に求めるために、10月1日に工事協議を設けた。JR側からは、工事の工程上、調査期間の延伸を最小限にしてほしいとの申し入れがあり、11月上旬までの期間延伸ということで埋蔵文化財課側との折り合いがつき、同時に手をつけていないC区については、先に表土剥ぎを行い、廃土は全て対象地西方のA区側に搬出するということになった。したがって、C区は協議後にE区と併行して作業を行うことになった（10月6日より表土剥ぎ）。残り1ヶ月強であり、調査工程は非常に厳しく、C区は遺構・遺物は若干薄くなつたもの

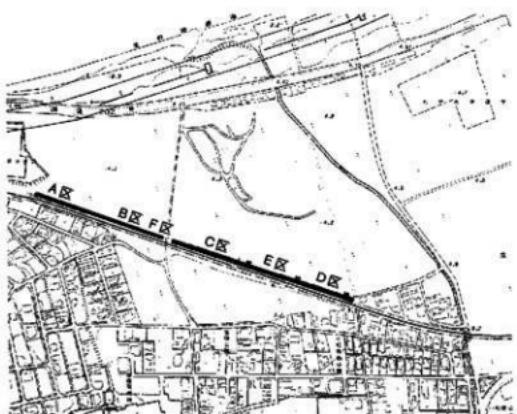


Fig.1 調査地点の位置(長さ103-0506 1:6000)

の、C区西半では表土直下に奈良時代の遺物包含層があり、遺構面も数面検出され、休日を返上するなど調査は慌ただしく行われた。しかし、埋蔵文化財課の職員諸氏や、調査補助員諸氏の応援を得て、10月末まではE区を、11月2日にはC区を終了することができた。次に、ユニットハウスを置いていた部分の「大谷RC」踏切のすぐ西の部分のF区の調査を最後に行って（10月29日～11月4日）、11月5日には全てを撤収し、調査は終了した。

今回の調査では、作業上様々な制約を受ける保安林内の調査ということもあったが、様々な問題点があった。当初設定されていた調査期間は、あまり根拠はなく、今回のJR沿線調査は試掘即調査ということで、このあたりに調査期間を調整する協議を設けるべきであったであろう。結果的に、当初設定期間に縛られて、JR側も工事期間を予定してしまっていたのであり、遺構・遺物の調査も余裕の全くないギリギリの状況になってしまった面がある。試掘を、調査開始当初に全対象地に設けようとしても、実際には工事の都合で縛られたり、伐採の工程や保安林解禁などの条件整備などで限定的であり、入れるところからとにかく調査に入るという状況であった。事務所も、保安林内という制約はあるものの、1ヶ月という長期の現場としては不足な感のあるユニットハウス1棟のみであり、砂地の現場であるにも関わらず水道を確保できないといった問題があった。ユニットハウスも、工事上の都合で2回も動かす自体が生じた。このあたり、原因者側と調査側の協議や連絡が不足していた部分がある。これは今後の同様の調査の際に留意すべき点であろう。なお、念のために申し上げておくが、この生の松原遺跡の調査の際の以上のような状況は問題があるということが、原凶者側と埋蔵文化財課側の双方の認識となり、その後の周船寺10次の調査や、飯氏9次の調査では、両者の間で密に連絡・協議を持つようになり、事前の条件整備や（事務所の設置を含む）、工程の調整などについて

（期間の若干の延伸も含めて）、その後状況は改善されており、比較的スムーズな調査をすることができた。これはJR側の御協力のおかげである。なお本来は、鉄道沿線という保安上の制約があるが、今後の同様な調査では、他の埋蔵文化財調査と同様に、十分な試掘を事前に実行してから本調査を準備するという通常の手続きがやはり望ましいのではないかということも申し上げておきたい。

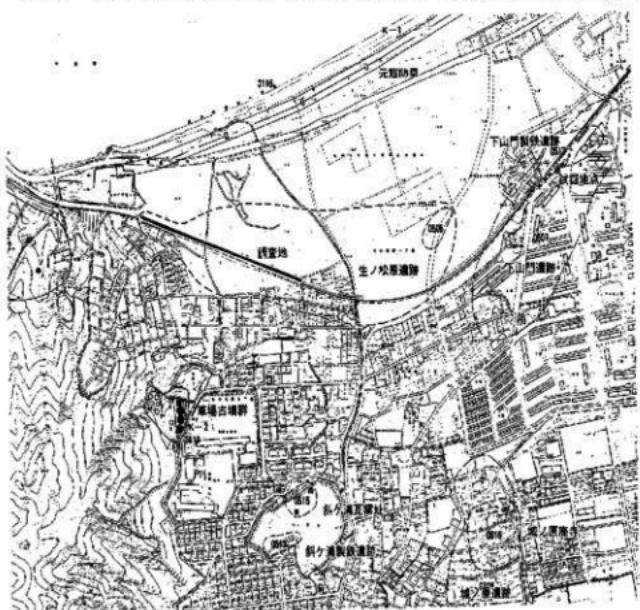


Fig.2 生ノ松原遺跡と周辺の遺跡(1:10,000)

2) 生の松原遺跡の周知化について

調査時および、その後生じた別の問題点として（こちらの方が今後より問題であるが）、遺跡の周知化の問題がある。生の松原遺跡は、1972年の下山門遺跡の調査中に、担当者らが踏査を行い、九大演習林管理事務所付近において、古式土器の二重口縁壺や鉢を採集している（福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集『下山門遺跡』、6頁参照）。また土製模造鏡1点も採集されているようである（同『下山門遺跡』、79頁参照）。現在の福岡市文化財地図の生の松原遺跡の範囲は（Fig. 2）、この時の成果によるもののようにある。しかし、これ以前に、生の松原は「海岸に近き砂丘地の遺蹟で、彌生式土器石器の散布地である」とことが知られておいた（鏡山猛1942「原始箱式石棺の姿相（一）」『史叢』27、131）。さらに、大正9年の北九州鐵道路線（現在の筑肥線）工事中、板石を組み合わせた箱式石棺が現れ、これを中山平次郎博士が記録している（中山平次郎1925「大発を出せる古代遺跡」『考古学雑誌』第11巻第2号）。現在、この石棺が発見された位置は不明であるが、生の松原地内への筑肥線沿線であることは確実であるから、九州大学の管理事務所付近の限られた範囲より遺跡範囲が広がっていることが、十分な文献調査をすれば分かっていたはずであった。ところがそれはなされず、また九州大学の関係者（演習林事務所）や森林を統括する市役所内の関係部局にも十分な周知化がなされていない状況であったようである。今回、JR筑肥線の拡幅に伴う調査の前に、担当者の久住と池田が、また調査中も周囲の演習林内の踏査を行い、今回一部報告しているような古墳時代から奈良時代の遺物を表探ししている。ところが、遺物が採集される場所というのは、樹木の間の下部には、本来雜草や灌木が生えているが、これがなぜか無く、砂丘の白い砂が露出している場所であった。調査中に判明したことだが、九州大学演習林内では、松林の保全上、間の灌木を抜根したり、木の枝を刈ったりすることがあり、こうした作業による枝木の廃棄処理のため、径数m程度の穴を掘削しここに廃棄することがあったようである。前述の表探し物は、こうした場所で採集されており、地表下の包含層や遺構の砂が巻きあがっているようである。さらに、これは調査中の話であるが、A・B区の調査期間中にC・D・E区の伐採を行っていたが、伐採された樹木の処理にあたって、演習林管理事務所の許可をもらって、演習林内の樹木保全



Ph.1 C・D・E区調査状況全景(手前はC区西半第3面西から)



Ph.2 作業風景

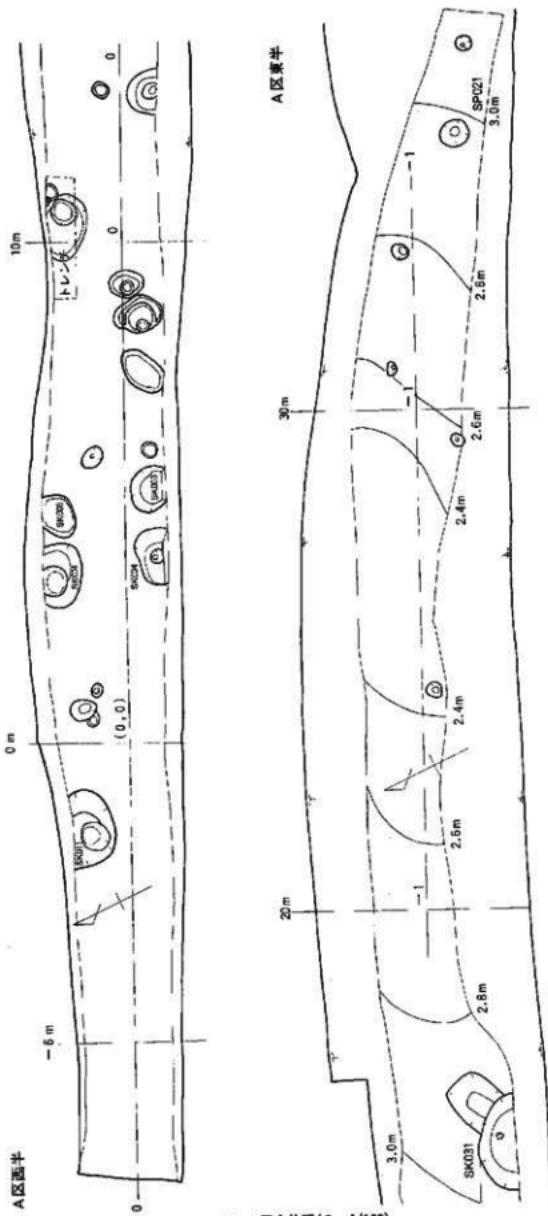


Fig.3 A区全体図 ($S=1/100$)

の掘削廃棄と同様にJR側の施行業者が調査対象地の北側隣地に、同様な穴を数ヶ所掘削して廃棄してしまった。結果として、樹木の量が多いため、廃土(砂)の山がその掘削範囲の隣に残り、遺構や包含層の遺物が多数まきあがって採集できる状況となってしまった(なお、調査中はそうした土山は全て精査し、遺物も主要なものは今回報告している)。調査中の施行業者の掘削に関しては、調査担当者が注意を怠っていたという落ち度があるが、いずれにしてもこのような状況が続くと遺跡の破壊が進行してしまうことになるから、その後JRとその施行業者、また九州大学演習林管理事務所、森林保全を担当する市役所内の関係部局に注意を促し、埋蔵文化財包蔵地のため無断掘削はできない旨を伝えている。ただし、分布地図では今も狭い範囲のものなので、これによって埋蔵文化財が無いと

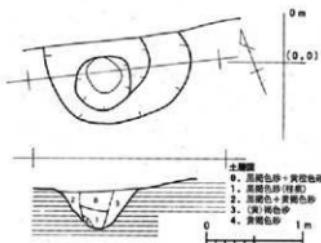


Fig. 4 A区SK011平面図・断面図 ($S=1/50$)

判断されてしまうおそれもあり、今回の正式な報告を契機として、関係部局や九州大学等に十分な周知化をする必要があり、この範囲での工事や掘削の予定に関しては、埋蔵文化財課としては事前に十分な審査と試掘、協議をする必要があろう。なお、今回の調査と、周囲の踏査、および以前の踏査による遺物散布範囲、また砂丘地形のあり方から、Fig. 2 のような遺跡の範囲を想定できる。今回の調査の成果から、全体としての遺構・遺物の密度はそれほど高いものではないが、部分的に非常に濃密な部分があると想定される。今後、この範囲での開発予定については、前述のように十分な対応をして行くことが望まれる。

3) 遺跡の立地と周辺の歴史的環境

生の松原遺跡は、長垂丘陵、東を十郎川に画された海岸に形成された砂丘の西半部分に位置している。現在の標高は4.0~5.0m前後を測る。この砂丘は、調査中に来訪された磯望先生（西南学院大学）の御教示によると、その表層50cmないし1mは風成砂による新期砂丘ということである。なお調査中の所見では、表層の黒色有機質土壌は非常に薄く、表土直下の黄褐色砂質土層は若干の有機土壤化が認められるものの、顕著ではなく、また遺構の覆土は地山の砂丘砂が若干濁った程度で分かりにくくのが多かった。さらに、風成砂層の下はやや粗い砂となり、地表下2m強前後で湧水がみられる。河川堆積の砂層が風成砂の下部に広がるようである。周辺の遺跡



1. A区西半遺構検出状況(西から)



2. A区東半調査状況(東から)
Ph.3 A区調査状況写真

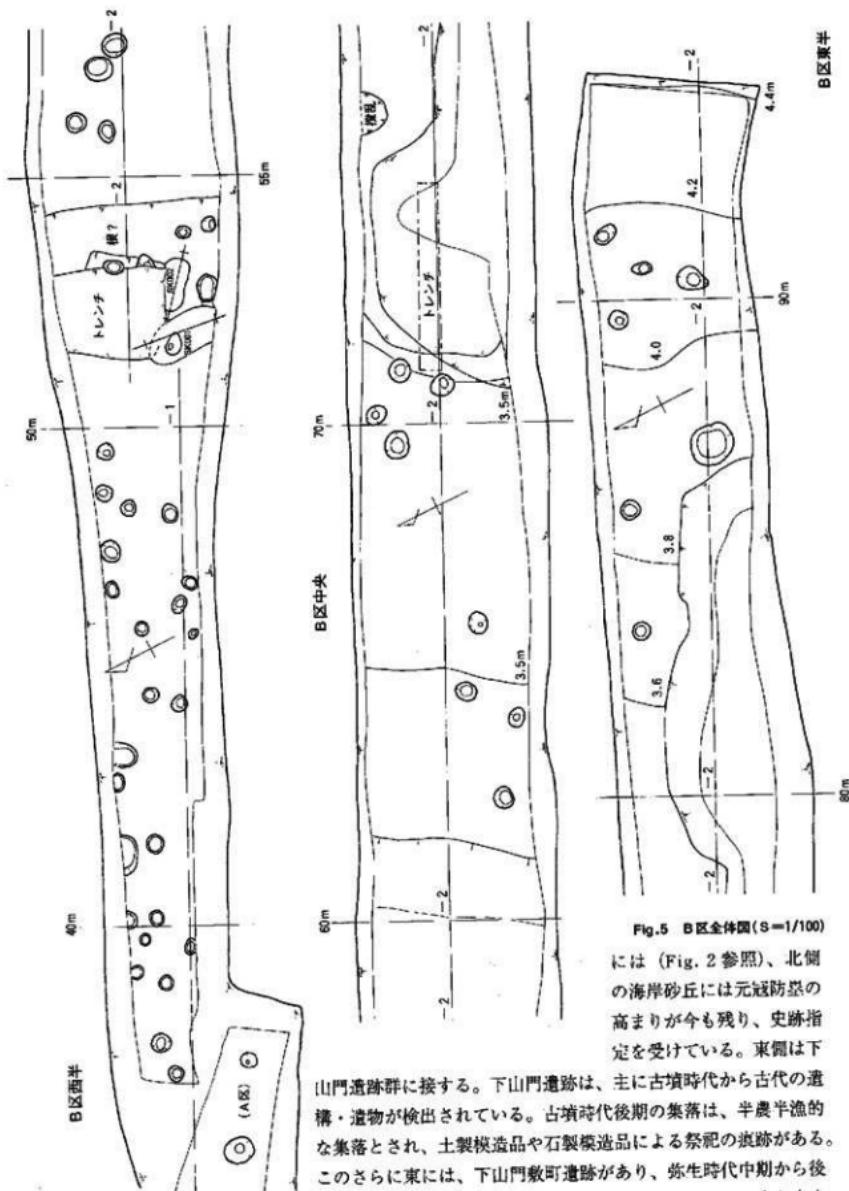


Fig.5 B区全体図(S=1/100)

には(Fig.2参照)、北側の海岸砂丘には元寇防塁の高まりが今も残り、史跡指定を受けている。東側は下

山門遺跡群に接する。下山門遺跡は、主に古墳時代から古代の遺構・遺物が検出されている。古墳時代後期の集落は、半農半漁的な集落とされ、土製模造品や石製模造品による祭祀の痕跡がある。このさらに東には、下山門敷町遺跡があり、弥生時代中期から後期の遺構・遺物がある。中広鋼戈が3本出土している。また奈良

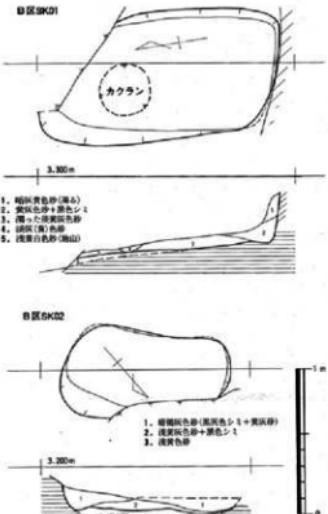
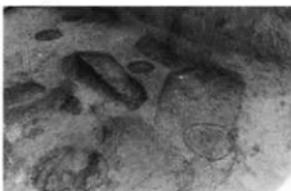


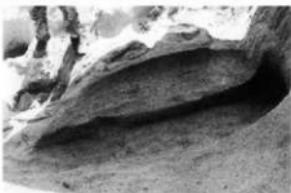
Fig. 6 B区SK01・02平面図・断面図 ($S=1/30$)



Ph.4 B区西平調査状況(東から)



1. SK01(右)・SK02(左)(北から)



2. SK01土層状況(西から)



3. SK02土層状況(北から)

Ph.5 B区SK01・02写真

～平安時代の規則的な方位と配列を有する掘立柱建物群がある。墨書銘のある須恵器と綠釉陶器が出土し、製鉄関連遺構・遺物が多く、鉄生産に関連した官衙（公的施設）の一部と推定される。生の松原遺跡の南東500mには、奈良時代から平安時代にかけて存在した城の原廃寺遺跡がある。またこの西方200m、生の松原遺跡の南方400mには、寺と関連するものか斜ヶ浦瓦窯址がある。「警固」「伊賀作瓦」「今行」銘の瓦が表採・出土している。これまでの数度の調査によって、平安時代の10～11世紀に瓦の生産の主な時期があり、銘文の一一致や型式の類似から鴻臚館に供給されたことが確実視されている。これに接して斜ヶ浦製鉄遺跡があり、また下山門遺跡でも製鉄関係遺物が多く出土しており、周辺で奈良時代から平安時代にかけて製鉄が多く行なわれたようである。今回の生の松原の調査では、奈良時代の遺物包含層中から、輪の羽口や鉄滓、斜ヶ浦瓦窯址のものに類似する瓦の破

F区

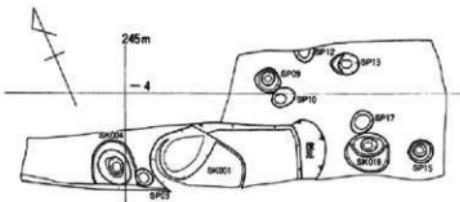


Fig.7 F区全体図 (S=1/100)



Ph.6 F区調査状況(東から)

関連するものか、続く時期の7世紀中頃～後半には、生の松原遺跡の南2kmにおいて、桁行4間以上の掘立柱建物9棟を含む26棟、堅穴住居43棟のやや特殊な拠点的な集落である広石遺跡群(生松台)があり、早良平野から今宿方面へ抜ける交通路上の重要な軍事的拠点の可能性がある。なお、「倭名類聚抄」における早良郡六郷のうち、生の松原地域は、「野方」を中心とする「額田郷」の一部の可能性が高い。これ以前の弥生時代から古墳時代中頃にかけては、生の松原遺跡の南約1.2kmに、宮の前遺跡があり、弥生終末から古墳前期の集落と墓地がある。C地点1号墳は弥生終末期新相の全長15m前後の墳丘墓であり、この地域も古墳の成立に向かって胎動していたことが分かる。

片が出土しており、有機的な関係が推定される。生の松原遺跡の南西300mあたりには、草場古墳群が所在する。古墳時代後期(6～7世紀)の、横穴式石室を主な中心施設とする群集墳で、2群12基が確認され、多

くが調査されている。鉄滓供獻が多く、また墳丘には外護列石が目立つ。Fig.2の範囲外になるが、同様の古墳群で高崎古墳群が生の松原遺跡の南1kmにある。高崎古墳群と草場古墳群は、鉄鋸と石突のセットの出土とともに目立つたり、有蓋足付壺の類似したセットが両者ともに出土しており、両者の造営集団は深い関係にありそうである。鉄鋸の出土も多く、軍事集団かもしれない。その他さらに南には、6世紀中頃以降コノリ古墳群、広石古墳群など、山麓部に横穴式石室を内部主体とする多くの群集墳が造営される。広石古墳群はかなり大きな、有力な古墳群で、武具・武器、馬具が多く出土しているのが注目される。これらに



Ph.7 D区調査状況(東から、手前SC047、中央右SC057、奥左SC058)

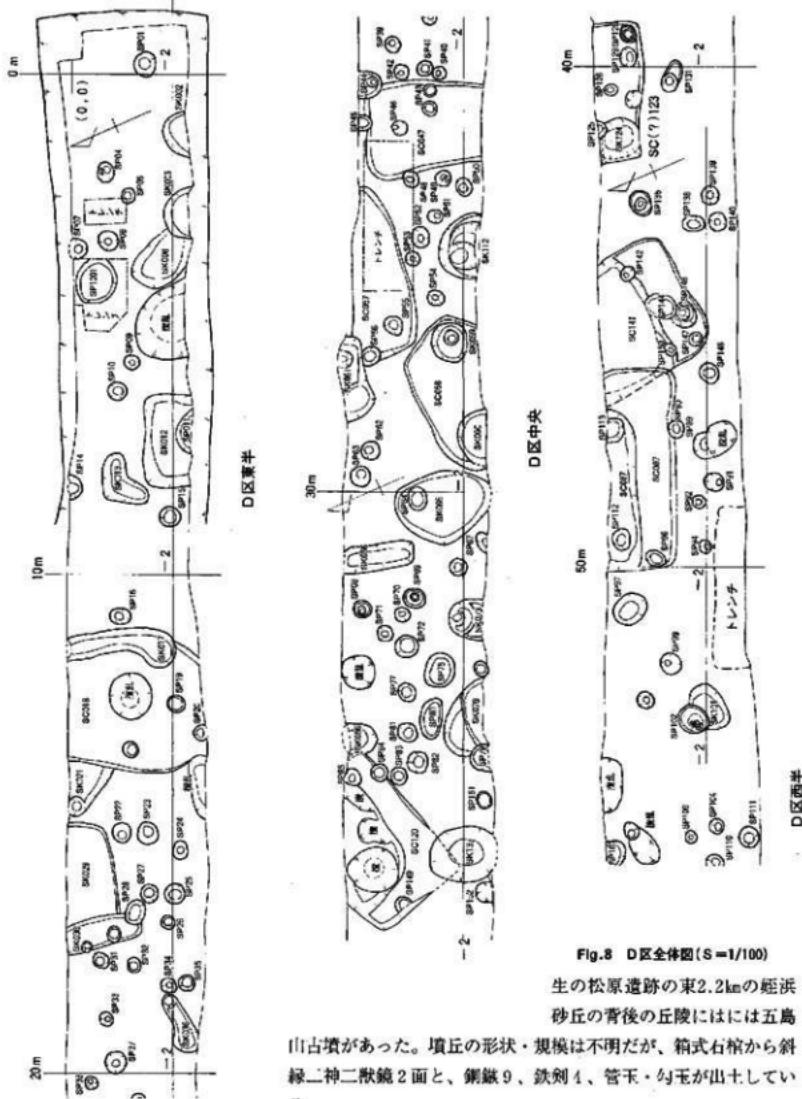


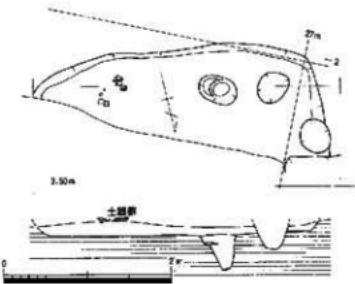
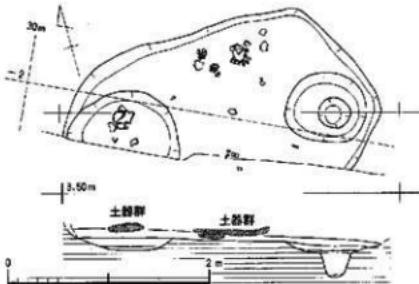
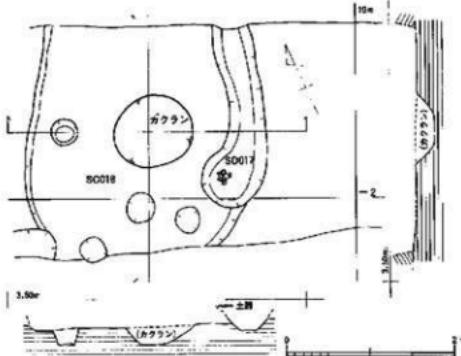
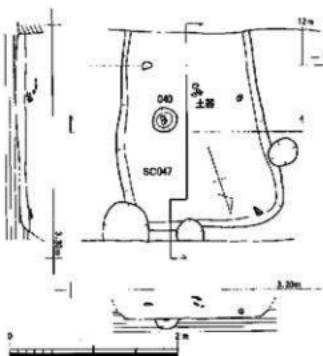
Fig. 8 D区全体図 ($S=1/100$)

生の松原遺跡の東2.2kmの姪浜
砂丘の背後の丘陵にはには五島

山古墳があった。墳丘の形状・規模は不明だが、箱式石棺から斜
縁二神二獸鏡2面と、銅鏡9、鉄剣4、管玉・勾玉が出土してい
る。

かなり豊富な副葬品の質・量であり、すでに消滅しているので憶
測ながら、周囲の地形図と高さから判断すれば、50m規模の前方
後円（方）墳であったのではないだろうか。銅鏡の型式や斜縁神

獸鏡の出土傾向から、古墳時代初頭に位置付けられるこの地域最初の首長墓である。五島山古墳の基
盤となるのは砂丘上にある姪浜遺跡である。生の松原遺跡の北北東2.3kmにある。弥生中期から古墳



前期までの撿点的な集落であり、壺状墓列や弥生中期後半から後期初頭の刀槍上器を含む大量の土器窓があり、弥生中期の石製品とその未製品も注目される。製塩に使用した可能性のある弥生中期の壺も数個体出土している。その他、特筆すべきは、弥生時代において、貝輪未製品、貝製玉、朝鮮系無文土器高杯、漢式三角墜、西部瀬戸内系壺など、内外の広い交流を示す遺物が出土していることである。古式土師器の集落は、同じ砂丘上の古墳時代前期の遺跡で大規模かつ著名な博多遺跡群や西新町遺跡群が古

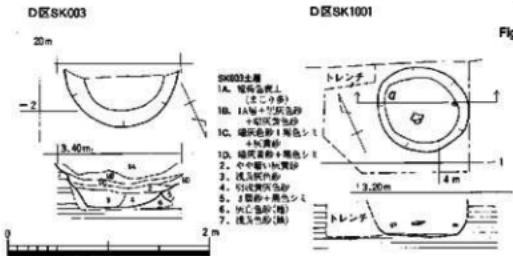
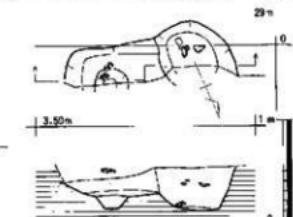


Fig. 14 D区SK003(左)・SK1001平面図・断面図 (S=1/50)





1. D区SC047調査状況(西から)



2. D区SC047調査状況(東から)



3. D区SC018調査状況(南から、中央は桜沼)



4. D区SC058調査状況(北から)
Ph.8 D区調査状況写真(1)

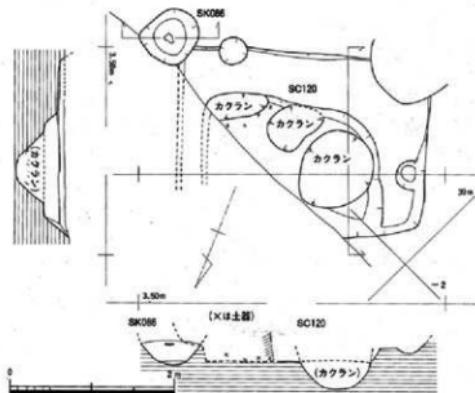


Fig.16 D区SC120平面図・断面図(S=1/60)

遺跡はこれらの集落群への海側の閑門としての位置付けがなされるであろう。なお生の松原遺跡は、今回調査の出土遺物の傾向から見れば、経浜遺跡とは交代的に、古墳中期から

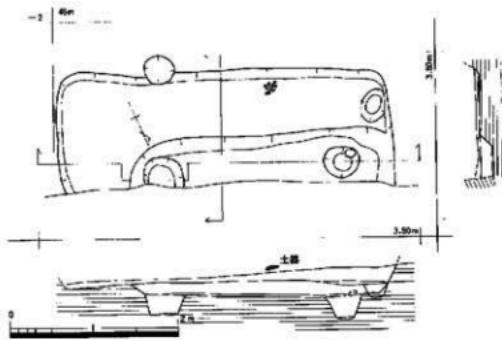


Fig. 17 D区SC087平面図・断面図 (S=1/60)

かに潤った感じないし、わずかに褐色気味の感じであり、あるいは表土直下の表面の黄橙色土まじりの覆土であり、遺構の検出は難解であった。このような状況があるので、遺構下層ないし底面がよく分からず、結果的に掘り過ぎてしまったのではないかというのが多い。しかも、調査の経緯のところで述べたように、事務所に水道を確保できず(週に一度のペースで整理事務所からボリタンク

20個分の水をトラックで運送し、400のタンクに溜め置き使用した)、水が限られたしか使用できず、砂が乾くと真っ白になり遺構がほとんど分からなくなる状況であった。砂地(砂丘)の現場では、特に夏の前後の期間を含むので日射しも厳しく、晴天続きでは砂が乾いてどうしようもなく、十分な水がないと調査に支障が生じることは、こうした現場をされた方々なら経験のあることであろう。同じ砂丘上の今宿遺跡も、遺構検出や重複を見切ることが難しかったが、生の松原遺跡はさらに難しい。今宿遺跡や博多遺跡群など、砂丘上の遺跡の遺構検出や底面の確認は相対的

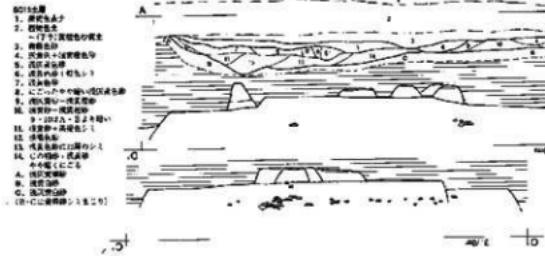


Fig. 18 E区SC14・SC15平面図・断面図 (S=1/60)

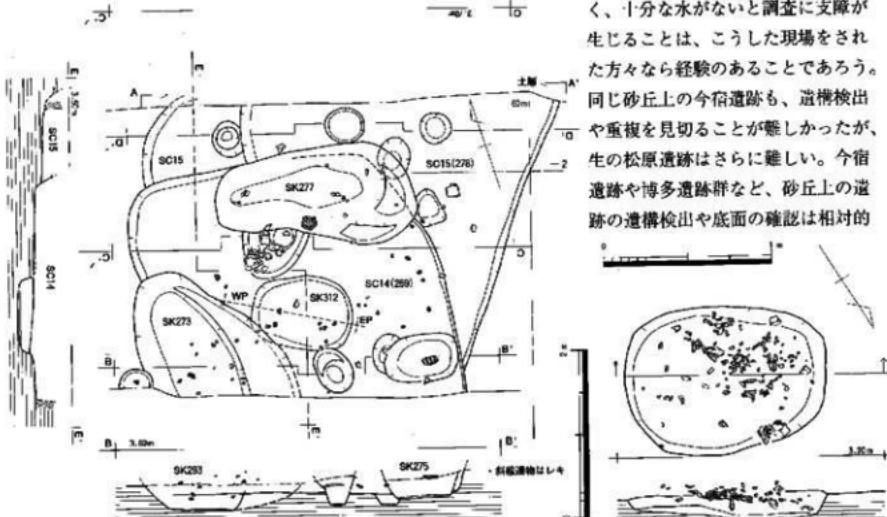
Fig. 19 E区SK312(SC14P)平面図・断面図 (S=1/30)

奈良時代の早良平野西半(室見川左岸)の集落群の閑門になる可能性があろう。

2. 調査の記録

1) 調査の概要

今回の発掘調査では、地表下20~50cmで風成砂の浅黄色砂丘上面となり、ここで遺構を検出・確認している。遺構の覆土は、遺跡の立地の項でも述べたように、不鮮明なものが多く、わず





1. D区SK061調査状況(南から)



2. D区SK1001検出状況(西から)



3. D区SC087(手前)、SC141調査状況(西から)



4. D区SC087調査状況(南から)



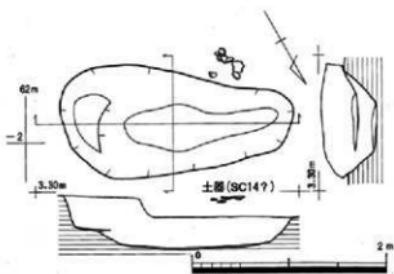
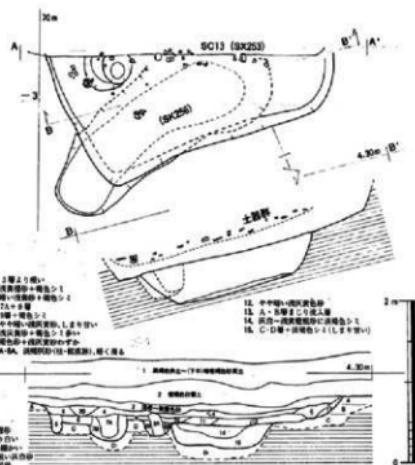
5. D区SC141発掘状況(南から)
Ph.9 D区調査状況写真(2)

に難しい場合が多いが、それでも覆土に暗い褐色系ないし黒っぽい砂が混じることが多く、まだ理解しやすい。生の松原跡ではこれがほとんどなく、そうした土色は、人間活動や植物の活動などによる有機物の働きによるものと考えられるが、ここではそれが少ないので、地盤が安定し、植物(とりわけ樹木)の展開が比較的遅い時期であり、人間の生活の痕跡も比較的限られた時期であるためであろうか。この点、今回は分析していないが、今後花粉分析などによる検討が必要であろう。なお、奈良時代の包含層である表層の黄褐色砂質土層は比較的安定しており、一部ややしまりのある部分もみられる。この時期には地盤が安定した可能性がある。しかし、調査ではこれ以降の遺構・遺物はほとんどみられず、植物腐植土の表土層も発達していない。またこれ以降の砂丘の堆積もほとんどない可能性がある。

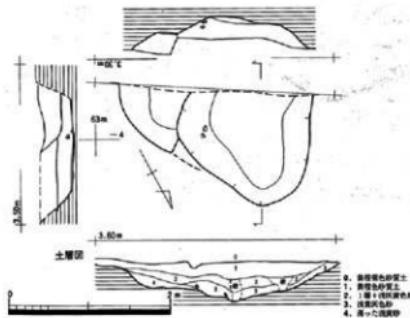
さて、このような遺構の覆土の状況であるので、遺構のプランや深さ、重複関係の確認には、間違っている部分がいくつかあるかもしれないことを取えて断っておきたい。ただし、住居址などの主要な

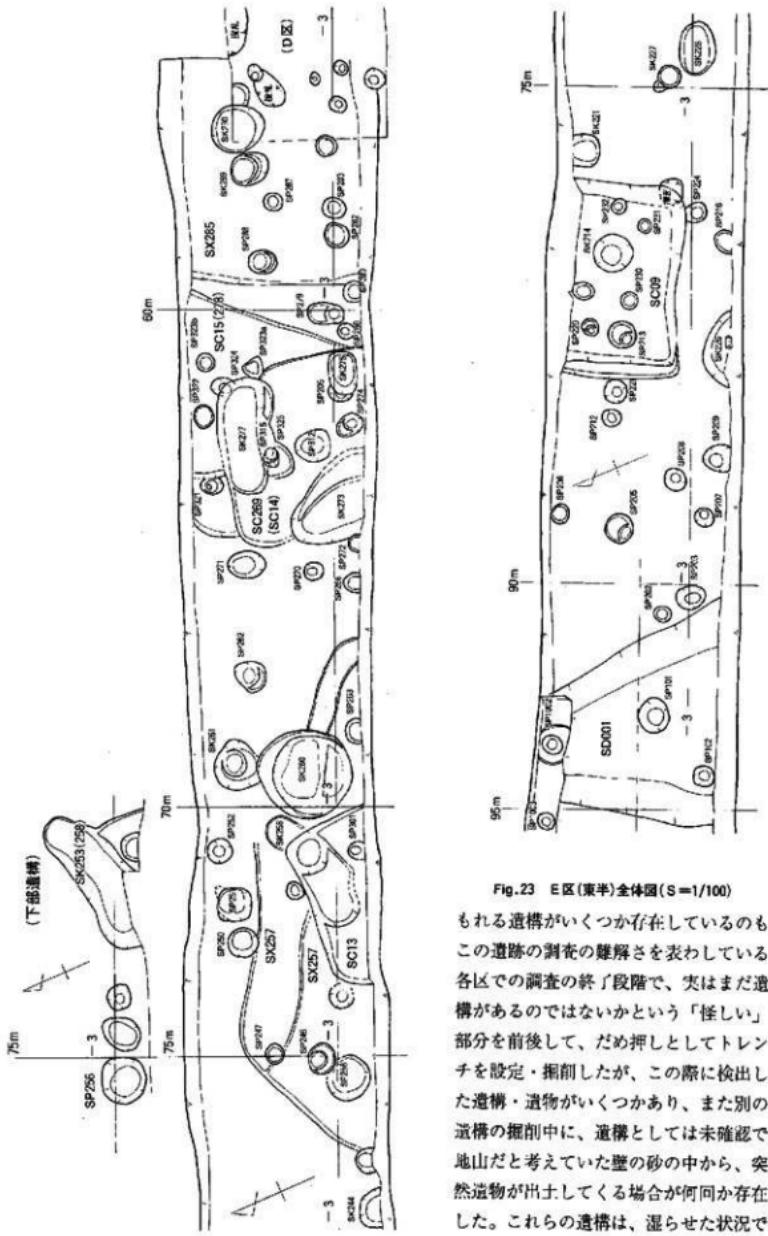
遺構については、こうしたこともあり、土層ベルトを残したり、調査区壁面で土層を確認しながら調査している。

また、確実と思われるもののみを拾っていくと、遺構自体を見落とす可能性が高いので、遺構の可能性があるものは全て掘り下げて確認した。ただし、このために植物の生根や、自然の凹みや堆積した砂の違い(いわゆる「シミ」を含む)を遺構の可能性ありとして掘ってしまったものも少くない、と思われる。ただし、今回は紙幅の都合でそれらを紹介することができないが、遺構検出の際に、まず平板で遺構分布略図($S=1/100$)を作成し、これに確認された遺構の覆土について、その土色と土質をメモし、その特徴から遺構ではないもの(「シミ」や植物の生根、あるいは近年の搅乱と考えられるもの)、ないしその可能性が高いものをチェックしている。今回の報告の各区の全体図では、そうしたもの一部を除去している。このように遺構でないものも含む可能性のある形で、遺構検出・掘削をしたが、それでもその網から



Ph.10 E区東半調査状況 (100mより東、西から)



Fig. 23 E区(東半)全体図 ($S=1/100$)

もれる造構がいくつか存在しているのも、この遺跡の調査の難解さを表わしている。各区での調査の終了段階で、実はまだ造構があるのではないかという「怪しい」部分を前後して、だめ押しとしてトレーナーを設定・掘削したが、この際に検出した造構・遺物がいくつかあり、また別の造構の掘削中に、造構としては未確認で、地山だと考えていた壁の砂の中から、突然遺物が出土してくる場合が何回か存在した。これらの造構は、湿らせた状況で断面を觀察すればわずかに地山との相違

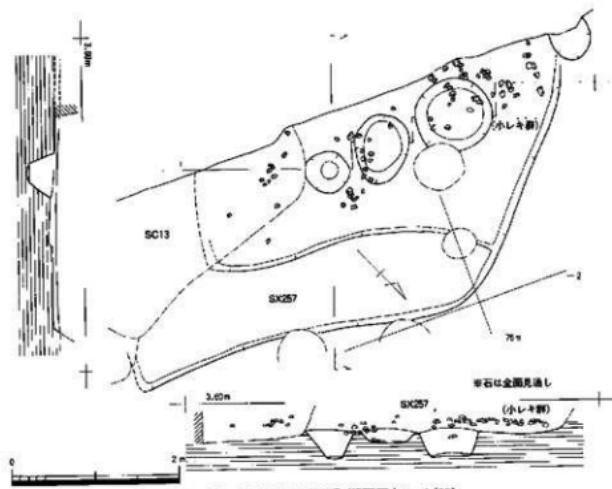


Fig. 24 E区SX257平面図・断面図 (S=1/60)

り、造構検出も慎重に進める必要があり、かつ同時に、大胆に造構の可能性のあるものは、それとし
てとりあえず掘削してみる必要がある。

調査区は、調査の経緯のところでも述べたが、西からA・B・F・C・E・F区である (Fig. 1、付図参照)。調査区の順番

がやや混亂しているのは、A・E区については、当初の段階での調査予定順であり、諸般の事情で調査の順番が異なったものである。F区は後に調査の必要性が生じたため、新たに設定したものである。調査区内の座標は、任意に設定したが、A・B区についてはA区の西の基点から同じ座標軸を用い、「基点から東へ〇〇m」というように説明)、D・E・C・F区についてはD区の東の基点から同じ座標軸を用いている(基点から西へ〇〇m」というように表現)。国土座標との関係については、JRの設定した工事杭に基づき、光波測量機でその関係を求めている(付図参照)。調

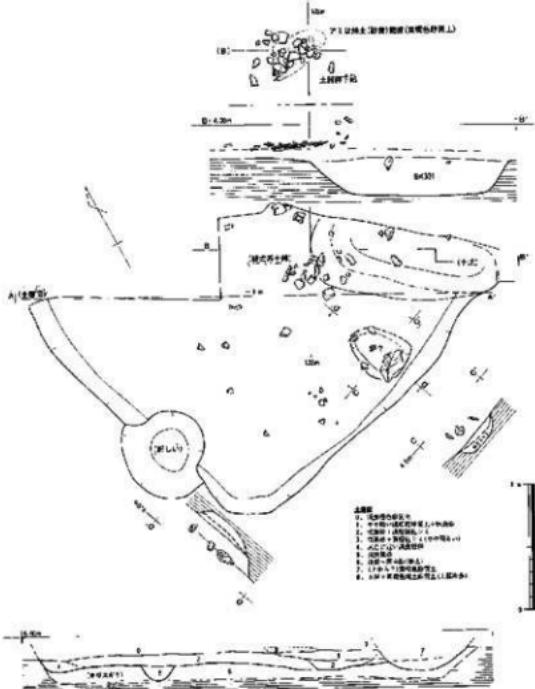


Fig. 25 E区SC02平面図・断面図 (S=1/40)

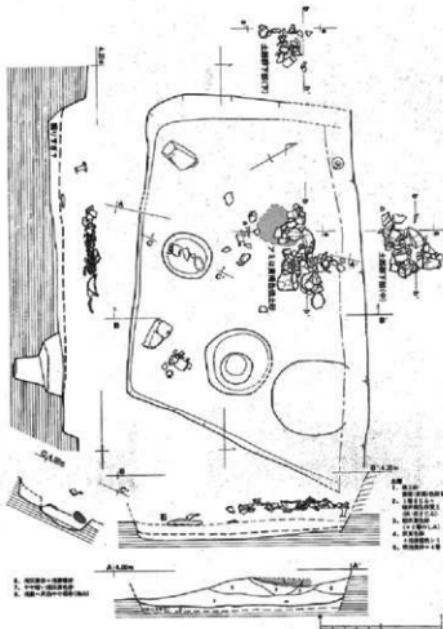


Fig. 26 E区SC01平面図・断面図 (S=1/40)

査区内の標高については、近辺に適当な国土地理院水準点が見当たらないため、やはりJRの設置した測量杭の数値によっている。図面における方位は、磁北を用いている。

2) A区の調査 (Fig. 3、168頁)

A区の調査は、廃土置場の都合上、東西の2区を反転している。座標杭は、調査区の西端付近に基点杭を設定している。A区の層序は、西半は、現地表から1.0~1.2m前後の真砂土や泥土などによる近年の客土があり、その下に旧表土がある。

旧表土上面（旧地表面）より40~50cmで淡黄橙色砂となり、遺構検出面とした。この上にある黄橙色から赤色の砂質土（赤色の方が上部）は、質的にはC区などの表層の包含層の黄褐色砂質に類似するが、A区では遺物はほとんど包含していない。淡黄橙色砂の下部は黄白色砂（風成砂かどうか不明）となっている。A区東半も、まず50~100cmの客土があり、以下同様の層序だが、淡黄橙色砂の下部はやや粗い黄白色砂となっている。淡黄橙色砂面での旧地形は、おおまかには西へ低く東へ高いが、A区東半中央がやや低い感がある。南北では、南へ高くなっている。遺構は、土坑状の遺構と柱穴らしきものを検出した。土坑としたものの中には、風倒木痕なども含まれる可能性があり、柱穴とした



1. E区SC14-15調査状況(北から)



2. E区SC14-15発掘状況、SK312検出状況(北から)



3. E区SC14内SK312調査状況(北から)
Ph.11 E区SC14-15調査状況写真

ものの中には植物の生根がある可能性があるのは前述の通りである。遺構の覆土は黄橙色や、やや黒っぽい灰黄褐色砂などであり（遺構確認状況はPh. 2 参照）、遺物はほとんど出土していない。わずかに古墳時代から奈良時代の土器器および須恵器の小片が遺構や包含層から検出されている。土層から柱穴と思われる A 区 S K 011 や (Fig. 4、5 頁)、東半調査区の S P 021 とその並びの柱穴は確定な遺構である。いずれにしても、A 区は遺構は極めて少なく、遺跡の外縁部のようである。なお、A 区のある部分は九州大学演習林から外れた三角形状の土地の部分であり（付図参照）、すでに J R が土地を取得していたが、この三角形状の土地の北半、A 区の北側は、試掘の結果急激に落ち込んでいて、谷が入るようである。また、A 区基点杭の西側も、試掘の結果、旧表土下の黄橙色から赤色砂質土層が、やや深く落ち込んでおり、ゆるい谷状の地形になるようである。

3) B 区の調査 (Fig. 5、170 頁)

B 区の調査は、A 区の調査終了後行い、その重機による廃土は、A 区とその北の三角部分（前述）に送りだすことができたので、一度に調査することができた。B 区の任意座標軸は A 区と同じで

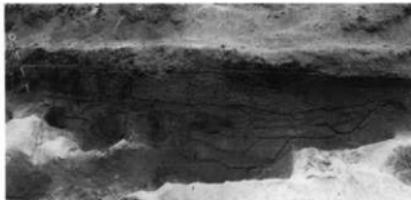
ある。B 区の層序は、その西端では、地表下に客土（A 区の統き）の黒褐色泥土があり（厚さ 40cm）、旧表土、暗橙色～橙色砂質土、浅黄橙色砂と続く。この下の浅黄色砂（風成砂？）の面で遺構を確認している（B 区西端で標高 2.7m 前後）。この面は調査区の中央から東に向かって高くなり、調査区中央付近では地表下 60cm 前後、東側では表土下の表層黄褐色（橙色）砂質土直下の地表下 30cm 前後となる。西側から中央にかけては、浅黄色砂の上部やそれにあたる部分に粗い砂がある場合があり、河川堆積が考えられる。調査区中央からやや東側にかけて（70～86m）、大きな攪乱があるが、覆土は A 区から B 区西半の客土と同様な最近のものであり、以前このあたりに海水浴場客用の臨時の駅があつ



1. E 区 SX257(手前)、SC13(奥中央)調査状況(西から)



2. E 区 SC13 検出状況(北から)



3. E 区 SC13 南壁土層(北から)

Ph.12
E 区 SC13
-SX257
調査状況

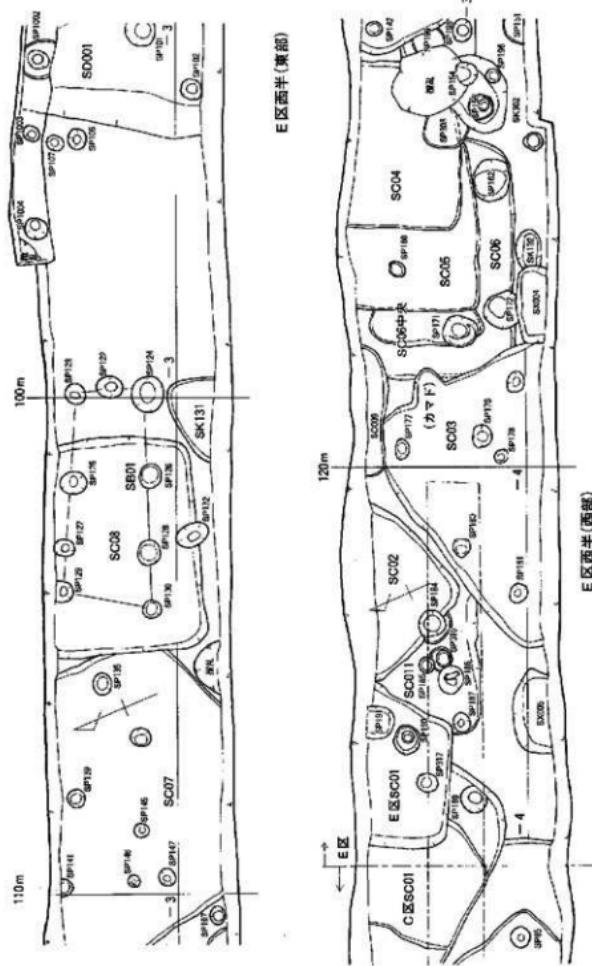


Fig. 27 E区(西半)全体図 ($S=1/100$)

ことや、そのサイズ、集落の終辺部にあることから、土壙墓の可能性を考えておきたい。今後の調査で、周辺にこのようなものが群在するかどうかが興味深い。その他、B区では、顕著な遺構の検出もなく、包含層を含めた遺物の出土はほとんどみられなかった。

4) D区の調査 (Fig. 8、173頁)

調査対象地の東端から西へ約60m部分までをD区として調査した。D区の現在の標高は3.9~3.6mで、調査区東側の方がやや高いが、遺構確認面とした浅黄色ないし黄白色の砂層面は3.1~3.3mであり変わらない。層序は、薄い黒褐色腐食上の下に黄橙色ないし黄橙灰色砂質土、浅黄橙色砂（砂質

たということだが、おそらくそれに関連する掘り込みであろう。

遺構は柱穴と、土坑がある。柱穴は散漫に分布しているが、調査区西寄りにやや目立つ。ただし、柱穴の可能性ありとしたものは、前述のような理山で、植物の生根などを誤って検出しているものが含まれる可能性がある。一方、確実と思われる覆土のものもある（以下の土坑と同様の覆土など）。土坑は、調査区中央やや西寄りで、2基検出している (Fig. 6、Ph. 5)。SK01は、 $1.5 \times 0.8\text{ m}$ の略長方形の土坑である。十層の確認では、本来30cmの掘り込みはあったようである。上面で須恵器が出土した。SK02は、 $1.0 \times 0.6\text{ m}$ の略楕円形の土坑である。遺物は出土していない。二つの土坑は、方位はバラバラだが、近接しており、ごくわずかだが遺物を出土す



Ph.13 E区西部住居跡(1)(SC04より西、東から)



Ph.14 E区西部住居跡(2)(SC03より東、西から)

土)、浅黄色砂と続くが、主にD区東半で焼土混じりではないかとも疑われる赤褐色砂質土が混入する層が浅黄橙色砂質土に相当する部分に存在している（検出面の浅黄色砂の上）。浅黄色砂の下部は、黄白色ないし灰白色の砂層となっている。さらにこの下を試掘すると、標高2.2m付近で湧水層となる（粗砂まじりの浅黄

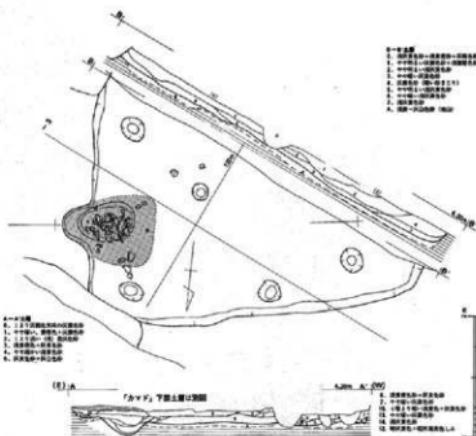


Fig.28 E区SC03平面図・断面図(S=1/80)

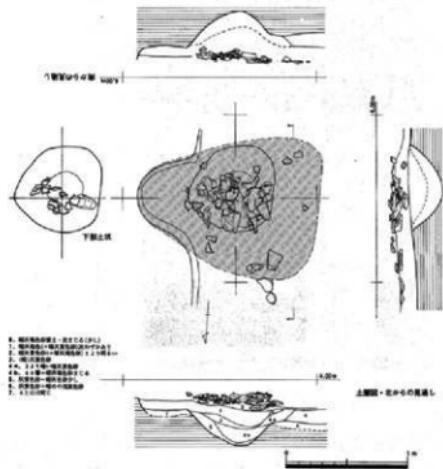


Fig.29 E区SC03「カマド」平面図・断面図(S=1/40)



1. E区SC01検出状況(西から)



2. E区SC01下部出土状況(南から)



3. E区SC01発掘状況(西から)



4. E区SC01南北土層(東から)



6. E区SC01中央土器群下部出土状況(北から)



5. E区SC01中央土器群出土状況(上部、北から)

Ph.15 E区SC01調査状況

白色砂)。確認した遺構は、調査区全体に分布し、竪穴住居址およびその可能性のあるもの9棟、土坑15基前後、柱穴多数などがある。もちろんD区でも、土坑としたものは風倒木なども含まれる可能性があり、柱穴としたものには植物の生根などが含まれる可能性がある。なお遺物は、遺構からは主に古墳時代の土師器が、検出面より上部の包含層では、古墳時代から奈良時代の土師器や須恵器が出士している。量的ないし、密度的には、次のE区やC区での出土量ほどではない。住居址とした遺構からの土器の出土量も、理由は不明ながら、総じて少ないものが多い。以下では、紙幅の都合上、主要な遺構についての概要を述べたい。

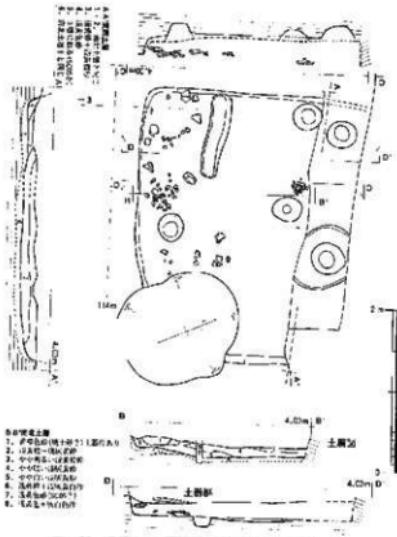


Fig.30 E区SC04平面图·断面图 (S=1/60)

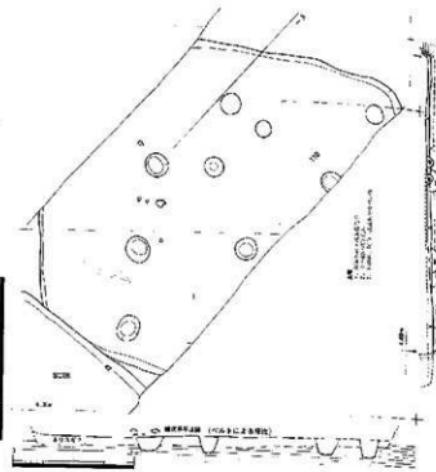


Fig.31 E区SC07平面图·断面图 (S=1/60)

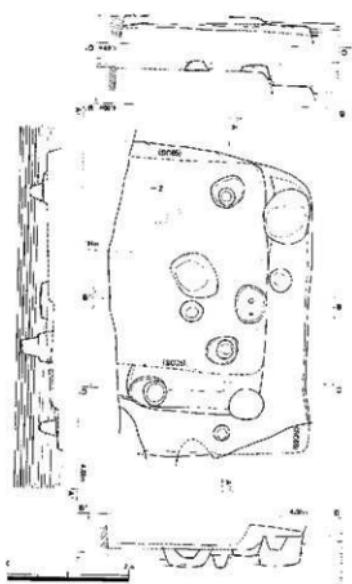


Fig.32 E区SC06平面图·断面图 (S=1/60)

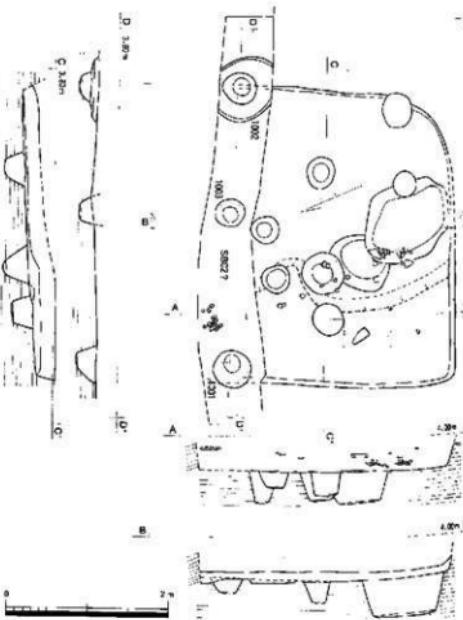


Fig.33 E区SC05-SB02平面图·断面图 (S=1/60)



1. E区SC02検出状況(北から)



2. E区SC02実測掘出土状況(南東から)
Ph.16 E区SC02調査状況



3. E区SC02被張部上層出土状況(南西から)

後、南北2.7m以上の長方形ないし梢円形。中央の穴は搅乱で、東側をS D017に切られるが、この溝は同じ遺構の覆土の違いを掘ってしまった結果の可能性がある。溝の上面より若干の土器が出土している。確認できた遺構は浅いが、本来はより上面からの掘り込みがあったと考える。

・D区SC058 (Fig.11, 174頁、Ph.8-4) 28m付近で検出。東西3.2m、南北1.7m以上の不整梢円形（長方形？）の住居址。

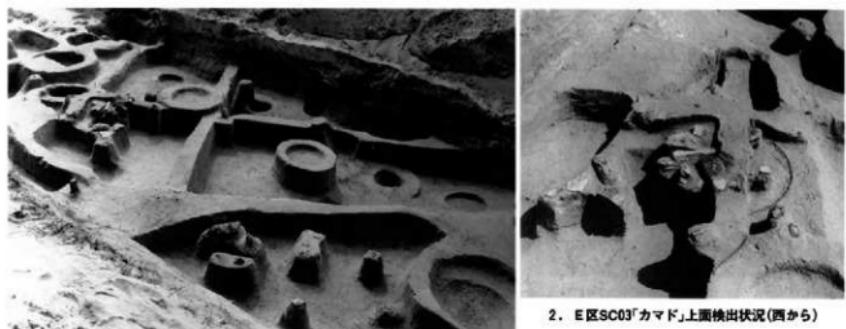
床面の東西に土坑、ないし柱穴がある（土坑059、060）。西側のSK060の上部と、中央部分やや北に、やや集中して土器が出土。浅いが、本来の掘り込みはより上にあろう。SK060が新しい可能性もある。

・D区SC057 (Fig.12, 174頁) 27m付近で検出。東西3.4m、南北1.7m以上の長方形。北西側をSK061に切られる。東側でやや浮いて土器が出土。掘り込みは20cm程度を確認。

・D区SC029 (Fig.13, 174

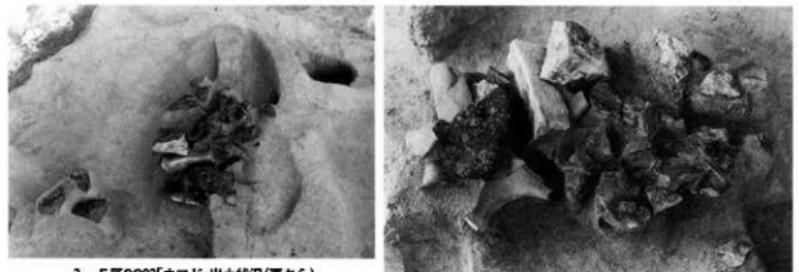


Ph.17 E区SC02実掘状況(南西から)



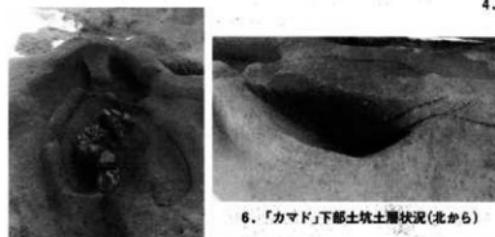
1. E区SC03検出状況(手前はSC02、北から)

2. E区SC03「カマド」上面検出状況(西から)



3. E区SC03「カマド」出土状況(西から)

4. E区SC03「カマド」近景(南から)
Ph.18 E区SC03調査状況



5. 「カマド」下部検出状況(西から)

頁) 16m付近で検出。東西
2.5m×南北1.1m以上の長方形の
住居址ないし土坑。床面近くで検
出したが本来はより深いであろう。
西側を溝状のSK030に切られる。



7. E区SC03発掘状況(東から)

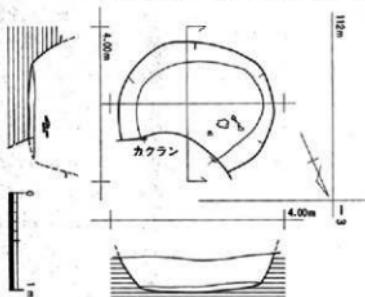
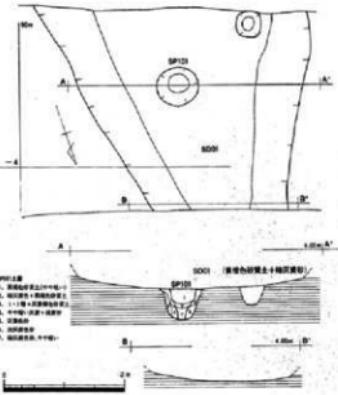
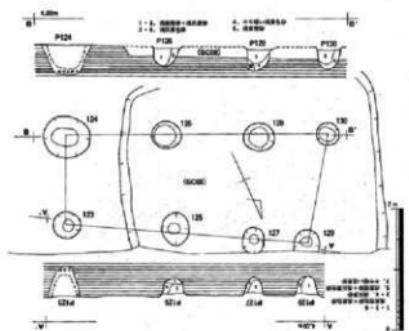


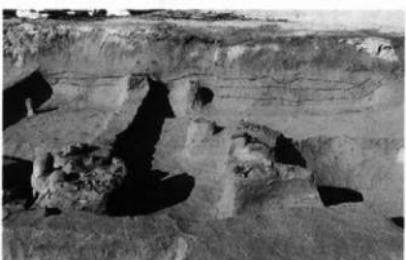
Fig. 34 E区SK02平面図・断面図 (S=1/50)



S K030は、幅60cm前後の溝状の土坑。柱穴3つが伴うようであり、横列などの可能性がある。S C029は、東側で浮いてわずかに土器が出土。

・D区 S K003 (Fig.14左、174頁、Ph.9-2) 3m付近で検出。径1.2m、深さ35cmの土坑。包含層の黄褐色砂質土が落ち込み、やや新しい遺構か。遺物は古墳中?後期の土器片出土。

・D区 S K1001 (Fig.14右、174頁) 5m付近で検出。当初は確認できず、怪しいと思った場所にトレンチを設定して検出。径90cmの土坑で、本来の深さは30cm以上。弥生後期後半の土器が出土。覆土は地山の風成砂とほとんど変わらない。今回の調査では、最も古い遺構である。



Ph.19 E区SC04-05-06写真

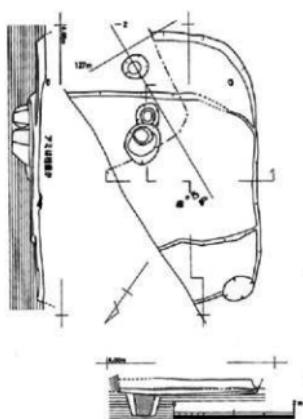


Fig. 37 C区SC01平面図・断面図 (S=1/80)

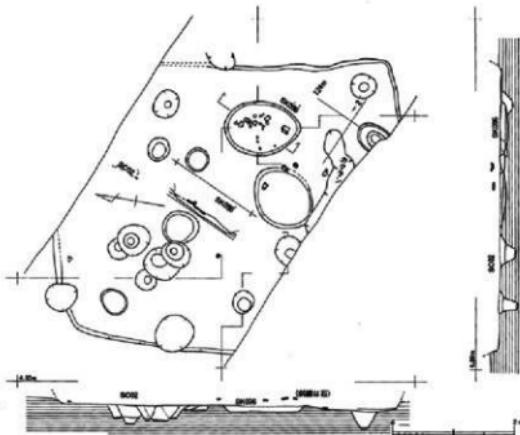


Fig. 38 C区SC02平面図・断面図 (S=1/80)

・D区SK061 (Fig. 15、174頁、Ph. 9-1) 28m
付近で検出。東西1.7mの長方形または楕円形の土坑。
二つのピットの重複に見えるが、同一の造構と判断した。
西側下層と、東側上層で土器片が出土し、接合する。

・D区SC120 (Fig. 16、175頁) 38m付近で検出。
南北3.1m、東西2.2m。中央が若干凹むが、あるいは
周囲はベッド状造構か。擾乱が多く、残りはよくない。
製塩土器片を下層より出土。

・D区SC087 (Fig. 17、176頁、Ph. 9-3, 4) 48m

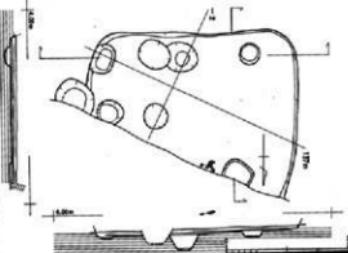


Fig. 39 C区SC03平面図・断面図 (S=1/80)



Ph.20 E区SB01及びSC08(奥はSC07、東から)



Ph.21 E区SD01概観状況(東から)

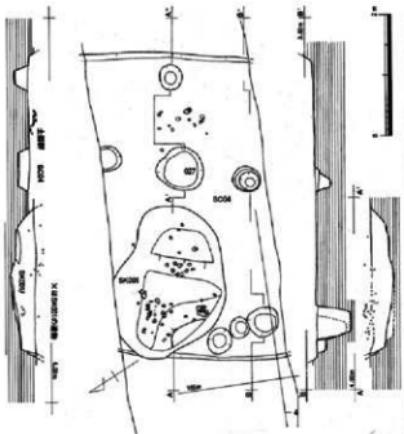


Fig. 40 C区SK001-SC004平面図・断面図 (S=1/80)



Ph. 22 C区東半(東部)調査状況(東から、手前はSC01)

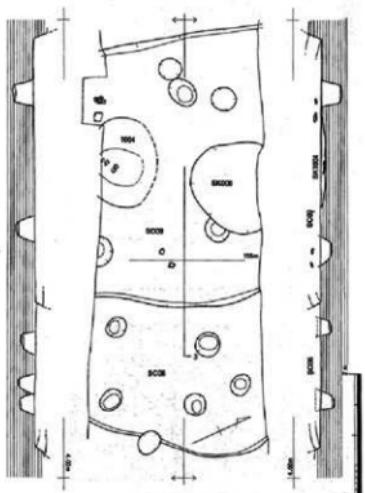


Fig. 41 C区SC06-09, SK008-1004平面図・断面図 (S=1/80)



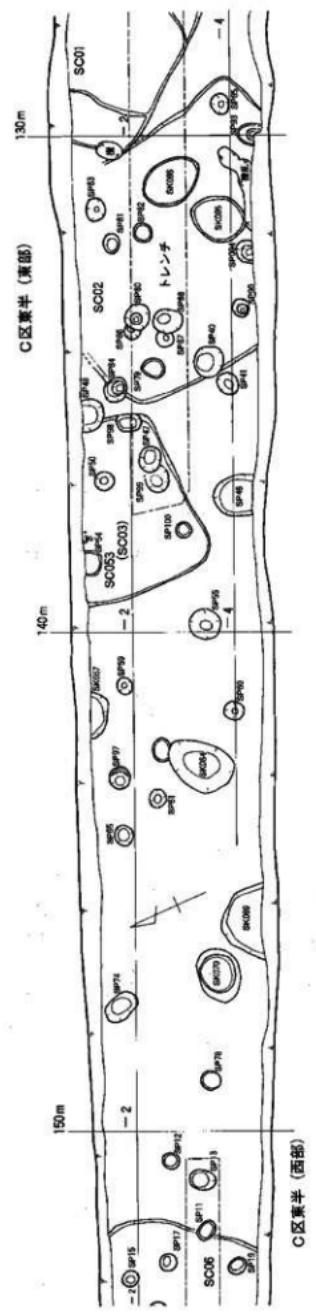
Ph. 23 C区東半(西部)調査状況(西から)

前後で検出。東西4.0m、南北1.6m以上。周囲

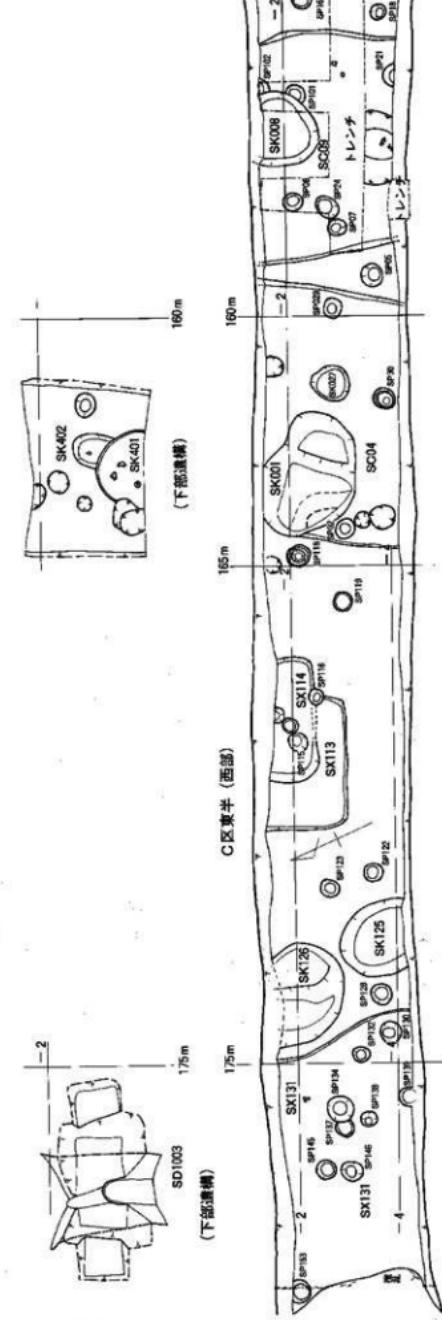
が高いベッド状を呈する。中央の一段低い部分の床面に柱穴2つあり。「ベッド」？上部から浮いて土器が出土。西側の柱穴の上からも土器が出土。

・D区SC141 (Ph.9-5) —— 45m付近で検出。遺物の出土はないが、調査区壁面の土層の検討より、堅穴住居と判断した。東西2.5m、南北2.6m以上。南側が「ベッド」となるか。SC087に切られる。

C区東半(東部)



C区東半(東部)



C区東半(西部)

Fig. 42 C区東半全体図(S=1/100)



Ph.23 C区SK01調査状況(北から)



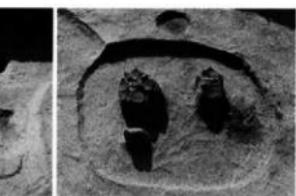
Ph.24 C区SC02調査状況(北から)



Ph.25 C区SK096(SC02内)出土状況(東から)



Ph.26 C区SC04検出状況(北から)



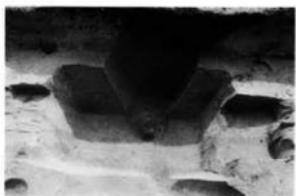
Ph.27 C区SK1002出土状況(北から)



Ph.27 C区SK001出土状況(西から)



Ph.28 C区SK008出土状況(南から)



Ph.29 C区SD1003検出状況(北から)

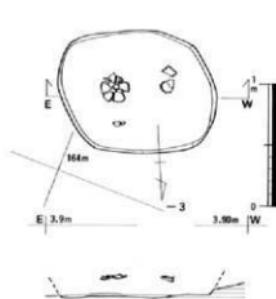


Fig.43 C区SK1002平面図・断面図(S=1/40)

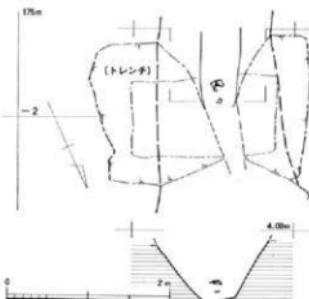


Fig.44 C区SD1003平面図・断面図(S=1/60)

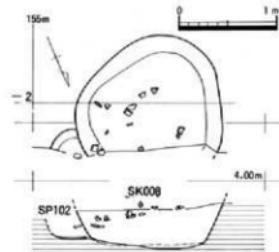


Fig.45 C区SK008平面図・断面図(S=1/50)

5) F区の調査 (Fig. 7、
Ph. 6)
説明が前後するが、「大

谷RC踏切」の西側の一部は、B区の調査の際にはJR側の施行業者の事務所があり、未調査であったもので、調査の最終段階でそれを除去して調査したものである。踏切に延びる道路の敷設のため、現地表から50-80cmは真砂土の客土がなされ、さらに旧地表から60-80cmで造構検出面とするが、これは浅黄色砂層を少し下げる面である。この標高は3.6-3.8m前後である。B区の検出面より低いのは、実際に旧地形が低いことと、擾乱が多く、検出面を下げたということもある。浅黄色砂の上部は、下から、浅黄橙色砂、黄褐色砂質土となっているが、古墳時代後期から奈良時代の遺物を若干包含しており、道路の反対側（東側）のC区の包含層の続きとみられる。

検出された造構は、柱穴と土坑の可能性のあるものがあるが、植物の生根や風倒木痕の可能性もあるものが多い。実際の人为的な遺

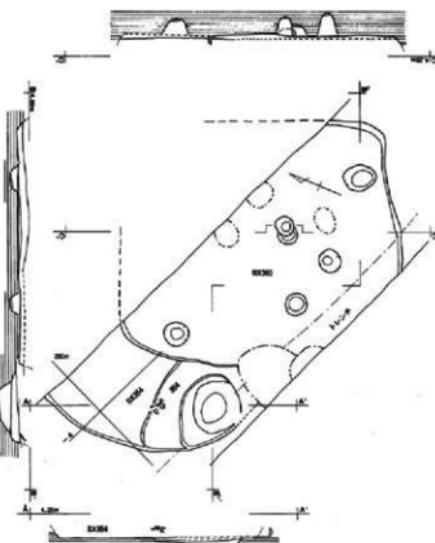


Fig. 46 SX360-354平面図・断面図 (S=1/80)

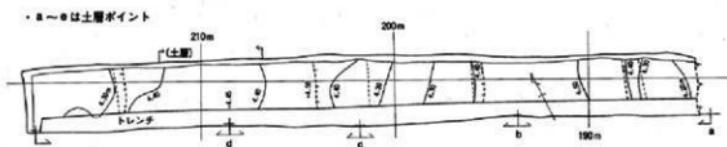


Fig. 47 C区西半第1面造構地図地形図 (S=1/250)

構はやや少ないであろう。遺物も、造構面からはわずかしか出土せず、むしろ上部の包含層や擾乱から出土している。

6) E区の調査 (Fig. 23、179頁、Fig. 24、183頁)

E区は、D区の西に位置し、D区東端の基点から56m-128m付近である。現地表の標高は、E区東側で3.7m、西側で4.1mを測る。

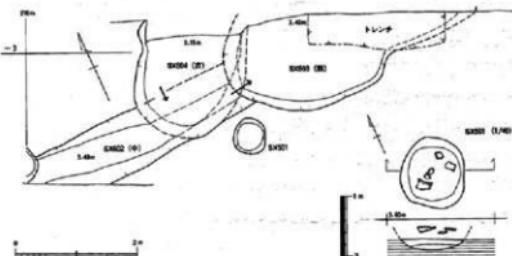


Fig. 48 C区西半第4面造構図 (S=1/80, 1/40)



Fig. 50 C区西半第1面造構地層状況 (西から)

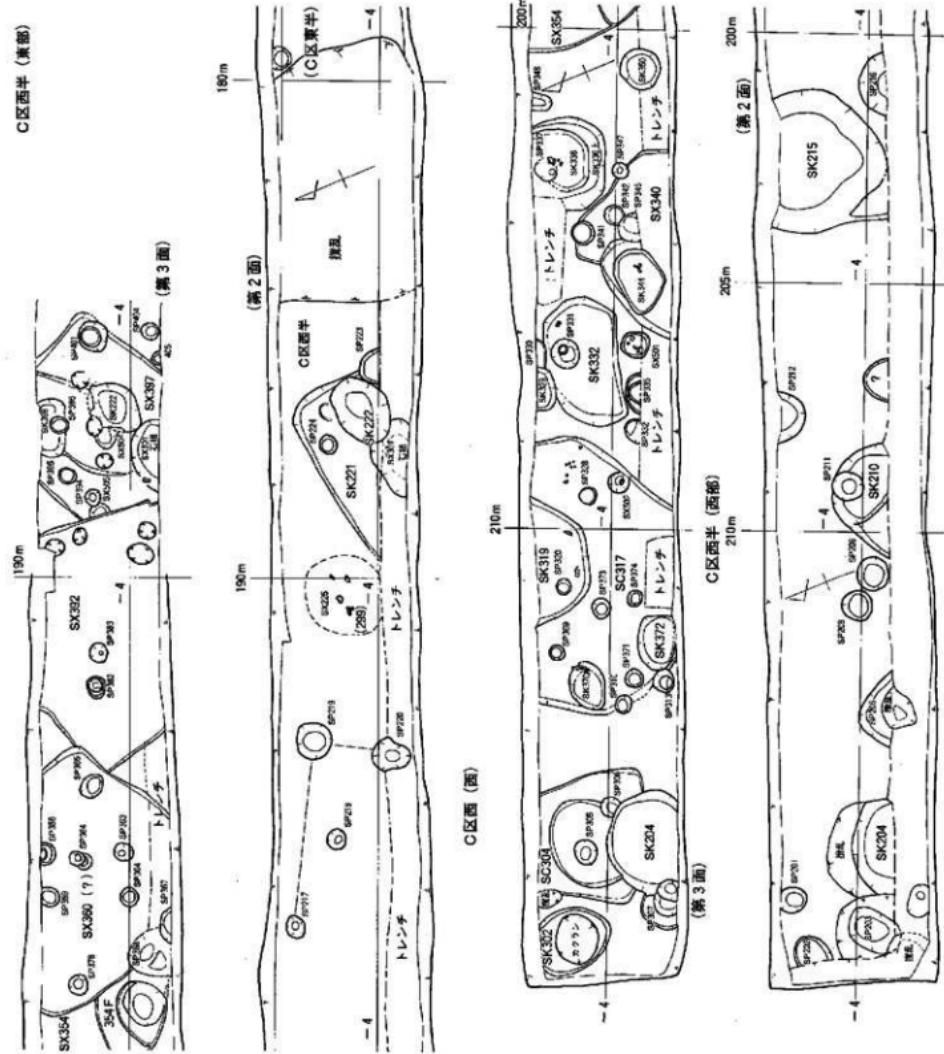


Fig.49 C区西半第2・3面全体図(S=1/100)

層序はおむね、上から、黒褐色腐植土（表土）、暗褐色砂質土、黄褐色砂質土、明黃褐色砂、浅黃色砂（風成砂）となり、この浅黄色砂を少し下げたところで遺構を検出した。浅黄色砂の上面は、3.2～3.6mを測る。E区では、比較的多くの遺構・遺物を検出した。特に西側では、古墳時代前期～中期の住居址群が重複している。検出した遺構は、E区東半（Fig.23）では、堅穴住居（の可能性のあるもの）4棟、上坑8基以上、溝状遺構1条、不明遺構1基、柱穴多数が、西半（Fig.27）では、堅穴住居9棟？、掘立柱建物2棟？、十坑6基前後、柱穴多数がある。なおこれらの中には、これまで



Ph.31 C区西半第2面調査状況(東から)

ら奈良時代にかけての包含層を形成している。ただし、後述するC区西半ほどの量は出土していない。前述したように、E区の北側隣接地の数ヶ所を施行業者が不注意で無断掘削してしまっているが、その廃土からも古墳時代から奈良時代の多くの遺物を検出したが、一部は遺構出土の遺物と接合した。



Ph.32 C区SX299出土状況(西から)



Ph.33 C区SX225(一部)出土状況(西から)

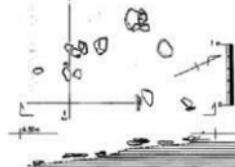


Fig.50 C区SX317平面図・断面図 (S=1/80)



1. C区SX301検出状況(北から)



2. C区SX301土坑平戦状況(北から)



3. C区SX301完掘状況(東から)

Ph.34 C区SX301石組遺構調査状況

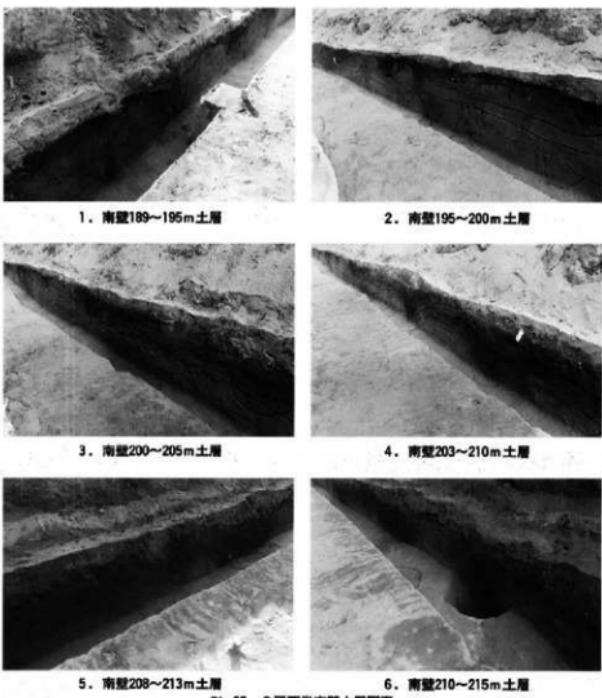
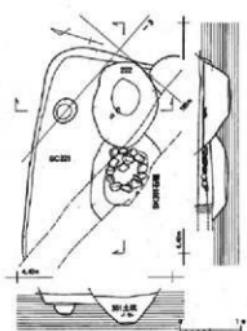
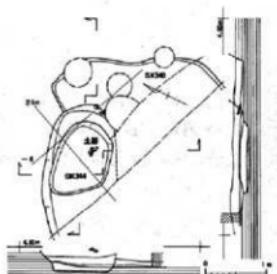


Fig. 52 C区SX221-222-SK301平面図・断面図 (S=1/60)



5. 南壁208～213m土層 6. 南壁211～215m土層

Ph.35 C区西半南壁土層写真

この無断削削されてしまった場所から出土した遺物も今回紹介するので、その場所を記しておきたい。D区基点から、67-73m地点の北側隣接地 (①)、97-102m (②)、109-117m (③)、137-143m (④)、169-176m (⑤)、188-197m (⑥) の各北側隣接地であり、径6~9mの範囲を掘削している（なお、

※ 1～5は大割土層(土色・土質の大割)、A～Z(イーク)は細別土層(今後は詳細省略)・大割土層は本文参照。

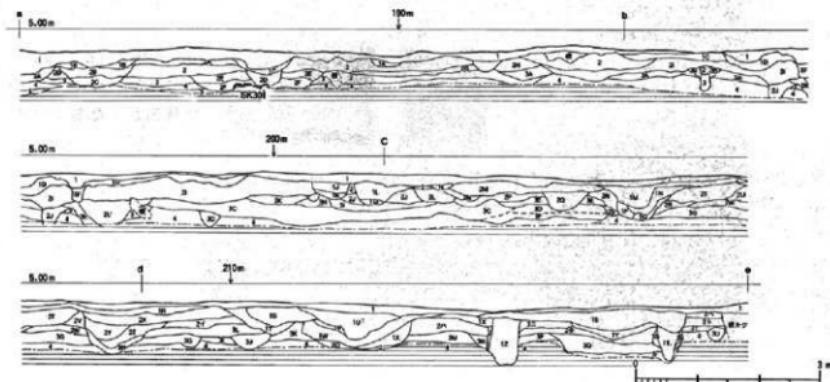


Fig. 54 C区西半南壁土層図 (S=1/60)

④⑤⑥はC区の隣接地)。以下、各遺構について説明するが、紙幅の都合上、主要な遺構についての概要のみを記述するにとどめる。

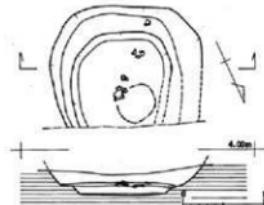


Fig. 55 C区SK336平面図・断面図 (S=1/60)

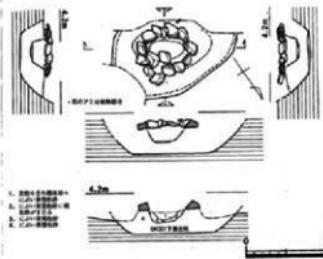
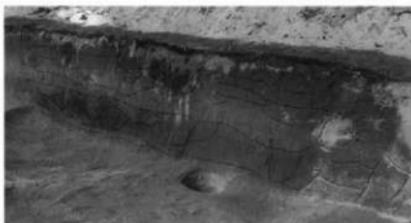


Fig. 56 C区SK301平面図・断面図 (S=1/60)



Ph. 36 C区西半北壁207~212m土層(南から)



Ph. 37 C区西半第3面調査状況(東から)



Ph. 38 C区西半第3面SX319-317他(東から)



Ph. 39 C区西半第4面調査状況(手前SX601、西から)

・E区SC14 (SC269) (Fig.18、176頁、Ph.11、181頁) 63m付近で検出。SC15を切り、SK277とSK273に切られる。東西3.4m×南北3.0m以上の略方形。中央に、小角碟を集めた炉址がある (SK312) (Ph.11-3、Fig.19)。小碟は被熱して黒くなつた感がある。遺物は、中央の土坑の上層に土器片の集中がややあり、その他は散漫に床面から浮いて出土する。土器片の他、小円・角碟が若干出土する。SK277は、2.4×1.2mの長楕円形の土坑。深さ60cm (Fig.21、178頁)。古墳時代の土器片を出土するが、これらは本来SC14のものか。SK273は径1.5~2.0mの不整形の土坑。深さ40cm。プランが明瞭ではなく、壁面がよく分からなかった。人為的な遺構というより、風割木痕などの可能性もある。小碟が散漫に出土。

・E区SC15 (SC278) (Fig.18、Ph.11) SC14に切られる住居址。東西4.5×南北3.5m以上の不整形。西側はベッド状に一段高い。床面より柱穴をいくつか検出。土器片は浮いた状態で出土しているが、遺物は絶じて少ない。

・E区SC13 (SC253) (Fig.20、178頁、Ph.12、182頁) 72m付近で検出。SX257を切る。東西3.5×南北1.8m以上。深さは、掘り過ぎたので土層で観察すると、30cmは確認できる。土層の観察から、柱穴2つには柱痕跡があり、また東西には壁溝の痕跡がある。SK258は、SC13に切られるもので、3.0×1.2mの溝状の土坑。プランがやや不明瞭で、遺物は見られず、自然の遺構の可能性あり。

・E区SC01 (Fig.26、181頁、Ph.15、185頁) 126m付近で検出。C区SC01を切る。東西2.5~3.2m、南北1.9m以上。深さは、掘り過ぎ気味なので、土層の観察では25cmを確認。中央上層を中心に、主に浮いた状態で高壇・壺を主とする古墳中期の土器群を出土。一括土器の部分は焼土が一部混入。そのほか、碟も出土。床面には柱穴2つを確認。

・E区SC02 (Fig.25、180頁、Ph.16、17、187頁) 123m付近で検出。SC01との切り合いは微妙で不明。東西3.0m以上×南北2.6m前後の方形。全体的に掘り過ぎてしまったが、掘り込みは土層から20cm前後確認。東辺中央に小土坑があり、大小の石を4つ立て並べており、全て被熱して赤くなっているので、炉址であろう。北側拡張部分からは、長さ1.5mの楕円形の土坑を検出。この土坑の西脇から、やや浮いた状態で焼土とともに韓式系土器の破片を多く出土。そのほか、遺物（土器片）は散漫に出土。



Ph.41 D区SC58出土土器

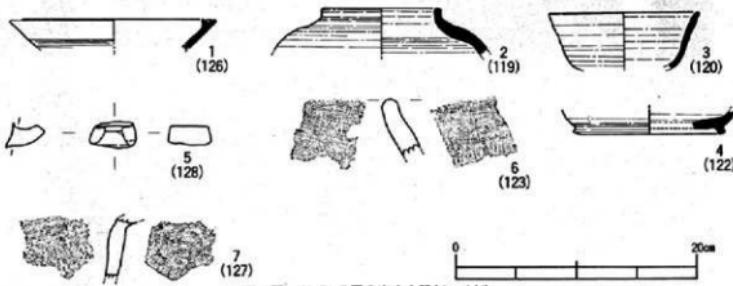


Fig.57 A-B-F区の出土土器 (S=1/4)

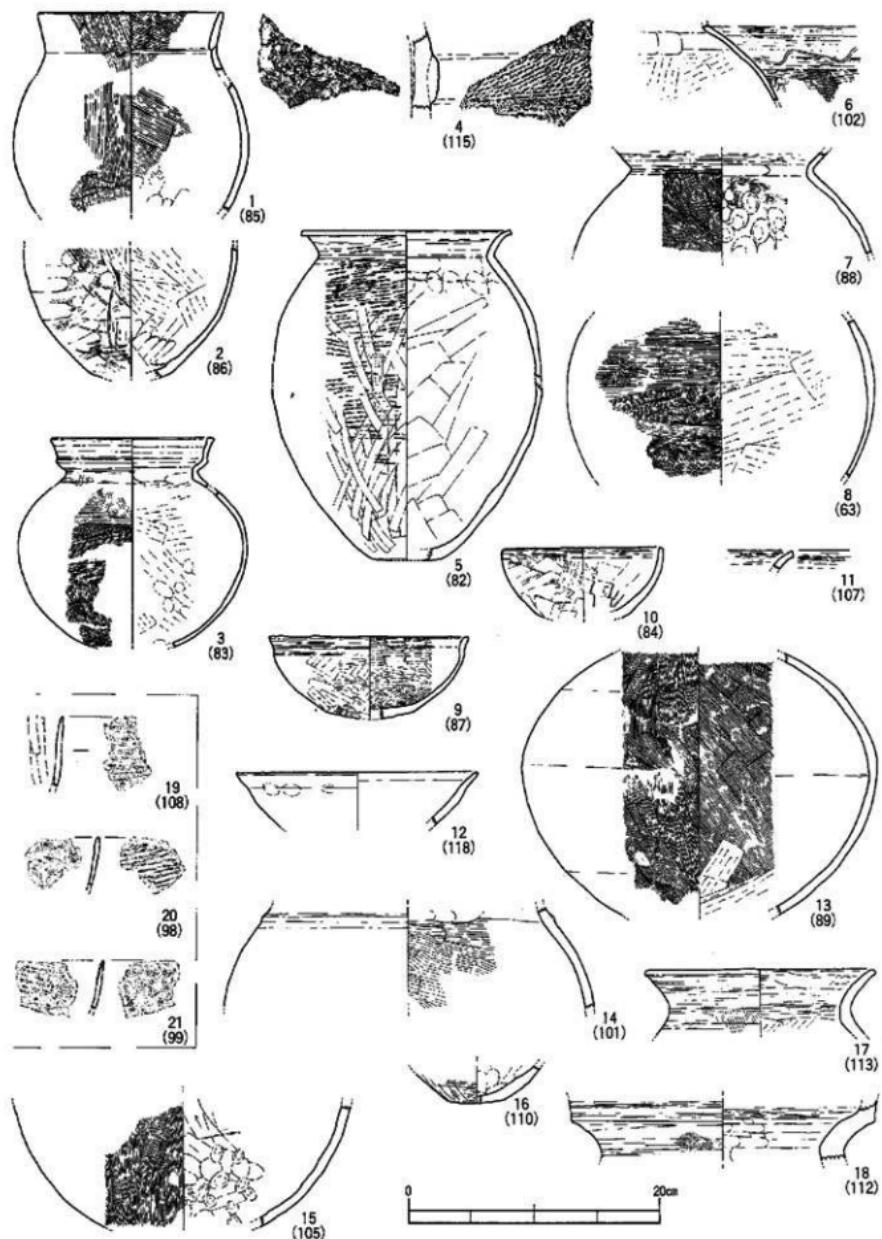
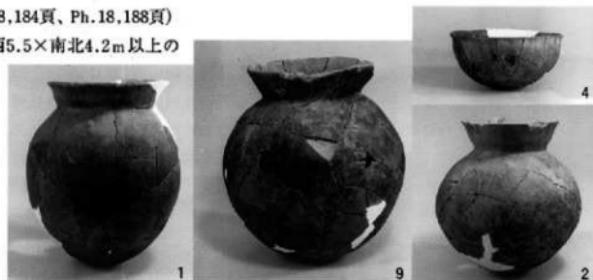


Fig. 58 D区の出土土器 ($S=1/4$)

・ E 区 S C03 (Fig. 28, 184 頁, Ph. 18, 188 頁)

120m付近で検出。東西5.5×南北4.2m以上の方形住居。深さは30cm
前後を土層より確認。
床面には、住居に伴う
柱穴が5つある。東邊
の中央よりやや北で、
壁のラインより外へ突
出した部分を当初検出
し、検出面では炭粒合
みの暗灰褐色（灰が混



Ph. 42 E 区 SC01 出土土器(番号は Fig. の()内番号)

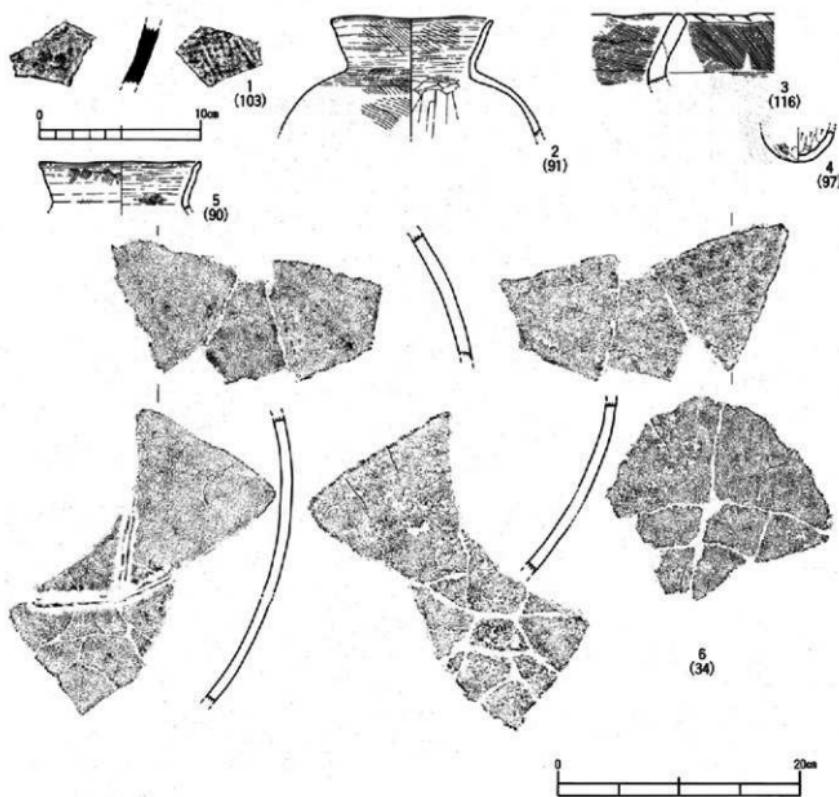
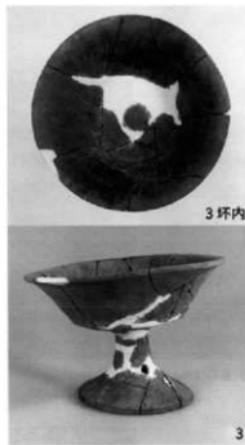


Fig. 59 D・E 区の出土土器 (S = 1/4)



じったような) 砂質土で(図のアミの範囲)、これを取り除くと主に扁平な石(主に頁岩など。一部花崗岩)を集積したような遺構を検出した(Fig.29, Ph.18-3.4)。

この石の集積に挟まるように陶質土器の壺や韓式系軟質土器の壺の破片を検出。遺物はこの集石遺構の周囲に散在して出土。集石遺構は、整然と石が積まれたものではなく、土



Ph.43 E 区SC01出土高壺

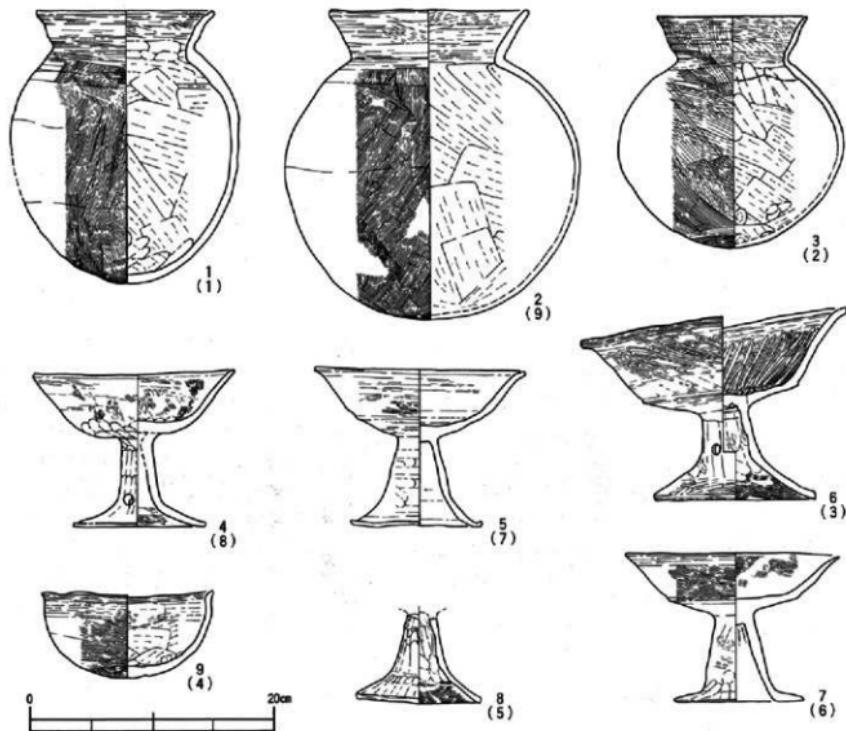


Fig.60 E 区の出土土器(1)(S=1/4)

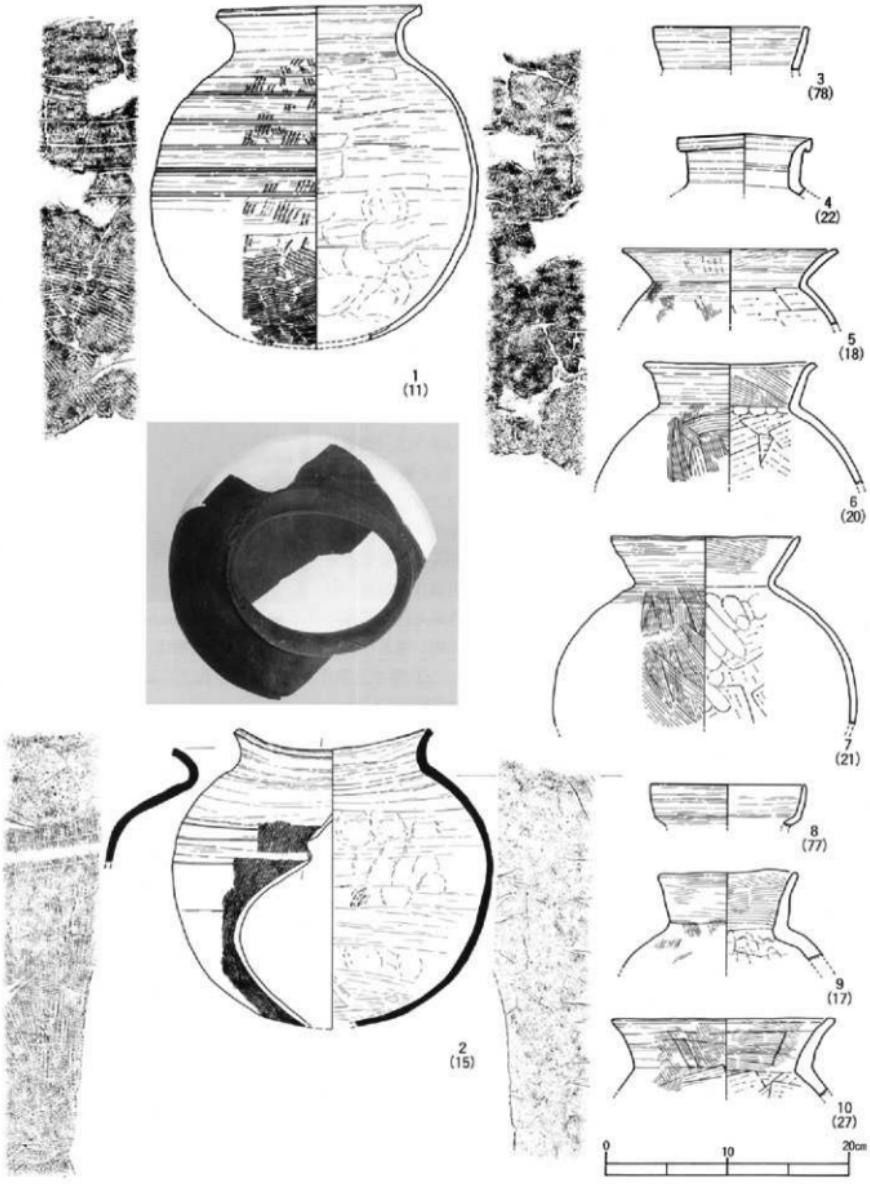


Fig. 61 E区の出土土器(2)(S=1/4)

器片が挟まっているなど、本来の姿を反映していないと考えるが、平面プランがカマドのそれに類似し（住居の壁の外に煙道が出る型式）、甌と壺がセットで周囲で出土していること、確認時に火の使用を思わせる覆土であったことから、カマドに類する施設と判断し、本来は石で積まれたものであったのが、廃棄時に取り壊し、土器を破碎して石とともに集めたものではないかと考える。なお粘土は検出していない。集石の下部には土坑を検出。出土遺物は、高坏1点と土師器の壺の破片以外は、陶質土器の壺、韓式系軟質土器の甌と瓶であり、渡来系の匂いがする様相である。したがってこの集石施設も、類例は不明ながら、やはり韓半島系の施設ではないかという予想が可能で、今後問題となる遺構であろう。



Ph.45 E区SC03出土陶質土器(1)

• E区SC04 (Fig.30、
186頁、Ph.19-1, 2, 189頁)

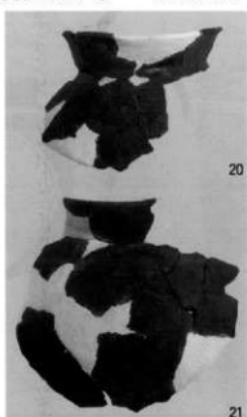
114m付近で検出。東西3.3×南北2.7m以上の方形住居。やや掘り過ぎたが、土層から20cm強の掘り込みを確認。南側は一段高い床面の可能性あり。床面西半



Ph.44 E区SC02出土韓式系土器(1)
に、東西の細い溝あり。仕切り板の溝か。遺物は、主に南半で、上層に浮いた状態で土器片と砥石、礫が出土。より古いSC05, 06の建て替えだろう。

• E区SC05 (Fig.33、186頁、Ph.19-3) S C04と重複する住居。

S C04より床面が低い。東西3.5×南北3.0m以上の方形、床面より複数の柱穴や土坑を検出。遺物は、南半中央下層と、上層にまばらに出土。なお、北側拡張区で検出された3つの柱穴は(S P 1002~1004)、S C04~06に伴う可能性もあるが、一定間隔で並んでおり、別の建物か(S B02)。(※なお、Fig.27のE区東半全体図の103m付近の北側に挿入しているS P 1002~1004の位置は誤りで、20m西へ挿入すべきで、Fig.33の位置が正しい。)



Ph.46 E区SC04出土土器

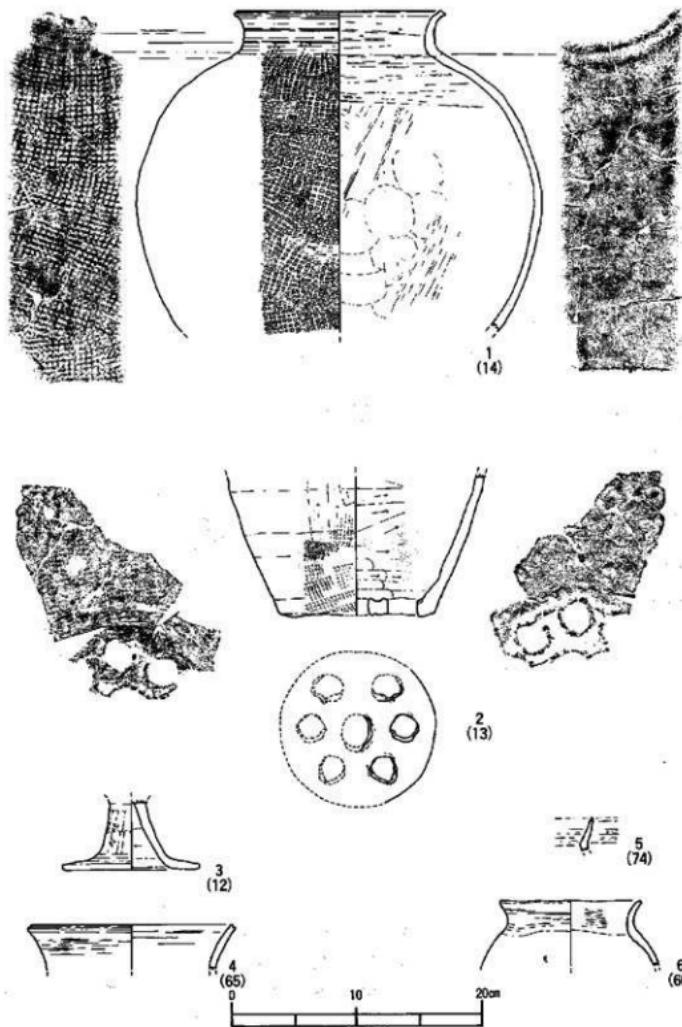


Fig. 62 E区の出土土器(3)(S=1/4)

• E区 S C06 (Fig.32、186頁、Ph.19-4) S C04,05に切られる住居で、ひとまわり大きい。東西4.9×3.4m以上の方形、中央部の深さは40cm。南と西側が一段高く、ベッド状造構か。遺物はほとんど出土していない。

• E区 S C07 (Fig.31、186頁) 108m付近で検出。東西5.6×南北5.8mの正方形。全体的にやや掘り過ぎの感があるが、十字ベルト土層で床面を確認。本来の掘り込みはもっと上からであろう。床面に伴うであろう柱穴が複数ある。中央付近でわずかに浮いた状態で土器が出土。韓式系瓦質鉢を伴う。

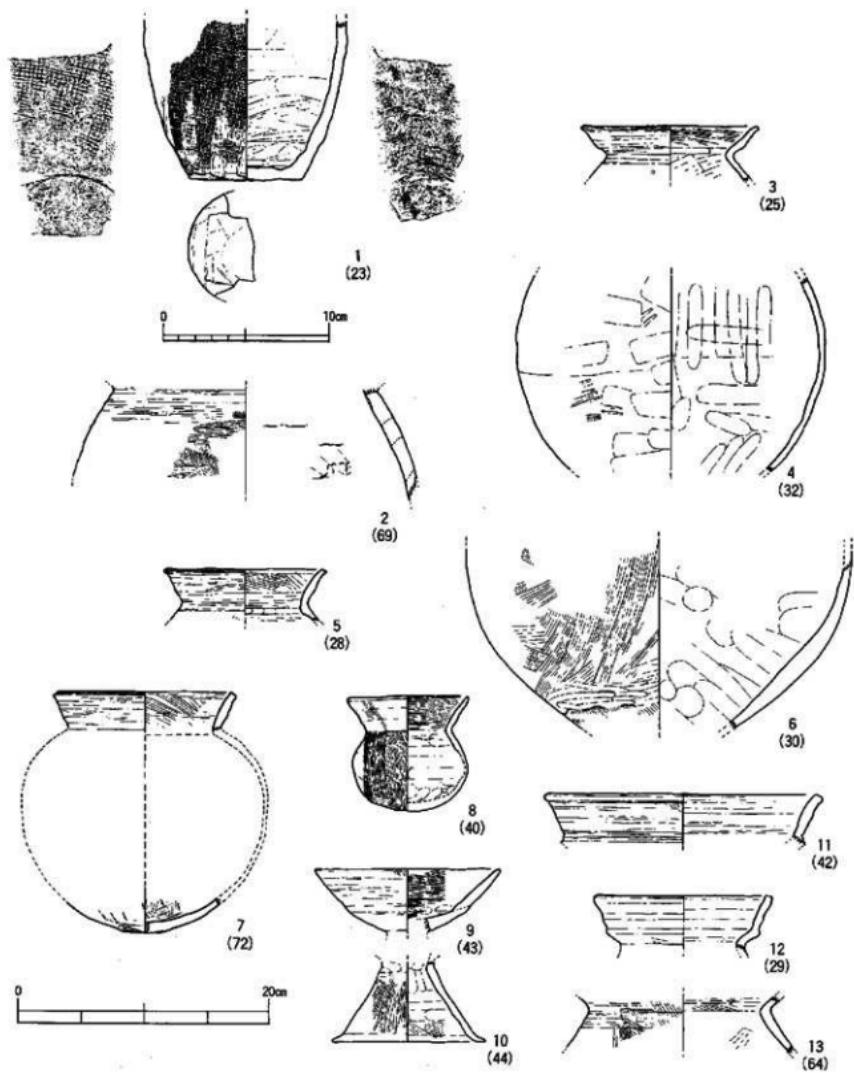


Fig.63 E区の出土土器(4)(S=1/4)

・E区 SK 302 (Fig.34、188頁) 113m付近で検出。当初は遺構の存在に分からなかったが、攪乱の壁から土器が出土し検出。径1.5m前後、深さ40cm位の略円形土坑。下層に上器を出土。

・E区 SB 01 (Fig.35、189頁、Ph.20、190頁) 100-104m付近で検出した掘立柱建物。1×3間で、南北1.8m前後、東西4.1m前後。土層の検討では、柱痕跡ではなく、その抜き取りの痕跡がある。淡黄褐色砂の覆土で、やや新しいものか（古代？）。SC 08を切る。SC 08は、やや掘り過ぎの

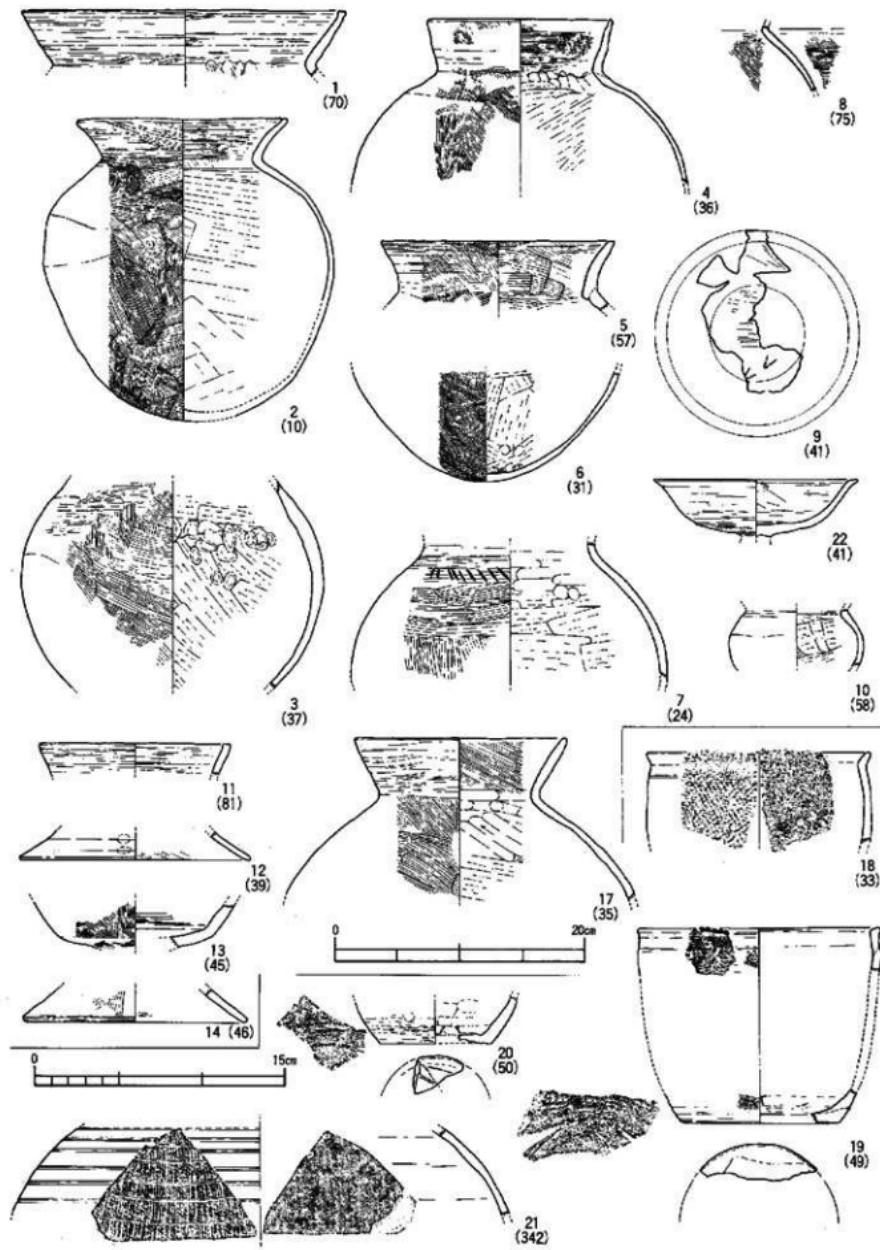


Fig. 64 E区の出土土器(5) (S=1/4)

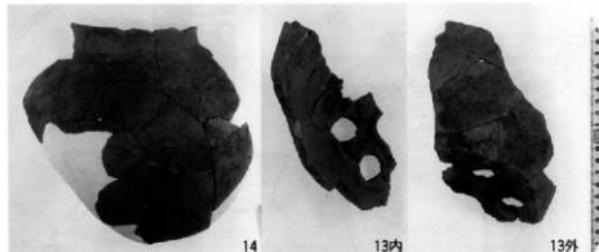
感があり、東西4.2
×南北3.0m以上。
遺物はごくわずか
出土。遺構としてはやや疑問もある。

・E区 S D 01
(Fig.36、189頁、
Ph.21) 93m
付近で検出した、
調査区に直交する

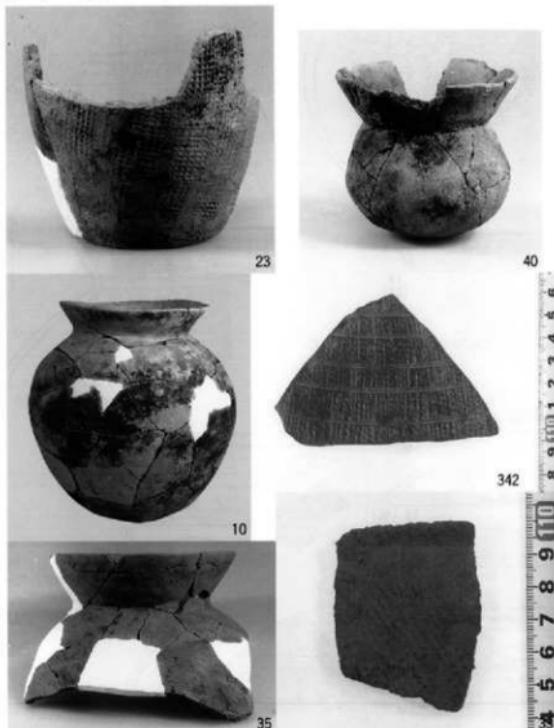
溝状遺構。北側が広く、4.6mの幅で、南側は2.3m前後。深さは調査区壁の土層で40cm前後確認。古墳時代の遺物を出土するも、下層が淡黄褐色砂、上層が焼土まじり?の橙褐色砂質土で、新しい遺構か。

7) C区東半の調査 (Fig.42、192頁、Ph.23)

C区は、東端のD区の基点から127m付近より西側全ての100mにおよぶ調査区である。長い調査区のため、180m付近前後の大きな擾乱を境として、便宜上東西に分けている。C区東半の現在の標高は、東側で3.9m、西側で4.6mを測る。層序は、上から、黒褐色腐食表土、褐色～黄褐色砂質土、明黄褐色砂、浅黄色(～浅黄橙色)砂と続く。浅黄色砂面で遺構を検出している。この面は、西に高く、3.6～3.9mである。表層の褐色～黄褐色の層は遺物をやや多く包含し、C区西半の遺物の多い包含層に続く。遺構・遺物の検出は、E区よりやや少ない感があるが、竪穴住居(その可能性のあるもの含む)7棟? (確実なのは5棟)、



Ph.47 E区SC03出土韓式系土器写真



Ph.48 E区遺構他出土土器写真(韓式系土器ほか)

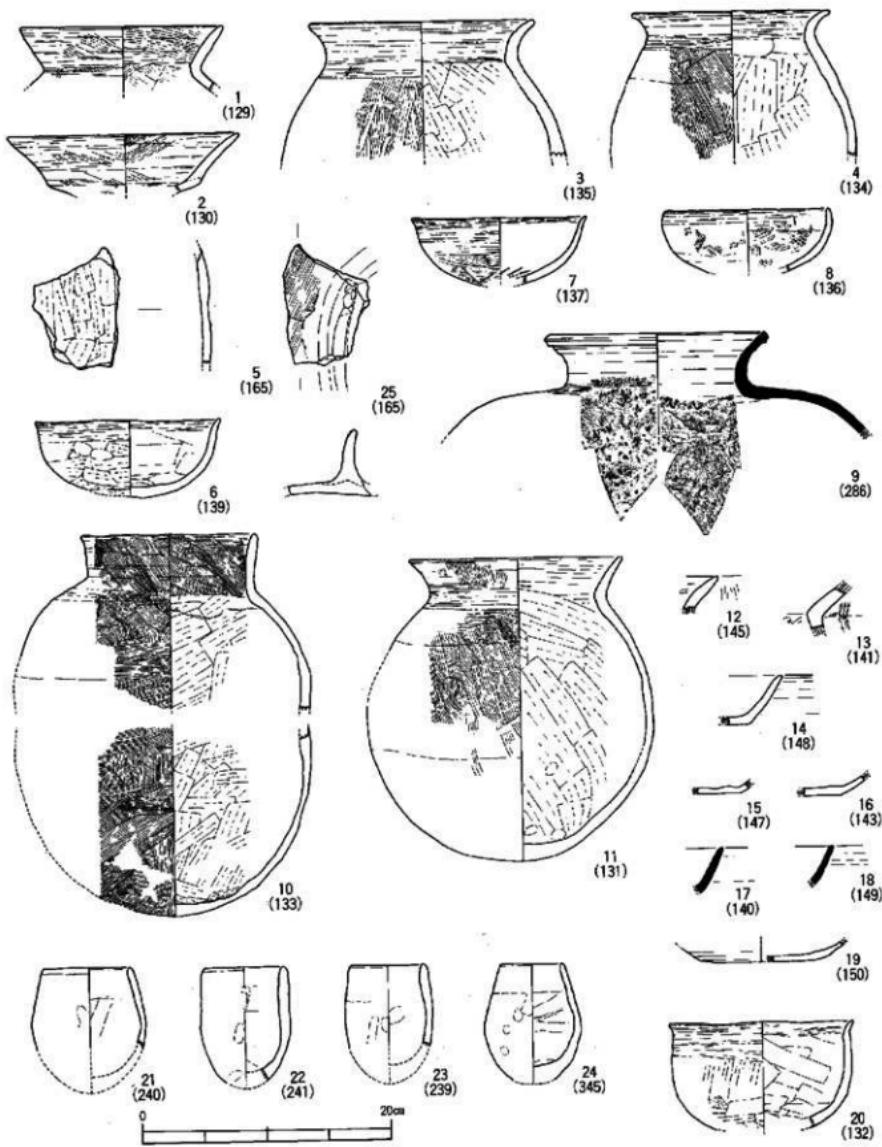
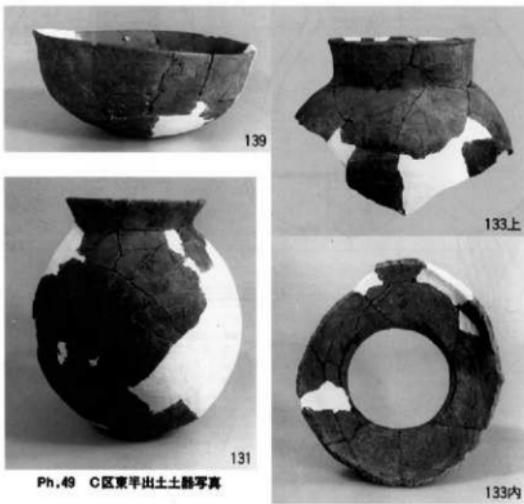


Fig.65 C区東半の出土土器 ($S=1/4$)

土坑11基、不明遺構2、溝状遺構1、柱穴多数を検出した。以下、主要な遺構について説明する。



Ph.49 C区東半出土土器写真

東西3.5×南北3.0m以上。覆土不明瞭で床面近くで検出。遺物はかなり浮いた状態でわずかに出土。住居址とするのには疑問もある。

・C区SC04 (Fig.40、191頁、Ph.26、193頁) 163m付近で検出。東西5.2×南北2.8m以上。覆土不明瞭で、床面近くで検出。柱穴・土坑を床面で検出。遺物は東側で若干出土。西側は、奈良時代の土坑C区SK001に切られる。SK001は(Ph.27)、2.6×2.0mの不整梢円形の土坑。深さ45cm。黄褐色砂を覆土とし、主に上層に遺物を出土。土器は細片が多い。

・C区SC09、SC06、SK1004 (Fig.41、191頁) 156m前後で検出。東西4.6×南北3m以上。深さ25cmを確認。SK008に切られ、SC06を切る。SK1004は床面南側で検出。この土坑中と、そのほか床面からやや浮いて、土器片を若干出土。C区SC06は、SC09の東で切られる住居址。床面で柱穴を複数検出。遺物の出土は無く、やや疑問な部分もある。

・C区SK008 (Fig.45、193頁、Ph.28) SC09の北側で重複。径1.5m前後の略円形。深さ50cm。上層を中心で土器片が出土。遺物から、古墳後期前後の遺構。

・C区SK1002 (Fig.43、193頁、Ph.27) SC04の下層で検出。あるいはSC04に伴う可能性あり。1.4×1.1mの梢円形の土坑。床面近くでやっと検出したので、本来の深さは不明。

・C区SD1003 (Fig.44、193頁、Ph.29) 177m付近で検出。はじめ分からず、トレーナーの精査により検出。幅1.5m前後、深さ80cm(以上?)の溝。下層で土器片を出土。

・C区X131 (Fig.42) 175~180m付近で検出。遺構というより、上部の包含層の下層の淡黄褐色砂がやや落ち込んでいた範囲。蜻蛉形土器など、奈良時代の土器を出土。なお、この西側の搅乱(180~185m)の落ち込みからも、蜻蛉など似た様相の遺物が出土。

8) C区西半の調査 (Fig.49、195頁)

180~185m前後の搅乱より西をC区西半とした。C区西半は、複数の遺構面を検出した。重機による表土剥ぎの当初、他の区に比べ、表土(第1層、土層図はFig.54、Ph.35参照)直下での遺物の出

・C区SC01 (Fig.37、190頁、Ph.23、193頁) 128m付近で検出。E区SC01に切られる。東西4.5×南北3.2m以上。確認できた深さは30cm。東西がベッド状にか。中央にわずかに土器片を出土。

・C区SC02 (Fig.38、190頁、Ph.24、193頁) 133m付近で検出。SC02と接する。東西4.8×南北5.6m。覆土が分かりやすく、床面近くで検出。床面に柱穴複数と、浅い土坑を検出。SK096は中央東寄りの土坑。土器をややまとめて出土(Ph.25)。

・C区SC03 (Fig.39、190頁) 138m付近で検出。

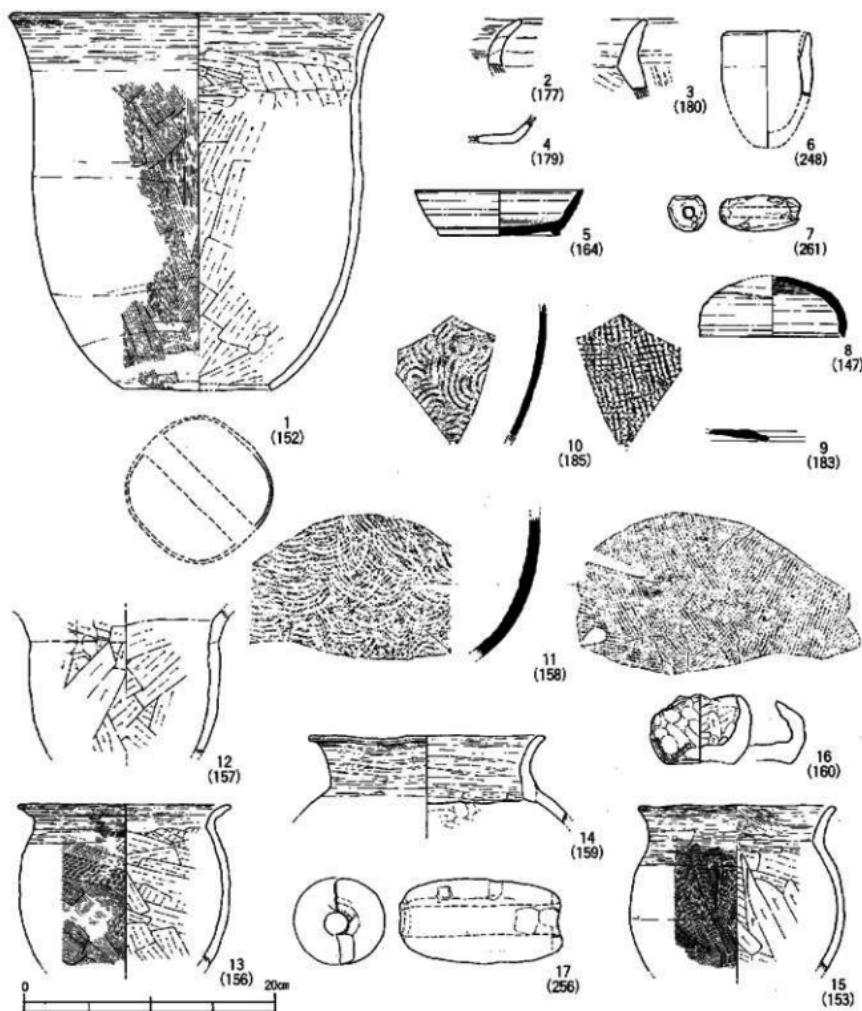
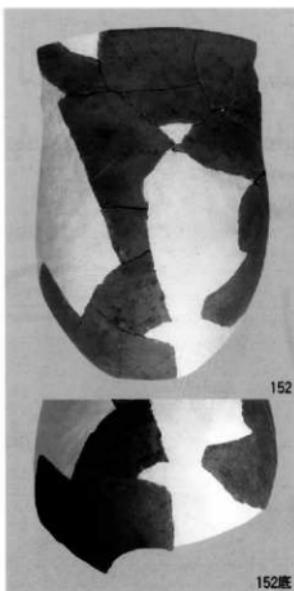


Fig. 66 C区西手の出土土器 (S=1/4)

土がかなり多く（第2層）、重機による掘削はここで止め、以下を人力で掘削した。この重機掘削を止めた面を第1面とする（Ph.30）。第1面は、C区西半南側トレンチ層序（Fig.54、197頁）の第2層（橙色～黄褐色砂質土）の上面で、一部硬化している面もあり、2層に奈良時代の遺物が多量に包含されていることなどから、整地された面である可能性がある。この面では遺構は検出できなかったが、等高線を記録した（Fig.47、194頁）。この整地層の可能性のある2層を取り除いて、第3層（浅黄橙色～黄橙色砂）の上面で第2面とした。第2面では古墳後期から奈良時代の遺構を検出した。遺



152



147

Ph.50
C区西半出土土器写真

152底

構の覆土は2層の土が混ざる。次に3層を除去して、第4層（浅黄色～にぶい黄橙色砂）の上面で第3面とした。この面の遺構の覆土は、3層に類似する。第3面では古墳時代の遺構を検出した。さらに一部、第4層を若干下げた面で、黄白色砂となり（第5層）、この面でわずかに遺構を検出している（第4面、Fig.48、194頁、Ph.40、198頁）。遺構は主に、第2・3面で検出したが、覆土は不明瞭なものが多く、遺物もあまり目立たず、人為的な遺構ではないものも含まれている可能性があるが、その疑いがあるものは一応、遺構として調査した。なお、第2面検出遺構を200番台、第3面検出遺構を300番台で呼称している。以下、主要な遺構について報告する。

・C区S X 354,360 (Fig.46, 194頁) 第3面195m前後で検出。住居址の可能性がある。西側のS X 354部がベッド状となっている可能性がある。5.4×6.0m前後。床面で複数の柱穴を検出。遺物は少ないが、S X 354で浮いて若干出土。遺物から古墳後期か。

・C区S C 317 (Fig.50, 196頁, Ph.38, 198頁) 第3面210m前後で検出。4.8×5.0m前後の不整形方形。深さは20cm前後を確認。遺物は少ないが、東西に、若干の土器片が出土。遺物から古墳後期か。SK 319はこれより新しい土坑。径2.6m前後、深さ30cmを確認。奈良時代の遺物を出土 (Ph.36, 198頁はこの部分の土層)。

・C区S X 225,299 (Fig.51, 196頁, Ph.32,33) 第2面190m付近で検出の土器群。掘方は全く不明であったが、出土状況から同一遺構の掘り込みが考えられる。北から投棄された状況。

・C区S X 221, S X 301 (Fig.52, 197頁) 187m付近の第2面で検出。南北3.0m?、東西4m前後。深さ25cm前後の竪穴状の土坑。SK 222は上からの掘り込み。石組遺構S X 301は (Fig.56, 198頁, Ph.34-1-3)、このS X 221の中央にあるもので、C区西半南壁トレンチ掘削中に検出。この掘り込みはより上からの可能性もあるが (Fig.54)、位置的にS X 221に伴う可能性もある。花崗岩の20～40cmの亜角礫を梢円形に並べている。一部、礫が中に落ち込んでいる。並べられた礫は、内側がやや赤変化しており、この遺構は炉址の可能性がある。下部に土坑があり、礫群直下の径40cmの土坑は伴うが、下部の径1.5×1.2mの土坑は別の遺構の可能性がある。遺物は、古墳後期頃の土器の細片がある。遺構の時期は不明確だが、層位的に奈良時代よりは前、古墳時代の範疇であろう。

・C区SK 344 (Fig.53, 197頁) 第3面205m付近で検出。南北1.3m×東西2.2m以上。二段状の掘り込み。深さ30cm強を確認。上層で遺物を若干出土。SK 346はこれに切られる竪穴状の不明遺構。2.8×1.5m前後。わずかに遺物が出土している。

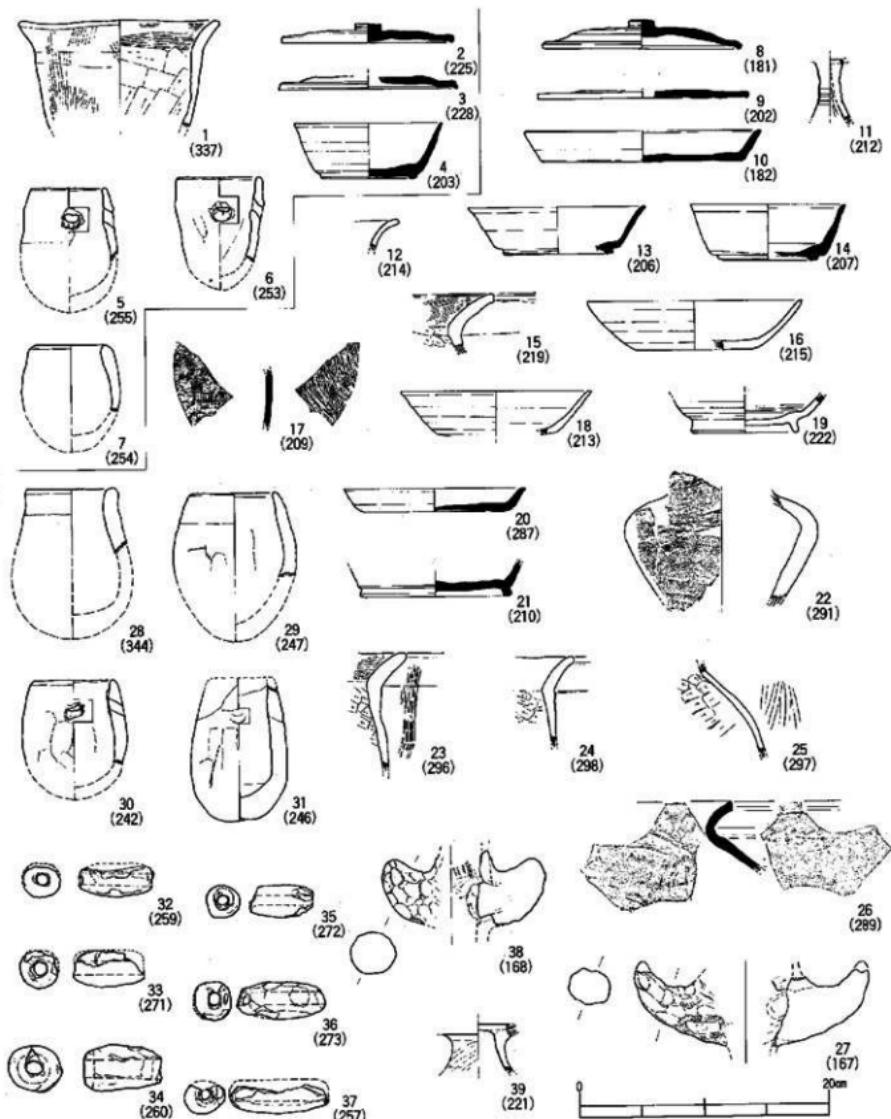


Fig. 67 C~E 区の出土土器 (S=1/4)

• C 区 S K 336 (Fig. 55, 198頁, Ph. 39) 第3面203m付近で検出。径1.8m前後の土坑。深さ30cmを確認。やや下層で土器片を検出。

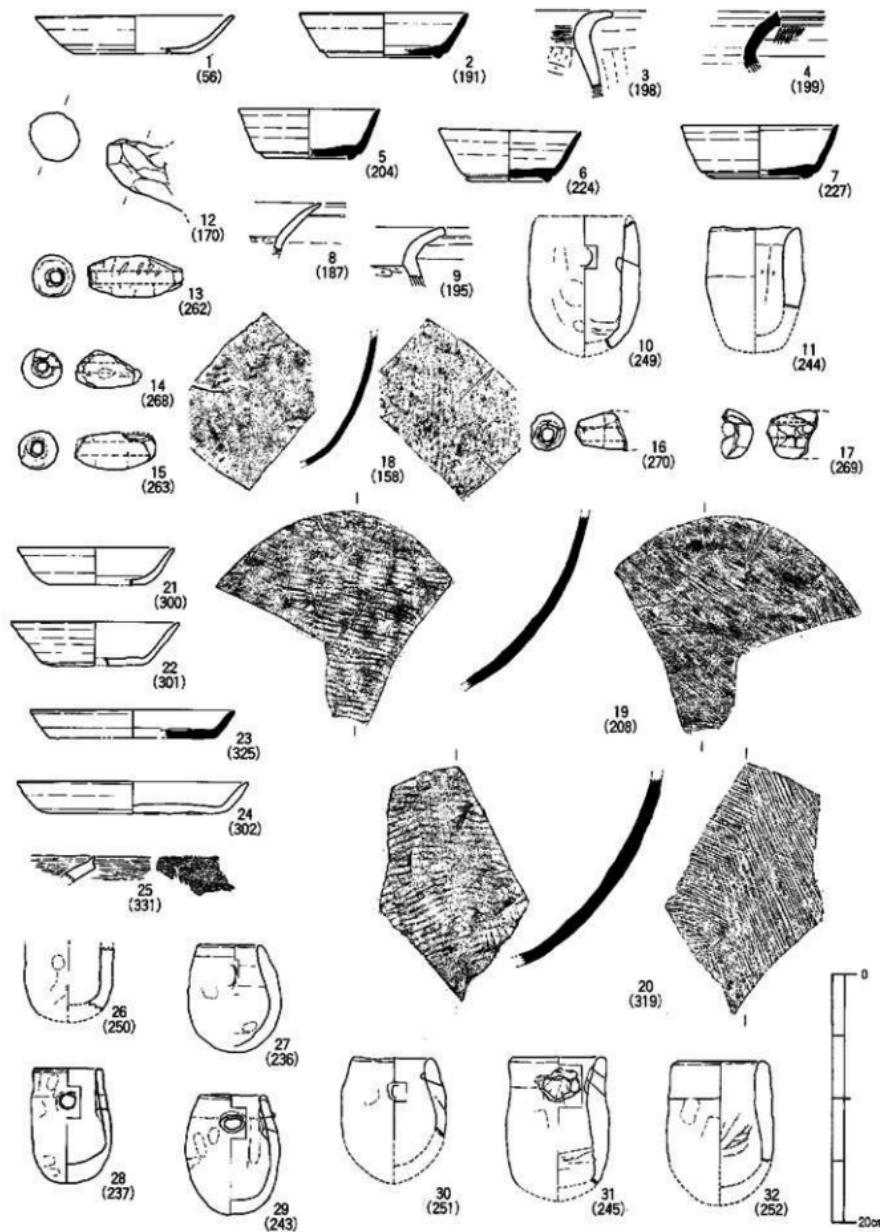


Fig. 68 C 区包含层(整地层)·C 区横剖面他出土土器(1)(S=1/4)

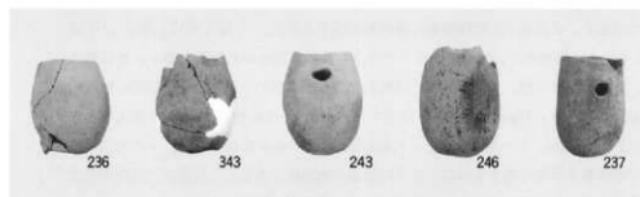


Fig. 69 C区横堀剖面出土土器2(S=1/4)

・C区S X501 (Fig.48、194頁) 207m付近の第4面で検出。径55cmの土坑。浮いた状態で古墳中期の土器片を出土。本来の深さは30cm以上か。

3. 出土遺物

遺物はパンケースにして57箱出土している（調査終了当初、大きめの箱に詰め込んで22ケースであったが、接合の結果、上記の箱数にまとまる）。一部、集中して出土する遺構や包含層（特にC区西半）があるが、総じて遺物の出土は散漫である。以下 (Fig.57~72、199~219頁)、各遺構・包含層の出土の遺物を紹介するが、紙幅の都合で、一つ一つについて詳細な説明はできないので、概要のみ記し、一部特別な遺物のみや詳述する。その他の遺物の、法量や調整については実測図から読み取って頂きたい。また、Ph.41~54の遺物番号は、各挿図中の()内の番号であり、この番号は収蔵予定番号の下3ケタである。須恵器の時期比定については、九州の小田富士雄の編年を便宜的に用いる。奈良時代の土器については実年代も併用した。古墳時代前期の土器編年については、久住編年（今宿5次の項参照）を



Ph.51 C区包含層・カクラン他出土イイダコ型



Ph.52 調査区外出土フイゴ型

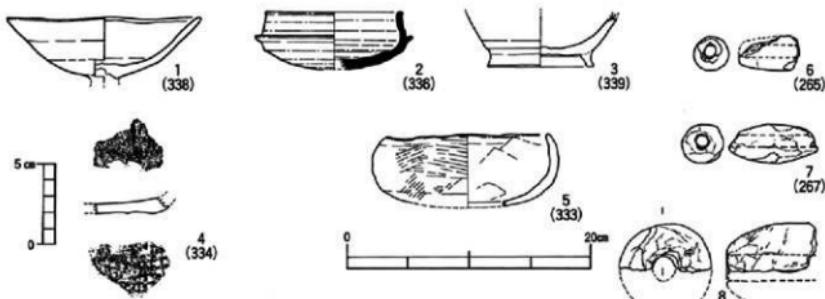


Fig. 70 表揚その他出土土器 (S=1/4)

用い、古墳時代前期後半～中期の土師器編年については重藤福年を準用する（同じく今宿5次の項参照）。なお、生の松原遺跡出土の古墳時代前期～中期の土器とそれに伴う韓式系土器などについては、後日別稿を期したい。

1) A・B・F区の出土土器 (Fig. 57, 199頁)

1はB区SK01出土の須恵器身。蓋の可能性あり。径16.9cmと大きく、カキメがあり高坏か。IV期？。2～4はF区表土なし包含層出土。2は須恵器で、IV期前後の短頸壺。3,4はF区表土出土。8世紀前半頃。5はA区東半包含層出土の土師器の把手。精良な胎土で、台付長頸壺などの把手か。8世紀？。6はF区検出上面出土の土師器。8世紀頃の土製カマドの上部か。7はA区西半SK006トレンチ出土。8世紀の土師器の壺である。

2) D区の出土土器 (Fig. 34, 35, 200頁)

Fig. 58-1,2,4はSC018出土。1はSC047出土と接合。1は在来系壺。2はB系統壺で、内面ケズリで新相。4は在来系大型壺の胴部片。突帯に斜格子状のハケメ（タキヤ压痕？）。この図は天地逆の可能性あり。以上はII A期か。3,5はSC058上層出土。3はSK061出土と、5はSP097, SK066出土と接合。3は山陰系の小型壺。5はB系統壺 (Ph. 41, 199頁)。以上はII A～II B期。6はSC087出土。壺D（布留系）。II C期前後。7はSP112 (SC087) 出土。壺B（D）ないしは壺F。内面の押捺が特異。8はSP097上層出土。壺D。やや新しい時期（III A期前後）か。9はSK（SD）017出土。III C（重藤III B期）～IV期か。10,11はSK061出土。10は在来系（A系統）の鉢。11も同系統の壺であろうが、あるいは瀬戸内系などの可能性も。12は鉢。古墳前期の範疇だが時期不詳。13はSC058内のSK060上層出土。内外ともに丁寧な細かいハケメ。二重口縁壺（B系統）の可能性。II A～II B期。14,15はSK1001出土。14は弥生後期後半の複合口縁壺で、16は同時期の壺の底部。在来系。17,18はSK003出土。17はIII B期（重藤III A期）前後の壺。18は同じ頃の山陰系二重口縁壺の系譜下の壺。大型品。15はSP102出土。古墳前期の壺の下半部。内面はケズリというよりは板ナデ。Fig. 59-3はD区東端排土出土。在来系大型壺の口縁部。4はD区東側検出時出土。極小型の壺。古墳前期か。

3) E区の出土土器 (Fig. 59～64, 201～207頁)

Fig. 59-1,2,5は造構出土ではなく、E区東半北側隣接地の掘削地の廃土より出土（「はじめ」に参照）。1は掘削地①、2,5は掘削地②出土。1は内面ナデ、外表面格子目タキ。初期須恵器ないし陶質土器か。2はIII C期（重藤III B期）前後の壺。5は同じ頃の壺。6はE区SC04およびSC05出土の土師器大型壺胴部の破片。同一個体。内面ナデ、外表面細かいハケメ。Fig. 60 (202頁) は全てSC01出土 (Ph. 42, 43)。1,2は壺A IIIと壺A II（重藤分類）。3は中型壺（同分類）。4～8は高坏。5,7,8は北部九州の在来系高坏だが、4の椀状坏部のものと、6の坏部が大型で暗文風ミガキを施すものは、上下の接合が充填法であることも含め、畿内布留式系ないしは山陰系のもの。北部九州では珍しいタイプ。9は椀状の鉢。III C期（重藤III B期）の良好なセット



Ph. 53 周囲表揚須恵器

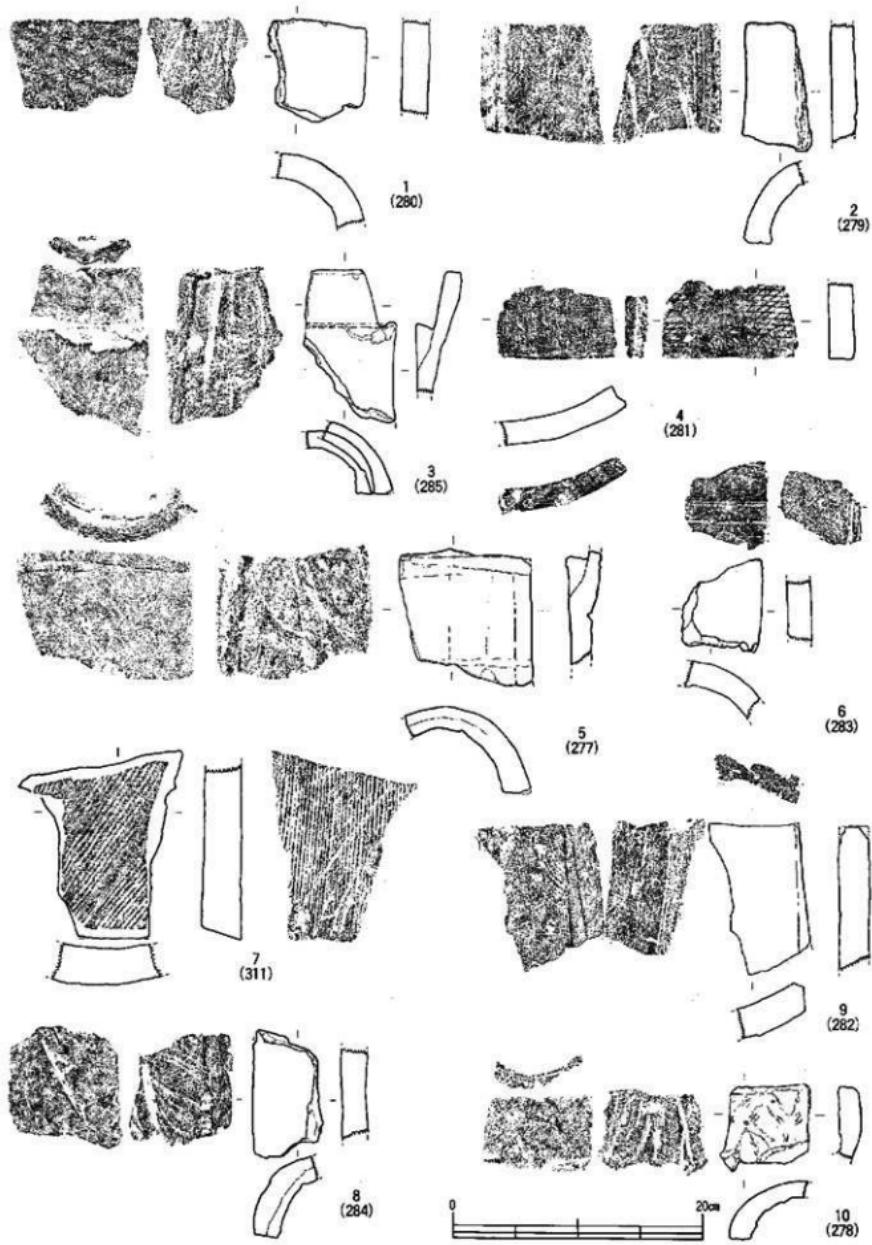
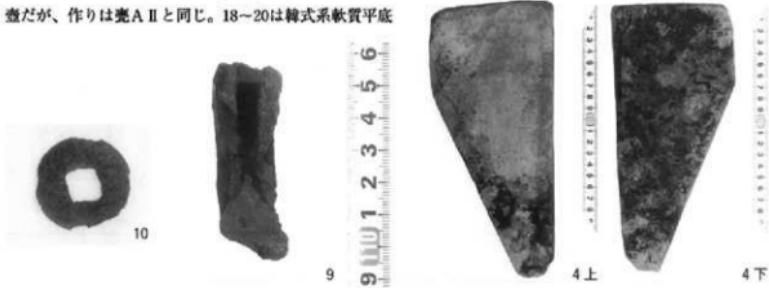


Fig. 71 C区出土の瓦 (S=1/4)

(新相?)。なお、4,6の型式的位置から、最初の須恵器が成立している時期の可能性がある。Fig.61-1,3はE区S C02出土。1は韓式系軟質土器の壺(Ph.44)。胴部外面は平行条痕のタタキ後、平行(ラセン状ではないらしい)沈線およびヨコナデ。沈線は工具の割れか、一部二条風。内面は無紋当て具後、ナデ。3はIV期(古墳中期)の土師器の壺。4~7はSC04出土。4はやや軟質の焼成の須恵器の壺ないし瓶の口縁部。須恵期ⅢB期前後のものか。混入品。5~7は、土師器の壺。5は丁寧な作りで、やや古相か。6は壺A III、7は壺A II(重藤分類、Ph.46)。以上はⅢC期古相か。8,9はSC05出土。いずれもⅢB~ⅢC期の壺。10はSC06出土。壺A III?。ⅢC~Ⅳ期か、混入品か。2は陶質土器の壺(Ph.45)。著しい焼け歪みがあり、圓化は何処を測るかにより異なってしまう。胴部外面繩帯紋後、螺旋状沈線(左下がり)。肩部ヨコナデ顯著(この後に沈線)。繩帯紋は細かいもの(一段Rの撚り)。内面は無紋当て具の痕跡。Fig.62は全てSC03出土。1は韓式系軟質土器の壺(Ph.47)。胴部外面は格子目タタキ。内面は無紋当て具後、板ナデ。口縁部ヨコナデは外面沈綱風の条痕。2は韓式系軟質土器の壺(Ph.47)。外面は格子目タタキ後板ナデ、内面ケズリ後ナデ。底部は平底で、中央1つと周囲6つの穿孔が復元される。3は土師器の高杯。粗い作り。重藤分類の高杯B I。型式的にIV期古相(重藤編年)。4は古墳初頭の在来系壺Aか。混入品。5は作りの粗い小型丸底壺で、ⅢC~Ⅳ期。6は小型の壺で、壺C(同分類)。以上から、E区SC03はIV期古相で、初期須恵器併行期。Fig.63-1,3はSC07出土。1は、韓式系瓦質平底鉢(Ph.48左上)。外面は細かい格子目タタキ後、タテの板ナデ。内面はナデ、底部付近ヨコナデ。底外面は、方形の「ゲタ」の痕跡。2はSC07上面出土。分厚い壺ないし壺。5世紀代?。4はSK303, SK302, SC04, SC07, SC06, SP155の各出土が接合。外面タタキ後ナデ、内面ケズリ後ナデ。B系統の壺でも新相。ⅡC期前後か。5はSC08上面出土。壺A III(重藤分類)。IV期古相か。(※6は、C区SC09下層出土。外面ハケメ一部ミガキ。内面ケズリ後ナデ。壺の下半部。ⅢB~ⅢC期か。揮因の位置を譲る。以下、E区)7~11はSC13出土。7は小型の壺C(以下、重藤分類)。8は小型丸底壺Ⅲ式(Ph.48右上)。9,10の高杯は、高杯C II式の小型品。11は山陰系二重口綠壺の系譜。以上は、IV期古相か。12,13はSD01出土。12は山陰系二重口綠壺。13は壺F(久住分類)または壺A II(重藤分類)。ⅢB期前後か。Fig.64-1はSC15出土。壺Dの大型品。ⅢA~ⅢB期か。2はSC14出土(Ph.48左中)。壺F(壺A II)。ⅢB期か。3,7,9はSK277の出土。3は分厚い壺で、壺F。7は山陰系壺。9は高杯D(久住分類)の範疇。ⅢA~ⅢB期。4,8はSC16(SK285、住居址としては疑問。E区東端)上層の出土。4は短頭直口壺。比較的丁寧な作り。8は内外ハケメの壺の破片(B系統壺?)。以上は、ⅡC期前後か。5は、搅乱SX001出土。本来はSC04~06か?。壺A III(重藤分類)。6はSK302とSP155が接合。壺D。ⅢA期前後か。10はSX005出土。外面ナデの小型丸底壺。ⅢC期前後?。11,12はSP271(SC14より西)出土。11は壺、12は高杯の脚部。13,14はSP270(SP271の南)出土。同一個体の高杯か。高杯C I(重藤分類)。11~14はセットでⅢB~ⅢC期前後か。17は北側脚接地掘削③の出土(Ph.48左下)。

壺だが、作りは壺A IIと同じ。18~20は韓式系軟質平底



Ph.54 その他の遺物写真(番号はFig.48に一致)

鉢。18はE区西半表土、19,20はE区検出時出土。18は、外面細かい格子目タタキ。口縁部下に沈線状につくヨコナデ（Ph.48右下）。19は上下推定同一個体。底部付近に格子目タタキ残る。底面に「ゲタ」痕跡。口縁部ヨコナデ、外面格子目タタキ痕跡？。20は、底面に「ゲタ」痕跡。外面ナデ。21は北側溝接地掘削①出土。やや古い焼成の陶質土器の窓の肩部片（Ph.48右中）。外面は縱位の繩巻紋（一段L）の後、T具の先が2条に割れたような沈線。螺旋沈線であろうが傾き不明。内面無紋當て具？後ナデ。18～20はⅢC期前後に伴うか。21は薄手の作りで、やや古相？。

4) C区東半の出土土器 (Fig.65, 209頁)

1,2はSC01出土。1は土師器IV期の甕、2はⅢC期頃の高坏。3はSC03上層出土。6世紀前半頃の土師

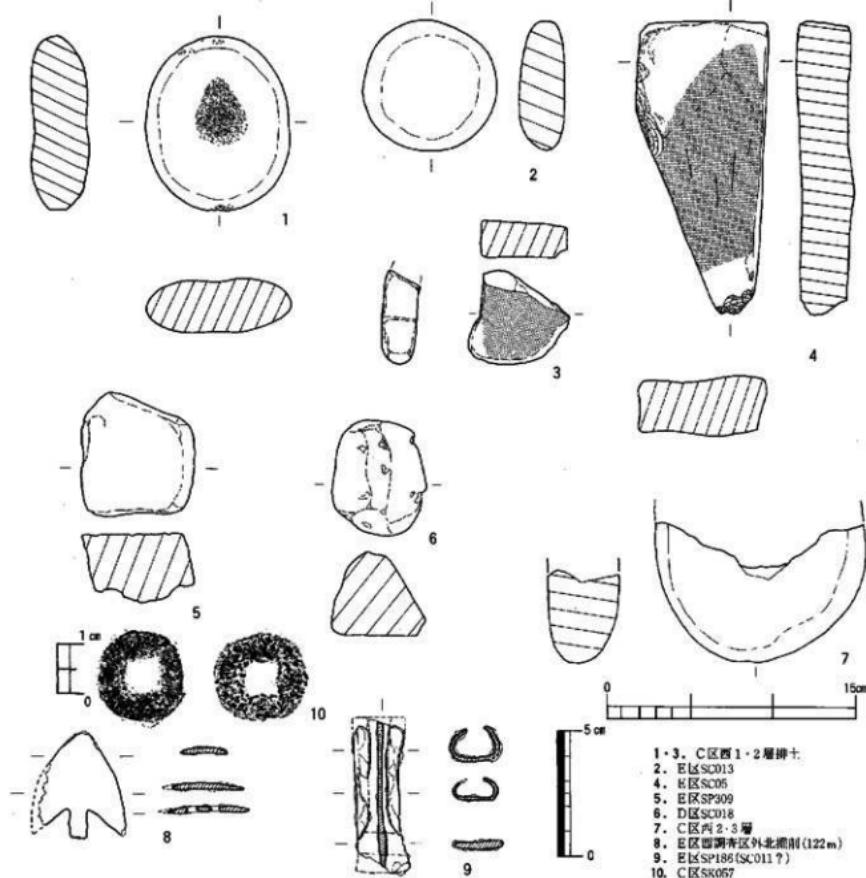


Fig.72 生ノ松原遺跡出土石製品 (S=1/3)・鉄製品 (S=1/2)

器甕。4はSK008出土。6世紀後半前後の土師器甕。5はSC04上面出土。土師器のカマドの焚口部。6はSC04出土。土師器ⅢC~IV期頃の鉢(Ph.49左上)。7,8はSC09出土。いずれも土師器Ⅳ期頃の鉢。9はC区東半廐土中採集の須恵器。外面タタキ後ハケメ状、内面當て具ナデ消し。奈良時代。10はSC02のSK096出土(Ph.49右)。分厚いやや粗雑な壺で、土師器Ⅳ期か。11はSK1002出土の壺F(壺A II)(Ph.49左下)。ⅢC期。12~18はSK001出土(12~16は土師器)。奈良時代(8世紀後半か)。19,21~24はSX131出土。19は土師器の壺。21~24は壺蓋。いずれも奈良時代(8世紀後半か)。20はSD1003出土の土師器の鉢(碗)。ⅢC期前後か。

5) C区西半の出土土器 (Fig.66, 211頁)

1はSX299出土。土師器の瓶(Ph.50左)。非常に丁寧な薄手の作り。底部の穿孔は、曲率のバランスから2つの半円孔と考えた。6世紀代。2はSP209出土。3はSX221出土。2,3は土師器の甕。4,5はSK215出土。4は土師器甕、5は須恵器甕で、8世紀末頃か。6はSK222上層出土の壺蓋。7はSK205出土の土錘。いずれも奈良時代。8,10はSX225出土。8は須恵器の短壺蓋(Ph.50右上)。ⅢA~ⅢB期。9,11はSK319出土。9は須恵器壺蓋。8世紀中頃。11は須恵器甕で、外面タタキ後カキメ。12はSK354出土。粗雑な土師器の小型甕。ⅢC~Ⅳ期ぐらいか。13はSK336出土の小壺蓋(Ph.50右下)。甕C(重巻分類)。Ⅳ期。14はSK344出土。土師器の甕で、甕A IV。Ⅳ期以降。15はSX501出土。SK336出土と接合。小型の甕C。13と同様の時期。16は手すくね土器。SK332出土。17はSK502出土の土錘。やや大型。層位から古墳時代の所産。

6) C~E区包含層他の出土土器 (Fig.67~69)

Fig.67~7はE区西半~C区東半の廐土より採集。全て奈良時代の範疇。本来は表層包含層か。2~4は須恵器。以下、8,10はC区表土出土、9,11~19,21,27,30~34,37,38はC区西半廐土中の採集(本来多くは表層の包含層か)、20,22~26,28,29,35,36,39はC区北側隣接地無断掘削⑥よりの出土。このうち須恵器は、8~11,13,14,17,20,21,39。12は越州窯青磁か。おおむね奈良時代で、8世紀中頃以降、末頃が主体。25は古墳時代(6世紀頃)の甕。土錘(32~37)、壺蓋28~31が目立つ。Fig.68~1はC区東半北廐包含層中出土。2~5,12,13,16~18はC区西半包含層(1~2層)出土。6,9,10,15はC区西半南トレンチ包含層出土。7はC区内半北廐包含層出土。8,11,14は、C区西半包含層(2~3層)出土。19,26~32はC区中央擾乱(182m前後)上層出土。20~25は北側隣接地無断掘削④⑤出土(遺物が混亂してしまった)。これらのうち、2,4~7,18~20,23は須恵器。10,11,26~32は壺蓋。13~15は土錘。おおむね奈良時代の遺物で、8世紀中頃から末頃が主体。25は占式土師器の甕の口縁部で、あるいは瀬戸内系の可能性もある。Fig.69は、全てC区北側隣接地の無断掘削地点⑥の出土。1~4,7~9,12,15,17は須恵器。13は鈴の羽口。14は土錘。16は外面が斜格子目タタキとすれば韓式系軟質土器の可能性もある(挿図断面黒塗りは誤り)。おおむね(15,17以外)8世紀後半前後の遺物。17は8世紀前半か。

7) 周囲表採土器 (Fig.70)

1は土師器高杯。D系統高杯でⅢA~ⅢB期。2は須恵器1B期(TK208-TK23)の壺身。3は9世紀代の土師器の高台付椀。4は外面格子目タタキで、韓式系軟質土器の底部?の可能性あり。5は土師器の楕状鉢で、6世紀代か。6~8は土錘。本遺跡での出土傾向から、奈良時代か。

8) その他の遺物(瓦、石製品、鉄製品など) (Fig.71,72)

Fig.71は瓦。1,2,5,10はC区西半包含層上面(1~2層)出土。3はC区擾乱出土。4はC区西半表土出土。6~8はC区北側隣接地掘削地点⑥出土。9はC区廐土より採集。外側は縦目タタキ(一部は斜格子目タタキ)でいくつかナデ消しがあり、内面は基本的に布目痕があり、一部に模骨痕がある。淡黄褐色系の施成が多いが、1,4は須恵器の灰色系。1,2,6,9は丸瓦、3,5,10は正縁丸瓦、4,7は平瓦。Fig.72~7は石製品。1は安山岩製凹石。2は粘板岩製の丸石で、用途不明。3は砂岩製の砥石?。4は砂岩またはシルト岩の砥石。5,6は軽石製の浮子(石浮)。7は軽石製の磨石か。8は古墳前期の平根系铁鍬。9は小堀の鉄斧で、類例は韓半島にあり、東漸分類のⅢb類。メタル質残る。刃先も鐵板状で非尖用品の可能性も。10は銅鏡。外縁が欠失し(?)、磨滅のためか無紋で時期不明。以上、遺物の報告は紙幅の限りもあり、時間もなく簡略になってしまった。御寛恕を請う。

JR筑肥線複線化地内遺跡 埋蔵文化財調査報告書

—周船寺遺跡第10次・飯氏遺跡第9次・瀧町遺跡第2次・
今宿遺跡第5次・生ノ松原遺跡第1次の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集

2000年(平成12年)1月31日発行

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 株式会社ナガシマ

福岡市博多区豊1丁目9-18

JR筑肥線複線化地内遺跡 埋蔵文化財調査報告書

付 図

付図1 周船寺遺跡第10次調査全体図(S=1:500)

付図2 生ノ松原遺跡第1次調査全体図(S=1:500)

『JR 筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』

(福岡市埋蔵文化財調査報告書第654集)

<正誤表>

頁	行 (Fig., Ph.など)	誤 (下線部)	正 (下線部)
巻頭図版	2	(1) 飯氏遺跡9次	(2) 飯氏遺跡9次
例言	6	鹿富士寛	鹿富士寛 (以下同様)
例言	10	坂本 成清直子、蜂須賀博子、	坂元、成清直子、蜂須賀博子、
例言	20	9次の全景である。	9次 (東半調査区) の全景である。
1頁の前	(西下部)	調査地点と周辺の遺跡	調査地点と周辺の遺跡 (S=1/50,000)
10	(西中央)	(鉄分沈積多い)	(鉄分沈積多い)
17	Ph.23	上層南拡張区出土状況 (北から)	上層南拡張区出土状況 (南から)
18	Fig.17右 4行目	(鉄分・マンガン沈積)	(鉄分・マンガン沈積)
21	2	・SC01	・SD01
26	Ph.33(各遺物の番号)	32.16.32.17 上.17 下.31.24.30	16.1.16.2 上.2 下.15.3.14
28	Ph.34(各遺物の番号)	43.43.44.48	28.28.29.33
32	24	B区 SX06→B区 SD01→C区 SX10	B区 SX06→C区 SX10→B区 SD01
48	32	器面が歪んでいるものが	器面が歪れているものが (以下同様)
48	34	器面調整は粗れのため	器面調整は荒れのため (以下同様)
66	5	保存具合や	遺存具合や
68	3	これらは無形遺に含める	これらは無形遺に含める (以下同様)
77	4	(3) 捜査柱建物	(3) 掘立柱建物 (以下同様)
77	30	228.229は出土遺構不明	288.289は出土遺構不明
79	40	これは、堆積時・接続	これは、堆積時・堆積後
91	9	大きく削削を受けている	大きく削平を受けている (以下同様)
95	21	岡部拾之 (前原市教育委員会)	岡部拾之 (前原市教育委員会)
98	15	須恵式壺形格でKIIb式	須恵式壺形格でKIIIa式
98	27	2条の沈縫条の痕跡	2条の沈縫状の痕跡
103	1	5が2号窓棺で	5が109号窓棺で
103	4	渡田式でKIIa式と考える。	須恵式でKIIa式と考える。
104	16	中位には小口窓が多く見られ	中位には木口窓が多く見られ
105	Fig.11 (左下)	SK006	SK143
105	Fig.11 (下)	SK006 出土遺物実測図	SK143 出土遺物実測図
106	1	胸部最大径部が上位に	胸部最大径部が上位に (以下同様)
108	39	細い空巻をもつ胸部片	細い空巻をもつ胸部片
111	20	木口に板状の縁を配し	小口に板状の縁を配し
112	18	平行沈縫4条を	平行沈縫4条を (以下同様)
114	34	櫻土出土遺物はの検討	櫻土出土遺物の検討
120	25	あれのため不明確だが	あれのため不明確だが
128	(右下)	SK134	SK143
130	(右上)	110	124
130	(中央下)	160.161.162	161.166.160
132	2	特に製塙土器の	特に製塙土器の
133	35	南北3.6mであるが、	南北3.6m以上であるが、

136	(図左)	・SL036 土層	・SC036 土層
140	4	甕(壺) 棚の落ち込みを	甕(壺) 棚の落ち込みを
140	16	西側で確認で鐵て、	西側で確認できた鐵て、
142	10	鉄道敷による搅乱、	鉄道敷による搅乱、
146	10	土室なのが特徴。	土室なのが特徴。
146	33	A・B・D および埴土器系の	A・B・D および埴土器系の
149	Ph.55 (中 矢右下番号)	38.33	33.33
151	17	な水流胎土には至らない。	だが水流胎土ほどには至らない。
151	Ph.57	※番号は Fig.40-4 の () 内 2 に 一致	※番号は Fig.40-42 の () 内に一致
153	1	製埴土器の 1 タイプによく似ている	製埴土器の一類型によく似ている
155	18	その可能性あるが不詳	その可能性あるが不詳
155	30	21 の外側ハケと残小器台はハケ メ	21 の小型器台は外側ハケメ
155	Ph.58 (上 段左下番号)	141	309
155	Ph.58 (中 段番号)	143	311
155	Ph.58 (下 段番号)	143	311
155	37	5 内面接合痕残る。	5 は内面接合痕残る。
159	14	行った人々であり、	行った人々と考えられ、
159	14	というよりは近隣	というよりは主に近隣
159	34	何か道具等であろうか。	なんらかの道具であろうか。
164	4	既古遺物などから、	考古遺物などから、
165	13	この調査に入ったのは	B 区の調査に入ったのは
165	18	異なることとなった	異なることとなった
175	2	今宿跡などとして同様の傾向	今宿跡などと同様の傾向
176	15-16	400 のタンクに溜置き	400 のタンクに溜置き
180	7	壊ってしまったものが、	壊ってしまったものが、
180	17	A・B・F・C・E・F 区である	A・B・F・C・E・D 区である
183	Fig.27	(※上段 SP1002-1004 の拡張部の 位置※)	(※正しい位置は 204 頁 30-40 行参照 ※)
189	5	古墳中後期の土器片	古墳中後期の土器片
192	Fig.42 (左上)	C 区直(直) 下スケール	C 区直(直)
195	Fig.49 (上 段左)	354E	354 下
198	Fig.55 (右 下スケール)	1	1m
206	1	遺構の存在が分からなかった	遺構の存在が分からなかった
208	17	西側全ての 100m に	西側全ての総長 100m に
210	6	ベッド状にか。	ベッド状になる。
212	39	SX346 はこれに	SX340 はこれに
218	3	工具の割れか、	工具の先端の割れか、
218	15	韓式系瓦質平底鉢	韓式系瓦質(瓦質?) 平底鉢
218	20	以下、E 区)	以下、E 区)
219	4	陶質土器の裏の肩部片	陶質土器(瓦質土器か) の裏の肩部片
220	27	16 は外面が斜格子目タタキ	15 は外面が斜格子目タタキ

